熊本県文化財調査報告　第80集

大丸・藤ノ迫遺跡

―九州縦貫自動車道(八代～人吉)建設に伴う埋蔵文化財調査―

1986. 3

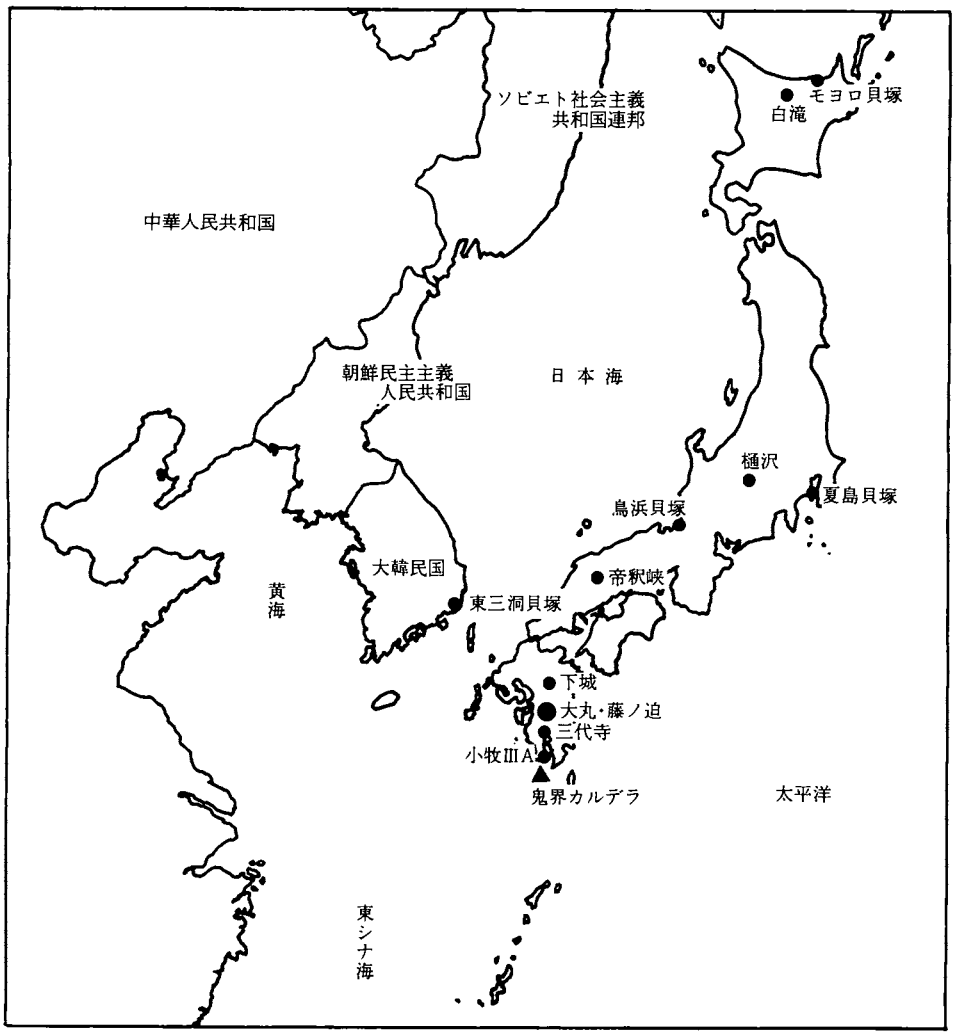
熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第80集

大丸・藤ノ迫遺跡

（だいまる　ふじのさこ）

— 熊本県球磨郡山江村大字山田字藤ノ迫所在の遺跡 —



1986．3

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を進めております。

ここに報告する球磨郡山江村大丸・藤ノ迫遺跡は、昭和58年度に発掘調査を実施したもので、先土器時代から歴史時代にかけての遺構・遺物を検出し、山間部における遺跡の性格を知るうえで、貴重な資料を得ることができました。この報告書が文化財の保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたりましては、日本道路公団人吉工事事務所をはじめ、山江村教育委員会のご協力、並びに専門調査員の先生方の多大のご指導、ご助言を賜りました。ここに心から厚く御礼申し上げます。

昭和61年３月31日

熊本県教育長　伴　　正　善

例　　言

1．本書は、日本道路公団の九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設計画に伴い事前に実施した埋蔵文化財調査の調査報告書である。

2．発掘調査を実施したのは熊本県球磨郡山江村大字山田字藤ノ迫に所在する大丸・藤ノ迫遺跡で、日本道路公団九州建設局からの委託を受けて、熊本県教育委員会文化課が行った。

3．当遺跡の発掘調査は、昭和58年度に実施し、本書は、昭和60年度に整理・報告を行ったものである。

4．本書は、層序に従って古い時代から順に報告している。

5．本書に使用した地形図は、日本道路公団九州建設局人吉工事事務所から提供をうけたものを基礎にして、地形復元・作製した。

6．現地調査に関する実測及び写真撮影は調査員で行った。また、遺構の製図は、中原由子が行い、一部を瀬丸延子が行った。遺物の実測は、木﨑康弘が行い、一部鶴嶋俊彦・中原が行い、製図は、上記３名で行った。なお、遺物の写真撮影においては、吉田正一の手を煩わした。

7．線刻礫については、奈良国立文化財研究所の松沢亜生氏の御指導を受け、実体顕微鏡による観察を行った。

8．本書の執筆は、主として木﨑がこれにあたり、一部を隈昭志（第Ⅰ章第１節）と中原（第Ⅲ章第４節－１の遺構部分）が担当した。

9．本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、木﨑が担当した。

本 文 目 次

序文
例言
第Ⅰ章　調査の概要…… 1
第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　調査の方法と経過…… 4
第Ⅱ章　遺跡の概要…… 7
第１節　遺跡の環境…… 7
第２節　遺跡の概要…… 15
第３節　遺跡の層位と包含層…… 16
第Ⅲ章　調査の成果…… 19
第１節　先土器時代の遺物…… 19
１．遺物の出土状況と分布…… 19
２．遺物…… 20
３．まとめ…… 29
第２節　縄文時代早期の遺構と遺物…… 30
１．遺構とその分布…… 30
２．遺物とその分布…… 71
３．まとめ……170
第３節　縄文時代前期・後期・晩期の遺物……171
１．遺物とその分布……171
２．まとめ……172
第４節　弥生時代の遺構と遺物……173
１．遺構と遺物……173
２．まとめ……198
第５節　歴史時代の遺構と遺物……199
１．遺構と遺物……199
２．まとめ……212
第Ⅳ章　総括……215

挿 図 目 次

第１図　地形図……4
第２図　球磨川流域図……8
第３図　遺跡分布図……9
第４図　地形断面図……14
第５図　土層図……15
第６図　倒木痕状況図・分布図……16
第７図　遺物分布図……19
第８図　石器実測図……21
第９図　石器実測図……22
第10図　石器実測図……23
第11図　石器実測図……24
第12図　石器実測図……25
第13図　石器実測図……26
第14図　石器実測図……27
第15図　遺構配置図……30
第16図　竪穴式住居跡実測図……31
第17図　小穴を有する土坑実測図……33
第18図　小穴を有する土坑実測図……34
第19図　小穴を有する土坑実測図……36
第20図　小穴を有する土坑実測図……37
第21図　遺構配置図……37
第22図　土坑実測図……39
第23図　土坑実測図……40
第24図　土坑実測図……41
第25図　土坑実測図……43
第26図　土坑実測図……45
第27図　土坑実測図……47
第28図　土坑実測図……49
第29図　土坑実測図……51
第30図　土坑実測図……52
第31図　土坑実測図……53
第32図　土坑実測図……55
第33図　穴実測図……56
第34図　遺構配置図……57
第35図　炉穴実測図……58
第36図　集石実測図……59
第37図　集石実測図……61
第38図　集石実測図……62
第39図　集石実測図……63
第40図　集石実測図……64
第41図　縄文式土器出土状況図……66
第42図　縄文式土器出土状況図……67
第43図　縄文式土器出土状況図……68
第44図　縄文式土器出土状況図……69
第45図　縄文式土器出土状況図……70
第46図　遺物分布図（塞ノ神式土器）……71
第47図　遺物分布図（塞ノ神式土器）……72
第48図　縄文式土器実測図……74
第49図　縄文式土器実測図……75
第50図　縄文式土器実測図……76
第51図　縄文式土器実測図……77
第52図　縄文式土器実測図……78
第53図　縄文式土器実測図……79
第54図　縄文式土器実測図……80
第55図　縄文式土器実測図……81
第56図　縄文式土器実測図……82
第57図　縄文式土器実測図……83
第58図　縄文式土器実測図……84
第59図　縄文式土器実測図……85
第60図　縄文式土器実測図……86
第61図　遺物分布図（押型文土器）……87
第62図　縄文式土器実測図……88

第63図　縄文式土器実測図…… 89
第64図　縄文式土器実測図…… 90
第65図　遺物分布図（手向山式土器）…… 91
第66図　縄文式土器実測図…… 92
第67図　縄文式土器実測図…… 93
第68図　縄文式土器実測図…… 94
第69図　遺物分布図（撚糸文・縄文土器） 95
第70図　縄文式土器実測図…… 96
第71図　縄文式土器実測図…… 97
第72図　遺物分布図（条痕文土器）…… 98
第73図　縄文式土器実測図…… 99
第74図　縄文式土器実測図……100
第75図　遺物分布図（その他の土器）……101
第76図　縄文式土器実測図……102
第77図　遺物分布図（石鏃）……104
第78図　石器実測図……105
第79図　石器実測図……106
第80図　石器実測図……107
第81図　石器実測図……108
第82図　石器実測図……109
第83図　石器実測図……110
第84図　石器実測図……111
第85図　石器実測図……112
第86図　石器実測図……113
第87図　遺物分布図（削器）……114
第88図　石器実測図……115
第89図　石器実測図……116
第90図　石器実測図……117
第91図　石器実測図……118
第92図　遺物分布図（石匙）……119
第93図　石器実測図……120
第94図　石器実測図……121
第95図　遺物分布図（抉入石器）……122
第96図　石器実測図……123
第97図　遺物分布図（石錐）……124
第98図　石器実測図……125
第99図　遺物分布図（石斧）……126
第100図　石器実測図……127
第101図　遺物分布図（礫器）……128
第102図　石器実測図……129
第103図　石器実測図……130
第104図　石器実測図……131
第105図　遺物分布図（磨石・敲石）……132
第106図　石器実測図……133
第107図　石器実測図……134
第108図　石器実測図……135
第109図　石器実測図……136
第110図　石器実測図……137
第111図　石器実測図……138
第112図　石器実測図……139
第113図　遺物分布図（石皿・台石）・石器実測図……140
第114図　石器実測図……141
第115図　石器実測図……142
第116図　石器実測図……143
第117図　石器実測図……144
第118図　遺物分布図（その他の石器）…145
第119図　石器実測図……146
第120図　遺物分布図（使用痕ある不定形石器）……147
第121図　石器実測図……148
第122図　石器実測図……149
第123図　石器実測図……150
第124図　石器実測図……151
第125図　石器実測図……152
第126図　石器実測図……153

第127図　石器実測図 …… 154
第128図　遺物分布図（石核・原石） …… 155
第129図　石器実測図 …… 156
第130図　石器実測図 …… 157
第131図　石器実測図 …… 158
第132図　遺物分布図（接合資料） …… 159
第133図　石器実測図 …… 160
第134図　石器実測図 …… 161
第135図　石器実測図 …… 162
第136図　石器実測図 …… 163
第137図　遺物分布図（土製品） …… 164
第138図　土製品実測図 …… 165
第139図　遺物分布図（石製品） …… 166
第140図　石製品実測図 …… 167
第141図　石製品実測図（線刻礫） …… 169
第142図　縄文式土器実測図・遺物分布図 171
第143図　遺構配置図 …… 173
第144図　1号住居跡実測図 …… 174
第145図　2号住居跡・出土遺物実測図 …… 175
第146図　3号住居跡実測図 …… 176
第147図　3号住居跡出土遺物実測図 …… 177
第148図　4号住居跡・出土遺物実測図 …… 178
第149図　5・6・7号住居跡実測図 …… 180
第150図　5・7号住居跡出土遺物実測図 181
第151図　8号住居跡実測図 …… 182
第152図　9号住居跡実測図 …… 183
第153図　9号住居跡出土遺物実測図 …… 184
第154図　10号住居跡実測図 …… 185
第155図　10号住居跡出土遺物実測図 …… 186
第156図　土器埋納土坑実測図 …… 188
第157図　土器埋納土坑実測図 …… 189
第158図　土器実測図 …… 189
第159図　土坑実測図 …… 191
第160図　土坑実測図 …… 192
第161図　土坑実測図 …… 193
第162図　土坑実測図 …… 194
第163図　粘土貯蔵穴実測図 …… 196
第164図　穴実測図 …… 197
第165図　遺構配置図 …… 199
第166図　1・2号掘立柱建物跡実測図 …… 201
第167図　3・4号掘立柱建物跡実測図 …… 202
第168図　5・6・7号掘立柱建物跡
実測図 …… 203・204
第169図　8号掘立柱建物跡実測図 …… 205
第170図　8号掘立柱建物跡内土坑実測図 206
第171図　溝状遺構・柵状柱列実測図 …… 207
第172図　掘立柱建物跡規格図 …… 208
第173図　土坑実測図 …… 209
第174図　土坑・出土遺物実測図 …… 211

表　目　次

第1表　九州自動車道建設地遺跡一覧（八代～えびの間） …… 2
第2表　調査行程表 …… 5
第3表　遺跡地名表 …… 11
第4表　器高・口径・底部径比較表 …… 213

図 版 目 次

図版１　遠望・全景
１．遠望（遺跡より北方）
２．遺跡北側の迫地
３．遺跡全景
４．丘陵基部の谷
図版２　遠望・遠景
１．遺跡遠景（水田面より）
２．遠望（人吉市街地）
３．遺跡遠景（西方）
４．遠望（西方）
図版３　土層
図版４　試掘調査
図版５　縄文時代早期の調査
１．出土状態遠景
２．出土状態遠景
３．出土状態遠景
４．出土状態
５．出土状態
６．出土状態
７．出土状態
８．出土状態
図版６　縄文時代早期の調査
１．調査風景
２．調査風景
３．出土状態
４．出土状態
５．出土状態
６．出土状態
７．出土状態
８．出土状態
図版７　縄文時代早期の遺構
１．竪穴式住居跡（右側）・弥生時代４号土坑
２．１号小穴を有する土坑
図版８　縄文時代早期の遺構
１．３号小穴を有する土坑
２．10号小穴を有する土坑
図版９　縄文時代早期の遺構
１．７号小穴を有する土坑
２．８号小穴を有する土坑
図版10　縄文時代早期の遺構
１．11号小穴を有する土坑
２．13号小穴を有する土坑
図版11　縄文時代早期の遺構
１．５号集石
２．８号集石
図版12　縄文時代早期の遺構
１．７号集石
２．同　上（半割）
図版13　縄文時代早期の遺構
１．11号集石
２．同　上（半割）
図版14　縄文時代早期の遺構
１．９・10号集石
２．12号集石
図版15　縄文時代早期の遺構
１．２号炉穴
２．３号炉穴
図版16　縄文式土器出土状況
図版17　縄文式土器出土状況
図版18　縄文式土器出土状況
図版19　塞ノ神式土器

図版20　塞ノ神式土器
図版21　石製品
図版22　弥生時代の遺構
1．遺構配置状況（西側平坦部）
2．1号竪穴式住居跡
3．2号竪穴式住居跡
4．3号竪穴式住居跡
図版23　弥生時代の遺構
1．4号竪穴式住居跡
2．5・6・7号竪穴式住居跡
3．5・6号竪穴式住居跡
4．7号竪穴住居跡
図版24　弥生時代の遺構
1．8号竪穴式住居跡
2．9号竪穴式住居跡
3．10号竪穴式住居跡
図版25　弥生時代の遺構
1．1号土器埋納土坑
2．2号土器埋納土坑
図版26　弥生時代の遺構
1．1号粘土貯蔵穴
2．2号粘土貯蔵穴
図版27　歴史時代の遺構
1．掘立柱建物跡配置状況
2．掘立柱建物跡配置状況
3．掘立柱建物跡配置状況
4．溝状遺構
5．掘立柱建物跡配置状況
6．柵状柱列
図版28　歴史時代の遺構
1．1・2号掘立柱建物跡
2．3・4号掘立柱建物跡
3．5・6・7号掘立柱建物跡
4．柱穴
5．柱穴
6．柱穴
図版29　歴史時代の遺構
1．8号掘立柱建物跡
2．8号掘立柱建物跡内土坑
3．10号土坑
4．10号土坑土師器出土状況
5．9号土坑
6．9号土坑土師器出土状況

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査に至る経緯

九州縦貫自動車道（八代～えびの間）について、日本道路公団福岡建設局から分布調査依頼があったのは昭和52年3月29日付けであった。熊本県教育委員会では調査計画を立て、昭和52年8月4～6日、同8月10～12日現地踏査を行った。前者には上野辰男、緒方勉、松本健郎、村上豊喜、後者には隈昭志、杉村彰一、島津義昭、田添夏喜らが調査を担当した。ちょうど真夏で調査には条件の悪い期間であったが下記の遺跡を確認した。

八代市（東片町古墳群、上片町条里遺構）、球磨郡山江村（淡島遺跡、狸谷遺跡、本城遺跡、高城跡、大丸遺跡）、人吉市（笹栗山遺跡、梢山遺跡、佐無田狩所遺跡、石清水遺跡、七地条里遺構、尾丸横穴群、原城跡、尾丸古塔碑群、七地遺跡、人我胸遺跡、昼子遺跡）以上18ヵ所。

この結果を昭和52年9月9日付けで日本道路公団福岡建設局あて回答した。その後日本道路公団から昭和53年4月11日付けで文化庁長官あて協議書が提出され、熊本県教育委員会の意見を付けて同年5月19日付けで文化庁長官あてに発送した。その内容は下記のとおりである。

このなかでとくに注意を要する遺跡は13尾丸横穴群であった。凝灰岩の崖面があちこちに崩壊しており、踏査段階では遺跡の重要性は判断できないが、近接して大村横穴群（人吉市・国指定史跡）も存在することから、装飾横穴の可能性があった。そこで「装飾横穴が出現した場合、現状保存が必要である」旨の意見を付した。

文化庁からは上記の協議書に対して、昭和53年6月12日付けで下記の通知があった。

「東片町古墳群（八代市東片町所在）他17遺跡については熊本県教育委員会と協議の上事前に発掘調査を実施すること。なお、調査の結果、重要な遺構等が発見されたときは、設計変更等によるその保存に配慮すること。」

このことを熊本県教育委員会から昭和53年6月20日付けで、日本道路公団あて通知した。

昭和56年度から熊本県教育委員会は日本道路公団の依頼をうけ、各遺跡の試掘調査に着手し、上片町条里遺構、七地条里遺構、大丸遺跡の全面発掘に移行していった。

これと前後して日本道路公団では前述の尾丸横穴群について検討され、調査着手前に設計変更によって横穴群を保存することとなった。当初は橋脚の一部が横穴群を削る計画であったが、横穴群を避けるような径間割及び基礎根入れの工法をとることになり、昭和57年8月6日付けで、熊本県教育委員会に協議書が提出された。これに対し昭和57年8月19日付けで、異議ない旨の回答を行った。また3淡島遺跡についてはトンネル区間に当たることがわかったため、調査対象から除外することとなった。

第1表　九州自動車道建設地遺跡一覧（八代～えびの間）

分布調査遺跡番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	要調査面積（㎡）（分布面積）	教育委員会の意見
1	東片町古墳群	八代市東片町	微高地上に立地する古墳群及び古墳時代の住居址群が想定される。	1,050(28,000)	発掘調査が必要である。
2	上片町条里遺構	八代市上片町	八代平野の東片町、西片町、中片町、上片町に条里型地割が残っている。その一部に路線が予定されている。	10,000(30,000)	仝　上
3	淡島遺跡	山江村 万江字淡島	淡島神社の西側丘陵上に、石器や石材片が散布しており、縄文時代の住居址が存在すると予想される。	800(1,500)	仝　上
4	狸谷遺跡	山江村 山田字狸谷	小森集落の西側丘陵のサービスエリヤ予定地内に、縄文時代早期の押型文土器片、石器や石材片が散布し、住居址が予想される。	2,800(12,500)	仝　上
5	本城遺跡	山江村 山田、乙、本城	山田川を眼下に望む台地上に土師器片が一面に散布し、生活址が予想される。	3,200(6,000)	仝　上
6	高城跡	山江村 山田、乙、本城	山田川左岸の本城遺跡の奥に、段違いの平担地と堀り切り状の凹道が残る中世城跡と考えられる。	2,800(4,000)	仝　上
7	大丸遺跡	山江村 山田、乙、大丸	鬼木川と水田を一望できる独立丘陵で、周辺は切り落し状の急斜面で城跡の可能性がある。また台地上に古墳時代の住居址が考えられる。	2,700(6,000)	仝　上
8	笹栗山遺跡	人吉市 願成寺町笹栗山	笹栗山東の丘陵の西斜面に弥生式土器片、土師器片が散布し、住居址と水田址の可能性がある。	12,000(28,000)	仝　上
9	梢山遺跡	人吉市願成寺町	火葬場西側の丘陵上に土師器片が散布し、古代の生活址の存在が考えられる。	2,500(4,000)	仝　上
10	佐無田狩所遺跡	人吉市 願成寺町狩所	佐無田の丘陵上に土師器片が散布するほか、相良氏第四代頼俊の居館関連の遺構が存在すると予想される。	10,000(54,000)	仝　上
11	石清水遺跡	人吉市 願成寺町岩清水	人吉市北部球磨川右岸の丘陵上に、縄文式土器(市来系)、石器や石材片が散布する。縄文時代の住居址が考えられる。	10,000(25,000)	仝　上
12	七地条里遺構	人吉市 七地町後葉園	球磨川左岸に広がる条里遺構で、付近に「大坪」の地名が残っている。	3,000(50,000)	仝　上
13	尾丸横穴群	人吉市 七地町尾丸	尾丸台地の北側崖面に凝灰岩の露頭があり、ここに古墳時代後期の横穴(6基以上)が存在する。	800(4,000)	発掘調査が必要である。なお装飾横穴が出現した場合、原状保存が必要である。
14	原城跡	人吉市 七地町尾丸	人吉城関連の伝原城の一部をなす城跡と推定され、空堀が残る。また多量の土師質土器片が散布している。	11,000(52,000)	発掘調査が必要である。重要な遺構については保存措置を必要とする。
15	尾丸古塔碑群	人吉市 七地町尾丸	尾丸台地のくびれ部付近に板碑や五輪塔の残欠が積んであり、付近に中世～近世の墓地があったと考えられる。	2,000(2,000)	発掘調査が必要である。古塔碑群は移転保存が必要である。
16	七地遺跡	人吉市 七地町七地	国道219の北、肥薩線の東にある丘陵上に、縄文・弥生・古墳時代の土器、中世の土器、陶磁器が散布し、重複した生活址が予想される。	12,000(94,800)	発掘調査が必要である。
17	人我胸遺跡	人吉市赤池 水無町人我胸	人我胸川右岸の小扇状地上に、弥生式土器片、土師器片が散布し、この期の住居址の可能性がある。	1,500(4,400)	仝　上
18	昼子遺跡	人吉市 上漆田町昼子	鳩胸川の西の河岸段丘上で、微細な土器片が散布する。	8,000(23,000)	試掘調査を行い、発掘の要、不要を判断する。

調査の組織

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　岩崎辰喜（昭和57年度　文化課長）米村嘉人（昭和58年度　文化課長）
森　一則（昭和59・60年度　文化課長）

調査総括　隈　昭志（文化課主幹・文化財調査係長）

調査・報告書担当　木﨑康弘（文化財保護主事、調査・報告書）古森政次（文化課嘱託、試掘調査）
鶴嶋俊彦（文化課嘱託、本調査）　河北　毅（文化課嘱託、本調査）
坂田和弘（文化課嘱託、本調査）　中原由子（文化課嘱託、報告書）

専門調査員　白木原和美（熊本大学文学部教授・考古学）
甲元真之（熊本大学文学部助教授・考古学）
大三輪龍彦（鶴見大学助教授・考古学）
阿蘇品保夫（熊本市立高校教諭）
柴田喜太郎（広島大学理学部研究生・地質学）

調査指導及び協力者

高田素次（熊本県文化財保護指導員）　三島　格（肥後考古学会会長）
花岡興輝（県立美術館美術専門員）　田中　琢（奈良国立文化財研究所）
佐原　眞（奈良国立文化財研究所）　松沢亜生（奈良国立文化財研究所）
安蒜政雄（明治大学文学部講師）　松藤和人（同志社大学文学部講師）
犬童敏春（熊本県文化財保護指導員）　富田紘一（熊本市立熊本博物館）
新東晃一（鹿児島県教育委員会）　長野真一（鹿児島県教育委員会）
高木恭二（宇土市教育委員会）　椎葉文雄（人吉市教育委員会）
松舟博満（求麻地方史研究会）　菖蒲和弘（求麻地方史研究会）
高場一郎（求麻地方史研究会）　永田　満（求麻地方史研究会）
和田好史（求麻地方史研究会）　人吉教育委員会
山江村教育委員会　免田郷土研究会　求麻地方史研究会

調査事務局

林田茂一（昭和57・58年度課長補佐）　佐々木正典（昭和59・60年度課長補佐）
大塚正信（昭和57・58年度文化課主幹・経理係長）　柴田和馬（昭和59・60年度文化課主幹・経理係長）
松崎厚生（昭和57・58年度文化課参事）　花田隆二（昭和59年度文化課参事）
森　貴史（昭和60年度文化課参事）　谷喜美子（文化課主事）

道路公団

坂巻持千男（人吉工事事務所所長）　古賀文男（人吉工事事務所庶務課長）
村田文敏（人吉工事事務所工務課長）　豊永盛喜（担当）　渡久地政樹（担当）

第２節　調査の方法と経過

九州縦貫自動車道は、遺跡の立地する南西方向にのびる舌状台地に対してほぼ直行して走る計画である。遺跡調査ではこの自動車道の中心杭の二点を使用して調査区画を設定した。

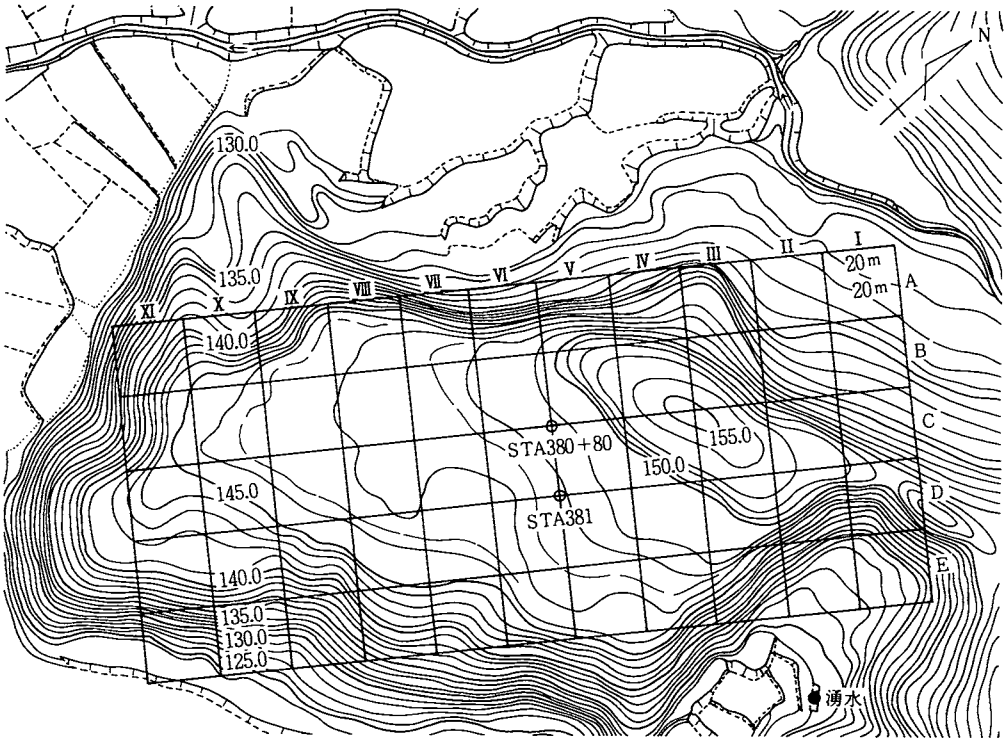
まず、STA380＋80と STA381を結ぶ線を基準とし、20m×20m の大グリッドを設定し、場所の指定を北東隅から基準線に直行してⅠ～XI、平行してA～Eという呼称によって行った（第１図)。そしてさらに、その大グリッドを４ m×４ m の25グリッドに分割し、それぞれを北東隅から横方向に１～25と呼称した。従って場所の指定は、例えばⅧB（大グリッド）－３（小グリッド）というかたちとなる。

調査は、この４ m×４ m の小グリッドを最小単位として実施した。特に包含層の調査では、遺物の分布を考慮に入れながらグリッドをあけていくかたちをとった。

次に調査の手順と経過は、以下のとおりである。

４月は、発掘調査の準備および調査の開始。調査事務所を建設し、重機により表土層を除去し、遺構の確認を行った。その結果、弥生時代の竪穴式住居跡等の遺構と歴史時代の遺構が検出された。

５月は、本格的に調査を開始した。歴史時代と弥生時代の遺構の調査が作業の中心となった。



第１図　地 形 図

ただ、弥生時代の遺構の埋土が確認面の土と同質であるという点と調査員がこの地域の土壌に不慣れであるということから、遺構の検出に大きく手間取った。しかし、人吉盆地での初めての竪穴式住居跡の発見でもあり、各方面の注目を集めた。

6月は、竪穴式住居跡の実測作業を残して、縄文時代早期の調査をXI・X区より開始した。主な遺物としては、押型文土器の尖底部分が出土している。こうした遺物の出土と同時に、純粋なアカホヤ火山灰を埋土とする土坑を確認した。この頃から埋土の状態がすべて把握できるようになり、土と時期とのある程度の対比が可能となった。

7月は、梅雨にあたり思う程の作業の進展はなかったが、遺構として特異な土坑を検出した。関東・東北地方では一般に「陥し穴」と呼ばれる土坑の底面に1個から数個の小穴を穿った遺構である。九州でのこの種の遺構の検出例はほとんど無く、その意味でも重要な資料となるものと考えられた。

8月は、すでに梅雨があけ、一年の内で最も土の状態の悪い乾燥期である。しかも遺物の量は、極端に増加していった。そのため作業の能率を高めるため作業員の数をほぼ倍にして対応した。対象とした発掘区は、Ⅷ区列である。出土する土器のほとんどは、南九州を中心に分布する塞ノ神式土器であり、その良好な資料が続々と検出される。

第2表　調査行程表

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
調査対象時代	弥生時代→							弥生時代→				
			縄文時代早期→									
								前期→	後期→			
											先土器時代→	
	歴史時代→								歴史時代→			
備考	◦表土剝ぎ	◦竪穴式住居跡検出	◦小穴を有する土坑検出	◦専門調査員 柴田		◦線刻礫確認	◦表土剝ぎ		◦歴史時代土坑検出	◦歴史時代屋敷跡検出	◦剝片尖頭器出土	◦専門調査員 白木原・甲元 ◦〃 大三輪・阿蘇品 ◦29日 終了

９月は、乾燥期を脱して徐々に土の状態が良好になってくる。発掘区は、Ⅶ区列に移行して、遺物量もさらに増加した。出土する土器には、塞ノ神式土器の他に押型文土器・手向山式土器、僅かではあるが、南九州に分布する吉田式土器もある。また石製品としては、偏平礫に穿孔した垂飾品、線刻礫が出土した。

８月と共に発掘調査の山場である。

10月は、Ⅵ区列の調査と４月での表土層削除の対象外であった東半分の表土層削除を実施した。その際、日本道路公団のご協力により排土を遺跡外に捨てることが可能となり、以後の調査を順調に進めることができた。

11月は、ＶＣ～Ｅ・ⅣＣ～Ｅの調査を行った。弥生時代の遺構と縄文時代早期の遺物を検出した。

12月～２月は、台地北部の山部に調査対象を移した。遺物量は少ない。歴史時代の掘立柱建物群・墓壙を検出し、歴史時代の屋敷の構成の全容を知ることができた。

３月の前半は、ⅦＢＣ区、ⅧＡＢ区の掘り残した部分の縄文時代早期の調査を実施し、後半は土層の堆積状態の観察のための深掘りを行った。また、２月から３月にかけて剝片尖頭器を主体とした石器文化の調査を実施した。

10月に行われた発掘技術者研修会の風景

第II章　遺跡の概要

第1節　遺跡の環境

1．地理的環境

九州島は、地形的に大きく四つに区分される。すなわち、福岡県・佐賀県及び長崎県北半の北部山地、大分県・熊本県北半と長崎県南半の中部火山地域、宮崎県・熊本県南半の中部山地、そして鹿児島県を中心とした南部火山地域の四地域である。その中で、中部山地は、一般に九州山地とも呼ばれ、祖母・国見・市房などの1,700m級の山々が連なる高山地帯である。大丸・藤ノ迫遺跡がある人吉盆地は、この中部山地内に大きく口を開けた標高100m～200mを測る断層盆地である。

盆地の中央部には東西に貫流する球磨川があり、その流れは、日本三急流に数えられる。そしてこの球磨川は、人吉盆地を抜けると急激に流れを北方へ変え、中部山地の谷間を蛇行しながら八代海へと注ぎ込んでいる。その間の支流は、80本を数え、流域面積は、1,880㎢に及び、熊本県総面積の25％を占めている。こうした県下最大の規模を持つ球磨川は、さらに人吉盆地とその周辺での地形展開の中心を成している。すなわち、球磨川を中心としての南北に沖積地→台地・丘陵地→山地という展開である。こうした地形の展開ではあるが、人吉盆地での地形上の中心を成すものは台地・丘陵地で、沖積地（細粒質・中粗粒質灰色低地土）の広がりは、球磨川とその支流の流路に沿ってみられるのみである。

球磨川南岸の台地・丘陵地の中心は、白髪岳山地の麓に形成された複合扇状地である。この扇状地には、扇状地の中央部（扇央部）で水流が潜流化するという性質があり、遺跡の分布は、こうした地形の性質によっても左右されて、主に扇頂・扇端部を中心にみられる。こうした地域の他に下球磨すなわち人吉市周辺には、姶良火山起源の入戸火砕流（シラス）を基盤とする台地・丘陵地が分布している。一方、北岸には、盆地中央部にみられる川辺川による広大な扇状地とそれ以外の地域の阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵地がある。このように球磨川の両岸の台地・丘陵地には基本的に生成の違いがあることがわかる。ちなみに、大丸・藤ノ迫遺跡は、球磨川北岸の入戸火砕流を基盤とする丘陵地に立地している。

次に、目を山地に移してみよう。球磨・人吉地方では盆地部に平地がみられるのみで、そのほとんどを球磨山地が占めている。そして、この山地には多くの種類の岩石・岩層がみられる。石器時代にあっては道具の主流が石器であって、その石器に使用された岩石が当地にあるものかそうでないのかが問題の一つである。そこで、当地での岩石・岩層の分布を示しておきたい

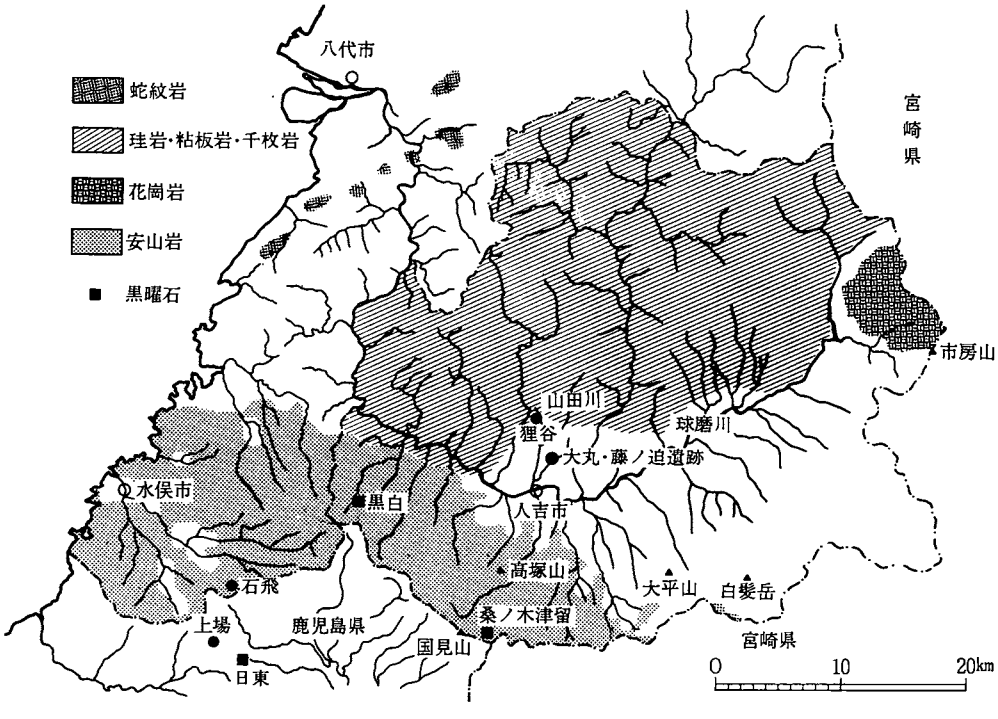
（第２図）。

大丸・藤ノ迫遺跡出土の石器の中で最も多い石材として黒曜石・珪岩・安山岩が使用されている。黒曜石は、人吉市桑ノ木津留と球磨村黒白で産出が確認されている。また鹿児島県大口市日東の産出地も近距離にある。珪岩は、人吉盆地の北側の山地に岩脈があり、その山地を流れる河川や川辺川の扇状地の礫層中に転石があり、入手が容易である。安山岩も同様に入手が容易で、盆地南西の山地の表層を成しており、河川には多くの転石がみられる。これらの石材の他、石器として利用されている砂岩・千枚岩・花崗岩（盆地東側の市房山周辺）も球磨山地中にみられる。

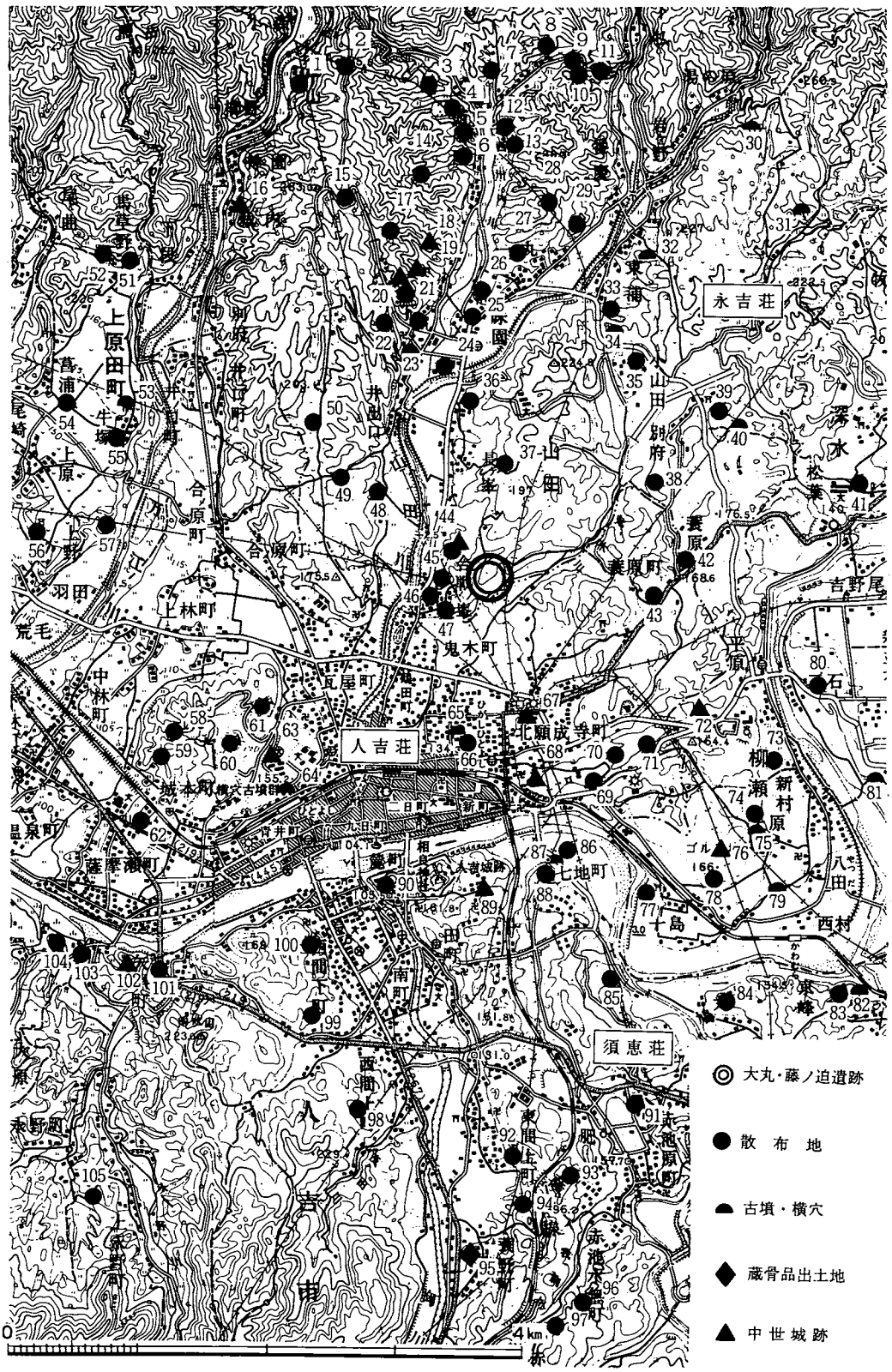
このように遺跡の周辺には多種の石材の産出地が分布し、しかも本流である球磨川には転石としてすべての種類の岩石が流入している（第２図）。

２．歴史的環境

大丸・藤ノ迫遺跡は、球磨川とその支流である山田・鬼木の両河川の流域にあり、その流域内に点在・分布している遺跡の中の一つにすぎない（第３図）。したがって、遺跡を取り巻く歴史的な環境は、遺跡に残されたものがそれぞれの時代の中でどのような役割を持って、どのような位置を占めていたのかを考える上での一つの材料となるはずである。



第２図　球磨川流域図



第３図　遺跡分布図

（１）先土器時代

確認されている先土器時代の遺跡は、人吉・球磨地方全体で22箇所であり、その中のほとんどが人吉・山江を中心とする地域にある。その所属時期による内訳は、ナイフ形石器文化に属するもの15遺跡、細石器文化のもの５遺跡、不明４遺跡である。しかし、ほとんどのものが表面採集によって確認された遺跡であり、その全体像については不明な点が多く残されている。

ナイフ形石器文化の中で最も古い石器文化は、３遺跡のものがあり、姶良噴火以前にあたる。この中で狸谷遺跡（５）は、その様相が最も良くわかるもので、ナイフ形石器・掻器・削器・彫器・磨石・敲石等の多くの石器群が検出されている(注1)。次に、姶良噴火以後の石器文化は、包含層が比較的浅い部分にあり、14遺跡が確認されている。検出された資料はほとんどがナイフ形石器であるが、その中でも国府型類似のナイフ形石器を出土した鼓ヶ峰遺跡（70)、大丸・藤ノ迫遺跡に隣接する高城遺跡(44)(注2)、剝片尖頭器が表面採集されている射場ノ本遺跡(105)（松舟・木﨑　1981）は、大丸・藤ノ迫遺跡の先土器時代を考える上で、特に注目される。

（２）縄文時代

縄文時代の大丸・藤ノ迫遺跡では、早期・前期・後期・晩期の遺物が出土し、その中で早期が質量共に最も充実している。

早期の遺跡としては、狸谷遺跡、大村遺跡（58)、石清水遺跡（69)、射場ノ本遺跡がある。狸谷遺跡は、押型文土器の時期に属する住居跡が確認され、しかも石組炉等の施設もあり、これらによる集落の構成を知る上での重要遺跡である。大村遺跡は、押型文土器を中心とした時期の遺跡であるが、その調査によって集石・炉穴などの遺構と共に押型文土器の他、撚糸文土器・手向山式土器・平栫式土器・撚糸文系の塞ノ神式土器が出土した（赤瀬・椎葉　1979)。この遺跡は、早期の遺跡の中でも大丸・藤ノ迫遺跡と同じように球磨川を前面に控えた遺跡にあたり、比較検討の資料として重要である。この他に、比較遺跡として大量の黒曜石の剝片・砕片が採集されている射場ノ本遺跡がある。また、高城遺跡は、遺跡の規模は小規模であるが、撚糸文系の塞ノ神式土器を主体とした遺物が出土しており、隣接した遺跡相互の比較は極めて興味がある。

前期以降の遺跡の中でその内容が安定・充実してくるのは、後期ないし晩期に属するものである。そうした中で、鼓ヶ峰遺跡では前期末～中期前半にかけての遺跡として曽畑式土器・船元式土器が、射場ノ本遺跡では中期前半の並木式土器が、僅かではあるが、出土している。一方、後期の遺跡としては、矢黒神社前遺跡（101）がある。この遺跡からは、縄文時代後期後半の土器・石器の他に石刀の柄部が採集されている。晩期の遺跡には、立地上で二つの種類の遺跡、すなわち、台地・丘陵地上の遺跡（アンモン山遺跡・天道ヶ尾遺跡）（88）とその下の低地部上の遺跡（アンモン山遺跡・七地遺跡）(86)があり、その二つが一体となって集落を構成し

第3表　遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	典拠他
1	平山	山江村大字万江字平山	縄	①
2	光畑	〃　〃　〃　〃光畑	縄	①
3	山渋谷	〃　大字山田字山渋谷	先・縄	②
4	中山・狸谷	〃　〃　〃　〃中山・狸谷	先・縄	③
5	狸谷	〃　〃　〃　〃狸谷	先・縄	④・⑥
6	庚申	〃　〃　〃　〃庚申	縄	③
7	山渋	〃　〃　〃　〃山渋	縄	③
8	鍋ノ平	〃　〃　〃　〃鍋ノ平	縄	③
9	段岡A	〃　〃　〃　〃段岡	縄	③
10	〃B	同上	縄	③
11	〃C	同上	縄	③
12	又ヶ野	山江村大字山田字又ヶ野	縄	③
13	中尾	〃　〃　〃　〃中尾	縄	③
14	庚申洞穴	〃　〃　〃　〃庚申	縄	③
15	丸岡	〃　〃　〃　〃丸岡	縄	⑤
16	万江の城	〃　大字万江字城内	歴	⑤
17	中山	〃　大字山田字中山	縄	⑤
18	山田城A	〃　〃　〃　〃城山	歴	⑤
19	〃B	〃　〃　〃　〃下城子	歴	⑤
20	〃C	〃　〃　〃　〃大王谷	縄・歴	⑤
21	大王神社裏	〃　〃　〃　〃味園		①
22	毘沙門堂前	山江村大字山田字寺山	縄	①
23	城原(ツカロウー)	〃　〃　〃　〃寺ノ下	古墳？	①
24	林田	〃　〃　〃　〃林田		①
25	味園	〃　〃　〃　〃味園		①
26	山江中学校	〃　〃　〃　〃述	縄	①
27	内角	〃　〃　〃　〃内角	縄	③
28	東中原	〃　〃　〃　〃東中原	縄	③
29	一丸	〃　〃　〃　〃一丸	縄	⑤
30	湯の原(古墳群)	〃　〃　〃　〃湯の原	縄・古墳	⑤
31	油免(古墳群)	〃　〃　〃　〃油免	縄・古墳	⑤
32	東浦(古墳群)	〃　〃　〃　〃東浦	縄・古墳	⑤
33	京塚	〃　〃　〃　〃京塚	縄	③
34	京塚古墳	同上	古墳？	③
35	屋敷下	山江村大字山田字屋敷下	縄	③
36	手石方	〃　〃　〃　〃手石方	縄	③
37	長ヶ峯	〃　〃　〃　〃長ヶ峯	縄	③
38	別府	〃　〃　〃　〃別府	縄	③
39	塚原	〃　〃　〃　〃塚原	縄	③
40	別府古墳群	同上	古墳	⑤
41	鳥越	相良村大字深水字	縄	⑤
42	蓑原	山江村大字山田字蓑原	縄	③
43		人吉市蓑原町		③
44	高城(跡)	山江村大字山田字高城	先・縄・歴	⑥
45	城下	〃　〃　〃　〃城下	弥	③
46	合戦峯A	〃　〃　〃　〃合戦峯	弥	①
47	〃B	同上	弥	⑤
48	濱谷	山江村大字山田字濱谷	縄	⑦
49	下原	〃　〃　〃　〃下原	縄	⑦
50	一本松	〃　〃　〃　〃一本松	縄	①
51	下ノ段	〃　大字万江字下の段	縄	⑧
52	後田	人吉市上原田町後田		⑤
53	牛塚古墳	〃　〃　牛塚	古墳	⑤
54	六地蔵	人吉市上原田町六地蔵	縄	⑧
55	牛塚	〃　〃　牛塚	縄・弥	⑤
56	八王子	〃　下原田町八王子	縄・弥	⑧
57		〃　〃		⑧
58	村山D	〃　城本町村山	縄	⑨
59	〃C	〃	縄	⑨
60	〃B	〃	縄	⑨
61	〃A	〃	縄	⑨
62	城本	〃　城本町	縄	⑩
63	村山城跡	〃　城本町村山	歴	⑧
64	大村横穴群	人吉市城本町	古墳	⑤
65	鬼木古墳	〃　鬼木町	古墳	⑤
66	人吉高校校庭	〃　〃	弥	⑤
67	佐無田の館	〃　北願成寺町	歴	⑧
68	大村平家城跡	〃　〃　上の寺	歴	⑤
69	石清水	〃　〃　石清水	縄	⑤
70	鼓ヶ峯	〃　〃　鼓ヶ峯	先・縄・歴	⑥
71	一本松	〃　〃　一本松	先	⑪
72	平家原城跡	相良村大字柳瀬字中原	歴	⑤
73		〃　〃　〃　〃	弥	③
74		〃　〃　〃　〃	縄	③
75	覚井古墳	〃　〃　〃　〃覚井	古墳	⑤
76	蔵城跡	〃　〃　〃　〃蔵城	歴	⑤
77	十島	〃　〃　〃　〃十島	縄	⑤
78	人吉ゴルフクラブ	〃　〃　〃　〃	縄	③
79	陣の内横穴群	〃　〃　〃　〃陣の内	古墳	⑤
80	三石	〃　〃　〃　〃三石	縄・弥	⑤
81	三石横穴群	〃　〃　〃　〃	古墳	⑤
82	京ヶ峯古墳	錦町大字西字京ヶ峯	古墳	⑤
83	京ヶ峯	同上	縄	⑤
84	一丸	錦町大字西字一丸	縄	⑤
85	花立	人吉市七地町花立		⑤
86	七地	〃　〃	縄・歴	⑥
87	尾丸横穴群	〃　〃　尾丸	古墳	⑤
88	天道ヶ尾	〃　〃　天道ヶ尾	先～歴	⑥
89	原城跡	〃	歴	⑤
90	籠	〃　籠町	縄	⑫
91	赤池原	〃　赤池原町赤池原	縄	⑤
92	東間	〃　東間上町	縄	⑤
93	白鳥平	〃　赤池原町白鳥平	縄	⑤・⑫
94	道場原	〃　赤池水無町道場原	縄	⑤
95	塘野	〃　塘野町述野	歴	⑤
96	人我胸	〃　赤池水無町人我胸	縄・弥	⑤
97	昼子	〃　上漆田町昼子	縄	⑤
98	茂田	〃　西間上町茂田	縄	⑤
99	岩川内	〃　西間下町岩川内	縄	⑤
100	北野	〃　〃　北野	縄	⑤
101	矢黒神社前	〃　矢黒町	縄	③
102	矢黒城	〃　〃　西ノ園	歴	⑤
103	戸越	〃　下戸越町下大坪	縄	⑤
104	戸越坂	〃　磨波神	縄	⑤
105	射場ノ本	〃　上永野町射場ノ本	先・縄	④

① 郡真賢氏の御教示による。
② 松舟博満「消される遺跡地」『郷土』第11号　1983
③ 木崎管見
④ 松舟博満・木崎康弘「熊本県球磨・人吉地方の先土器時代資料について」『肥後考古』第2号　1982
⑤ 文化庁文化財保護部『全国遺跡地図　熊本県』1981
⑥ 熊本県教育委員会発掘調査
⑦ 松舟博満氏の御教示による。
⑧ 髙蒲和弘氏の御教示による。
⑨ 赤瀬恵・椎葉文雄『村山遺跡調査報告書』1979
⑩ 髙場一郎氏の御教示による。
⑪ 松舟博満「シラスの下の文化層」『くまひと』第3号　1983
⑫ 人吉市教育委員会　発掘調査

ているようでもある。

（3）弥生時代

弥生時代後期は、球磨・人吉地方の弥生時代で最も遺跡数の多い時期で、独特な文様を持つ免田式土器によって特徴付けられている。球磨・人吉地方には、この免田式土器を出す遺跡30ヶ所があり(肥後考古学会　1984)、それらが人吉盆地中央部に集中し分布している。

大丸・藤ノ迫遺跡はこの分布域の西端部にあたり、この周辺では本目遺跡・市房隠遺跡のような有力な遺跡は、あまりみられない。それどころか、免田式土器の遺跡は、荒毛遺跡や合戦峯遺跡（47）のように僅かに周辺でみられるものの、そのほとんどは上記した分布域の中心部に集中している。こうしたことは、球磨・人吉地方の弥生時代後期の中心を成す地域が広大な低地部を前面に擁する盆地の中央部にあり、大丸・藤ノ迫遺跡を中心とした一帯はその周辺部にあたっていたということを示しているとも考えられる。

（4）古墳時代

古墳時代に至ってもその中心舞台は人吉盆地の中央部にあった。そのことは、前方後円墳である亀塚古墳群・四塚古墳群・才園四塚古墳群・鬼ノ釜古墳のような有力古墳がこの一帯に広がっていることからも伺われる。これに対して、大丸・藤ノ迫遺跡周辺は、湯の原古墳群(30)・湯免古墳群（31）・東浦古墳群（34）・別府古墳群（40）のような小型石室を持つ小円墳群や大村横穴群（64）・京ケ峯横穴群（82）等の横穴群のような盆地中央部に点在する古墳とは比較にならないほどの小規模な墳墓群が分布するという周辺地域の状態を呈している。

こうした小規模な古墳の他に、人吉市アンモン山遺跡では成川式土器を伴った古墳時代後期の住居跡2基が確認されている(椎葉他　1985)。こうした事実は、成川式土器に象徴されるような南九州の文化を基盤とする古墳時代の社会が大丸・藤ノ迫遺跡の付近一帯に存在していたことを表わしているのかもしれないし、さらに大和朝廷による隼人政策の前線基地である球磨・人吉地方が隼人社会を基盤としてあったことを示すものとしても注目される。

（5）歴史時代

古代における球磨・人吉地方の中心地域は、須恵器・瓦の古窯跡（高山古窯跡・下り山古窯跡等)、古瓦出土遺跡（久鹿寺田遺跡)、蔵骨器出土遺跡（廻り迫遺跡他4遺跡)、墓誌板出土遺跡（黒田遺跡）のような有力遺跡のほとんどが盆地中央部に多く分布していることから、依然として古墳時代と同様に盆地中央部であると考えられる。ただ、一方で人吉周辺もまた、時代が下るに従って、次第に中心的な地域の一つとなっていったようである。そのことを示すものが、『和名抄』に記載されている「人吉郷」の存在であり、平安時代末期の作風を示す仏像の存在（高寺院毘沙門天立像）そして中世における人吉の優位であろう。しかしながら、こうした断片的な資料の他には、古代の人吉周辺の状況を知ることのできるものはほとんど無く、わず

かに凝灰岩製の蔵骨器を出土している塘野遺跡（95）のみがある。これに対して、中世に入ると資料は、周辺が中心地域となったという関係上、古文書や神社仏閣・中世城跡を中心として急速に増加するようになる。

しかし、いずれにしても一般の生活状態を示す遺跡の資料は無く、この種の資料の発見が期待されている。

註１　昭和59年度に熊本県教育委員会が調査した遺跡で、縄文時代早期の集落と先土器時代の二つの石器文化が検出されている。

註２　人吉市鼓ヶ峯遺跡（昭和59～60年度）と山江村高城遺跡（昭和59年度）は、熊本県教育委員会が調査し、その結果、入戸火砕流直上に包含層がみられる先土器時代の石器文化が検出された。

参考文献

赤瀬　恵・椎葉文雄『村山遺跡調査報告書』 1979

熊本県 『球磨川流域環境利用ガイド』 1985

熊本県企画開発部『土地分類基本調査－人吉』 1982

椎葉文雄・松舟博満・菖蒲和弘『アンモン山遺跡』 1985

土壌調査研究会 『あるいて見る　九州の土壌－土壌調査の方法と利活用』 1982

肥後考古学会 『連合学会資料－免田式土器の諸問題』 1984

松舟博満・木﨑康弘「熊本県球磨・人吉地方の先土器時代資料について」
『肥後考古』第２号 1982

松舟博満 「永野の旧石器」『郷土』第10号 1982

松舟博満 「消される遺跡地」『郷土』第11号 1983

松舟博満 「シラスの下の文化層」『くまひと』第３号 1983

第２節　遺跡の概要

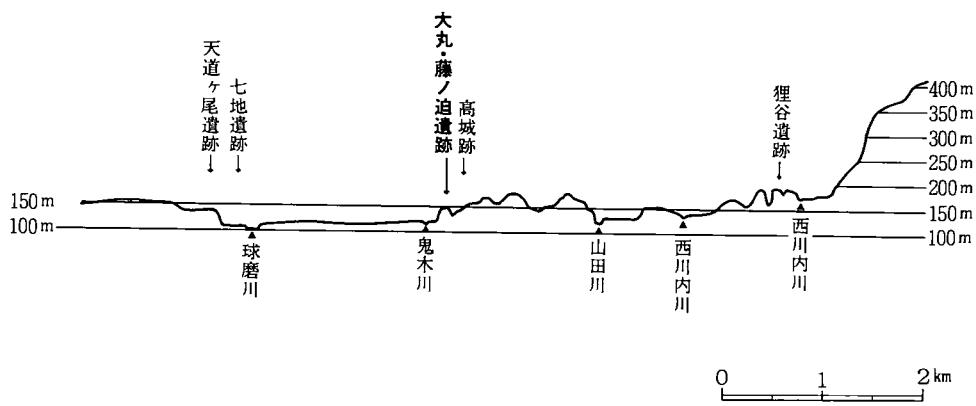
これまで遺跡を取り巻く概括的な環境について記述してきた。そこで、次にこの遺跡の持つ立地上の特徴とその概要について触れることにしたい。

遺跡は、熊本県球磨郡山江村大字山田字藤ノ迫に所在し、球磨川・山田川・鬼木川の氾濫原を眼下に見下ろすことのできる標高145m～155m の丘陵上にある。人吉盆地における位置は、山地より伸びる台地･丘陵地の突端部にあたり、球磨川の流れる様子を一望できる所でもある。（第４図)。

この丘陵は、大きな谷部によってほとんど独立した状態を示し、先端部を南西方向に向けている。地形は、北側に山部を擁し、そこより南へ緩やかに傾斜して広い平坦部となり、その後傾斜を強くして下面の水田面（氾濫原）に至るという特徴をとる。丘陵の平坦部には、中央部に南東方向へ開く谷部があり、あたかも当地を二分するかのようである。谷部と平坦部との比高７ m、平坦部と水田面との比高26m を測る。

遺跡としての丘陵の中心は、平坦部にあたり、この部分から先土器時代、縄文時代（早期・前期・後期・晩期)、弥生時代（後期)、歴史時代にわたる資料が出土した。この中で遺跡の主体を占める時期は、縄文時代早期、その中でも塞ノ神式土器の時期である。資料は、厚いアカホヤ火山灰に覆われて後世の攪乱がほとんど及んでおらず良好な状態であった。縄文時代ではその後ほとんど人間の足跡がみられず、僅かな資料がみられるのみである。このことは、アカホヤの人間活動に及ぼす影響を考える上で興味あるものであった。この他、剝片尖頭器を主体とした石器文化の先土器時代、免田式土器の時期の土器組成と集落、歴史時代の屋敷跡といった内容を持っている。

そこで次に、こうした時代文化と層位の関係について触れていくことにしたい。



第４図　地形断面図

第３節　遺跡の層位と包含層

遺跡では、姶良カルデラ起源の入戸火砕流（シラス）をⅧ層として８枚の土層が確認できた。そこで、以下各層別にその状態を示していきたい。

第Ⅰ層　表土層（耕作土）

第Ⅱ層　黒色土層

この層は、ほとんどが耕作等によって削られており、遺跡の北側斜面部と歴史時代の遺構の埋土としてわずかに残存している。しまりが無く、全体的に軟弱な状態を示しており、黒ボク土に混じってわずかにアカホヤのブロックを含んだ土層である。この層の形成時期は、歴史時代の遺構の埋土の基本となっているため、歴史時代以降であると考えられる。

第Ⅲ層　黄褐色土層

アカホヤ火山灰の土層である。この層は、土の性質によって二つの亜層に分離できる。すなわちⅢａ層とⅢｂ層である。

第Ⅲａ層は、遺跡北側の斜面部を中心に分布しているが、その残存範囲は狭い。この層の成因は、土壌化したアカホヤ火山灰の二次的な堆積によるものと考えられる。そしてその堆積の開始は火山灰降下直後に、その終了は弥生時代後期後半の遺構の埋土の基本となっていることから弥生時代にあたると考えられる。遺物は、縄文時代前期～弥生時代後期のものがみられる。

第Ⅲｂ層は、遺跡のほぼ全域に分布・残存し、非常に硬くしまったアカホヤ火山灰の一次堆積による純粋層である。無遺物層である。

第Ⅳ層　褐色土層

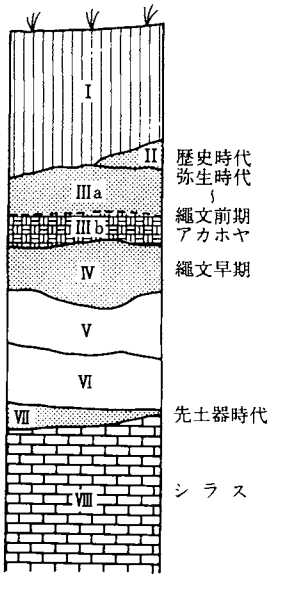
縄文時代早期の遺物を包含する土層である。分布は、遺跡全域に広がっている。土質としては、しまりがあり、粒子も比較的細かい。縄文時代早期の遺物の包含状態は、この層の上下に数型式の土器が混在したかたちでみられ、その層位的な分離は不可能である。

第Ⅴ層　黒褐色土層

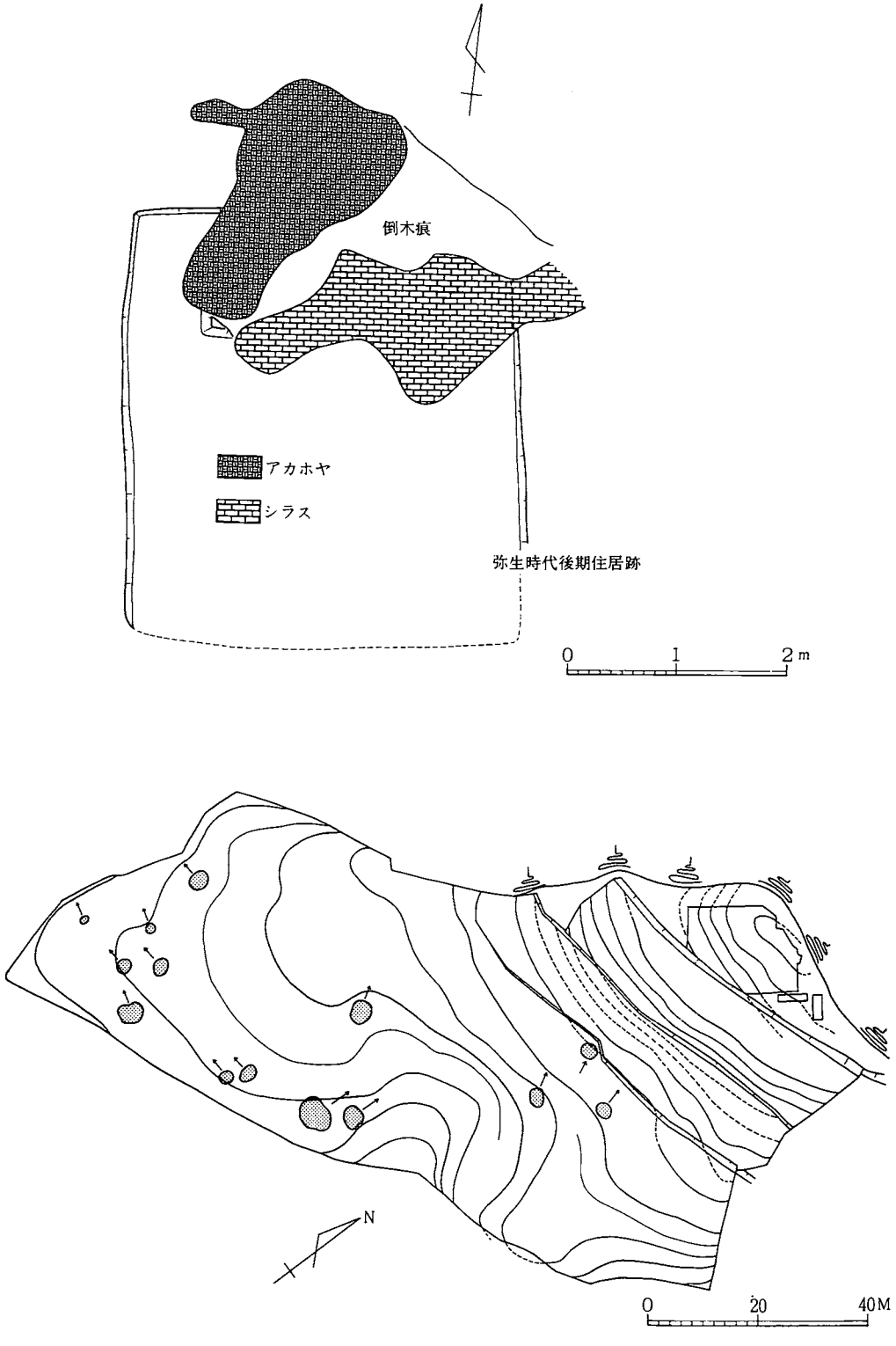
上層に比べやや粘性がみられる土層で、弱いクラックを示す。層の分布は、台地北側の斜面部・平坦部南側を除く部分にみとめられる。この層での遺物の検出はできず、無遺物層である。

第Ⅵ層　褐色土層

漸移層である。上層の汚染によって部分的に黒色の斑点が層中に観察できる。この層は、遺跡のほぼ全域に分布しているが、台地末端部では、第Ⅴ層との分離が不可能となり、層厚も薄く



第５図　土 層 図



第６図　倒木痕状況図・分布図

なる。無遺物層である。

第Ⅶ層　褐色土層

シラスが土壌化して、二次的に堆積した土層である。わずかに粘性を帯びるが、粒子の荒いものもみられる。土層の分布は、台地平坦部のみに限ってみとめられる。先土器時代の包含層である。

第Ⅷ層　シラス層

入戸火砕流で、遺跡の立地する台地の基盤となる層である。この火砕流は、前記しているように姶良カルデラを起源とする火山噴出物であり、その放射線炭素年代測定で2.1万～2.2万年前とされている。

本遺跡の調査の際、一般に「倒木痕」と呼ばれる地層の横転部分を14ヶ所確認した。この部分の特徴は、本来上下の関係で水平に堆積しているはずの地層があたかも横転したかのように垂直に近い状態で並んでいるところにある。こうした現象面を捉えて「地層横転」という名称が使われることもある。

これらの「倒木痕」の平面状況は、基本的には同一である。その状況とは平面上で自然層位が順序良く並んで観察されるということであり、遺跡での具体的層位で示せば、第Ⅲ層（アカホヤ層）から順にⅧ層（シラス層）までが平面上で観察されるということである。こうしたあり方をさらに遺跡の中で検討すると、傾向として大きく二つの群にまとめることができる。一つは、アカホヤが西側に位置するもの、一つは、ほぼ北側にあるものの二つである。そしてこの二つの群は、遺跡での分布をも異にして、前者は台地先端部に後者はそれより東側にまとまって分布している（第6図）。さらにこうした傾向を「倒木痕」として考えると、「倒木」方向の傾向として把握することができる。つまり、西方と北方との二つであり、そうしたことが遺跡の地形の状態と幾らか関係付けて考えることもできようか。

次に、時期について触れてみよう。この「倒木痕」を構成する土層として、すでに前記しているようにアカホヤ層があり、アカホヤ火山灰降下後のものとすることが可能である。一方、この土層の中に基本層位第Ⅱ層（黒色土層）が含まれておらず、歴史時代にまでは下らないはずである。さらに遺跡調査の際に、弥生時代後期の竪穴式住居跡を切った「倒木痕」を確認した（第6図）。こうしたことから「倒木痕」の時期を弥生時代後期から歴史時代以前とすることができる。また、その土層の状態から弥生時代後期に比較的近い時期である可能性が最も高い。

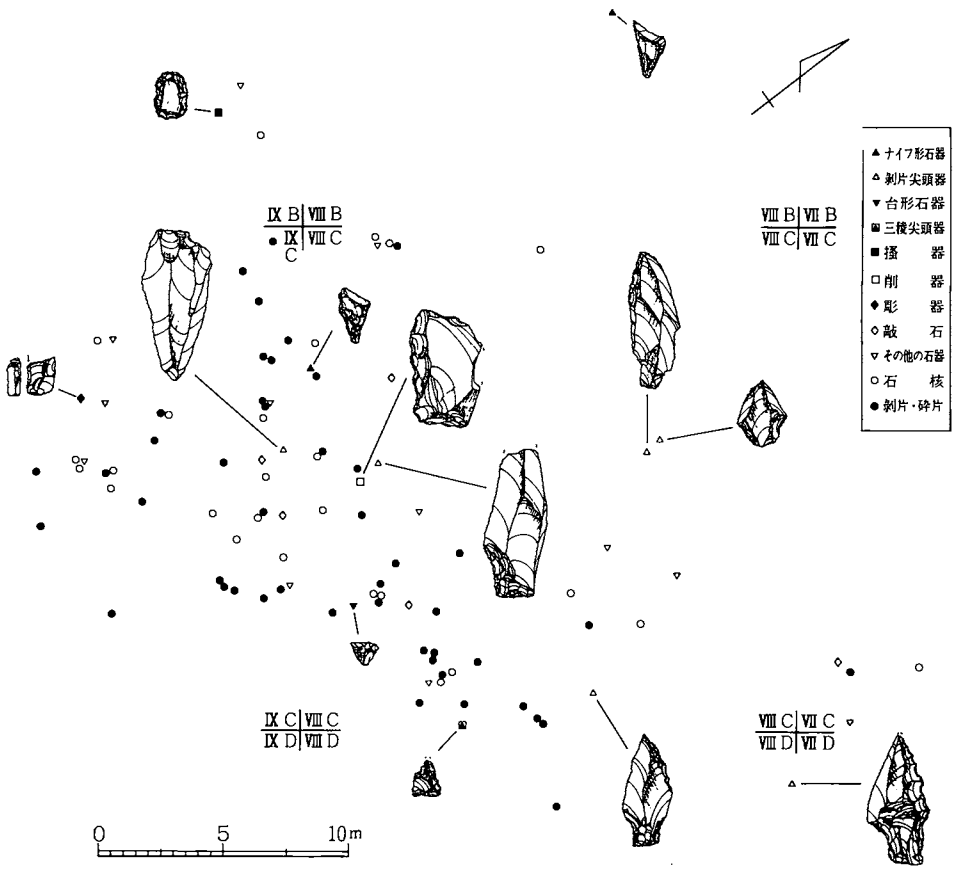
第Ⅲ章　調査の成果

第１節　先土器時代の遺物

１．遺物の出土状態と分布

先土器時代の調査は、調査区Ⅶ C 区、Ⅷ B・C・D 区、Ⅸ B・C 区を、また層位としては第Ⅶ層を対象に実施した。その結果、剝片尖頭器を主体とする石器文化を検出した。

丘陵の中の遺物の分布する位置は、平坦部中央の谷部の西側に近接した先端部付近にあり、その広がりは、東西40m、南北20m にわたっている(第７図)。層位の状態は、丘陵の縁辺部に近い場所にあるということからかなり不安定で、縄文時代早期の包含層であるⅣ層との間に僅かに一枚薄く間層をはさむだけの部分も広くみられた。遺物のほとんどは第Ⅷ層シラス層の直



第７図　遺物分布図

上にあったが、一部Ⅳ層に混入している遺物もあり、全体として遺物の包含状態は、良好とはいえない。

遺物の分布は、全体として一つのブロックと捉えられる。この分布の石器組成の構成は、ナイフ形石器として切出状のもの２点・剥片尖頭器５点・台形石器１点の計８点、三稜尖頭器１点、掻器１点、削器２点、彫器１点、敲石５点、不定形の石器12点、石核25点、剥片尖頭器の素材剥片１点、剥片･砕片47点の総計103点によっている。このように、石器組成としては、ほぼ完全な組成を示しているものといえる。

それでは石器ごとの分布の傾向はどうであろうか。

ナイフ形石器として切出状のものと剥片尖頭器は、ブロックの北側部分に偏在していることがわかる。一方、石核と剥片・砕片は、これらとは対照的に丘陵縁辺部に集中する傾向が指摘できるようでもある。このように分布において多少の傾向が観察されたが、明確なかたちでの傾向把握は不可能である。と同時に資料の接合関係は、一例も検出できなかった。

２．遺　　物

ナイフ形石器（第８図１～５・第９図７～10）

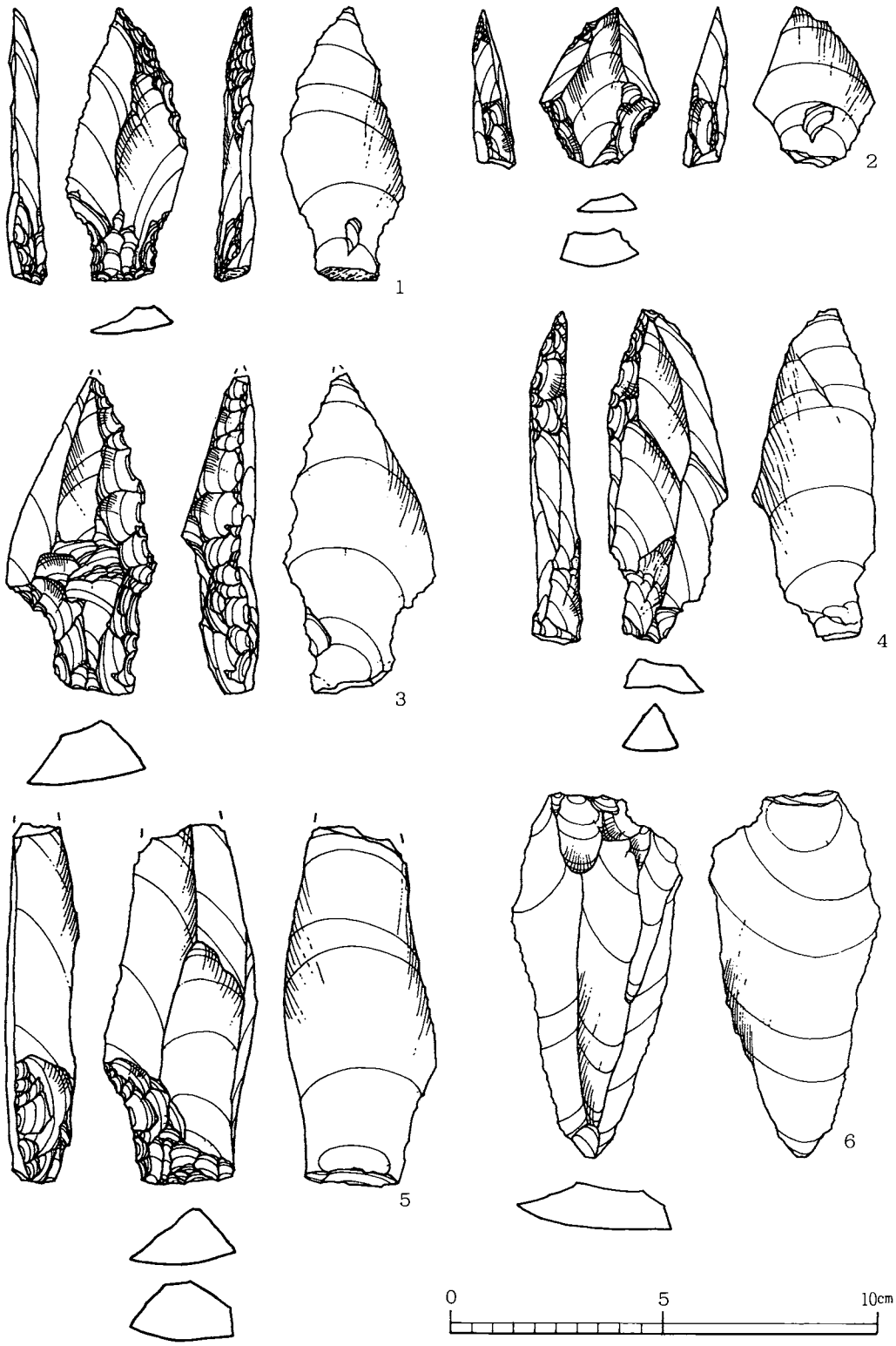
剥片尖頭器（１～５）、切出状のもの（７・８・10）、台形石器（９）の三種がある。

剥片尖頭器は、三つに分類される。すなわち、基部と先端部に加工のあるもの（１・２・５）、二側縁に加工があるもの（３）、先端部のみにあるもの（４）である。石質は、珪岩３点（１・２・４）、砂岩１点（３）、安山岩１点（５）である。

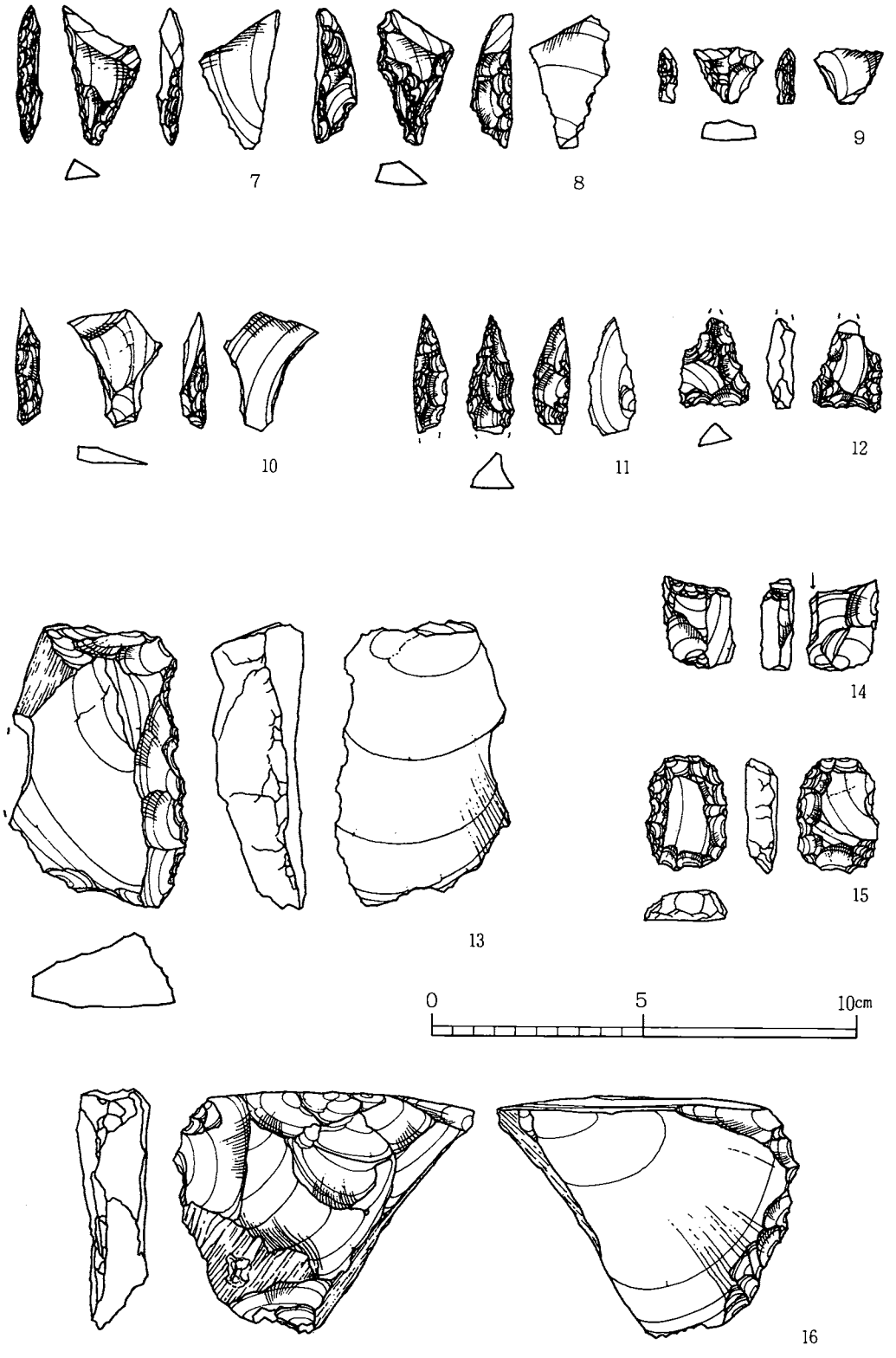
これらの中で興味を引くものに４がある。この資料は、先端部のみに刃潰し加工があり、基部は加工によってはいないが茎状に作られている。そもそも剥片尖頭器の特徴は、刃潰し加工によって作り出された茎部にあり、そのことからすればこの資料は、その範疇から外れる。しかし、茎状の基部を持つというその形状は剥片尖頭器に近く、その基部の作り出しが、剥片剥出の段階に準備されていたと考え、この資料を剥片尖頭器の一種とした。

６は、剥片尖頭器の目的剥片（砂岩製）である。その特徴は、打面部近くに肩部を持ち、先端部が先細った縦に長い形状にある。特に、打面部近くの肩部は、部位として茎を作り出す刃潰し加工の部分にあたっている。このことから剥片剥出の段階に茎を意識した石核調整があったことが推測される。また、肩部が一方にしかないということから３の資料のような二側縁加工の剥片尖頭器の目的剥片である可能性が強い。

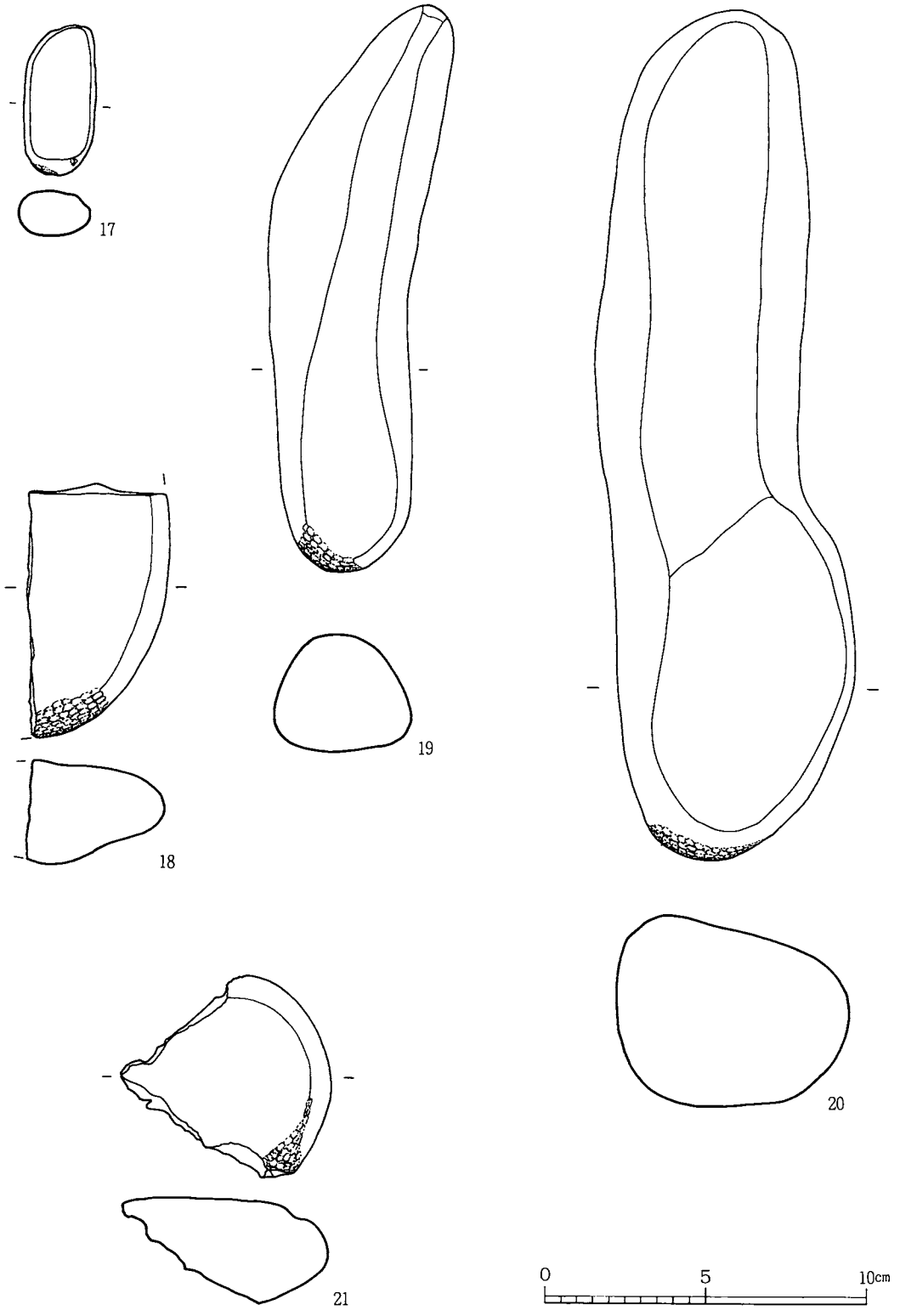
切出し状のナイフ形石器（７・８・10）は、すべて珪岩製である。石器の形状についても同一であり、おそらく素材である剥片も近似した形状をとるものと考えられる。台形石器（９）は、黒曜石製で、一点出土している。表面には多方向からの剥離痕がみられる剥片を素材とし



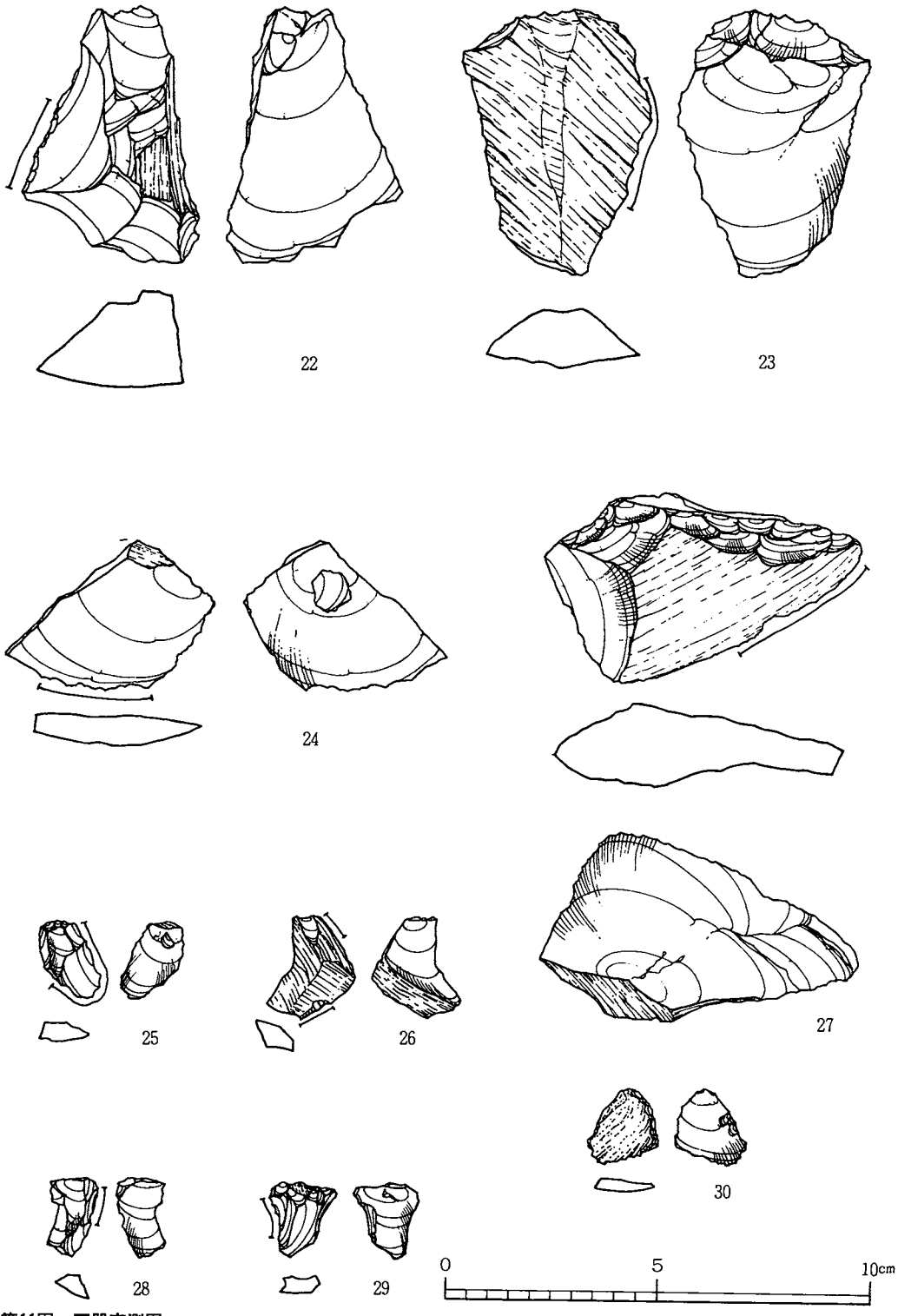
第８図　石器実測図



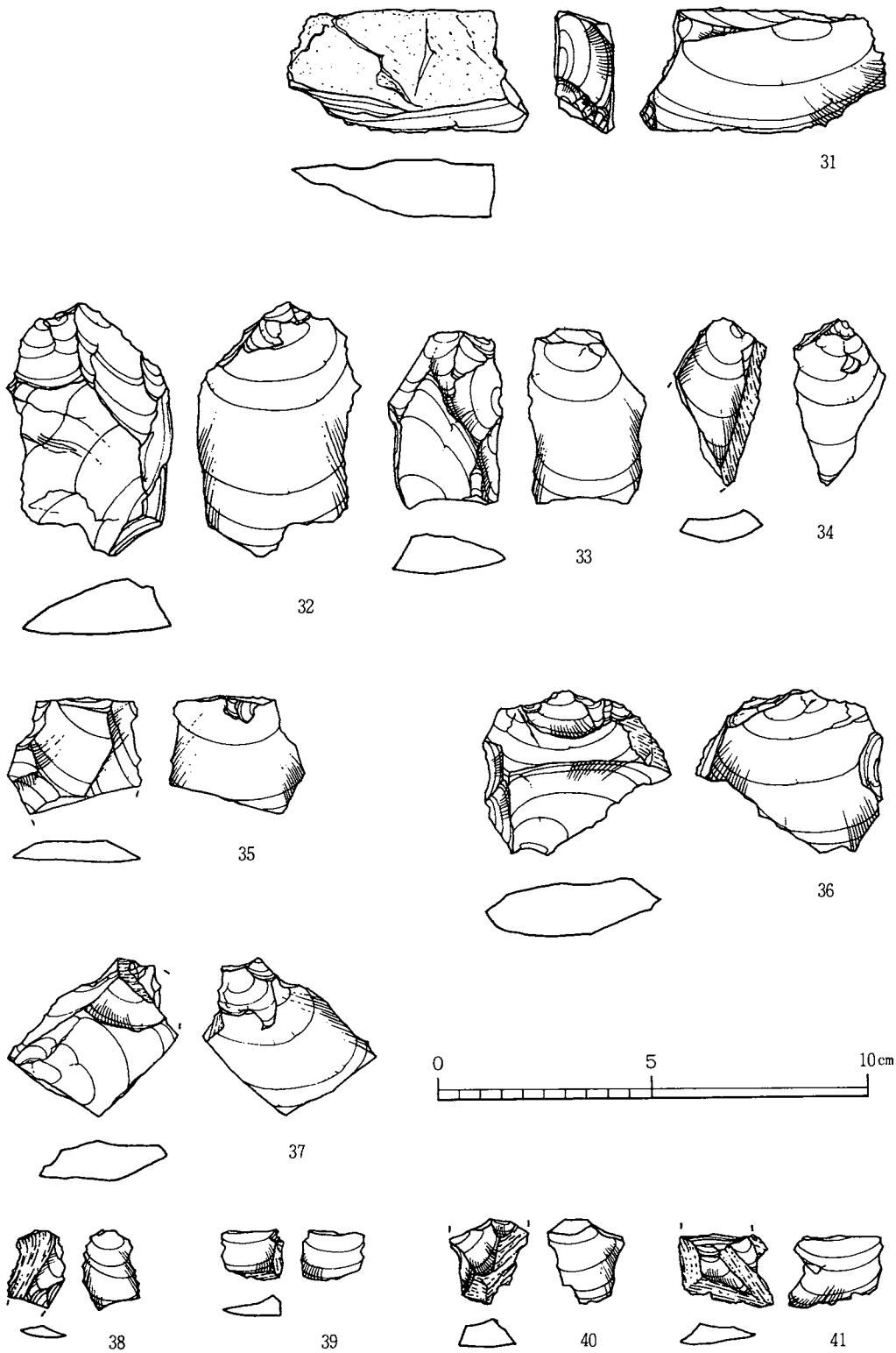
第９図　石器実測図



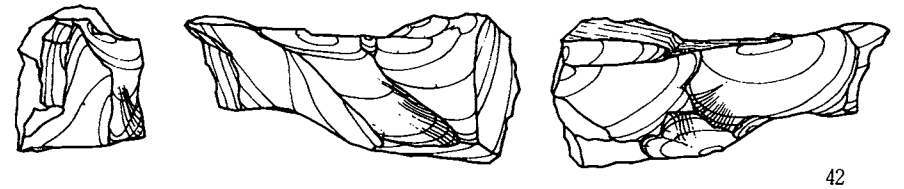
第10図　石器実測図



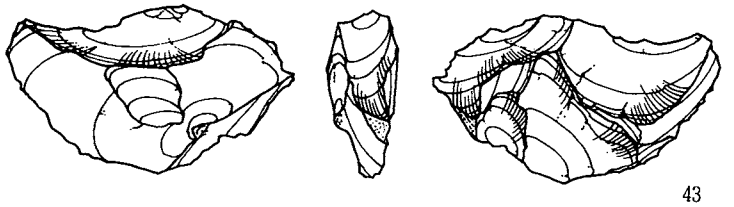
第11図　石器実測図



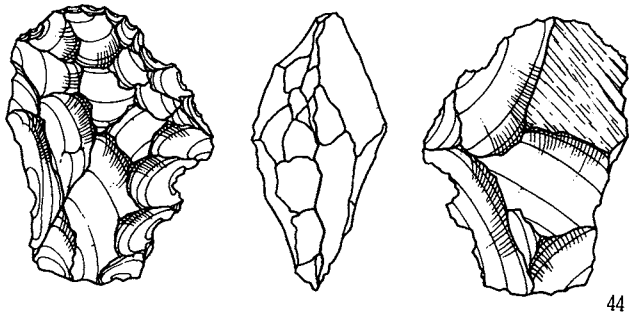
第12図　石器実測図



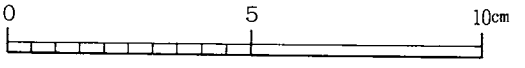
42

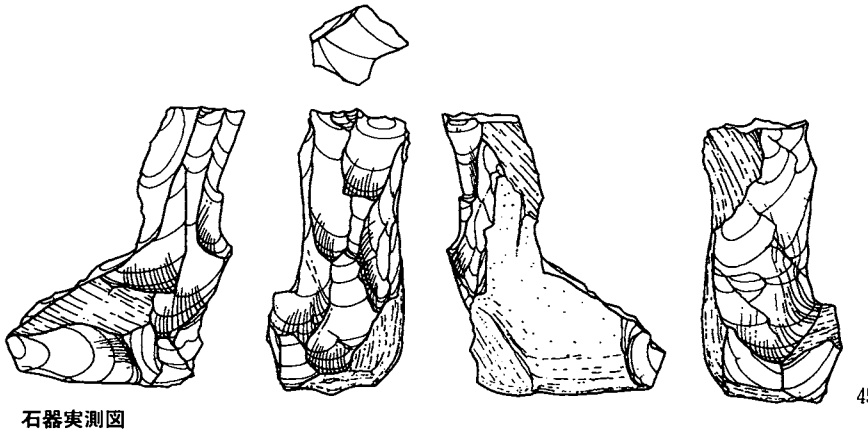


43



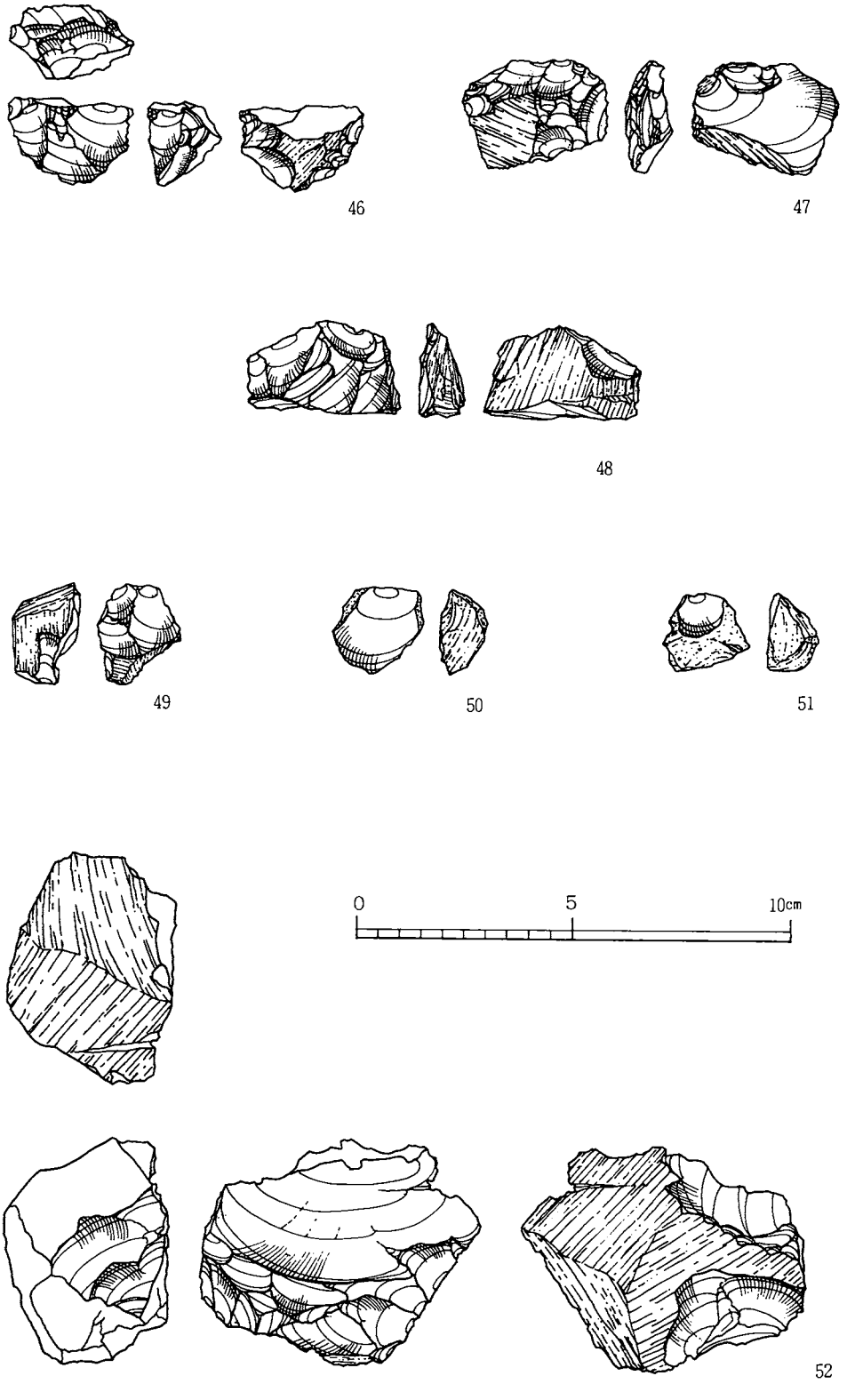
44





45

第13図　石器実測図



第14図　石器実測図

て、その打面部を右位に置いている。

三稜尖頭器（第９図11～12）

いずれも黒曜石製で、横広の剥片を素材としている。11は、平坦部側と表面の稜上からの加工によって断面三角形に作られている。12は、三稜尖頭器の未加工品であろう、先端部を欠損している。

彫器（第９図13）・**掻器**（同図14）・**削器**（同図15・16）

13は、黒曜石製の彫器である。彫刀面は、右位にあり、一枚の樋状剥離によっている。刃部は、側刃である。14は、安山岩製の掻器である。15は、珪岩製の削器である。縦長の厚手の剥片を素材としてその右位に刃部を持っている。16は、安山岩製の削器である。横広の剥片の左位裏面側に加工して刃部を作っている。

敲石（第10図17～21）

出土した５点すべて砂岩製である。これらには、二つの種類がある。つまり、棒状のもの（17～19）と円形のもの（20・21）である。

不定形石器（第11図22～30・第12図31）

この石器には使用痕のみがある石器（22～29）と二次加工がみられるもの（30・31）がある。石質としては、珪岩製（22～24・31）、黒曜石製（26～30）、砂岩製（25）がある。また、珪岩製と砂岩製のものは大型で、黒曜石製のものは小型であるようだ。

剥片・砕片（第12図32～41・45）

剥片は、47点出土し、総資料の約半数を占めている。石質別には、黒曜石が最も多く32点、珪岩11点そして安山岩４点である。ここでは、その中の10点を図示している。32～37は珪岩で、38～41は黒曜石である。珪岩の剥片は、縦長のもの（32～35）と横広のもの（36・37）の二種類がある。剥片の打面は、すべて剥離面である。表面の状態では、多方向からの剥離痕がみられるものと単方向のもの（34）がある。黒曜石の剥片・砕片は、すべて小型のものによって占められ、表面に礫面を残したものがほとんどである。また、鹿児島県日東産のものは無く、すべて球磨地方原産のものである。

45は、剥片剥離作業面の再生剥片である。打面は、一枚の剥離面によっており、非調整打面で、この剥離作業は、この打面単一で行われている。剥離された剥片は、縦長の剥片である。石質は、珪岩である。

石核（第13図42～44・第14図46～52）

石核は、25点出土している。石質ごとの内訳は、黒曜石21点（46～51）、珪岩３点（42～44）、安山岩１点（52）である。石核の素材には、剥片（43・47）と礫の二種類がある。

42は、石核用素材である。43は、横広の剥片を素材とし、主要剥離面を打面とした横長剥片石核である。44は、円盤状の石核で両面共に求心的な剥片剥離作業が行われている。珪岩製の

石核は、これらの横長剝片石核の他、45が示すような縦長剝片石核の二種類がある。次に黒曜石製の石核であるが、大型のものはまったく無く、ほとんどのものが49～51のような小円礫素材である。原産地別にみると、日東産のものは46のみで他すべて球磨地方産出のものである。52は礫素材の石核で、その打面は、礫面と剝離面によっている。得られる剝片は、横長の剝片である。

3．ま　と　め

大丸・藤ノ迫遺跡の先土器時代の資料は、姶良カルデラ起源の入戸火砕流（シラス）直上に包含され、剝片尖頭器を主体とした石器文化に属するものである。石器には、ナイフ形石器・三稜尖頭器・掻器・削器・彫器・敲石・その他不定形の石器がある。

ナイフ形石器には、剝片尖頭器・切出状の石器・台形石器がある。その中で剝片尖頭器が最も多様で、基部先端部加工と二側縁加工と先端部加工の三つの形態に分類できる。こうした形態組成に近似している遺跡として熊本県大観峯遺跡（古森　1982・木﨑　1985）・鹿児島県小牧ⅢA遺跡（長野　1979）がある。特に、小牧ⅢA遺跡は、剝片尖頭器の他に台形石器と三稜尖頭器があり、大丸・藤ノ迫遺跡の様相に酷似している。一方、切出状のナイフ形石器は、相模野台地の柏ケ谷長ヲサ遺跡（柏ケ谷長ヲサ遺跡調査団　1983）出土の相模野第Ⅲ期に属する資料に近似し、しかもこの他に剝片尖頭器と三稜尖頭器の存在・石器の出土層位からほぼこの時期に並行関係が求められるものといえよう。

参考文献

柏ケ谷長ヲサ遺跡調査団『柏ケ谷長ヲサ遺跡』1983

木﨑　康弘　「大観峯遺跡」『肥後考古』第５号　1985

長野　真一　「小牧ⅢA遺跡の紹介」『指宿史談』創刊号　1979

古森　政次　「熊本県下新発見の旧石器時代遺跡について」『旧石器考古学』第24号　1982

第２節　縄文時代早期の遺構と遺物

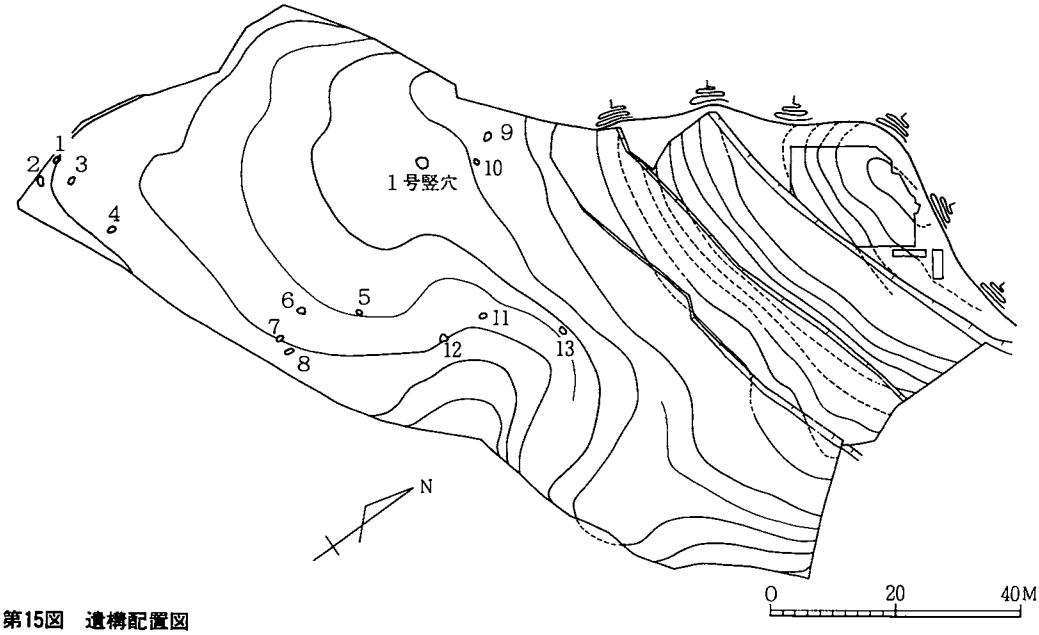
縄文時代早期の遺構及び遺物は、鬼界カルデラを起源とするアカホヤ火山灰層下の第Ⅳ層褐色土層中にある。これらの遺構・遺物は、厚い火山灰に覆われていたことによって倒木痕や山部の削平部を除けば後世の攪乱をほとんど受けず良好な状態で確認された。調査は、丘陵の先端部から開始して徐々に中央部そして山部へと進んでいった。その結果、平坦部を中心に多数の遺構・遺物が検出され、遺跡の主体が縄文時代早期にあることが判明した。その内容は、竪穴式住居跡１基・小穴を有する土坑13基・土坑64基・穴７基・集石12基・炉穴３基の遺構と塞ノ神式土器・押型文土器などの早期土器群とそれに伴う石器・石製品などの遺物群である。

１．遺構とその分布

(1)竪穴式住居跡（第16図）

丘陵の尾根線は、山部から平坦部へと徐々に傾斜を緩めながら南西方向へ走っている。竪穴式住居跡は、この尾根線上しかも山部から平坦部へと移る麓部分に位置している(第15図)。平面形態は、長軸2.1m、短軸1.7m の規模の楕円形を呈する。壁は、緩やかに堀り込まれ、25cm の高さを残している。そしてこの壁には２個の壁柱穴が掘り込まれている。また、炉穴等の付属施設は無く、床の硬化も弱い。

埋土は、しまりがある暗褐色の土が基本で、炭化物と焼土の小粒子を多く含んでいる。伴出



第15図　遺構配置図

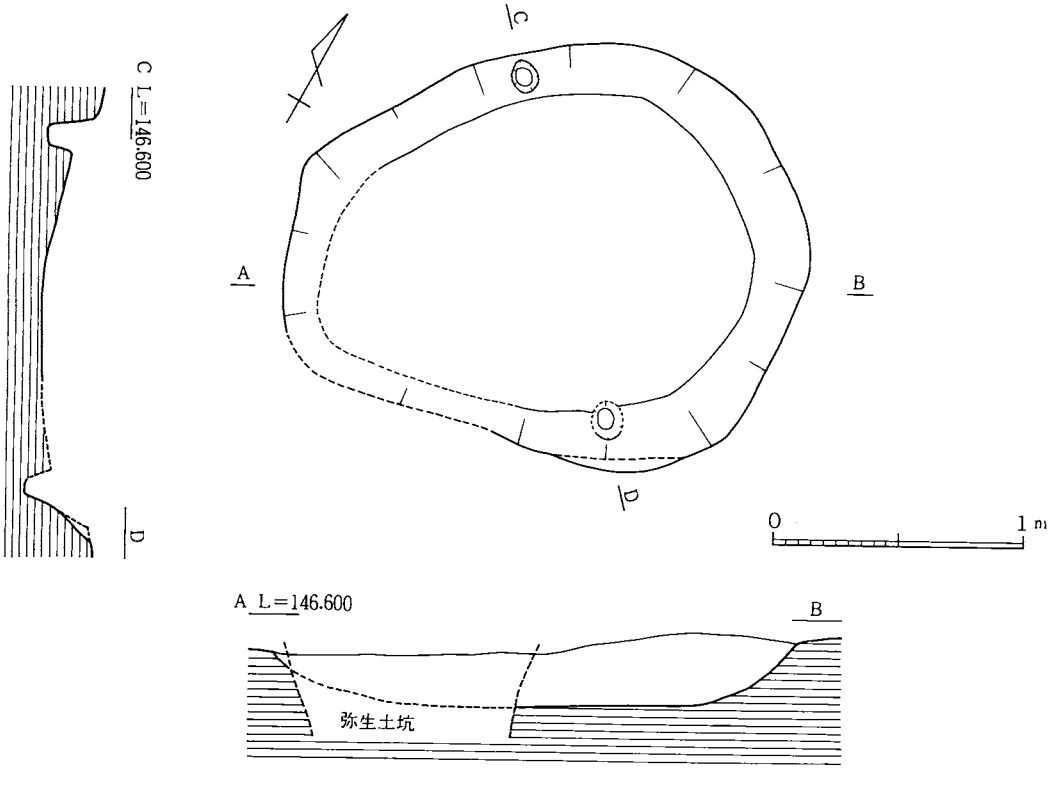
した遺物は、わずかに型式不明の小土器片のみであり、遺構の時期は不明である。

⑵小穴を有する土坑（第17図～第20図）

この遺構は、掘り込まれた土坑の底面にさらに小さく穴が穿たれているものであり、関東や東北地方で「陥し穴」と呼ばれている遺構に近似しているものも含んでいる。遺構は、西側平坦部で前記したように13基検出されたが、丘陵の平坦部中央にはまったく分布せず、すべて丘陵の縁辺部近く限られる。そしてそれらは、分布状態によって３群に分離できる。すなわち、丘陵の先端部付近の群（１号～４号）と谷部周辺にある群（５号～８号・11～13号）そして平坦部の北側縁辺近くにある群（９号・10号）である（第15図）。

１号土坑（第17図）

平面形態は、長軸1.29m、短軸0.81m の規模を持つ楕円形を呈し、深さは、0.5m を測る。底面には２個の小穴と比較的大きく掘り込まれた穴が２個が確認された。さらにこの大きな穴には、それぞれ５個と２個のさらに小さい穴が穿たれている。小穴の底面からの深さは、ほとんどのものが18cm前後である。埋土は、二つの層に分かれ、上層には純粋な状態のアカホヤ火山灰（基本層位第Ⅲｂ層黄褐色土）が、下層には基本層位である第Ⅳ層に類似した褐色の土が堆積していた。出土遺物は、無い。



第16図　竪穴式住居跡実測図

２号土坑（第17図）

平面形態は、長軸1.28m、短軸0.75m を測る楕円形を呈している。確認面から底面の最深部との比高は、0.46m である。底面から掘られた小穴は、土坑の中心部分に１個確認した。この小穴の底面からの深さは、50cmである。埋土は、四つの層に分離できたが、その堆積状態は、１号土坑と同様に上層に純粋なアカホヤ火山灰そして下層に褐色土の順である。遺物の出土は、無かった。

３号土坑（第17図）

１・２号の平面形態とは異なり、尻すぼまりの楕円形を呈する。その規模は、長軸1.37m、短軸0.79m、深さ0.6m を測る。土坑の底面は、瓢箪形の平面形態を示し、その下端の一部は上端の外に張り出している。埋土は、三つの層に分けられたが、その堆積状態は、上記土坑のものに近似している。ただ、土坑の底面の小穴がこの土坑では検出されず、他の土坑と同じ類のものとして取り扱うことはできないと考えたが、その規模と形態そして分布上の位置から類似性が強いと判断し、ひとまずこのように扱うことにした。

４号土坑（第17図）

３号土坑に近似した尻すぼまりの楕円形の平面形態を呈している。規模は、長軸1.28m、短軸0.71m、深さ0.65m を測る。土坑底面は、楕円形の平面形態で、その下端は対向する二隅で上端より外に深く張り出している。小穴は、この底面の一隅に２個掘られている。底面からの深さは、いずれも７cmと比較的浅い。埋土は三つの層に分けられているが、その状態は他の土坑のものと同様である。遺物も出土していない。

５号土坑（第18図）

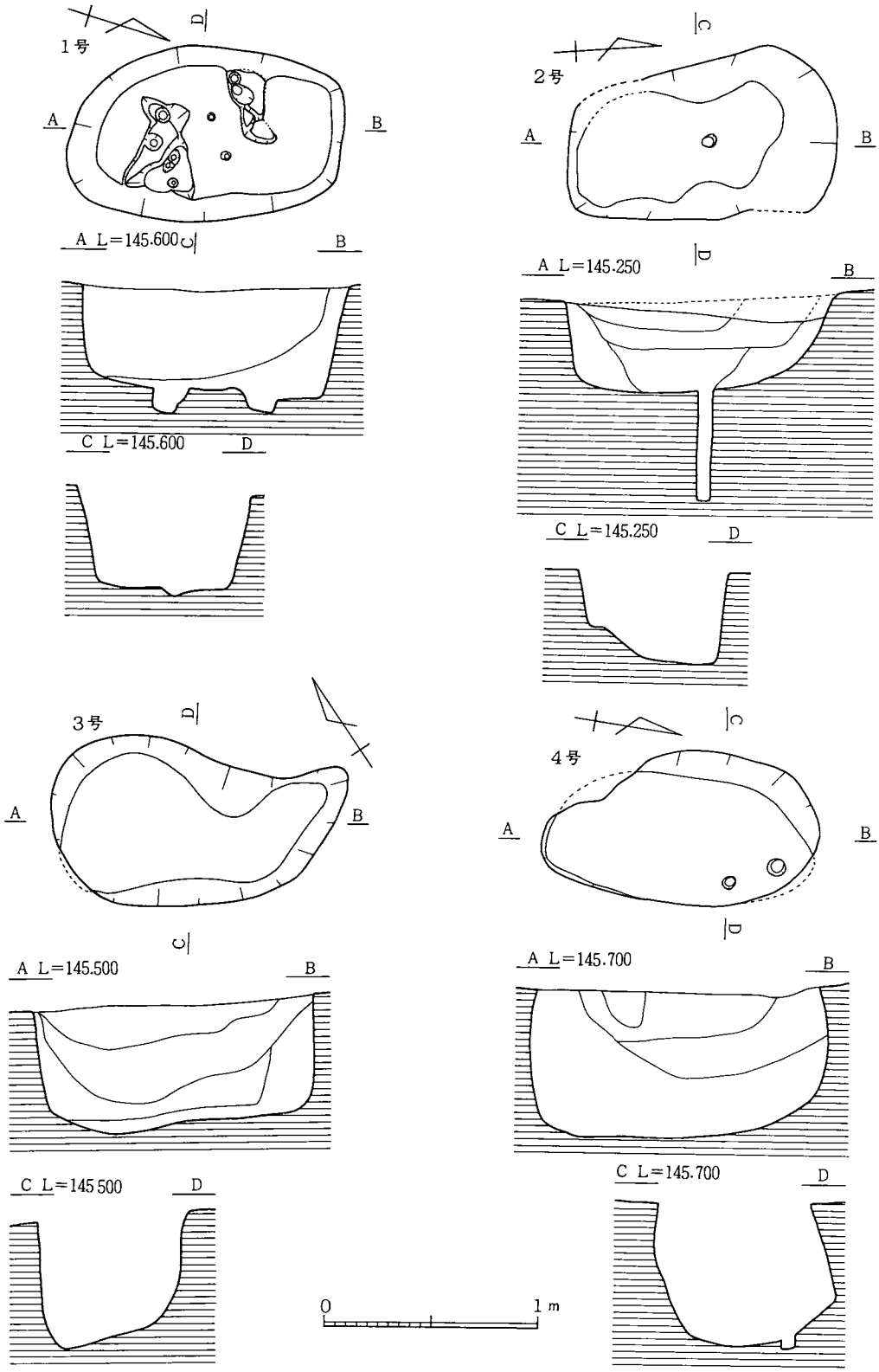
上面での確認ができず、土坑下端部分での検出であった。そのため平面形態・規模については不明である。底面から掘り込まれた小穴は、長軸0.45m、短軸0.3m の楕円形を呈し、底面からの深さは38cmであった。この埋土には、斜めに入った棒状痕様のものがみられた。出土遺物として敲石１点があった。

６号土坑（第18図）

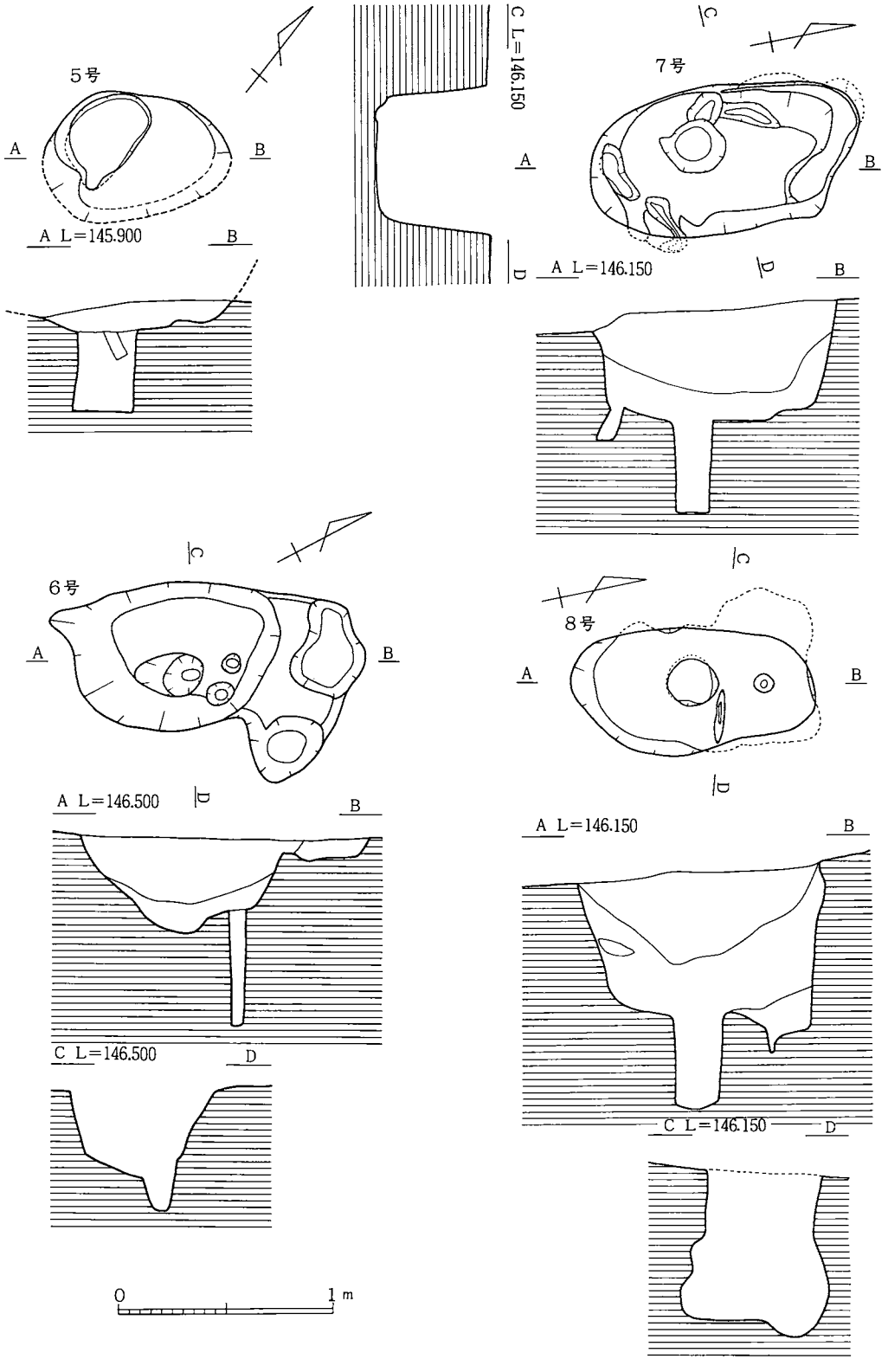
平面形態は、長軸1.48m、短軸0.86m の楕円形を呈する。確認面から底面までの深さ0.4m を測る。底面の片側に集中して３個の小穴が掘り込まれ、その小穴の深さは、54cmと深い。埋土としては、土坑部分で二つの土層と小穴の３層に分けられ、上層には純粋なアカホヤ火山灰、下層には褐色土が堆積している。

７号土坑（第18図）

平面形態は、長軸1.28m、短軸0.69m を測る楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは、0.55m を測る。底面にある小穴は、直径25cmの大きい正円の平面形態をとる。深さは、42cmである。またこの他に南壁寄りの下端部分から斜め方向に掘り込まれた深さ15cmの楕円形の小穴



第17図　小穴を有する土坑実測図



第18図　小穴を有する土坑実測図

がある。埋土は、上層の一次堆積であるアカホヤ火山灰と下層の褐色土との二つの土層に区分できた。

8号土坑（第18図）

平面形態は、長軸1.13m、短軸0.57m を測る楕円形を呈する。確認面から底面最深部までの比高は、0.8m である。底面には、その中央部に直径24cmを測る正円形の小穴が、またその小穴と北壁との間にも直径9cmの小穴が掘り込まれている。前者の深さは42cmで、後者は12cmである。埋土は、上層のアカホヤ火山灰と中層及び下層の褐色土の三つの土層に区分できた。出土遺物として珪岩製の剝片がある。またこの他に、中央部の小穴から拳大の円礫が3個出土している。

この8号土坑のように比較的大きい小穴を底面中央部に持つという特徴から考えれば、この土坑と5・7号土坑とはかなり類似したものといえる。

9号土坑（第19図）

この種の土坑の中で最も大きい遺構である。この遺構は、平面形態が楕円形を呈する土坑で、長軸1.67m、短軸1.31m、深さ0.7m の規模を持っている。底面は、比較的平坦で、その中央部に長軸26cm、短軸15cmの楕円形の小穴が掘り込まれている。その深さ73cmである。底面の平面形は、楕円形を呈し、その下端の一部は、東壁の一部で上端より外へ深く張り出している。埋土は、土坑中のアカホヤ火山灰と褐色土、小穴内の褐色土の三つの土層に区分された。

10号土坑（第19図）

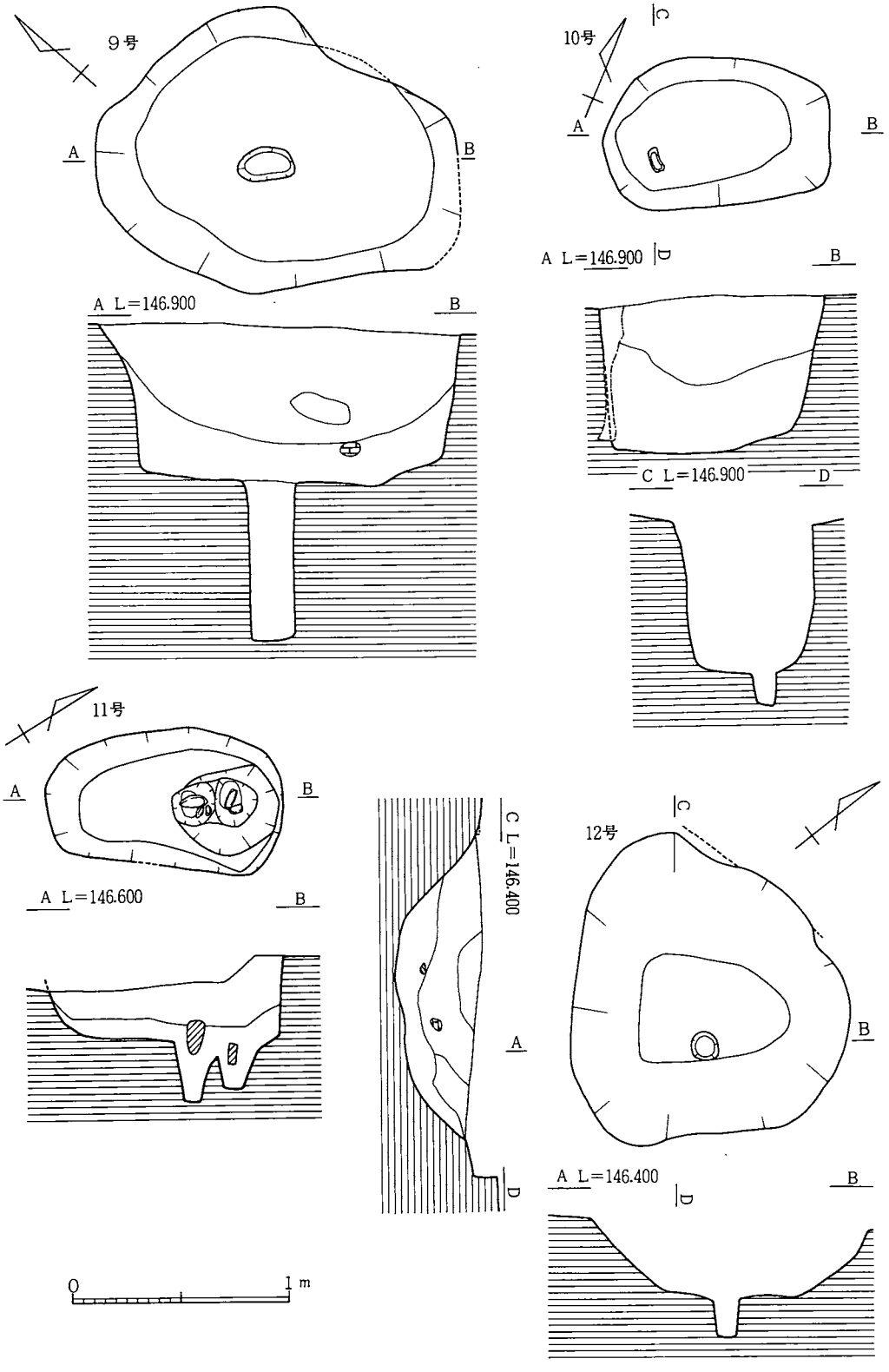
この土坑の平面形態は、楕円形を呈している。そしてその規模は、長軸1.05m、短軸0.68m、深さ0.87m を測る。底面には、南西隅に長軸11cm、短軸5cm、深さ15cmの小穴が掘り込まれている。埋土は、上層の一次堆積の状態を示すアカホヤ火山灰が、そしてその下層の基本層位のⅣ層に類似した褐色土である。

11号土坑（第19図）

この土坑の平面形態は、楕円形を呈している。そしてその規模は、長軸1.1m、短軸0.64m、深さ0.72m を測る。底面の小穴としては、北壁寄りに正円形のもの2個が検出された。その直径は20cmで、深さは28cmと22cmである。埋土は、アカホヤ火山灰と褐色土との二つの層である。また、小穴部分の下層上部の埋土中では比較的大きな礫が包含されていた。

12号土坑（第19図）

土坑の平面形態は、隅丸の胴張りの三角形を呈する。規模は、最大長1.42m、最大幅1.32m、深さ0.4m を測る。底面の小穴は、南壁下端部分にあり、直径13cmの正円形を呈している。底面と小穴の底との比高は、18cmである。中の埋土は、上層にシラスを含む褐色土、中層には基本層位であるⅣ層を主体とした褐色土そして下層にはシラスを含んだⅤ層主体の黒褐色土によっている。埋土中にはシラス塊の他に後世の攪乱により混入したアカホヤ塊が上部にある。



第19図　小穴を有する土坑実測図

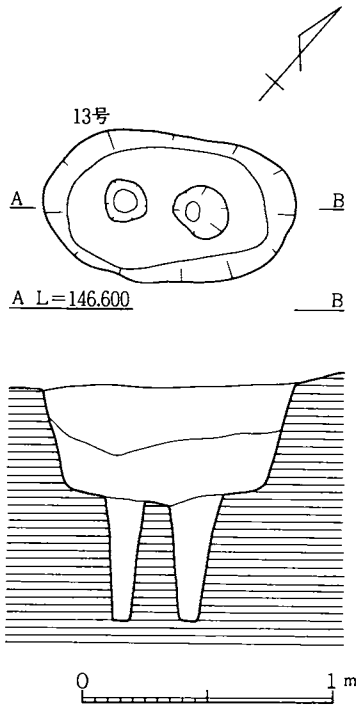
この土坑は、上記してきたものとは平面・断面形態や埋土の堆積状態において大きく相違している。このことから両者は、同一性格・同時期の遺構ではないことがわかる。しかし、そのことを具体的に示す遺物は出土していない。

13号土坑（第20図）

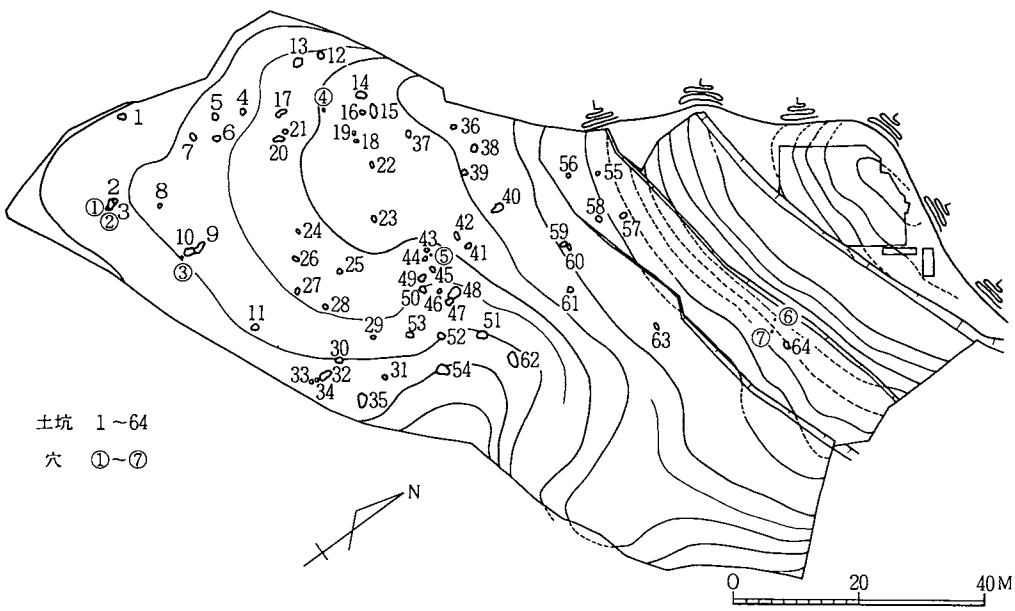
土坑の平面形態は、楕円形を呈し、その規模は、長軸1.01m、短軸0.61m、深さ0.44m を測る。底面には土坑の長軸方向に均等に並んだ２個の正円形の小穴がある。それぞれの直径は16cmと22cmで、深さは共に50cmを測る。埋土は、上層と下層とに一次堆積の状態を示す純粋なアカホヤ火山灰、小穴部に基本層位であるⅣ層を基本にした褐色土が入るという堆積状態を示している。

(3)土坑（第22図～第32図）

上記した小穴を有する土坑から外れるものを一括してここに示したい。すでに前記しているように、調査において64基の土坑を検出した。そしてこれらの土坑のほと



第20図　小穴を有する土坑実測図



第21図　遺構配置図

んどは、丘陵平坦部のしかも谷部を介して西側部分に集中して分布する傾向が強い。さらに、この集中の傾向も、より平坦な部分には少なく、そこを巡る状態にあり、遺跡においてこれらの土坑群が平坦性のより強い部分を取り巻きながら造られていることを示してもいる。そして、その分布の平面形態は、南方に開口した馬蹄形である(第21図)。

１号土坑（第22図）

丘陵の先端部に位置する遺構で、その平面形態は、不整形ではあるが楕円形を呈している。長軸1.46m、短軸1.08m、深さ0.58m を測る。埋土は、上層にアカホヤ火山灰の一次堆積物がみられ、下層には基本層位のⅣ層類似の褐色土という二つの土層に区分された。底面の平面形は、胴張りの正方形を呈している。

２号・３号土坑（第22図）

丘陵の先端部分に位置する切り合った状態で検出された遺構である。２号は、長辺0.68m、短辺0.43m、深さ0.25m の規模を持った隅丸長方形の平面形態を呈する遺構である。３号は、不整形の楕円形を呈する遺構である。長軸1.78m、短軸1.24m、深さ0.59m を測る。断面形態は、擂鉢状を呈する。

４号土坑（第22図）

丘陵の平坦部北側に位置する遺構で、その平面形態は、長軸1.12m、短軸0.82m の楕円形を呈している。埋土は、アカホヤ火山灰とⅣ層類似の褐色土による上下２枚の土層に区分できた。底面までの深さは、28cmである。

５号土坑（第23図）

４号土坑の４ m 南側にある円形の平面形を呈する遺構である。その規模は、直径１ m 前後、深さ0.29m を測る。埋土は、４号土坑と同一の状態を示している。出土遺物は無い。

６号土坑（第23図）

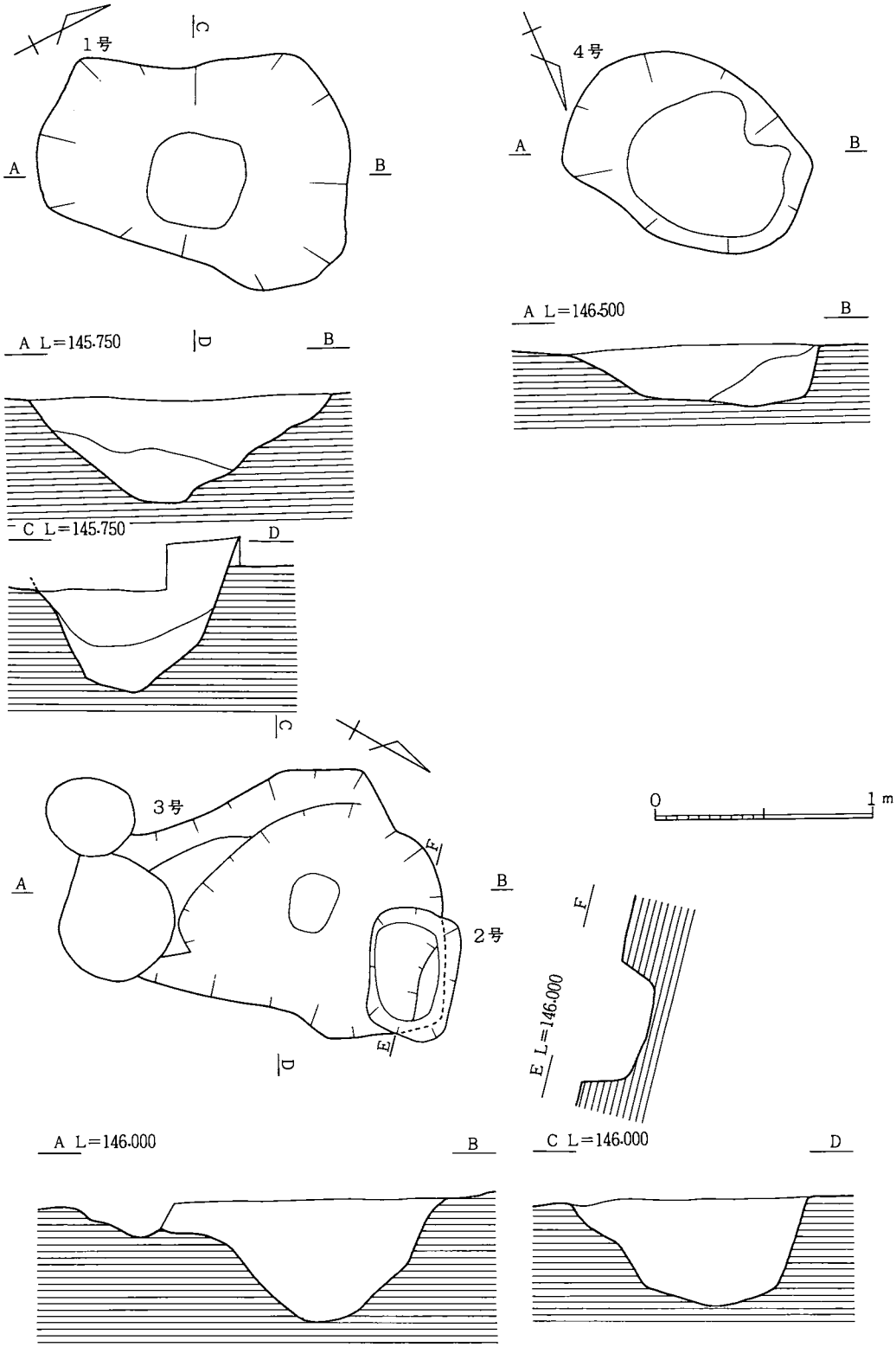
４号土坑の南側５ m の所にある不整円形の平面形を呈する土坑である。規模は、最大長1.12m、最大幅0.92m、深さ0.21m を測る。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物のみによっている。伴出遺物は、無い。

７号土坑（第23図）

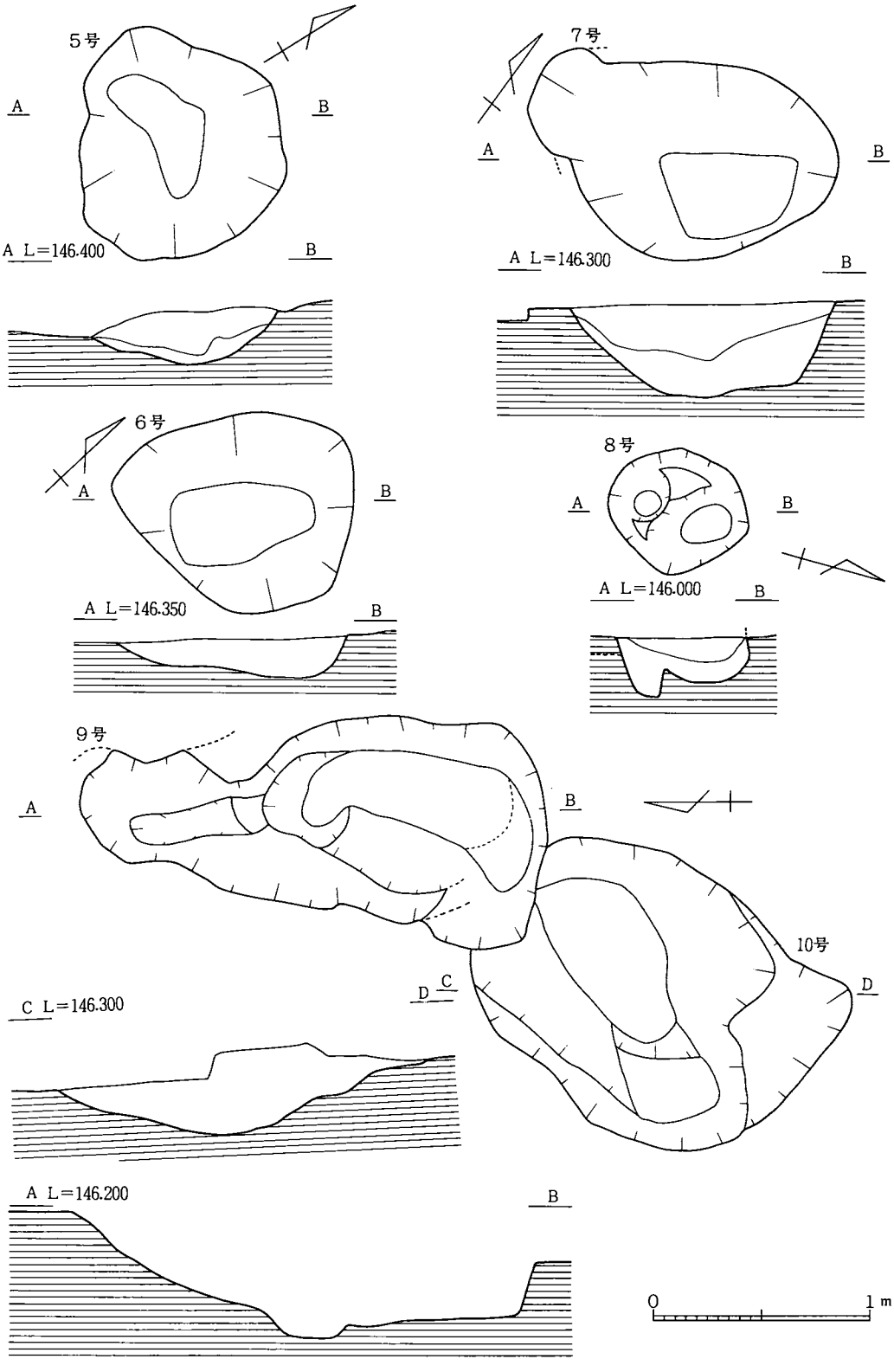
５号土坑の４ m 南側にある楕円形を呈する土坑である。その規模は、長軸1.46m、短軸0.92m、深さ0.45m である。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物と基本層位Ⅳ層に類似した褐色土が上下の関係でみられる。包含物としては、下層に炭化物の粒子・焼土粒がある。伴出遺物は無い。

８号土坑（第23図）

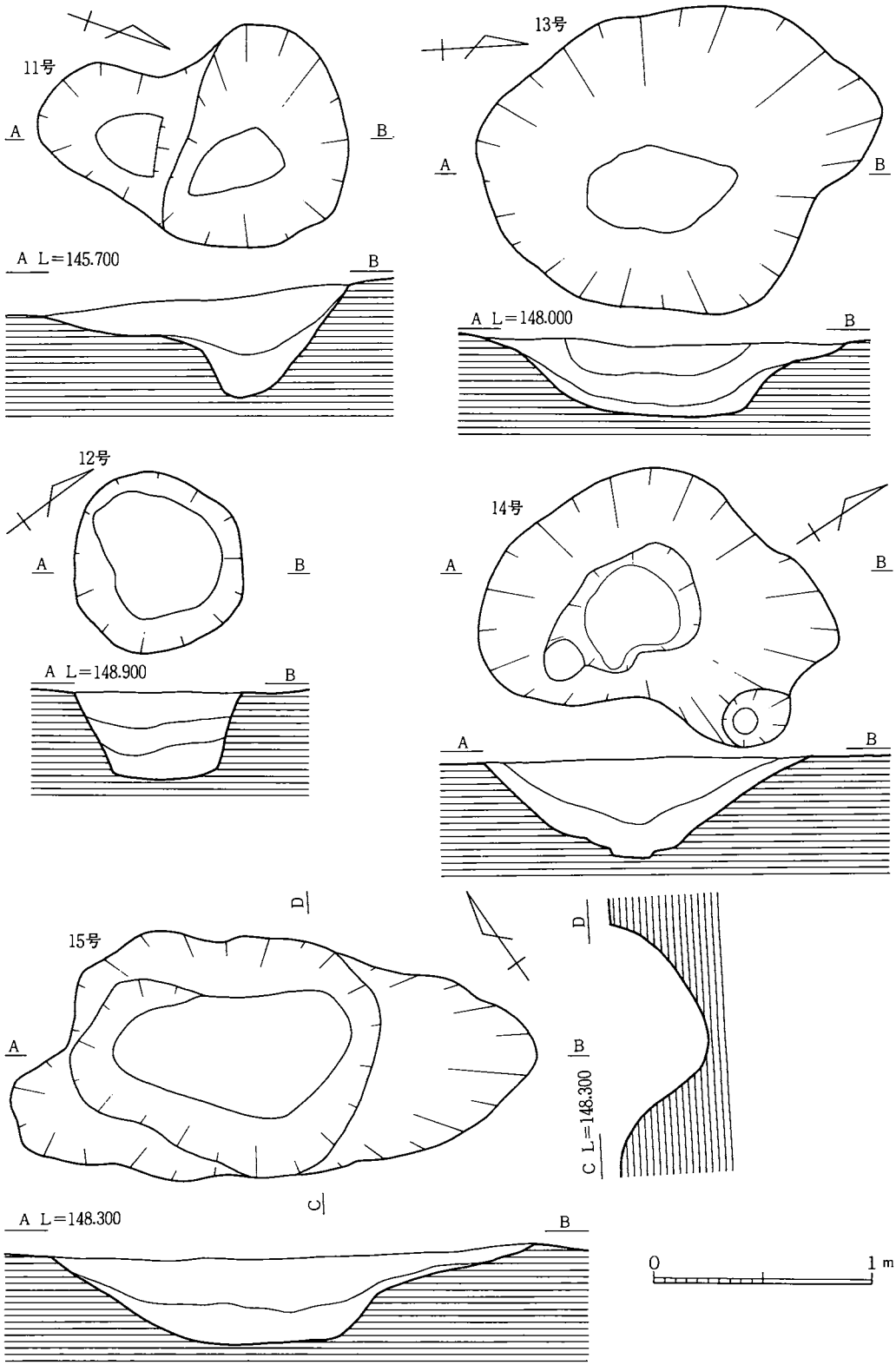
平坦部の南側縁辺部に位置する。平面形態は、0.65m×0.58m の円形を呈する。最深部は、確認部から28cmの深さにあり、しかも南壁寄りにある。埋土の特徴としては、下層の褐色土中


1号
A
B
C
D
A L=145.750
B
C L=145.750
D
4号
A
B
A L=146.500
B
3号
2号
A
B
C
D
E
F
0
1 m
E L=146.000
F
A L=146.000
B
C L=146.000
D

第22図　土坑実測図


5号
A
B
A L=146.400
B
7号
A
B
A L=146.300
B
6号
A
B
A L=146.350
B
8号
A
B
A L=146.000
B
9号
A
B
10号
D
C
D
C L=146.300
A L=146.200
B
0
1 m

第23図　土坑実測図


11号
A
B
A L=145.700
B
13号
A
B
A L=148.000
B
12号
A
B
A L=148.900
B
14号
A
B
A
B
15号
D
A
B
C L=148.300
C
A L=148.300
B
0
1 m

第24図　土坑実測図

に炭化物が比較的多く含まれていることがある。しかし、炉穴特有の焼けた底面の状態は示していない。

９号・10号土坑（第23図）

８号土坑の８ｍ東側にある切り合いの状態で検出された２基の土坑である。９号土坑は、一端が尻すぼまりに細くなる長楕円形を呈し、長軸2.17m、短軸1.03m、深さ0.59mの規模を持っている。一方、10号土坑は、長軸1.78m、短軸1.28mの楕円形を呈している。最深部は、30cmである。埋土は、両者共にアカホヤ火山灰であり、このことは、この二つの土坑がかなり近接した時期に掘られたことを物語っている。

11号土坑（第24図）

９・10号土坑の16m東側に位置する土坑で、その平面形態は、不整の楕円形を呈している。その規模は、長軸1.44m、短軸1.07m、深さ0.55mである。埋土は、一般に二つの土層を持つ遺構の状態に近似している。底面は、南半分が一段高いという段状になっている。

12号土坑（第24図）

丘陵の西端にあり、平面形態が直径0.81mの円形を呈している。底面までの深さは、40cmをはかる。埋土は、三つの層に分かれ、上層・中層がアカホヤ火山灰で下層がⅣ層類似の褐色土である。底面は、比較的平坦である。

13号土坑（第24図）

12号土坑の４ｍ南側に位置し、長軸1.87m、短軸1.40m、深さ0.38mの規模を持つ楕円形を呈した土坑である。埋土は、３層に区分できたが、その遺構は、12号土坑に類似している。

14号土坑（第24図）

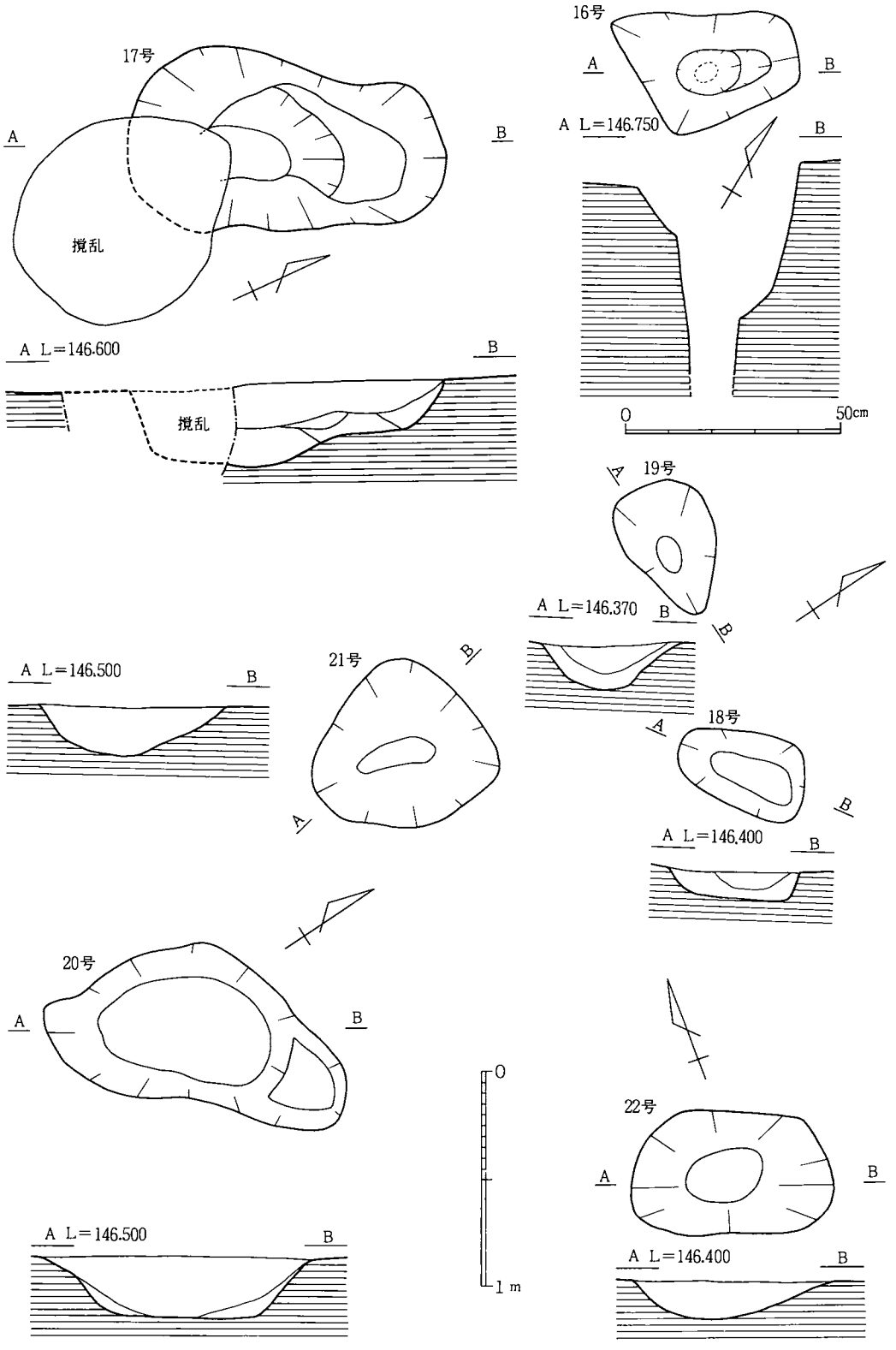
12号土坑の北東側８ｍの所に位置し、周辺には次の15号・16号土坑がある。土坑の平面形態は、長軸1.66m、短軸1.1mを測る不整楕円形を呈している。埋土は、二つの土層に区分された。伴出遺物としては、下層の方から型式不明の小破片の土器及び黒曜石・珪岩製の剝片が出土している。

15号土坑（第24図）

平面形態は、長軸2.44m、短軸1.14mの規模の楕円形を呈する。底面は、二段で、確認面からの深さは、43cmである。埋土は、二つの層位に区分できた。その状態は、他の土坑に類似している。遺物としては、下層から塞ノ神式土器の小片が出土している。

16号土坑（第25図）

平面形態は、台形を呈し、その規模は、最大長0.37m、最大幅0.3mを測る。この土坑の上には６号集石が乗り、調査当初は、集石の付属遺構と判断していた。しかし、その後の検討の結果、土坑内に石が混入せず、しかもそれぞれの中心にずれがあるという理由から直接関係は無いと判断し、時期差と捉えた。


17号
A
B
撹乱
A L=146.600
B
撹乱
16号
A
B
A L=146.750
B
0
50cm
19号
A L=146.370
B
B
A L=146.500
B
21号
B
A
18号
A
B
A L=146.400
B
20号
A
B
A L=146.500
B
0
1 m
22号
A
B
A L=146.400
B

第25図　土坑実測図

17号土坑（第25図）

攪乱によって一部破壊されているが、平面形態は推定が可能で、長軸1.44m、短軸0.86m の楕円形である。底面は、南壁に近付くにしたがい深くなり、現存する部分では41cmが最も深い。土層の状態はかなり不安定である。出土遺物としては、塞ノ神式土器がある。

18号土坑（第25図）

16号土坑の４ m 南東にあり、近くには、19号土坑がある。平面形は、楕円形をとり、その規模は、長径0.62m、短径0.38m、深さ0.15m を測り、比較的小さい。埋土は、二つの層に区分される。

19号土坑（第25図）

平面形態は、尻すぼまりの楕円形を呈し、その規模は、長軸0.65m、短軸0.44m、深さ0.23m を測る。埋土は、18号土坑の状態に近似している。

20号土坑（第25図）

17号土坑の近くに位置し、21号土坑が隣にある。楕円形の平面をとり、その規模は、長軸1.46 m、短軸0.77m、深さ0.29m を測る。底面は、比較的平坦で二段である。埋土は、上層のアカホヤ火山灰、下層の褐色土と他の土坑と同じ状態を示している。

21号土坑（第25図）

胴張りの三角形に近い円形を呈し、0.89m×0.79m、深さ0.24m の規模を持っている。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物のみである。

22号土坑（第25図）

18号土坑の東４ m の所に位置している。土坑は、楕円形で皿状を呈し、長軸0.94m、短軸0.58 m、、深さ0.2m の規模を持つ。埋土は、アカホヤ火山灰である。

23号土坑（第26図）

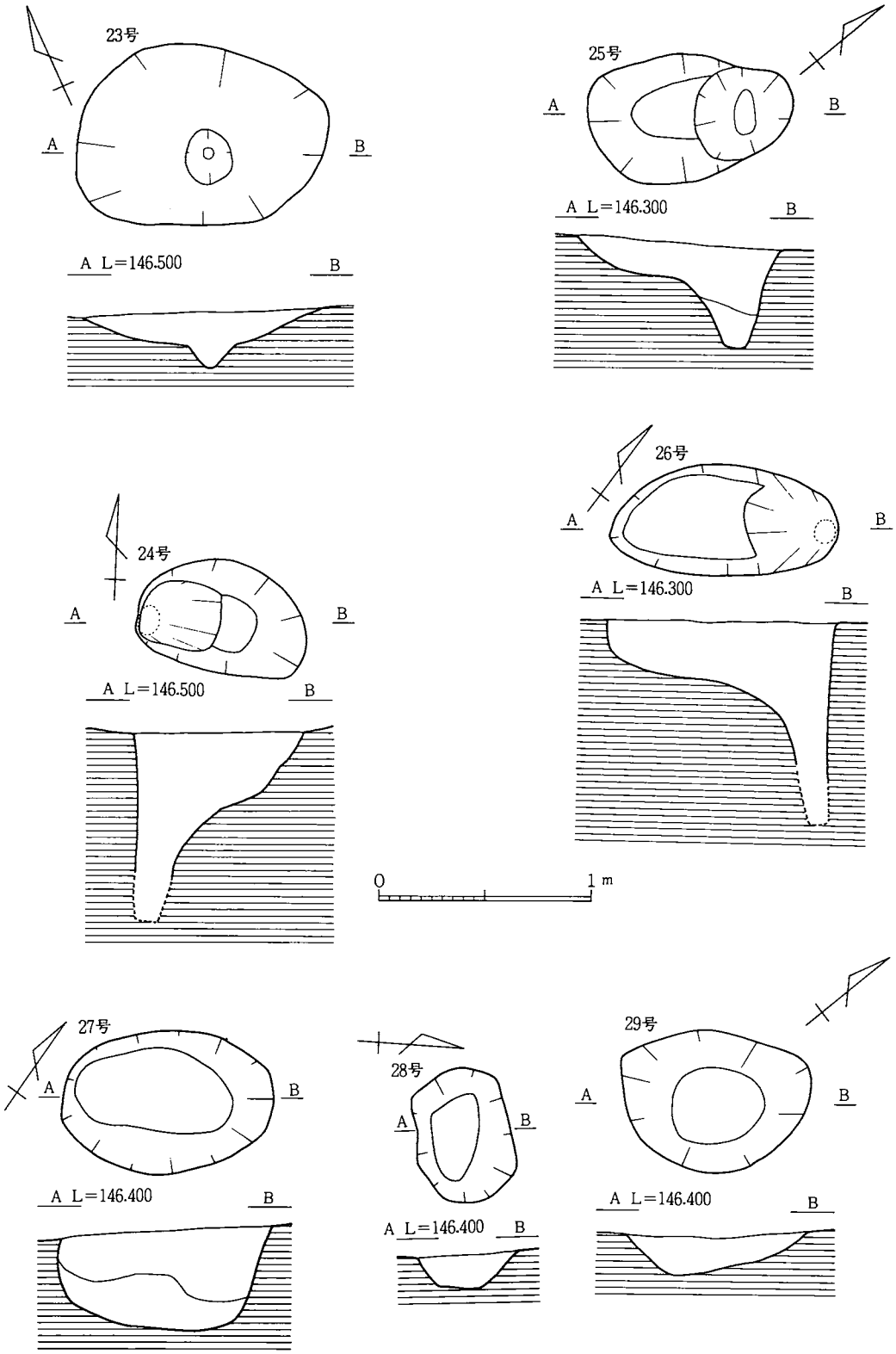
丘陵西側の中央部近くに位置している。土坑の形状は、長軸1.2m、短軸0.82m、深さ0.29m の皿状の楕円形を呈している。土坑の中心には、さらに小さい直径20cmの落ち込みがみられる。埋土は、アカホヤ火山灰である。

24号土坑（第26図）

23号土坑の南西12m の所の平坦部分にあり、平面形は、楕円形を呈し、その規模は、長軸0.8 m、短軸0.51m、深さ0.89m を測る。土坑の最深部は、西壁寄りに偏り、西壁は、垂直に立っている。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物に占められている。

25号土坑（第26図）

24号土坑の東８ m の位置にあり、土坑の形状も24号土坑に近似している。平面形は、楕円形を呈し、その規模は、長軸0.95m、短軸0.59m、深さ0.52m を測る。最深部は、北壁寄りにある。埋土は、アカホヤ火山灰と褐色土の二つに区分される。


23号
A
B
A L=146.500
B
25号
A
B
A L=146.300
B
26号
A
B
A L=146.300
B
24号
A
B
A L=146.500
B
0
1 m
27号
A
B
A L=146.400
B
28号
A
B
A L=146.400
B
29号
A
B
A L=146.400
B

第26図　土坑実測図

26号土坑（第26図）

24号土坑の南東４ｍの部分に位置している。この土坑も上記した二つの土坑の形状に類似し、楕円形の平面形と一方の壁寄りに偏った最深部を持っている。規模は、長軸1.06m、短軸0.56m、深さ0.93m を測る。埋土は、アカホヤ火山灰による土層だけである。

27号土坑（第26図）

25号土坑の南４ｍにあり、平面形は、整った楕円形を呈している。土坑の規模は、長軸0.99m、短軸0.66m、深さ0.5m である。埋土は、上層のアカホヤ火山灰と下層の褐色土の二つの層に区分できた。

28号土坑（第26図）

27号土坑の東５ｍの所にある土坑である。平面は、楕円形の形状をとり、その規模は、長軸0.62m、短軸0.46m、深さ0.17m を測る。埋土は、アカホヤ火山灰である。

29号土坑（第26図）

この土坑が立地する場所は、25号土坑の東12m の部分で、谷部から平坦部へと移るその変換点付近にあたる。土坑の平面形態は、長軸0.88m、短軸0.66m の楕円形を呈し、深さは、確認面から0.22m である。埋土は、同じくアカホヤ火山灰である。

30号土坑（第27図）

丘陵の南端部に立地し、谷部と平坦部との変換点付近にある。この周辺には、31号～35号土坑がある。この土坑は、楕円形を呈し、長軸1.47m、短軸0.94m、深さ0.27m の規模を持っている。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物である。

31号土坑（第27図）

平面形態は、長軸0.98m、短軸0.63m を測る楕円形を呈する。底面は、比較的平坦であり、確認面から25cmの深さにある。埋土は、30号土坑に類似している。出土遺物は、塞ノ神式土器である。

32号土坑（第27図）

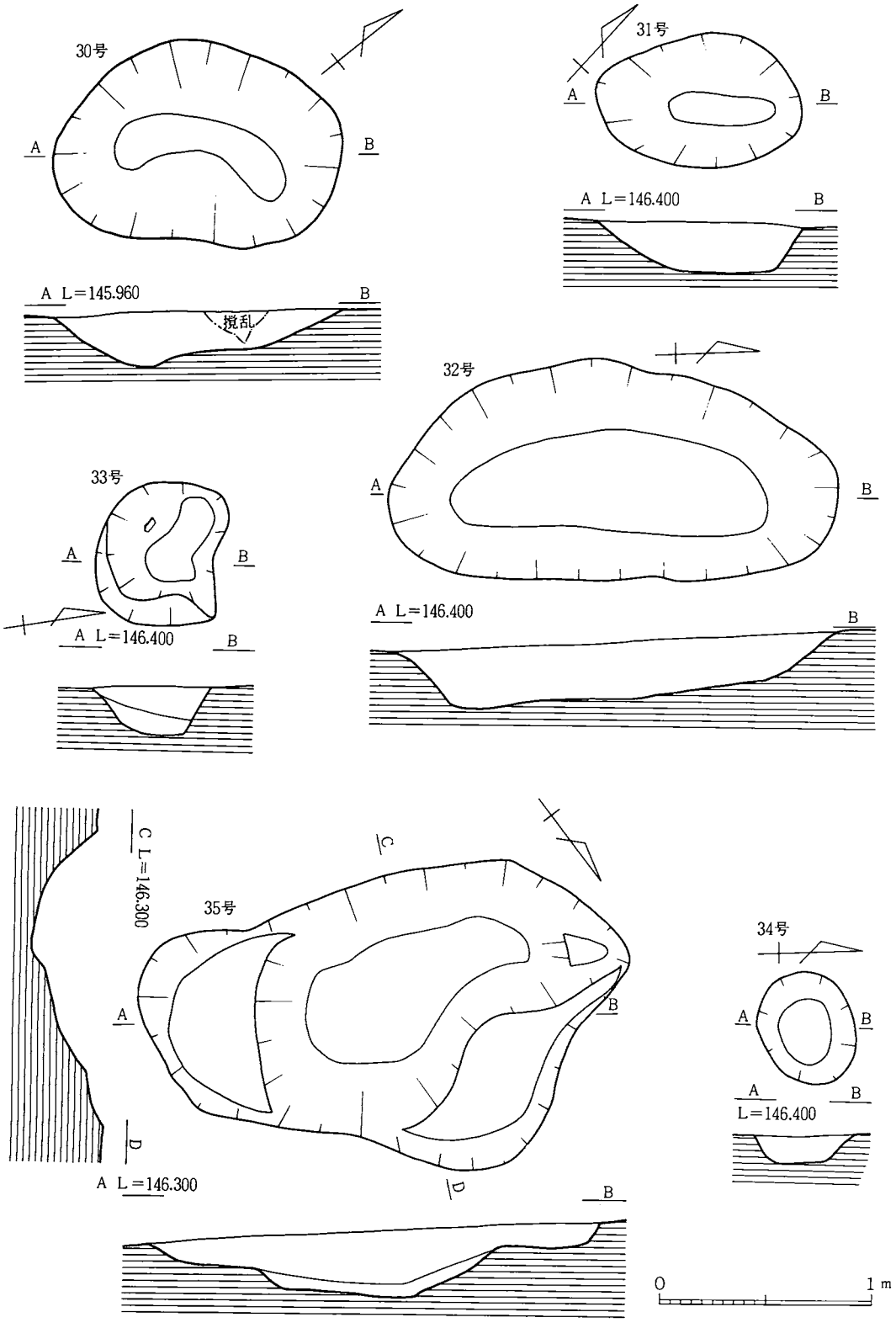
平面形が楕円形を呈する土坑である。その規模は大きく、長軸2.14m、短軸1.04m、深さ0.38ｍを測る。底面は、平坦ではあるが、南へ緩やかに傾斜している。埋土は、上記した土坑と同様にアカホヤ火山灰の一次堆積物である。出土資料には、型式不明の小破片の土器が１点ある。

33号土坑（第27図）

これは、比較的小型で直径74cm前後の円形土坑である。確認面から底面までの深さは、25cmを測る。埋土は、上層・下層共にアカホヤ火山灰の一次堆積物である。出土した資料は、床直上で型式不明の土器片が出土している。

34号土坑（第27図）

32号･33号土坑の間に位置している比較的小型の円形土坑である。直径は、0.53m～0.44m で


30号
A
B
A L=145.960
B
撹乱
31号
A
B
A L=146.400
B
32号
A
B
A L=146.400
B
33号
A
B
A L=146.400
B
C L=146.300
C
35号
A
B
D
A L=146.300
D
B
34号
A
B
A
B
L=146.400
0
1 m

第27図　土坑実測図

ある。底面は、平坦で確認面から15cmの深さにある。埋土は、32号土坑のものと同じ状態である。

35号土坑（第27図）

土坑の中の最も南に位置している。平面形態は、やや不整な楕円形を呈し、その規模は、長軸2.35m、短軸1.44m、深さ0.38mである。底面は、二段である。埋土は、二つの層があり、両者ともⅣ層類似の層である。遺物としては、上層から出土した型式不明の土器片がある。

36号土坑（第28図）

山部の麓部分に位置する遺構である。こうした立地をとるものに、38号～40号土坑がある。平面形は、隅丸の長方形を呈し、その規模は、長辺1.34m、短辺0.62m、深さ0.32mを測る。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物である。

37号土坑（第28図）

36号土坑の南８ mの所にある円形に近い土坑で、長軸1.01m、短軸0.81m、深さ0.2mを測る。試掘調査時に確認した土坑である。

38号土坑（第28図）

直径1.28m前後の規模の円形土坑である。底面は、平坦であるが、確認面から1.15mと深い部分にある。埋土は、上層のアカホヤ火山灰の一次堆積土そして下層のⅣ層類似の褐色土の二つがある。

39号土坑（第28図）

この土坑は、Ⅳ層上面から掘り込まれた不整の楕円形を呈する土坑で、長軸1.15m、短軸0.79m、深さ0.27mの規模を持っている。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物とⅣ層類似の褐色土との二つの層によっている。

40号土坑（第28図）

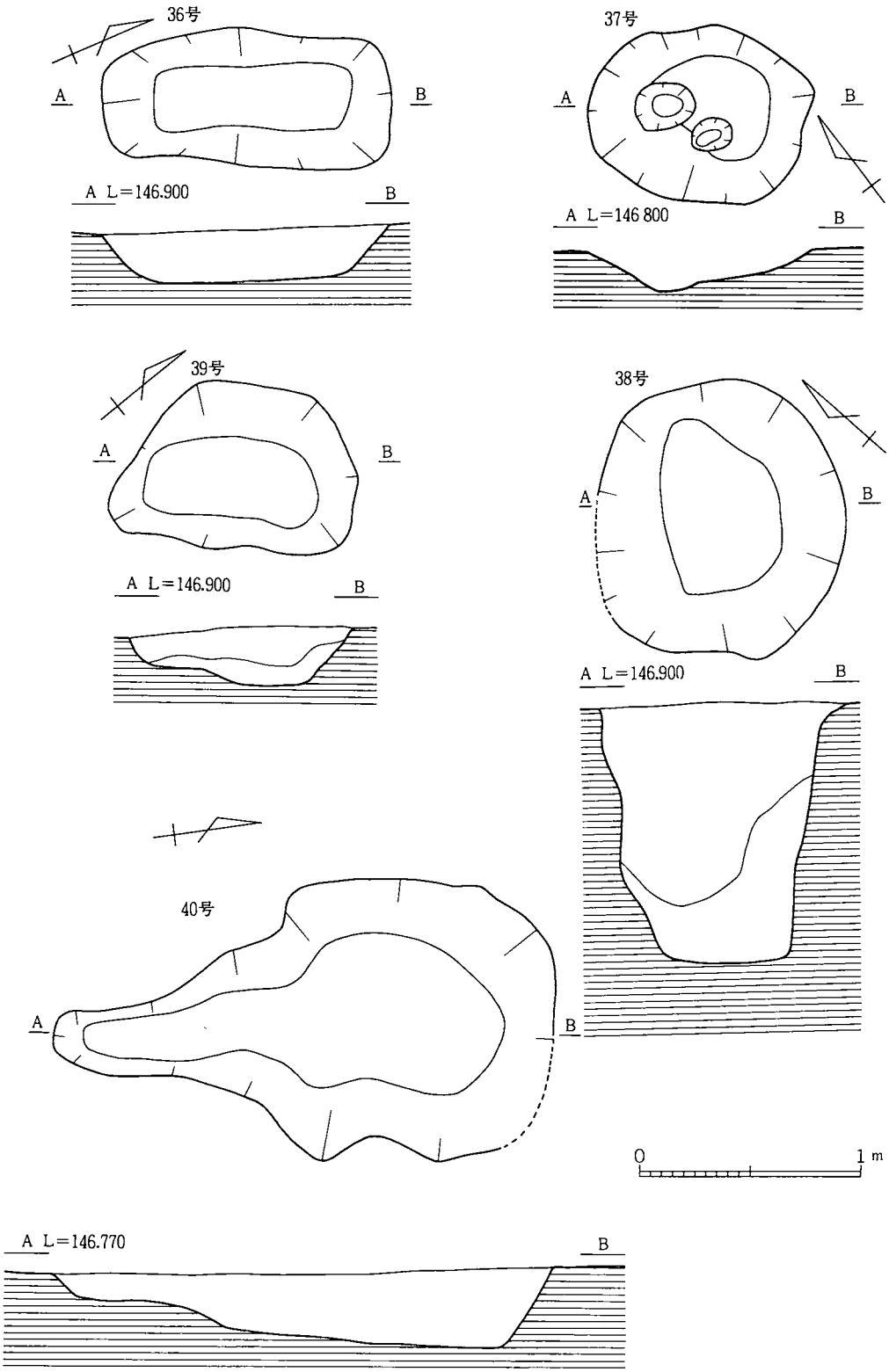
比較的大型の土坑で、長軸2.31m、短軸1.28m、深さ0.39mの規模を持ち、一端が尻すぼまりに細くなる柄鏡状の平面形態を示す土坑である。埋土は、他と同様にアカホヤ火山灰の一次堆積物である。

41号土坑（第29図）

丘陵のほぼ中心部に位置した遺構である。この土坑の他、この周辺には、42号～50号土坑がある。土坑は、長軸1.41m、短軸0.67m、深さ0.26mの規模を持つ不整の楕円形を呈するものである。埋土は、Ⅳ層類似の褐色土で、この中から塞ノ神式土器・押型文土器が出土している。

42号土坑（第29図）

平面形が楕円形を呈し、長軸1.25m、短軸0.77m、深さ0.59mの規模を持つ土坑で、形状・規模から小穴を有する土坑に類似しているようだ。埋土は、同様に上層がアカホヤ火山灰で下層が褐色土である。なお、塞ノ神式土器がこの下層より出土している。


36号
A
B
A L=146.900
B
37号
A
B
A L=146 800
B
39号
A
B
A L=146.900
B
38号
A
B
A L=146.900
B
40号
A
B
0
1 m
A L=146.770
B

第28図　土坑実測図

43号土坑（第29図）

24号～26号土坑に類似したもので、平面形態が楕円形をとり、その最深部が一方の壁寄りに掘られているものである。規模は、長軸0.92m、短軸0.67m、深さ1.06m である。埋土は、他のものに類似した堆積状態を示している。出土遺物として塞ノ神式土器がある。

44号土坑（第29図）

平面形は、不整な楕円形を呈し、長軸0.87m、短軸0.62m、深さ0.36m の規模を持っている。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物である。

45号土坑（第29図）

この土坑は、不整な円形を呈し、直径0.92m～1.1m、深さ1.08m の規模を持ち、底面は、上段･下段の二つがあるという特徴を持っている。。埋土は、上層にアカホヤ火山灰そしてその下層に褐色土と他の土坑の土層堆積状態と同一である。

46号土坑（第29図）

直径0.5m 前後の円形土坑である。底面は、平坦であり、確認面からの深さは、33cmである。埋土は、アカホヤ火山灰である。

47号・48号土坑（第30図）

切り合い関係で検出された遺構である。47号土坑は、長軸1.41m、短軸0.87m、深さ0.41m の規模を持った不整な楕円形を呈している。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物である。48号土坑は、長軸2.26m、短軸1.33m、深さ0.27m の規模の楕円形を呈するものである。埋土は、47号土坑と同一である。

49号土坑（第30図）

長軸1.14m、短軸0.77m、深さ0.34m を測る不整形の土坑である。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物である。

50号土坑（第30図）

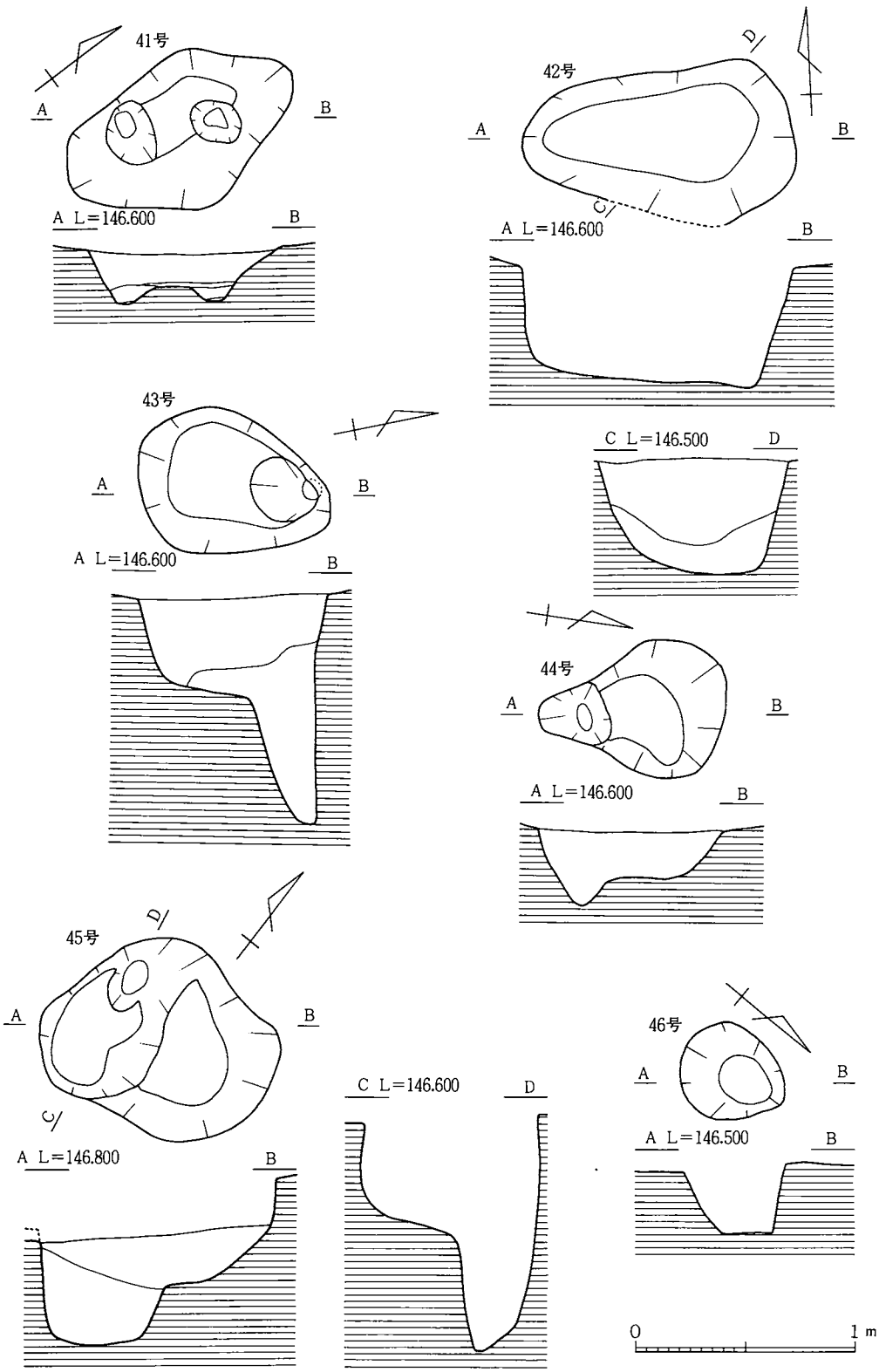
43号土坑に類似したものである。平面形態は、長軸1.19m、短軸0.8m を測る楕円形を呈している。この土坑の最深部は、南壁寄りに掘り込まれ、その深さは、85cmである。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物である。塞ノ神式土器が出土している。

51号土坑（第30図）

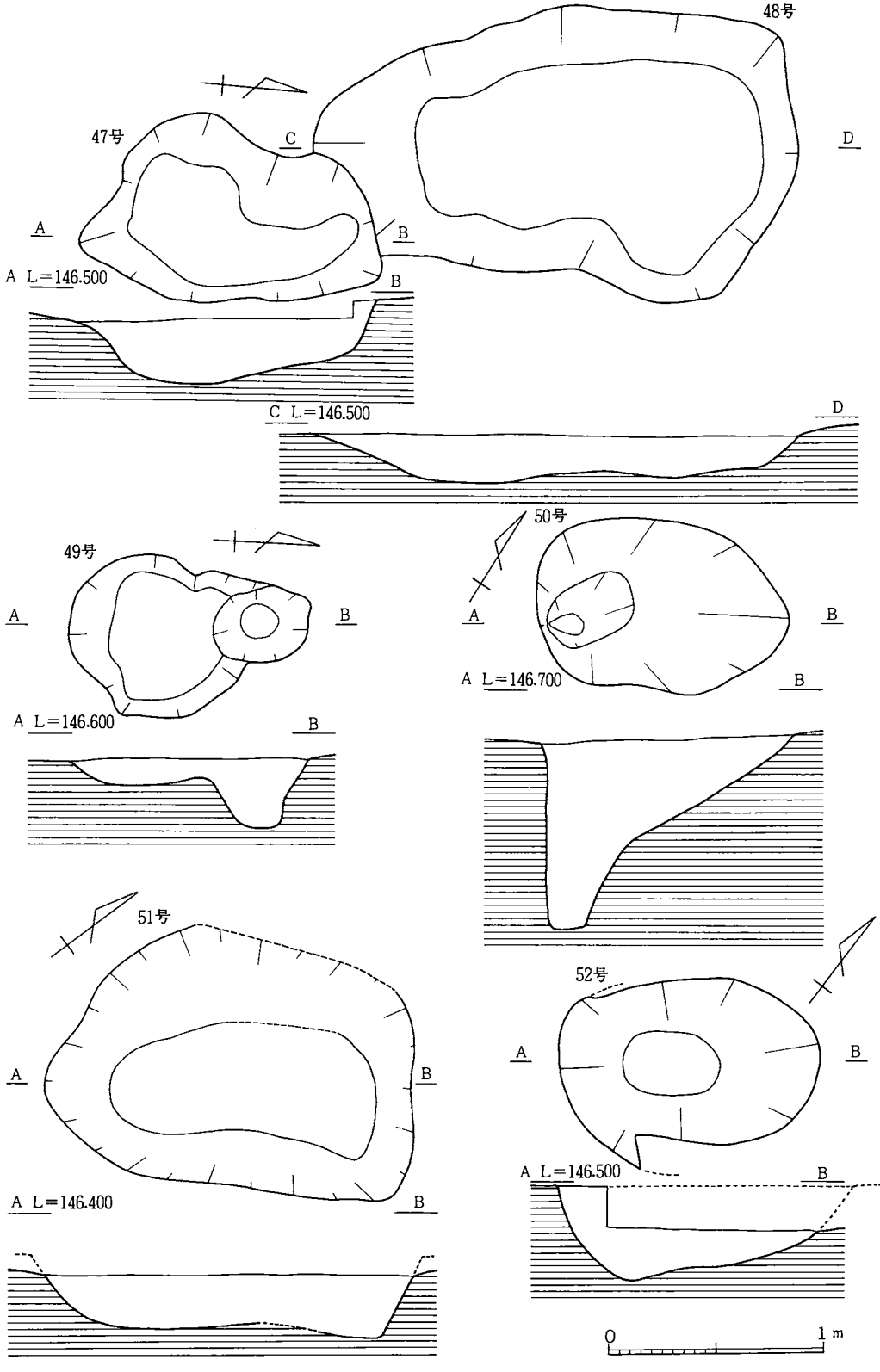
谷部を中心に分布している土坑にあたり、周辺に52号～54号・62号土坑がある。平面形は、楕円形を呈し、その規模は、長軸1.7m、短軸1.13m（推定）、深さ0.3m を測る。埋土は、アカホヤ火山灰である。

52号土坑（第30図）

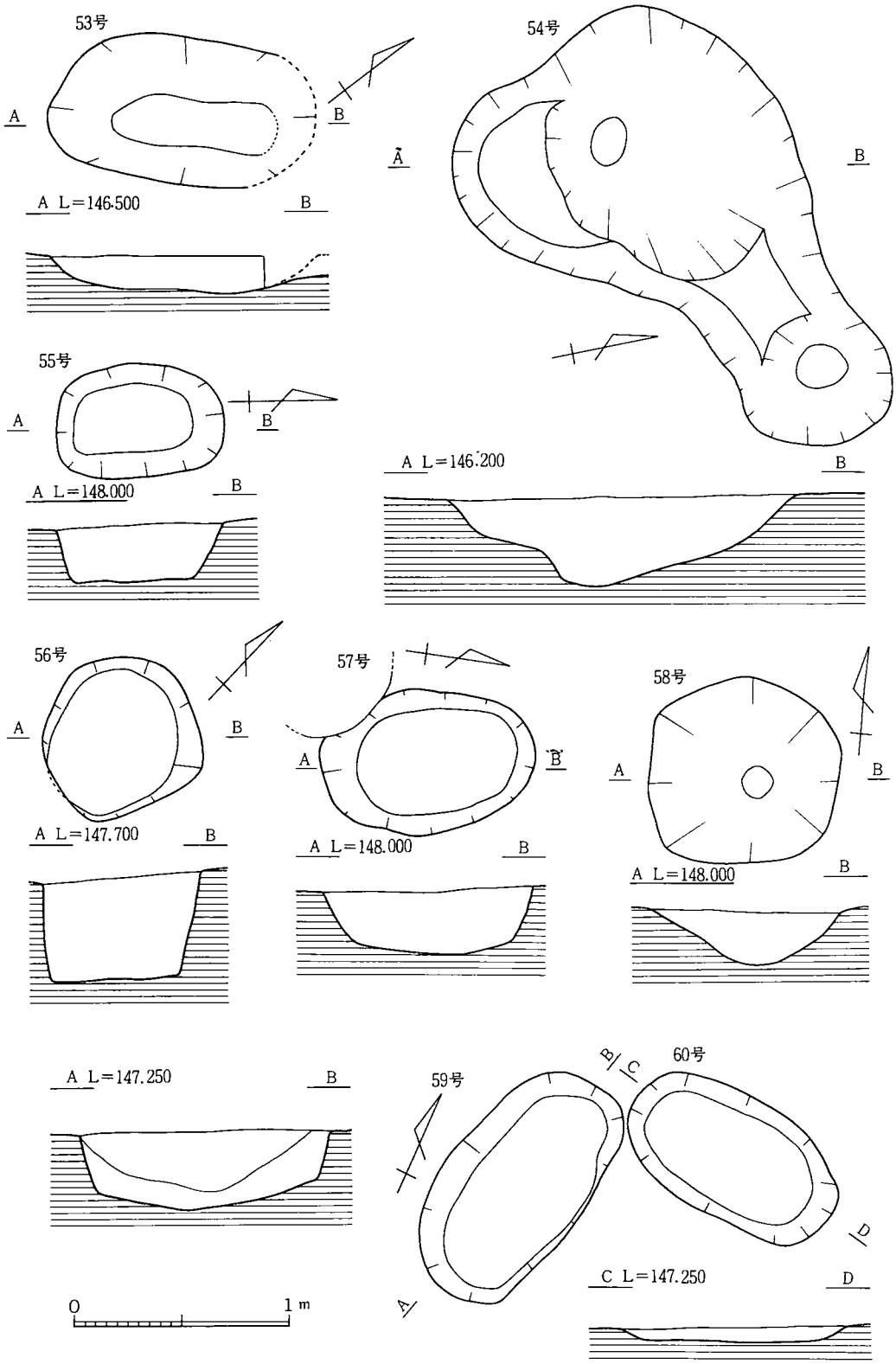
この土坑は、長軸1.21m、短軸0.77m、深さ0.44m の規模の楕円形を呈する土坑である。埋土は、51号土坑と同様にアカホヤ火山灰である。


41号
A
B
A L=146.600
B
42号
A
B
D
C
A L=146.600
B
43号
A
B
A L=146.600
B
C L=146.500
D
44号
A
B
A L=146.600
B
45号
A
B
D
C
A L=146.800
B
C L=146.600
D
46号
A
B
A L=146.500
B
0
1 m

第29図　土坑実測図


48号
47号
C
D
A
B
A L=146.500
B
C L=146.500
D
50号
49号
A
B
A
B
A L=146.700
A L=146.600
B
B
51号
52号
A
B
A
B
A L=146.500
B
A L=146.400
B
0
1 m

第30図　土坑実測図


53号
A
B
A L=146.500
B
54号
A
B
A L=146.200
B
55号
A
B
A L=148.000
B
56号
A
B
A L=147.700
B
57号
A
B
A L=148.000
B
58号
A
B
A L=148.000
B
A L=147.250
B
59号
B/C
60号
A/
/D
C L=147.250
D
0
1 m

第31図　土坑実測図

53号土坑（第31図）

長軸1.24m（推定）、短軸0.67m、深さ0.19mの規模を持つ楕円形を呈する土坑である。埋土は、一つでアカホヤ火山灰によっている。

54号土坑（第31図）

瓢箪形に近い不整形土坑である。長さ2.23m、幅1.49m・0.7m、深さ0.4mの規模を持っている。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物による土層である。出土遺物には、型式不明の土器１点がある。

55号土坑（第31図）

丘陵北側の斜面で、その尾根線上に立地している。平面形態は、胴張りの長方形を呈し、その規模は、長辺0.77m、短辺0.52m、深さ0.29mを測る。底面は、平坦である。埋土は、アカホヤ火山灰の堆積物である。

56号土坑（第31図）

55号土坑の南５ｍ、丘陵の尾根上にある。土坑は、直径0.74m～0.77m、深さ0.52mの規模を持つ円形土坑である。埋土は、上記遺構と同様でアカホヤ火山灰である。

57号土坑（第31図）

この土坑は、55号土坑の８ｍ東の斜面上にあり、長軸１ｍ、短軸0.67mの規模を持ち、楕円形の平面形を呈している。確認面からの深さは、31cmである。埋土は、アカホヤ火山灰によっている。

58号土坑（第31図）

57号土坑の４ｍの所にある直径0.94mの円形土坑である。底面は、狭く直径19cmにすぎず、全体の形状は、擂鉢状を呈する。深さは、27cmである。埋土は、アカホヤ火山灰である。

59号土坑（第31図）

58号土坑の南６ｍの山部麓に位置している。長軸1.18m、短軸0.66m、深さ0.37mの規模の楕円形の平面をとっている。埋土は、上層のシラスを含む褐色土と下層の基本層位Ｖ層に類似した暗褐色土との二つの土層に区分される。

60号土坑（第31図）

この土坑は、59号土坑の隣に位置し、長軸1.04m、短軸0.57m、深さ0.08mの規模を持っている。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物である。

なお、この59号・60号土坑の周辺は、激しい削平のため確認面がＶ層中であった。したがって、ここで示している数値は、本来のものではない。

61号土坑（第32図）

59号・60号土坑の南東６ｍの所にある。平面形態は、不整な円形を呈し、その規模は、長径1.12m、短径0.89mを測る。土坑にはさらに長軸40cm、短軸30cmの楕円形の落ち込みがある。

深さは、37cmである。埋土は、アカホヤ火山灰の二つの層に区分される。

62号土坑（第32図）

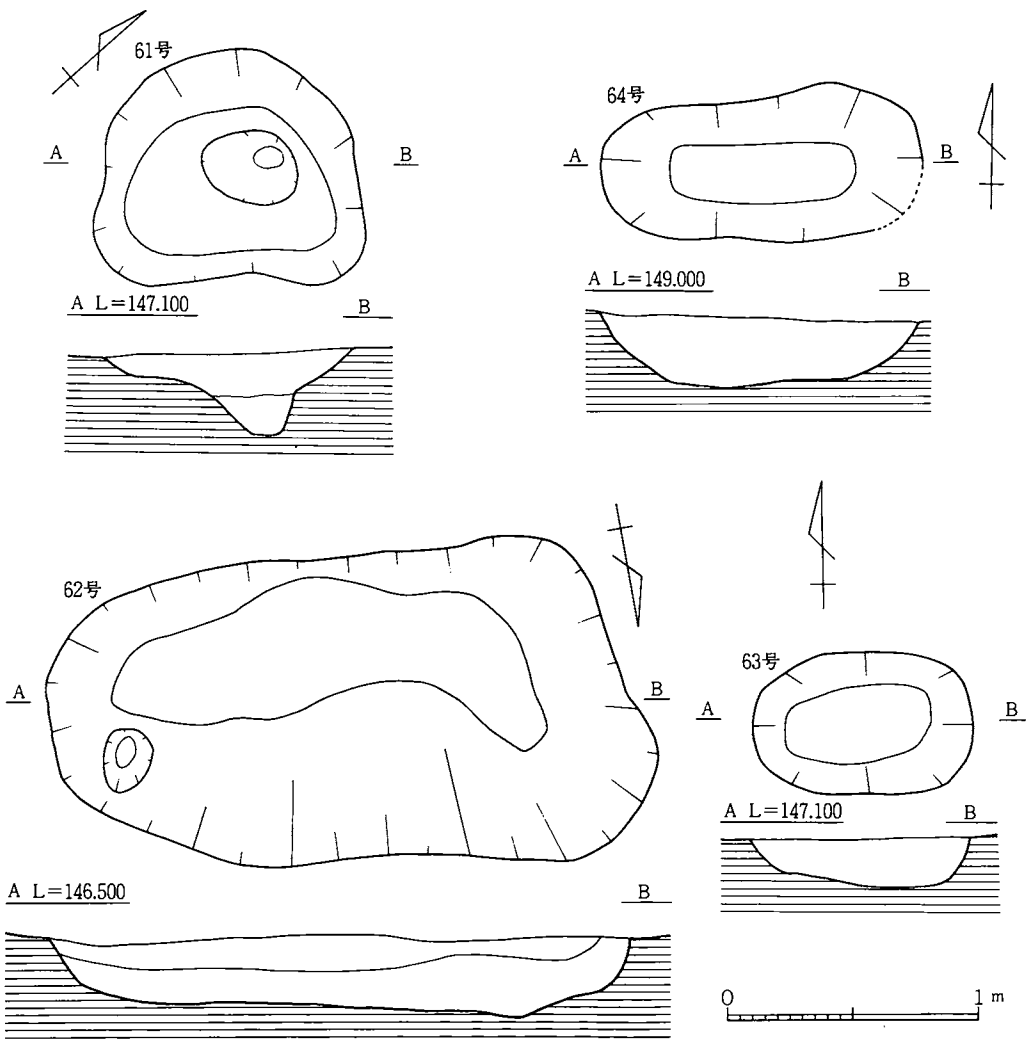
長軸2.48m、短軸1.28m、深さ0.34mの規模をもつ大型の楕円形土坑である。埋土は、上層のアカホヤ火山灰の一次堆積物と下層のⅣ層類似の褐色土との二つの層に区分できる。

63号土坑（第32図）

この遺構は、59号土坑の20m東に位置する土坑で、長軸0.87m、短軸0.56m、深さ0.21mのの規模を持つ楕円形土坑である。埋土は、基本層位Ⅳ層類似の褐色土によっている。

64号土坑（第32図）

土坑群の中で最も東側に位置する土坑である。平面形態は、楕円形をとり、その規模は、長



第32図　土坑実測図

軸1.29m、短軸0.61m、深さ0.31m を測る。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物による土層である。

⑷穴（第33図）

小型の土坑をここに集めている。従って、遺構の分類上では、土坑と同類ということになる。分布は、丘陵先端部近くに２基（１号・２号）、その東14m の所に３号、平坦部北端に４号、谷部から平坦部への変換点付近に５号、そして丘陵東端寄りに２基（６号・７号）という状態である（第21図）。

１号穴

直径0.36m～0.42m、深さ1.2mを測る。埋土は、アカホヤ火山灰である。

２号穴

直径0.85m 前後で、深さ0.12m の遺構である。底面にはさらに東寄りに直径28cmの円形落ち込みがある。

３号穴

平面形態が不整な楕円形を呈する。長軸0.52m、短軸0.25m、深さ0.76m の遺構である。

４号穴

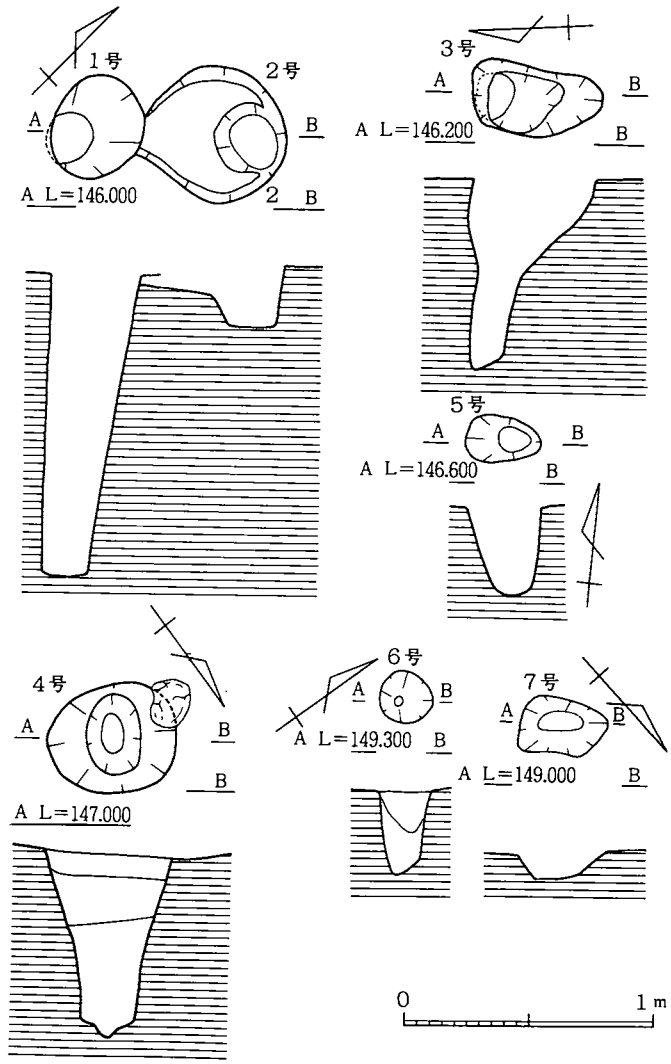
長軸0.53m、短軸0.43m、深さ0.73m を測る楕円形に近い遺構である。埋土は、上層のアカホヤ火山灰と中・下層の褐色土によっている。

５号穴

長軸0.3m、短軸0.19m、深さ0.36m の規模を持つ楕円形の遺構である。埋土は、アカホヤ火山灰の一次堆積物である。

６号穴

直径0.21m、深さ0.34m の円形の遺構である。埋土は、シラスを基本にした二つの層によっている。



第33図　穴実測図

7号穴

長軸0.36m、短軸0.22m、深さ0.12mの楕円形遺構であるが、確認した面がシラス上面で、本来の規模は、さらに深いものといえる。

(5)炉穴（第35図）

炉穴は、3基確認した。その配置状況は、丘陵の西端部近くに1号炉穴そして山部の斜面部に2基（2号・3号）である。また、この3基の他に2号炉穴の西側12mの付近にもその形跡が認められる部分があったが、不安定で確認できなかった（第34図）。

1号炉穴

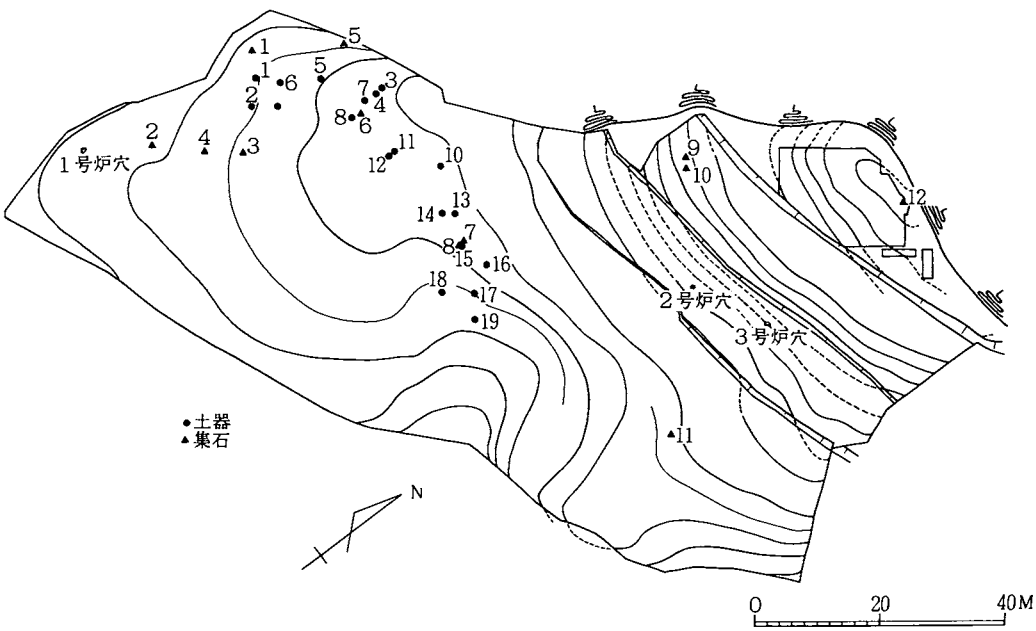
焼土の中心部のみの確認であった。その周辺は、後世の攪乱によって消滅してしまい、その全体像は不明である。したがって、炉穴の存在そのものも確認できなかった。

2号炉穴

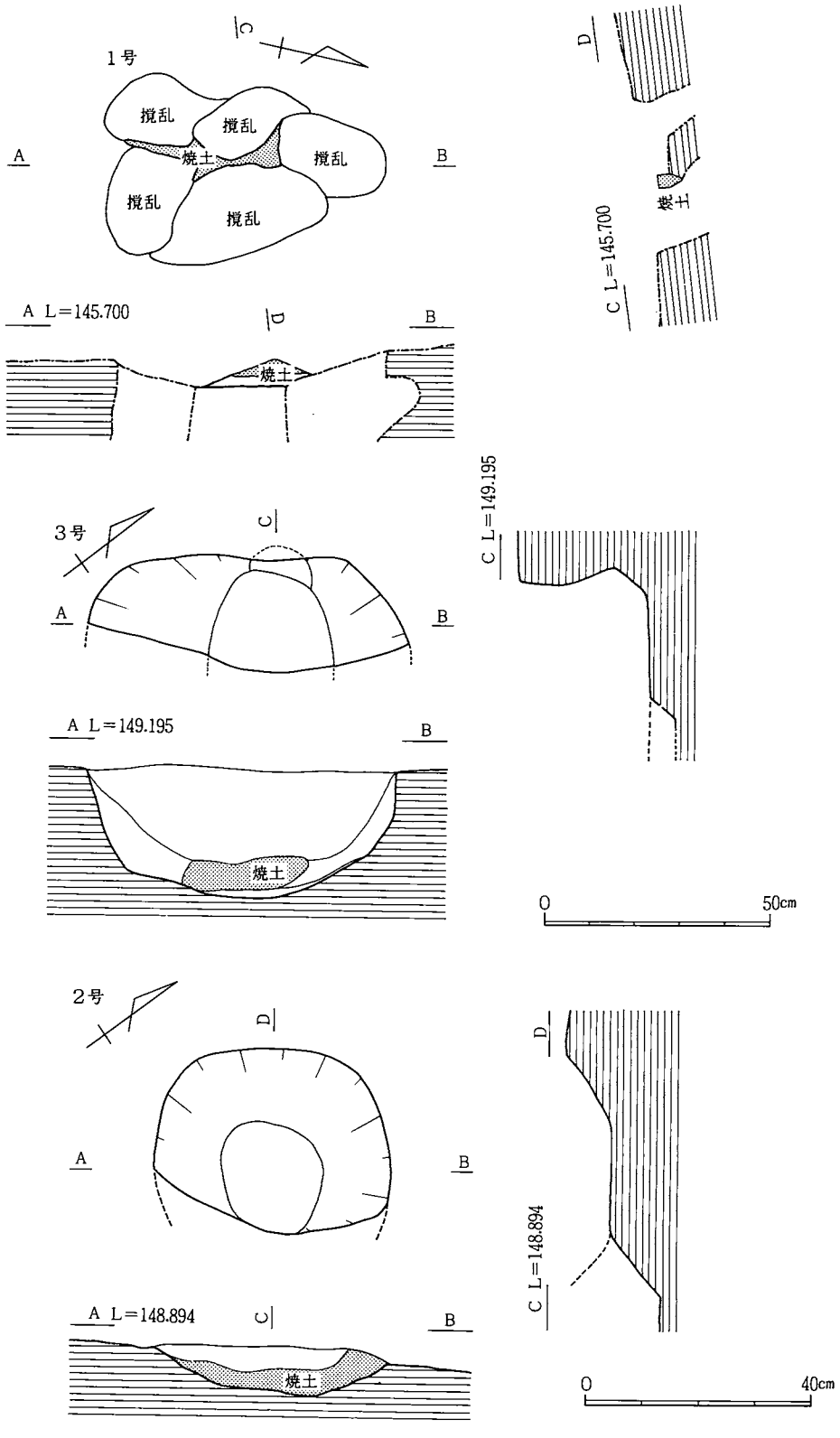
全体の約2/3が残存している。焼土は、炉穴の底面に厚く堆積している。炉穴は、直径0.42m、深さ0.09mの円形に近い平面形態をとっていたものと推定できる。焼土の上には、Ⅳ層類似の褐色土に焼土・炭化物が多量に混入した埋土がみられる。

3号炉穴

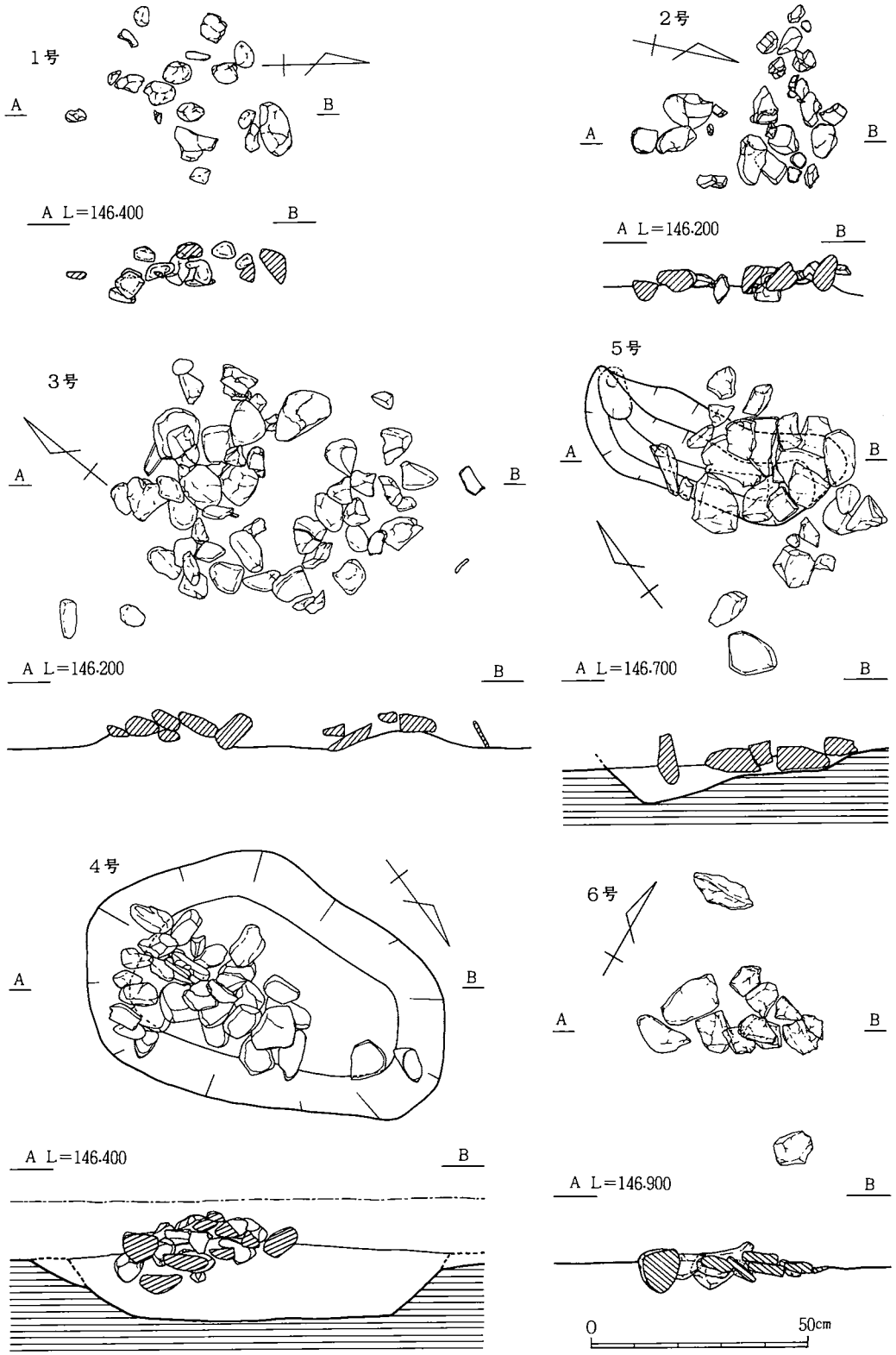
残存の状況は不明である。したがって、炉穴の平面形態及び規模については推定できないが、現存した部分の数値を示せば、長さ0.7m、深さ0.28mである。焼土は、底面部分のみにみられ、



第34図　遺構配置図


1号
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
焼土
A
B
C
D
A L=145.700
焼土
C L=145.700
焼土
3号
A L=149.195
焼土
C L=149.195
0
50cm
2号
A L=148.894
焼土
C L=148.894
0
40cm

第35図　炉穴実測図


1号
A
B
A L=146.400
B
2号
A
B
A L=146.200
B
3号
A
B
A L=146.200
B
5号
A
B
A L=146.700
B
4号
A
B
A L=146.400
B
6号
A
B
A L=146.900
B
0
50cm

第36図　集石実測図

その上には焼土・炭化物を多く含む褐色土の埋土が見られる。また、焼土直下の底面には、硬化している部分も観察できる。

⑹集石（第36図～第40図）

調査の結果、12基の集石を検出した。

では丘陵の中での配置のあり方は、どのような状態を示しているだろうか。

集石は、丘陵の山部の頂上部分に１基（12号）、その斜面部に２基（９号･10号）そして平坦部東側部分に１基（11号）がある他は、すべて平坦部西側部分に集中して分布している。さらにその西側部分での遺構は、平坦部の中でも平坦性の強い部分にはみられず、すべてその北側縁辺に平坦部を取り巻きながら分布している。またこうした分布の傾向は、前記した土坑群のそれとも共通している（第34図）。

検出された集石は、土坑を持つもの（６基）と持たないもの（６基）との二つの種類がある。前者は、４号・５号・７号・８号・11号・12号集石で、後者は、１号～３号・６号・９号・10号集石である。さらに土坑を持つ集石は、大型の土坑のもの（７号・８号・11号・12号）と小型の土坑のものに分けられるようである。

１号集石（第36図）

西側平坦部の北側縁辺部に位置し、土坑を持たず、珪岩と砂岩との19個によって構成されている集石である。石の散布状態は、弱い集中度で0.45m×0.9m の範囲に広がっている。またほとんどの石は、赤変してもろくなっており、火を受けていると考えられる。

２号集石（第36図）

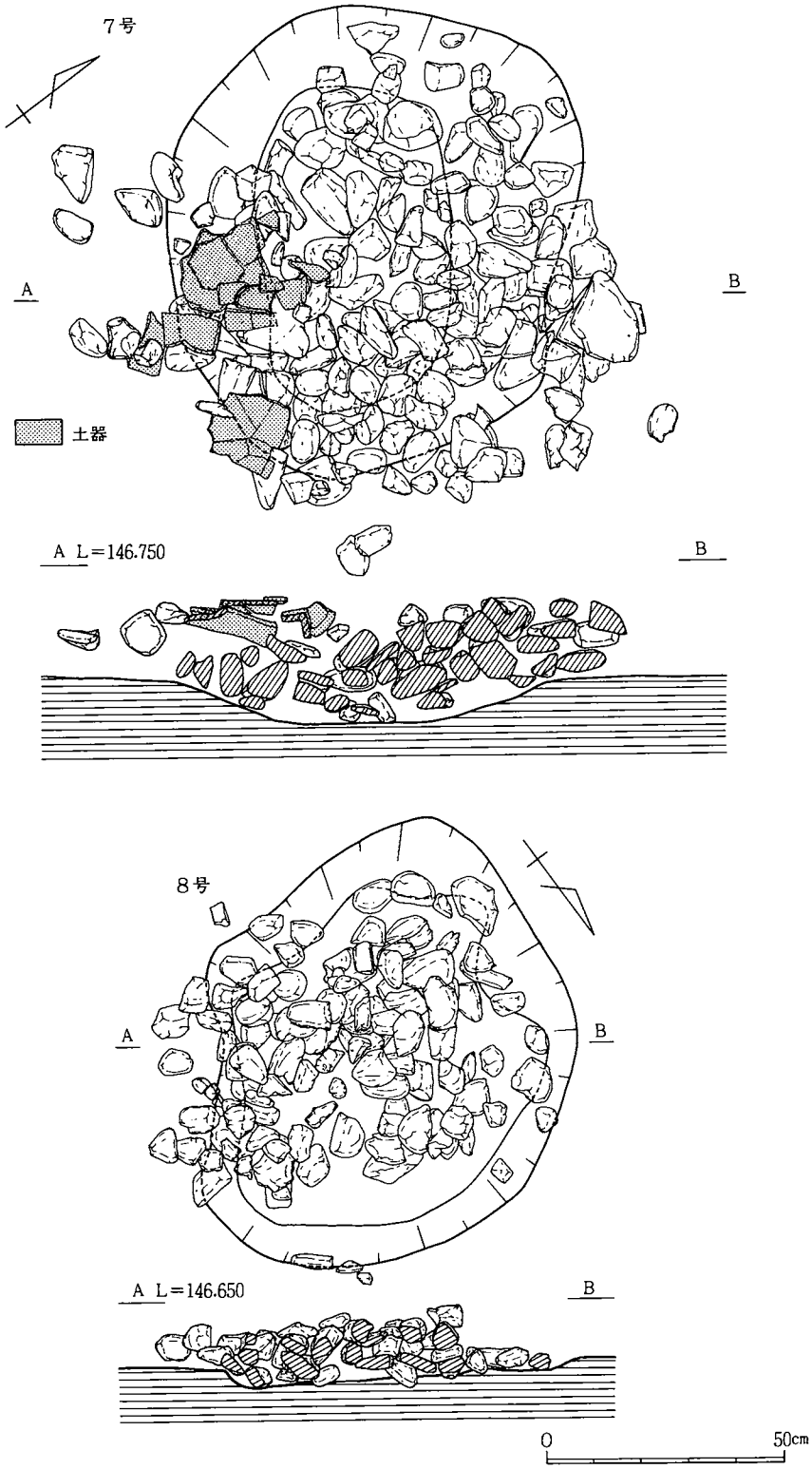
この集石は、丘陵の先端部寄りに位置し、土坑を持たず、珪岩と砂岩との33個によって構成されている。石の散布は、三角形の範囲に広がり、集中度は、弱い。また石は、ほとんど火を受けているものと考えられる。

３号集石（第36図）

西側平坦部の中で最も平坦性の強い部分の近くにある集石で、この６ｍ西隣には、４号集石もある。この集石は、長軸0.75m、短軸0.5m の楕円形の範囲で集まる66個の珪岩･砂岩の焼けた石によって構成され、比較的強い集中度を示している。

４号集石（第36図）

この集石は、長軸0.89m、短軸0.58m、深さ0.13m の規模の土坑を伴った遺構である。石の分布は、この土坑の中では平面上東隅に偏り、包含状態も中位以上である。構成する石は、珪岩と砂岩とが中心となり、焼けた状態を示している。



第37図　集石実測図

５号集石（第36図）

１号集石の北東12m の所にあり、長軸0.62m、短軸0.22m、深さ0.12m の楕円形を呈する土坑を持つ集石である。石は、黄褐色の凝灰岩の角礫が中心となり、土坑底面に張り付いた状態のものもみられる。また、中央付近の３個の石の表面には、焼土・炭化物の粒子を含む黒褐色土が張り付き、中には炭化物が直接付着したものもあり、また土坑の褐色土の埋土の中にも焼土・炭化物が包含されている。しかし、この遺構が炉跡であるとする積極的根拠ではない。

６号集石（第36図）

５号集石の東10m の所に位置し、13個の珪岩と砂岩の石が0.37m×0.3m の範囲の中に集まっ

第38図　集石実測図

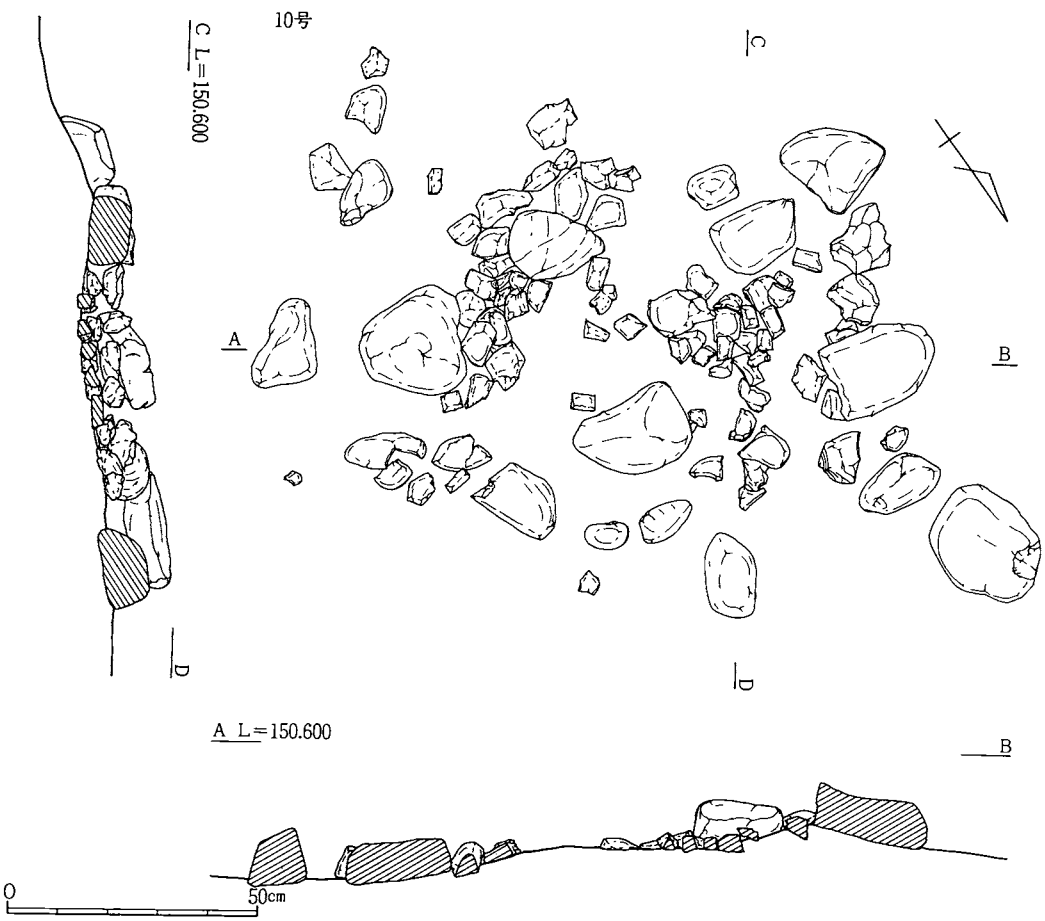
てできた集石である。石のほとんどは、火を受けたためか赤変そして軟質化しているが、周辺には火を使用した形跡は見当たらない。

7号集石（第37図）

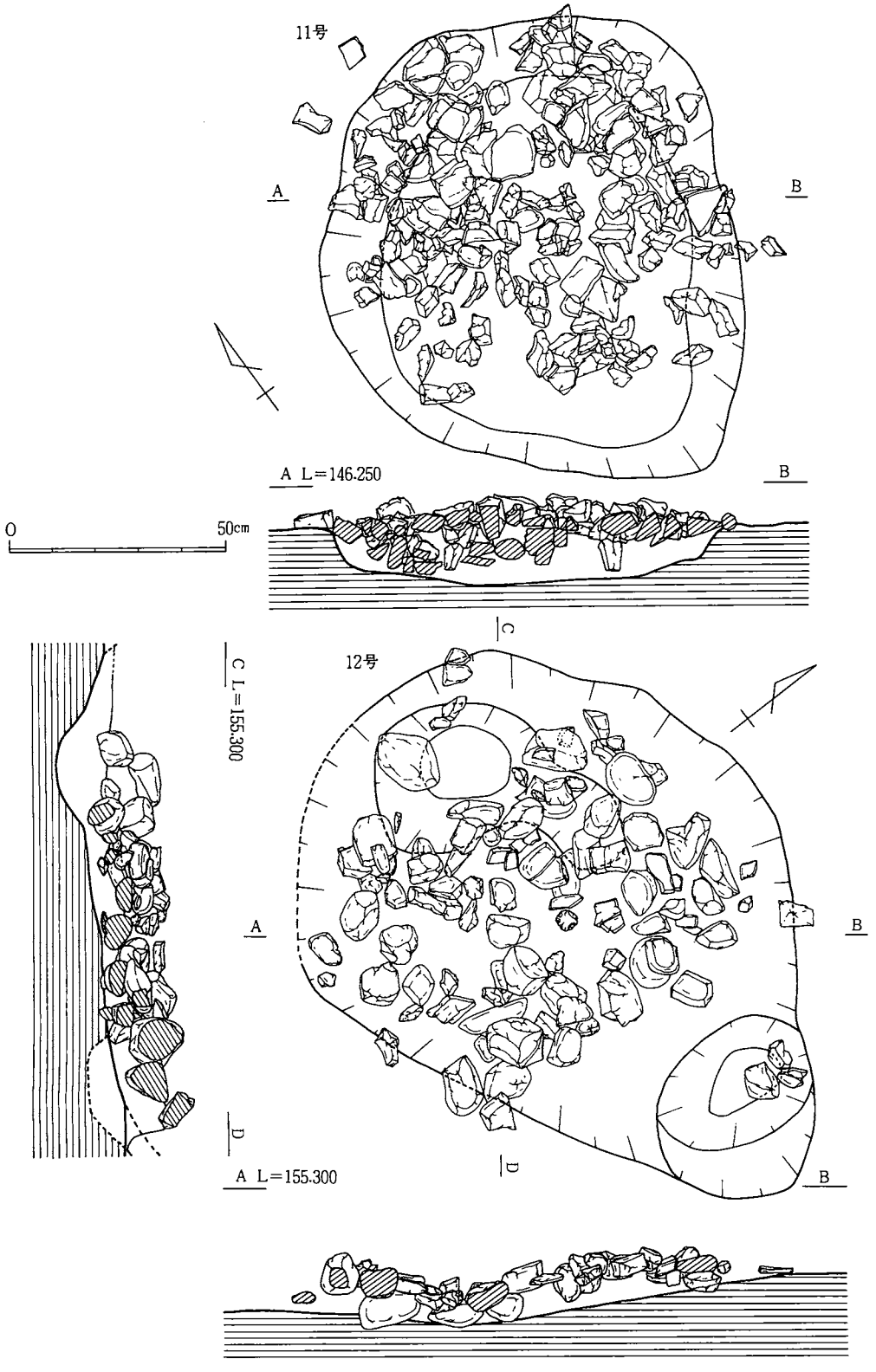
6号集石の東26mの所にある遺構で、直径が0.88m～0.99m、深さ0.11mの円形を呈する掘り込みを持っている。この掘り込みの中には、310個に及ぶ珪岩・砂岩を中心にした焼けた石が底面から上面まで詰っている。土坑の埋土は、Ⅳ層を基本とした褐色土であり、その中に少量の焼土・炭化物の粒子がみられる。伴出した遺物には、上面で塞ノ神式土器一括・石皿そして底面直上で楕円押型文土器1点がある。

8号集石（第37図）

7号集石の隣にある集石で、0.76m～0.89m、深さ0.06mの円形を呈する掘り込みを持っている。この掘り込みの中には珪岩と砂岩の133個に及ぶ石が入り込んでいる。土坑の埋土は、基本層位であるⅣ層を基本とした褐色土である。この遺構にも底面に火の使用の形跡はない。



第39図　集石実測図



第40図　集石実測図

9号集石（第38図）

斜面部にある集石で、土坑を伴っていない。集石を構成する石の分布は、0.65m×0.8mの範囲の中心部のものとその周辺のものという構造を持っている。おそらく周辺の石は、中心部から動き散在したものであろう。石材は、珪岩・砂岩が中心である。

10号集石（第39図）

9号集石の隣にあるもので、同じように土坑を持たない。石の分布は、0.9m×1.5mの範囲にあり、規則性は持ってない。石材は、珪岩と砂岩が中心である。

11号集石（第40図）

平坦部東側に唯一位置する土坑を持つ集石である。土坑は、直径0.98m～1.04m、深さ0.13mの規模を持ち、不整ではあるが円形を呈し、そしてこの中に珪岩と砂岩を中心にして357個に及ぶ石が詰っている。土坑の埋土は、Ⅳ層を基本とした褐色土が中心となっているが、焼土はほとんど見当たらなかった。

12号集石（第40図）

山部頂上にある集石で、1m～1.46mの直径を持つ不整形の土坑を持っている。深さは、16cmである。石は、この土坑内で珪岩・砂岩を中心にして150個を数え、その集中の状態は、円形を呈している。土坑の埋土は、基本層位であるⅣ層に類似した褐色土で、焼土・炭化物は包含されていない。伴出遺物に珪岩製の削器がある。

(7)土器の出土状態（第41図～第45図）

次に、良好な状態で出土した土器の分布とその出土状態について示してみよう。

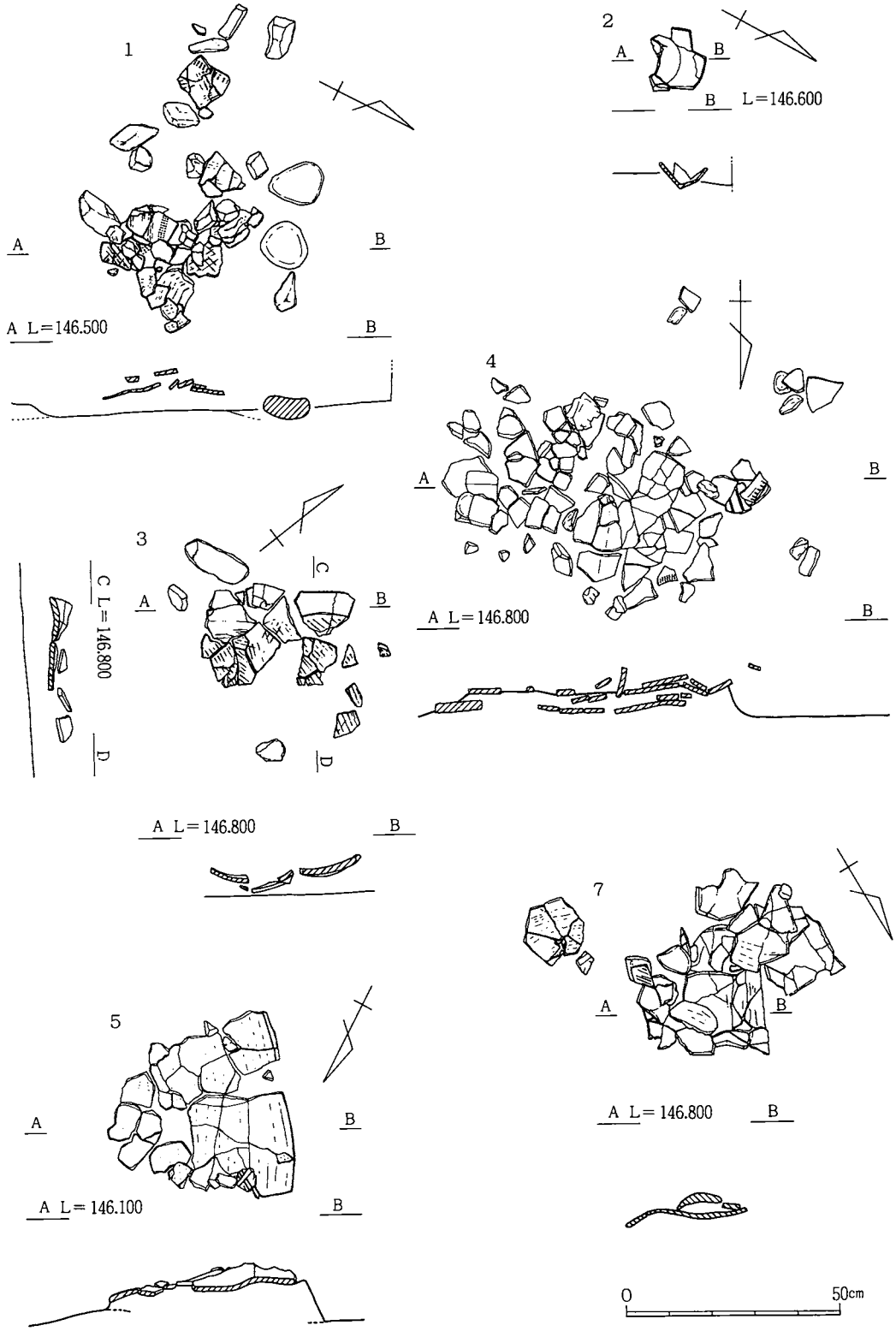
これらの土器として19例を取り上げた。その分布は、すべて丘陵の西側平坦部にあり、しかもその中で平坦性の強い部分には無く、そこを取り巻く形で北側に集中して検出された。こうした分布の傾向は、集石の分布とやや分布域をずらしてはいるが、かなり類似している。

それではこうした出土の状態には、どのようなあり方があるだろうか。こうした状態を次に類型化してみよう。

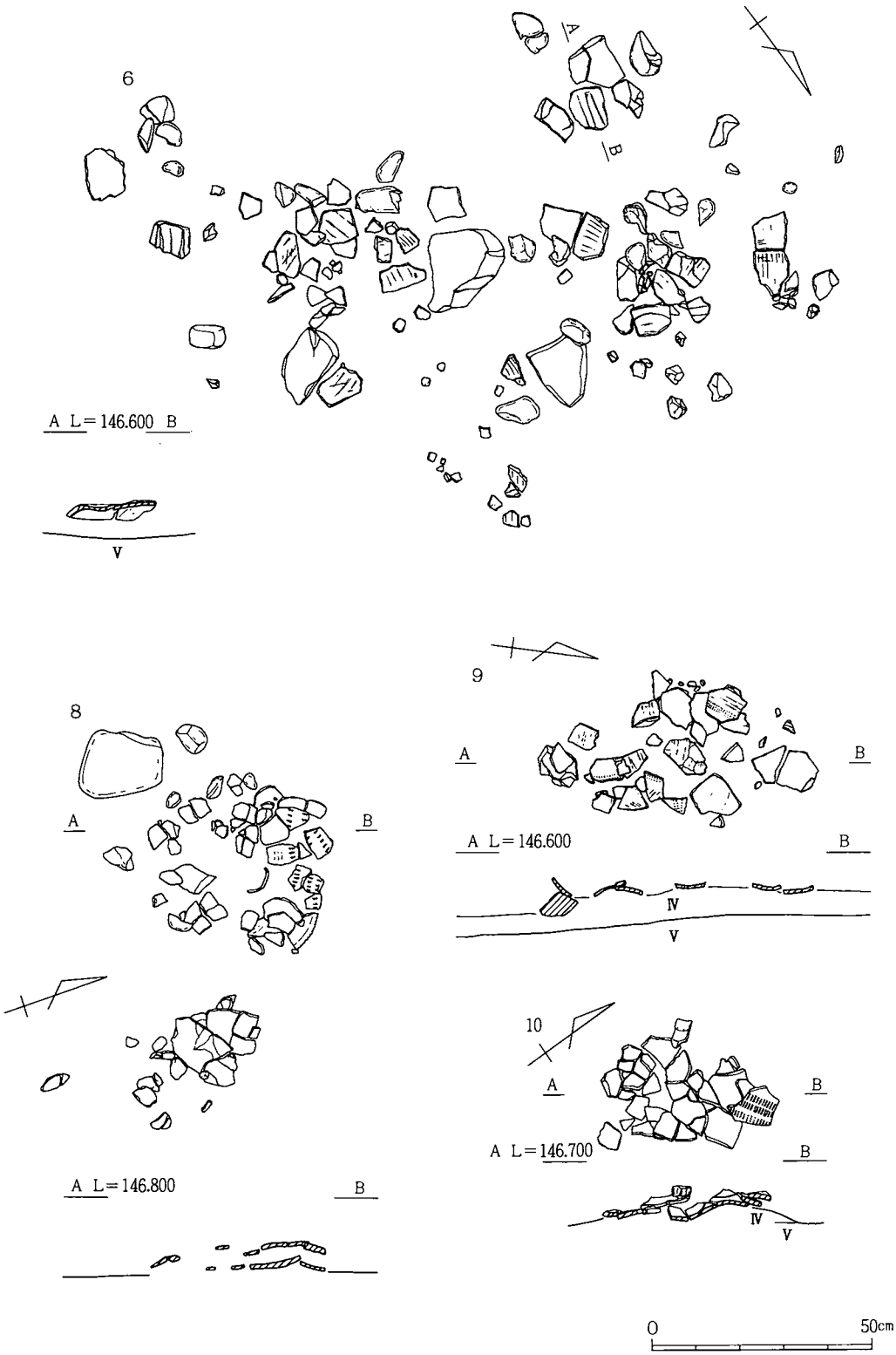
類型Ⅰ（第44図17）

第44図17として示しているものがこれにあたり、横倒しのままに押し潰された（底部を欠いてその部分に石が置かれているようでもある）状態で出土している。この土器の下には、長軸1m、短軸0.72m、土器下面からの深さ0.28mの楕円形を呈し、埋土がシラスを含む暗褐色土の上・下層の二つに区分される土坑がある。なお、この土器の口縁部の近くには磨石2点が重なり合った状態で出土している。

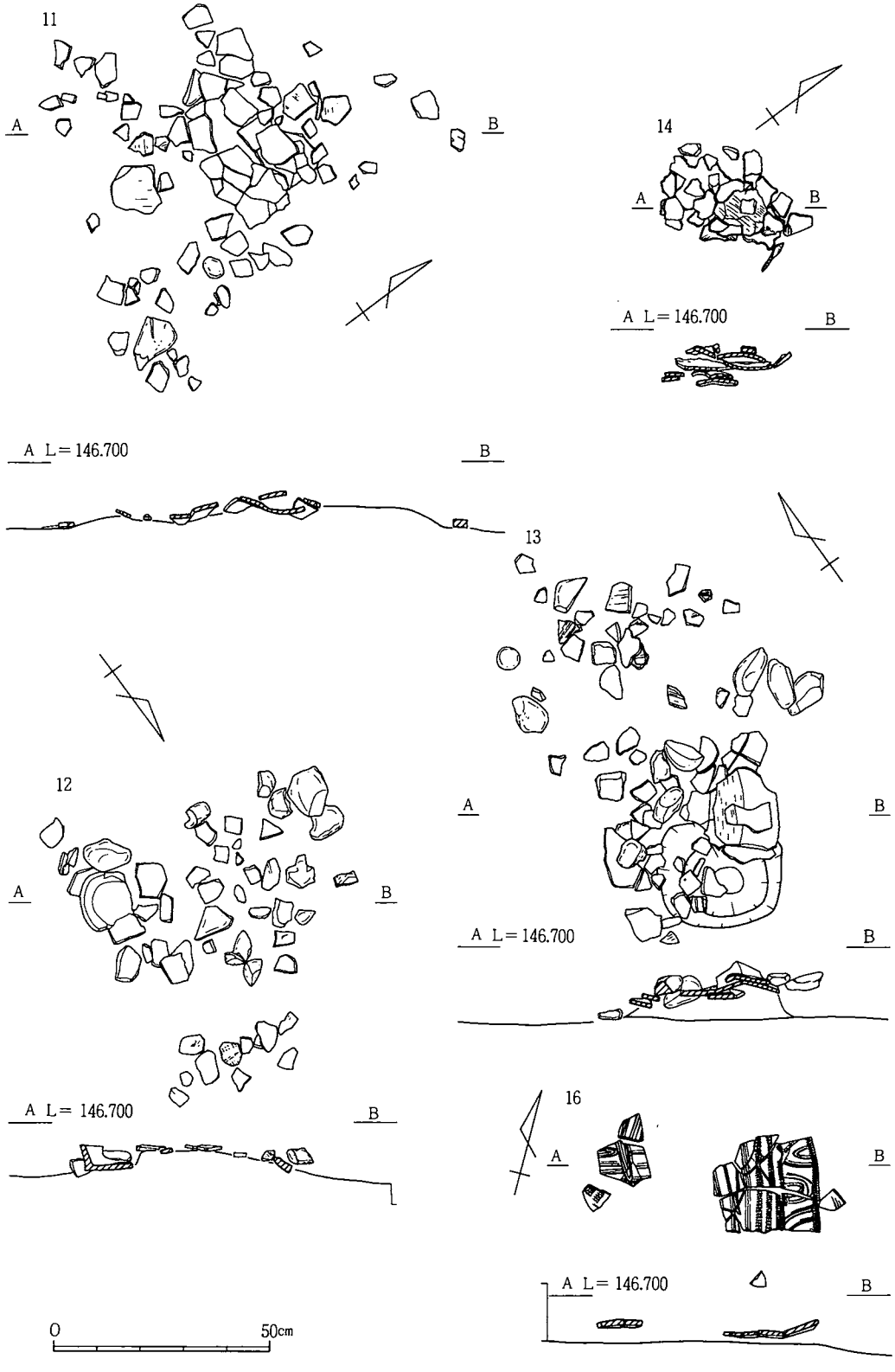
このように、土器が本来の状態に近いままで出土するものを類型Ⅰとしたい。



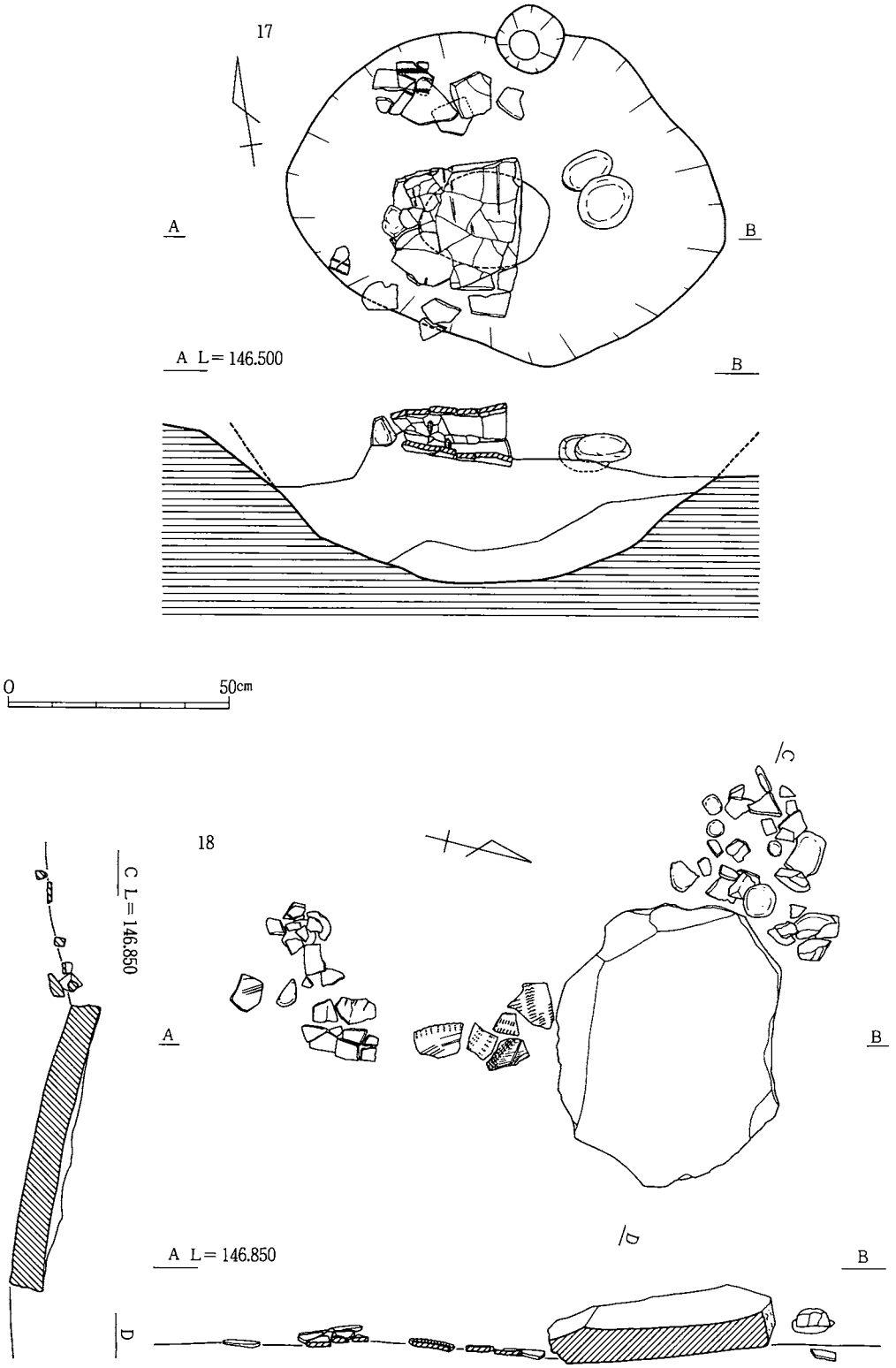
第41図　縄文式土器出土状況図



第42図　縄文式土器出土状況図



第43図　縄文式土器出土状況図



第44図　縄文式土器出土状況図

類型Ⅱ（第41図３・５・７・第42図10・第43図16）

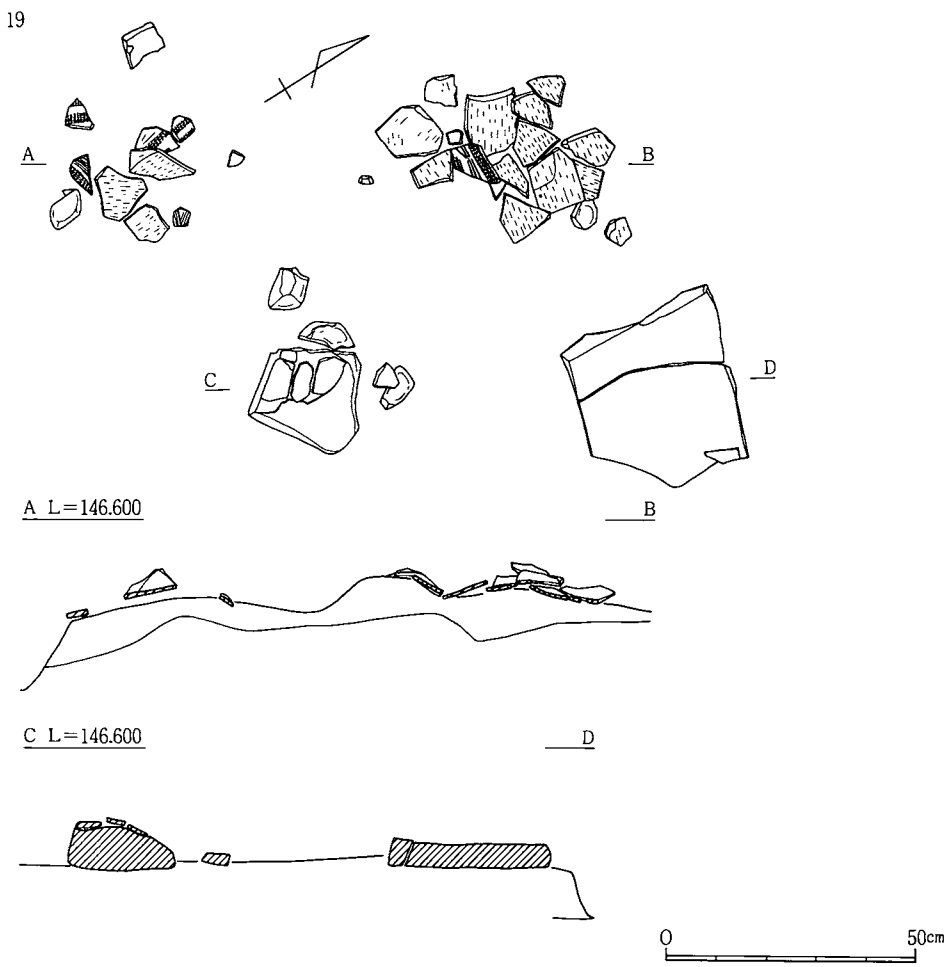
この類型の土器は、類型Ⅰのようにほぼ完全な姿をとらないが、土器の口縁部から胴部までが整然と並んだ状態で検出されるものにあたる。例えば、類型Ⅰの上半分を欠如したようなものである。しかし、第41図７のようにほぼ完全に復元されるものもある。

類型Ⅲ（第41図１・４・６・第42図８・９・第43図11～15・第44図18・第45図19）

この類型は、類型Ⅱの土器が散乱した状態となって出土するもので、口縁部や胴部の破片の並び方にほとんど規則性がない状態である。

類型Ⅳ（第41図２）

この遺跡出土のほとんどの土器片にあてはまる類型である。例えば、同一個体の土器の集合



第45図　縄文式土器出土状況図

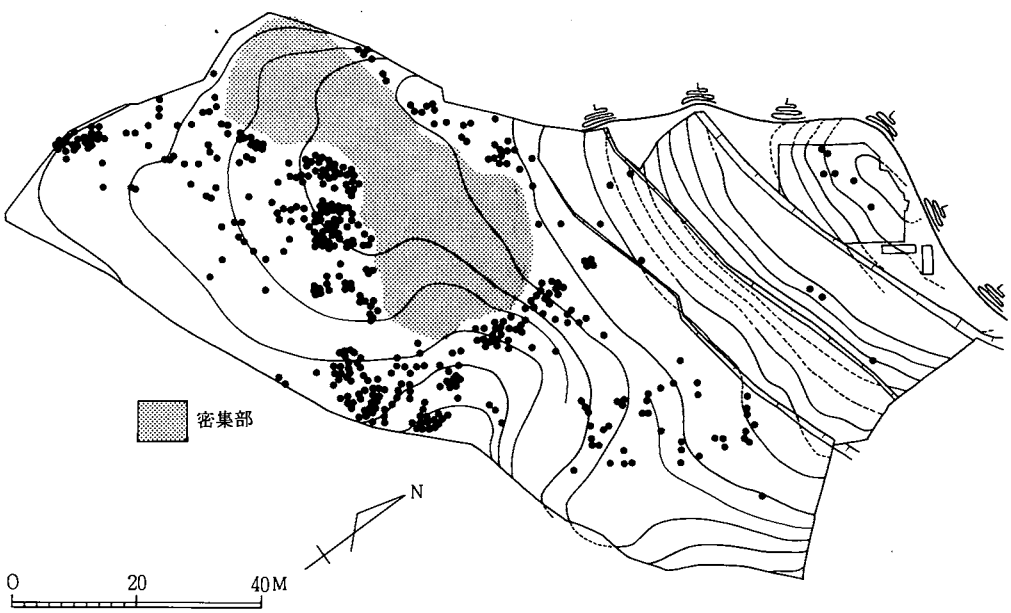
が無いもので、土器片が単独に近い状態で出土するものである。

以上のように土器の出土状態は四つの類型に区分できるが、ここでは、類型Ⅰ・Ⅱから類型Ⅲへさらに類型Ⅳへと進む散乱化の過程としてこれらの4類型を捉えておきたい。

2．遺物とその分布

(1)土器

遺跡を広く覆うアカホヤ火山灰直下のⅣ層褐色土層からはその文様・器形の特徴によって分類される幾つかの型式の土器が出土した。その土器の種類は、塞ノ神式土器・押型文土器・手向山式土器・撚糸文土器・円筒形条痕文土器・吉田式土器・平栫式土器・前平式土器・その他と多い。このことは、縄文時代早期にこの遺跡が長期間にわたり使用されていた可能性を示しているのかもしれない。しかし、この多種類の土器は、遺跡にあって平面的にも層位的にも混在した状態を示し、その状態として確実な形で時期差を認定することはできなかった。従って、この報告では遺物量において主体となる土器から順に、その分布と特徴を示していくことに止めておく。



第46図　遺物分布図（塞ノ神式土器）

塞ノ神式土器（第48図～第60図）

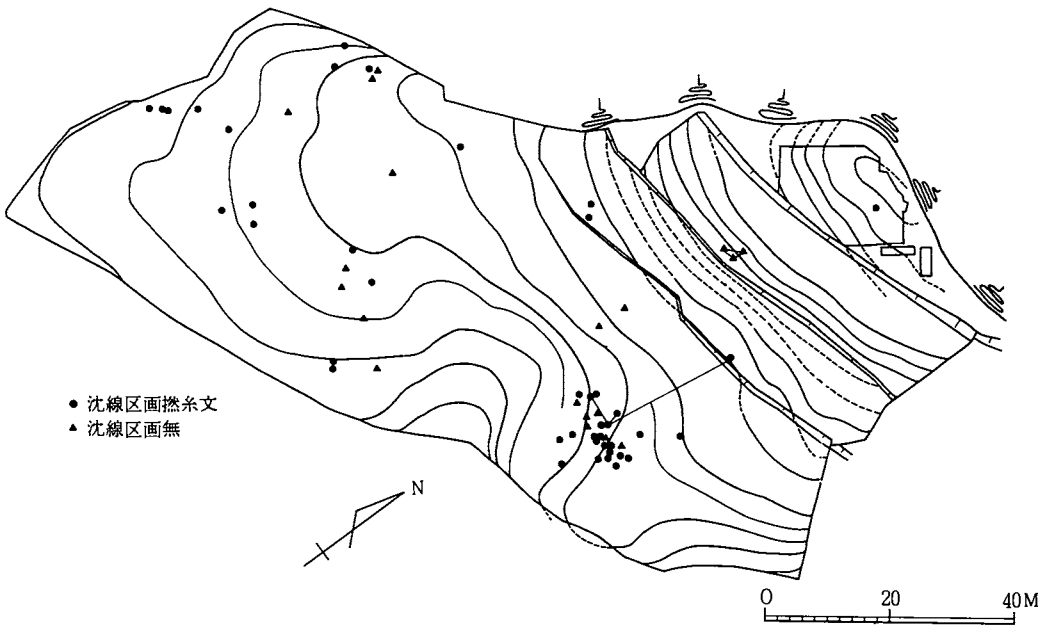
塞ノ神式土器には、文様施文の違いから大別して二つに分類できる（河口　1972、新東　1982）。つまり、貝殻文を主文様とするものと撚糸文を主文様とするものの二者である。これら二つの大別土器群は、文様はもとよりその器形・胎土・焼成においても大きく相違している。そこで、ここでは分布を区別して提示した（第46図・第47図）。

遺跡出土の土器の中で最も多量に出ているものが貝殻文であるが、その分布は、丘陵の平坦部しかもその西側に中心がある。さらに、その西側平坦部でも集中傾向が強く、スクリーントーンで範囲を示している部分でそのほとんどが出土している（第46図）。つまり、遺跡の貝殻文の塞ノ神式土器のほとんどは、このスクリーントーンの部分で出土していると言っても言い過ぎではない程である。それほど集中傾向の強い土器群である。

一方、撚糸文を主文様とする土器は、かなり散在的な分布をとっている。その中で、強いてその中心を挙げるとすれば、東側平坦部と谷部との変換点付近に集合しようとする傾向が強いようである（第47図）。

次に、出土した土器の特徴について示してみたい。

貝殻文を主文様とする土器については、すでに分類の基準を示したことがある（木﨑　1985）。そしてその編年的所見は別にして、その分類についての基準は、ある程度明確にできたものと考えている。しかしこの分類は、整理途中でのものであり、幾つかの不備があったことも事実



第47図　遺物分布図（塞ノ神式土器）

である。そこで、ここではこれまで行った分類を基にして新たな分類作業を試みてみたい。

塞ノ神式土器は、その器形と文様の構成で幾つかの種類がある。そこでそれらを類別して示してみよう。

第１類は、器形が円筒形を呈するもので、大きく二つの種類がある(第48図)。一つに交叉した貝殻条痕を持つもの（１～４）であり、一つに口唇部と胴部に貝殻の押し引き文、そしてその間に殻頂部による交叉した条痕という文様構成をとるもの（５）である。この中で前者については、本来の塞ノ神式土器の概念から大きく外れるものであり、ここでは区別して扱っておく。従って第１類の典型は、５の土器ということになる。しかし、交叉した条痕は、類似したものが塞ノ神式土器の中にも併用されることがある点については注意しておきたい。

第２類は、器形の特徴として口縁部がラッパ状に開くものを一括する土器群である（第49図～第54図)。さらにこの土器群は、貝殻の押し引き文と貝殻条痕との組み合わせによる文様の構成の特徴によって分類が可能である。

ａ．この土器の文様帯は、口唇部に刻み目そして胴部に押し引き文が施文され、さらにその間が横方向と斜め方向の条痕で埋められることによって構成されている（６・36)。

ｂ．この土器は、基本的には口唇部に刻み目と押し引き文そして胴部上半に押し引き文が施文され、その間と胴部下半とに条痕が埋められるという文様帯の構成をとっている(７～10･12～20･28)。また、口唇部と胴部の間に埋められた条痕には、直線や弧線による多様な組み合わせの種類がある。

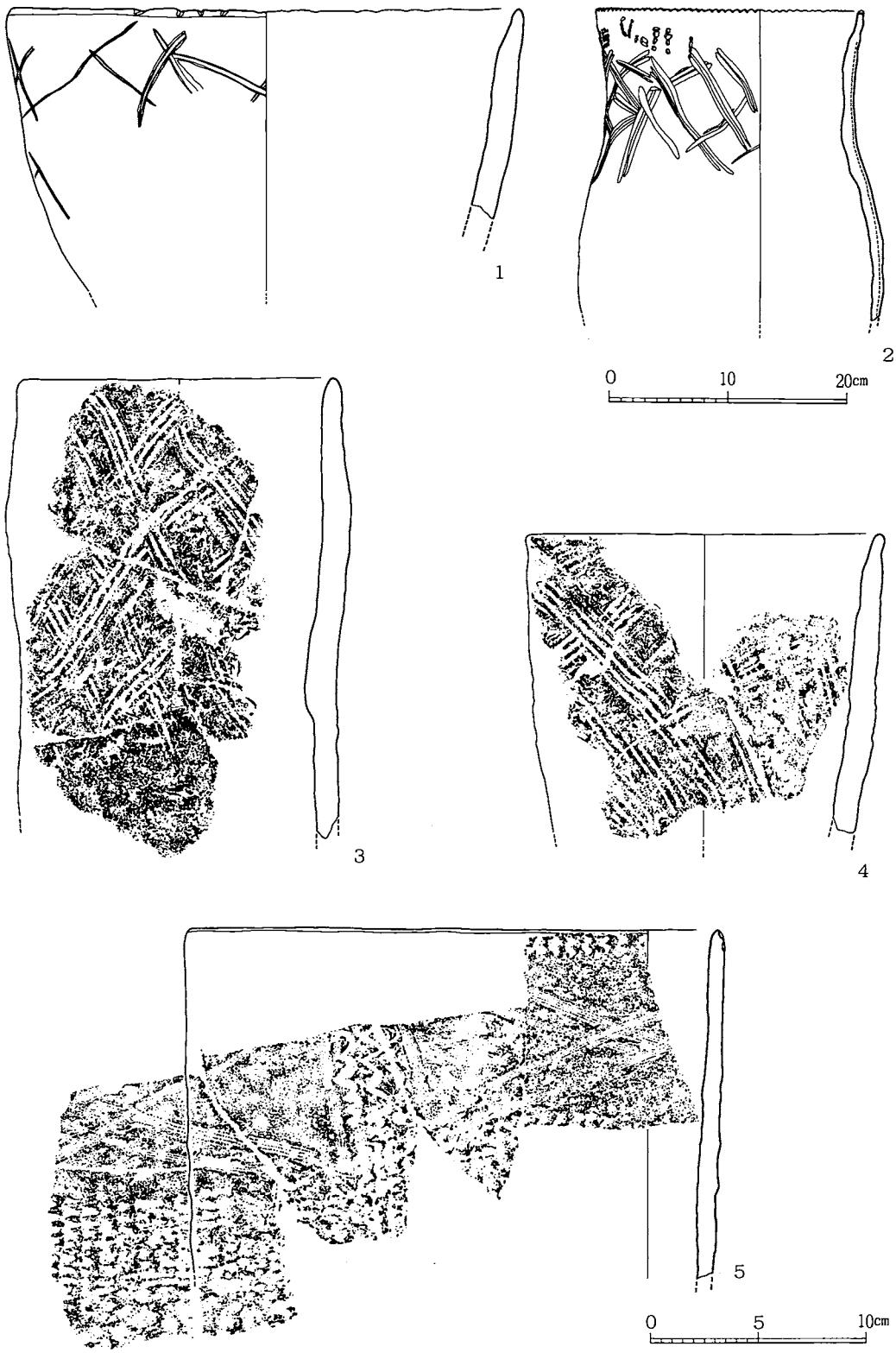
ｃ．この土器は、口縁部から胴部上半までが押し引き文によって満たされるという特徴を持ち、比較的単純な文様構成をとるものである（11･21～25)。この中で５の土器は、条痕による弧線と押し引き文とが同一文様帯中にみられる点で特徴的である。

ｄ．押し引き文の施文がみられない土器であるが、器形は、塞ノ神式土器の特徴を持っている（26・27)。

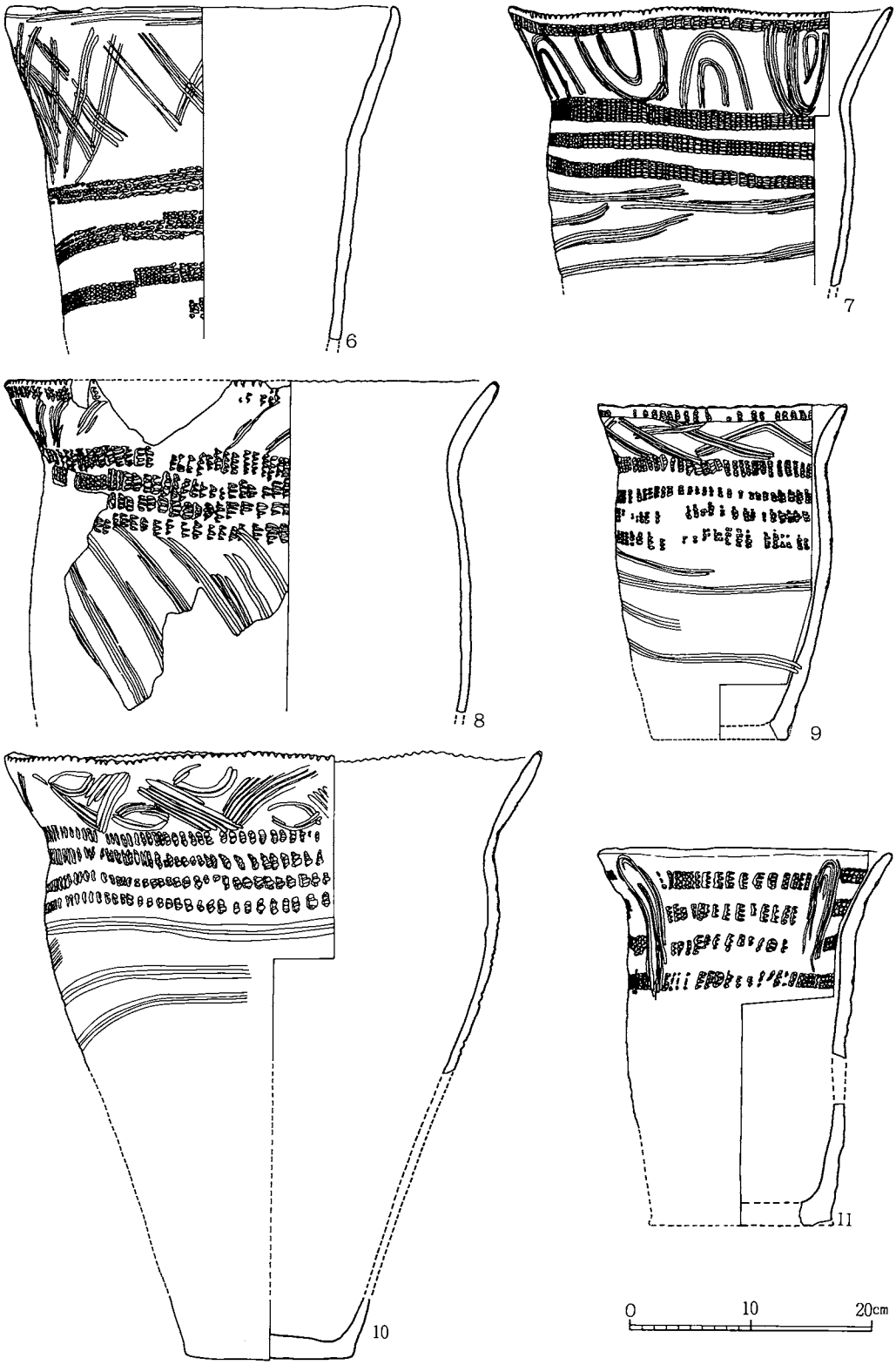
底部は、平底が中心であり、上げ底のものは１点のみであった(50)。製作は、ほとんどの場合土製の円板から作り上げるという手順を踏んでいる。器面の状態としては、36のように底部近くまで押し引き文がみられるものはほとんどなく、条痕のものが中心となっている。このことからほとんどの底部は、第２類ｂないしｃのものということがわかる。

撚糸文系の塞ノ神式土器（第58図～第60図）は、貝殻文系のものに比べて少なく、類別することはできない。従って、その部位別での特徴について触れるに留めておきたい。

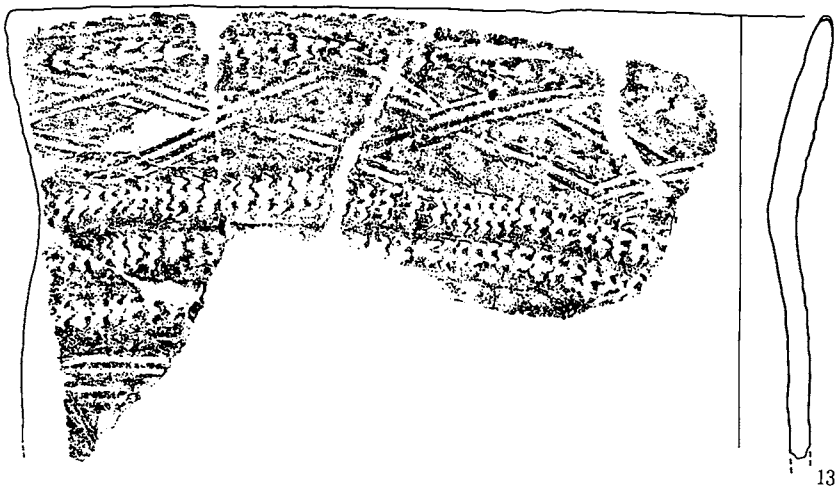
口縁部には、沈線区画の撚糸文がみられるもの（52・58～60)、沈線文・連点文の文様のもの（54・61～67）がある。また、胴部・底部では、沈線区画の撚糸文（52・68～79)、区画無しの幅の狭い撚糸文帯（80～91)、区画無しの幅の広い撚糸文帯（53)、沈線文（55～57）がある。



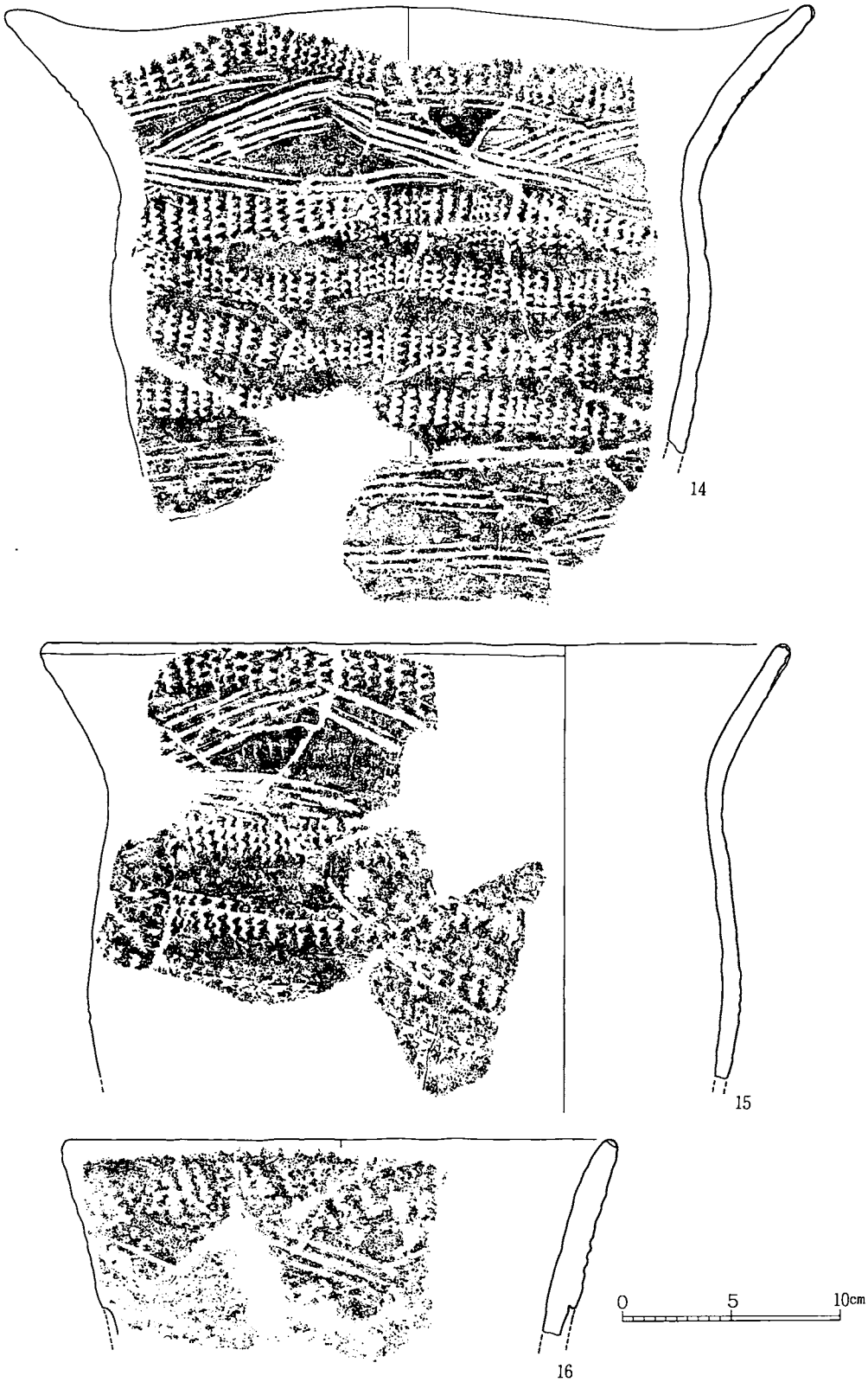
第48図　縄文式土器実測図



第49図　縄文式土器実測図

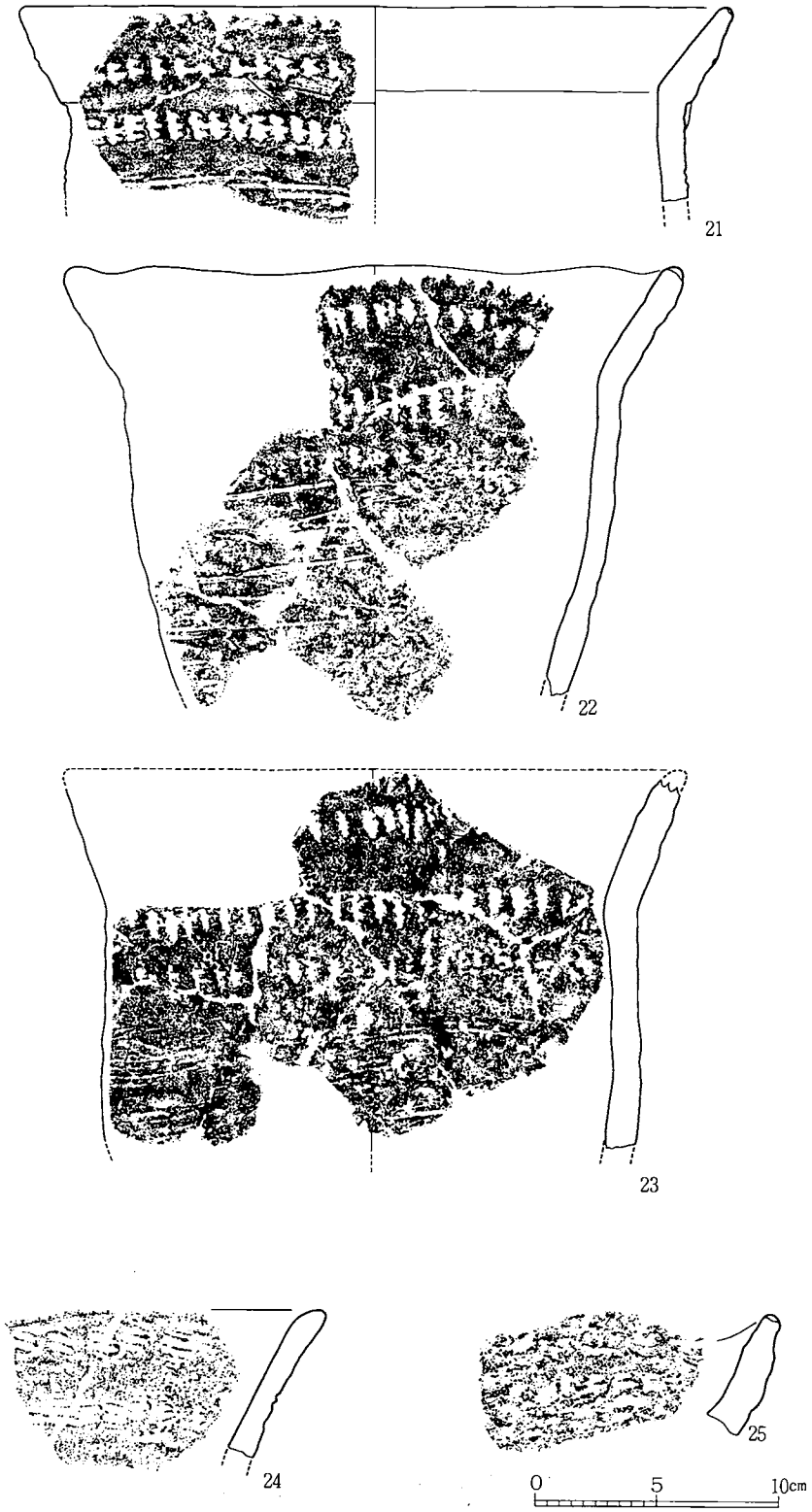


第50図　縄文式土器実測図

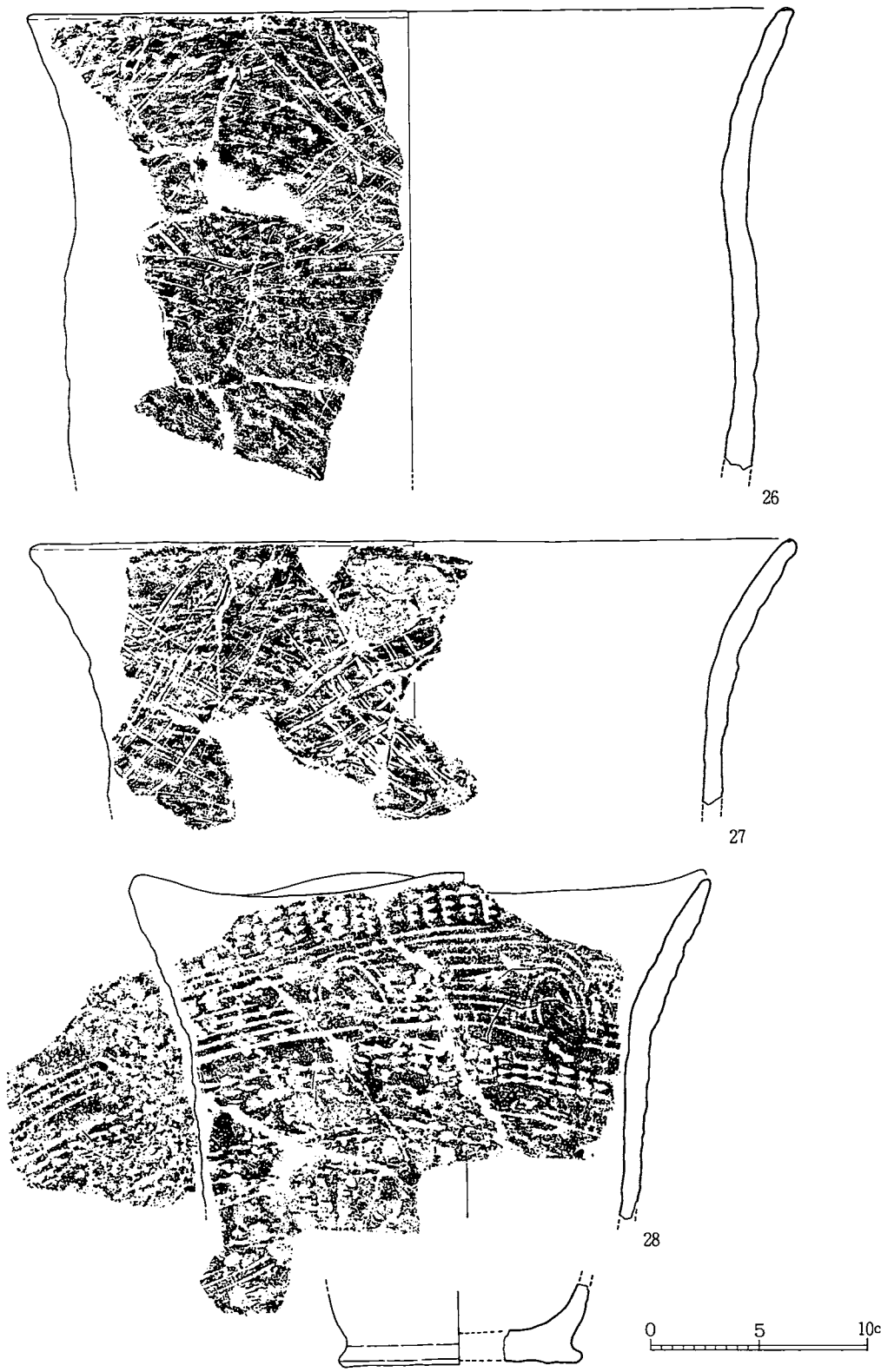


第51図　縄文式土器実測図

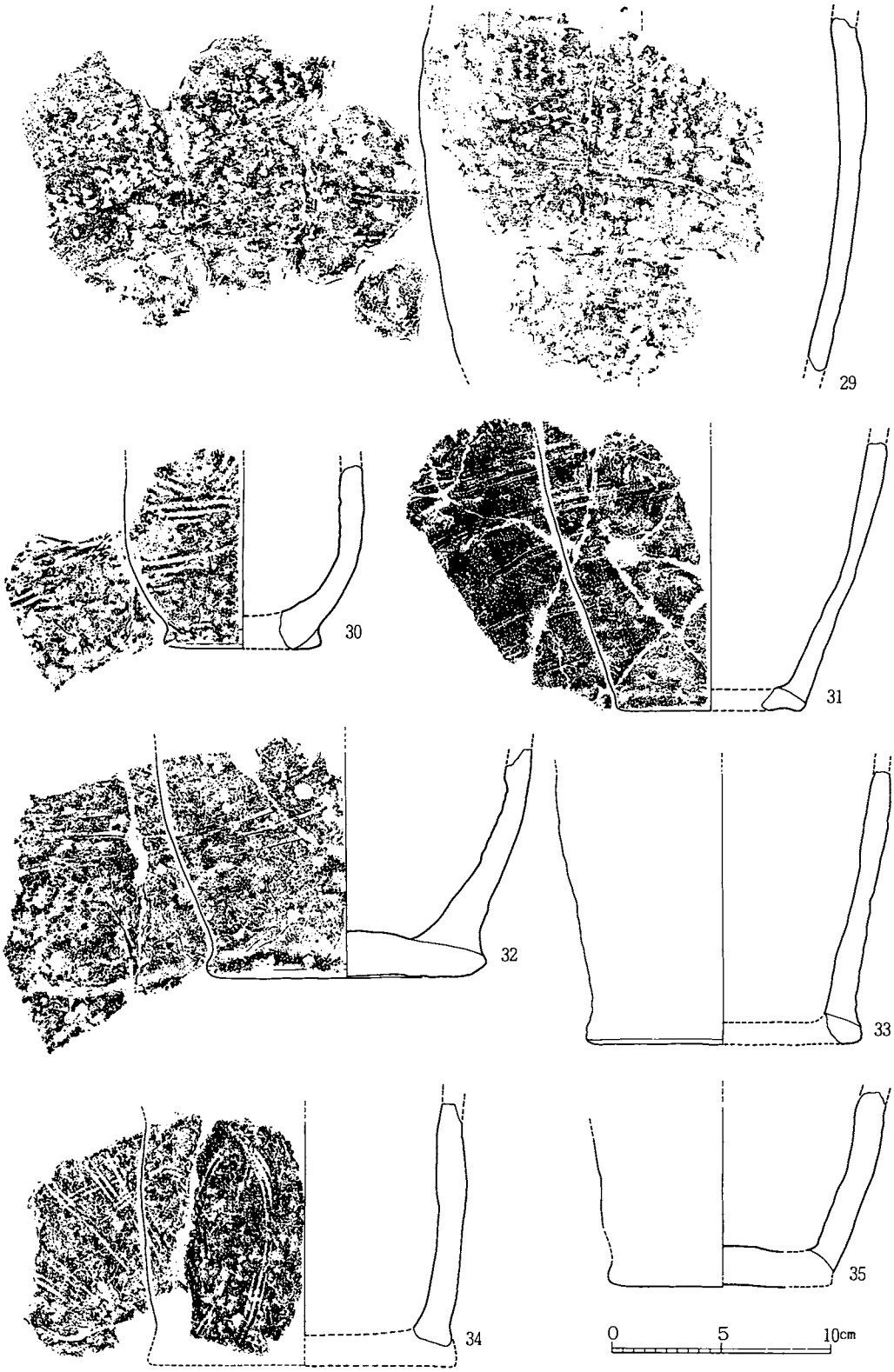
第52図　縄文式土器実測図



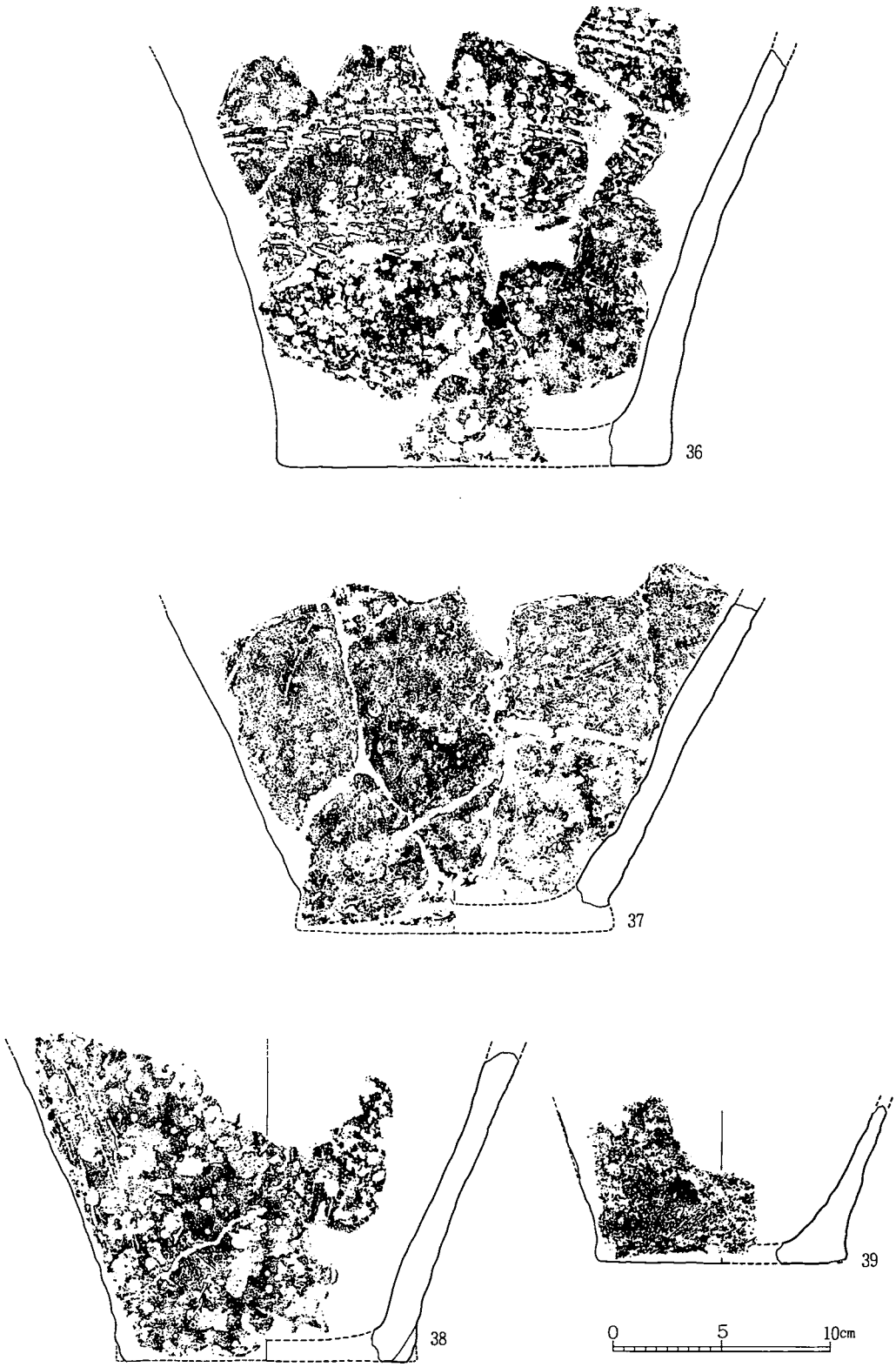
第53図　縄文式土器実測図



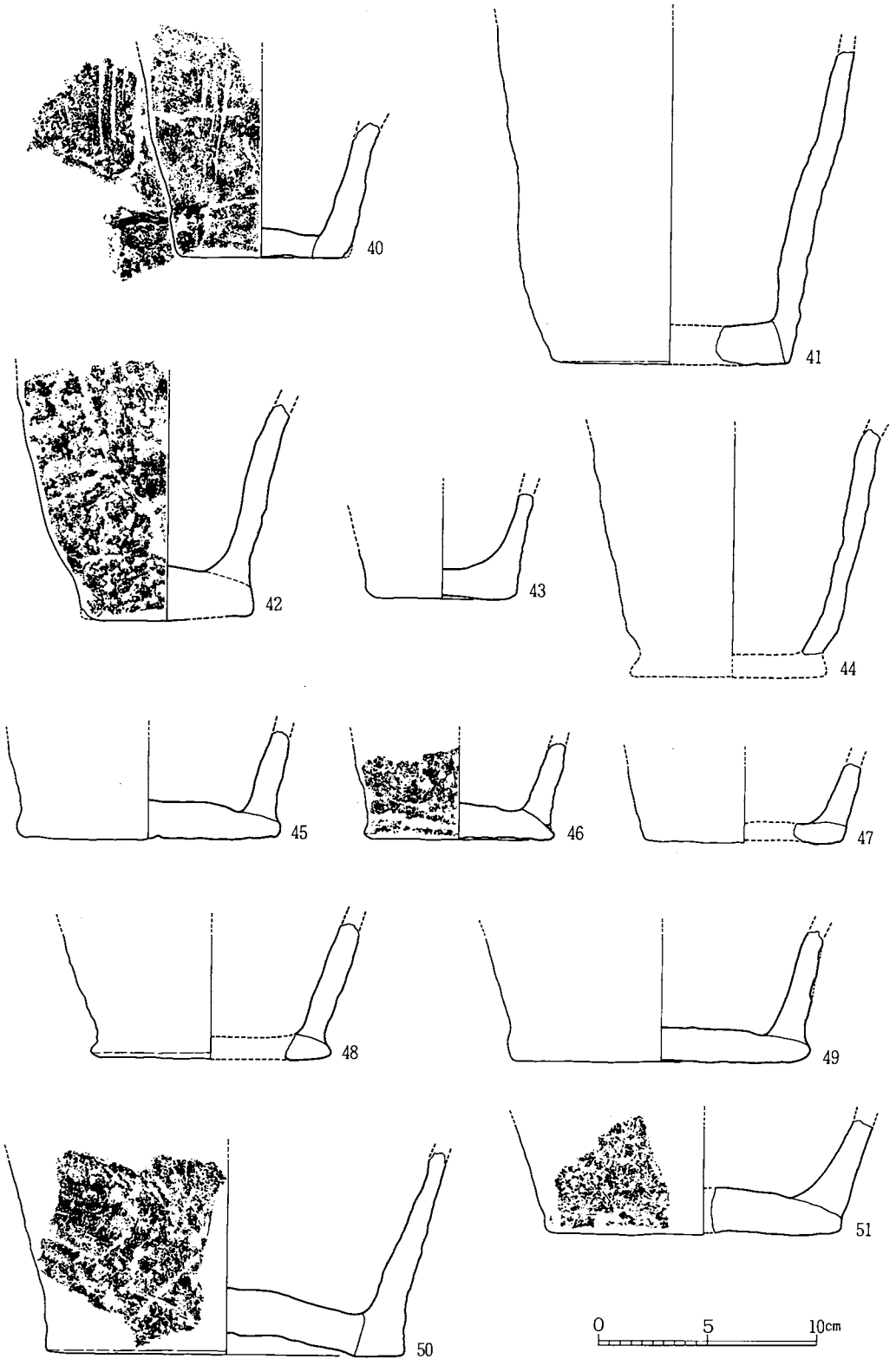
第54図　縄文式土器実測図



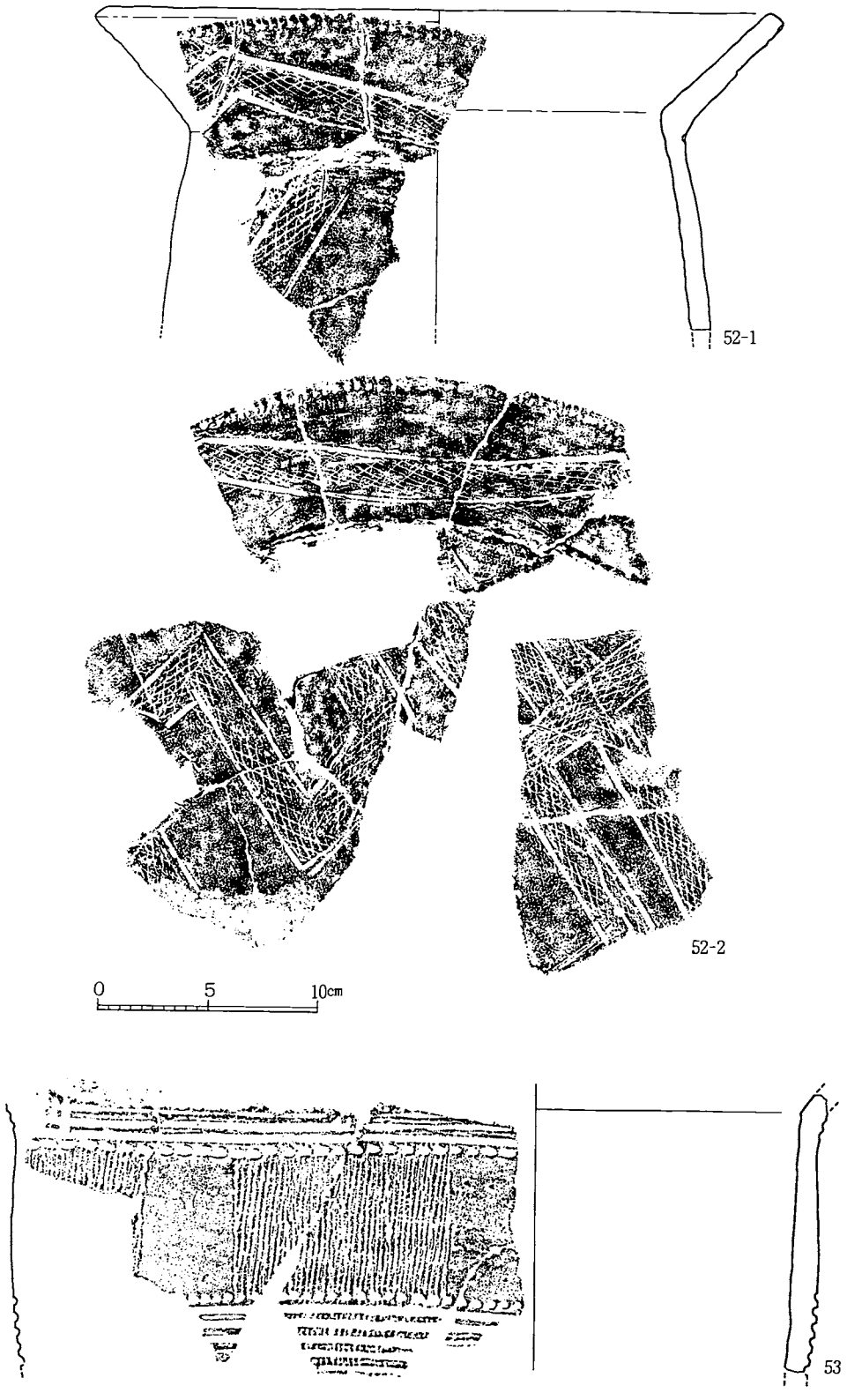
第55図　縄文式土器実測図



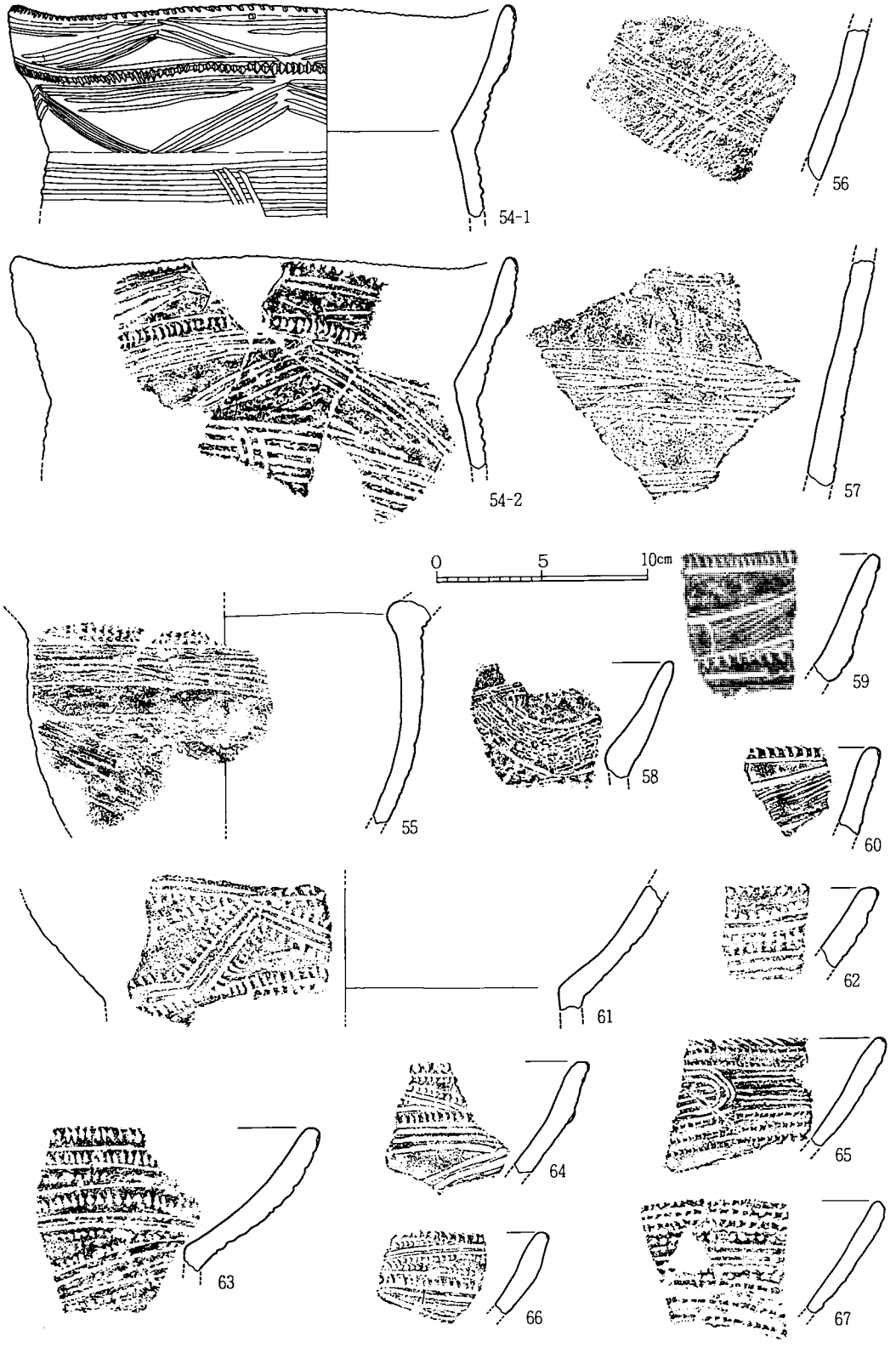
第56図　縄文式土器実測図



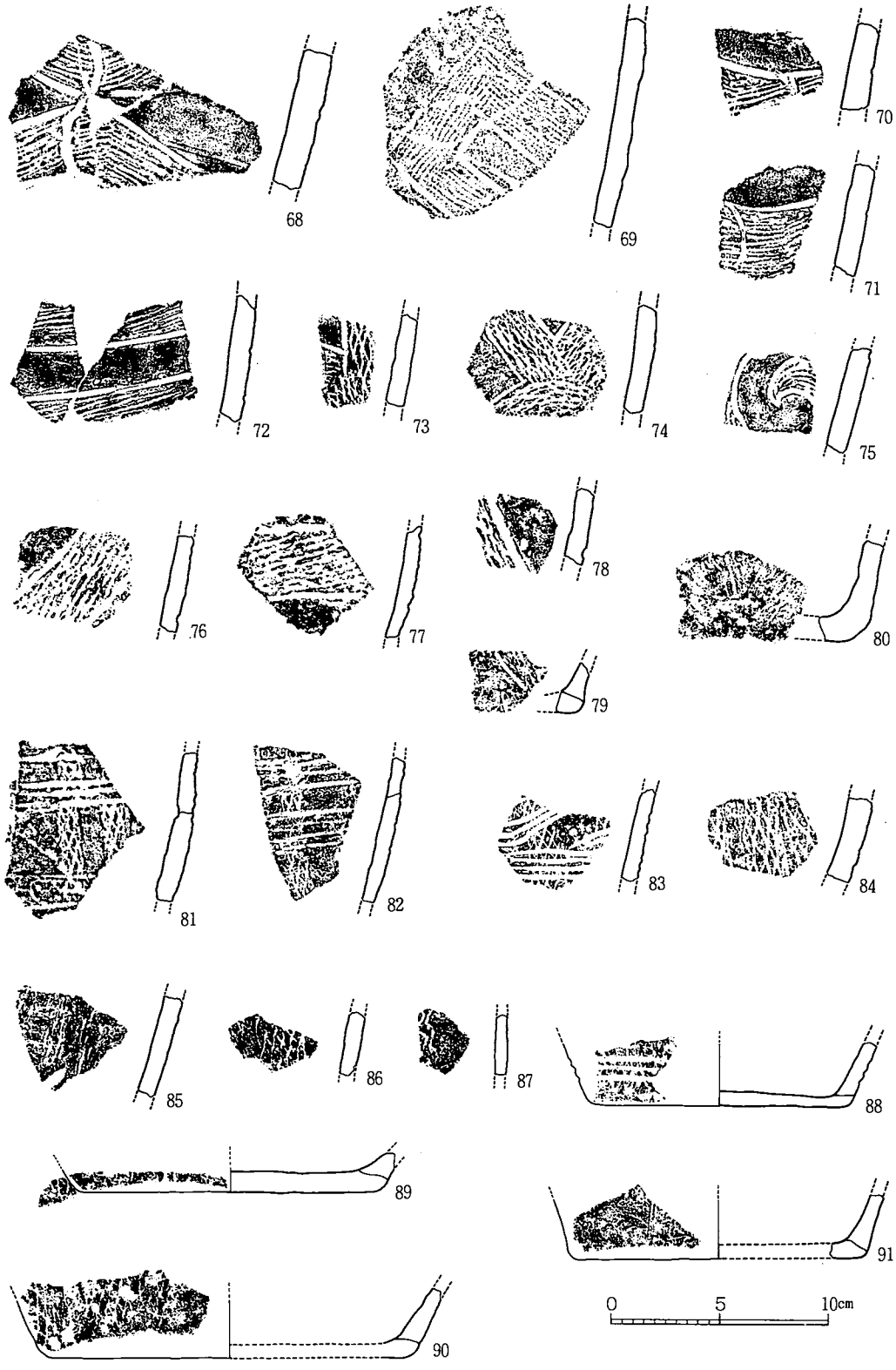
第57図　縄文式土器実測図



第58図　縄文式土器実測図



第59図　縄文式土器実測図



第60図　縄文式土器実測図

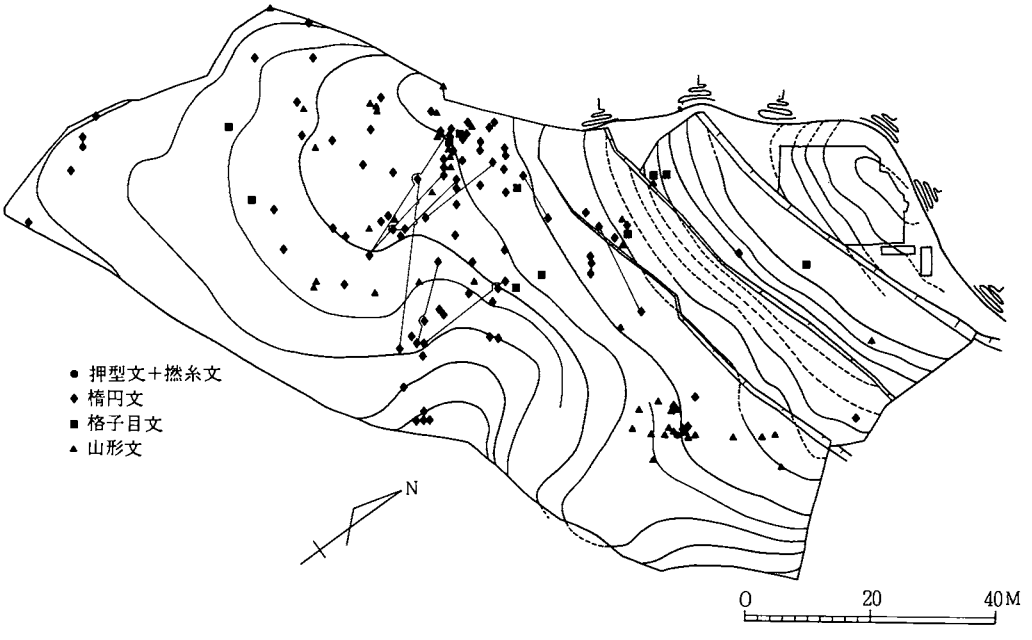
押型文土器（第62図～第64図）

塞ノ神式土器の次に出土量の多かったものが押型文土器である。この押型文土器には、楕円文・山形文・格子目文の他に押型文と撚糸文とを併用するものがみられた。そこで、まず最初に丘陵内での分布の状態をみていきたい。

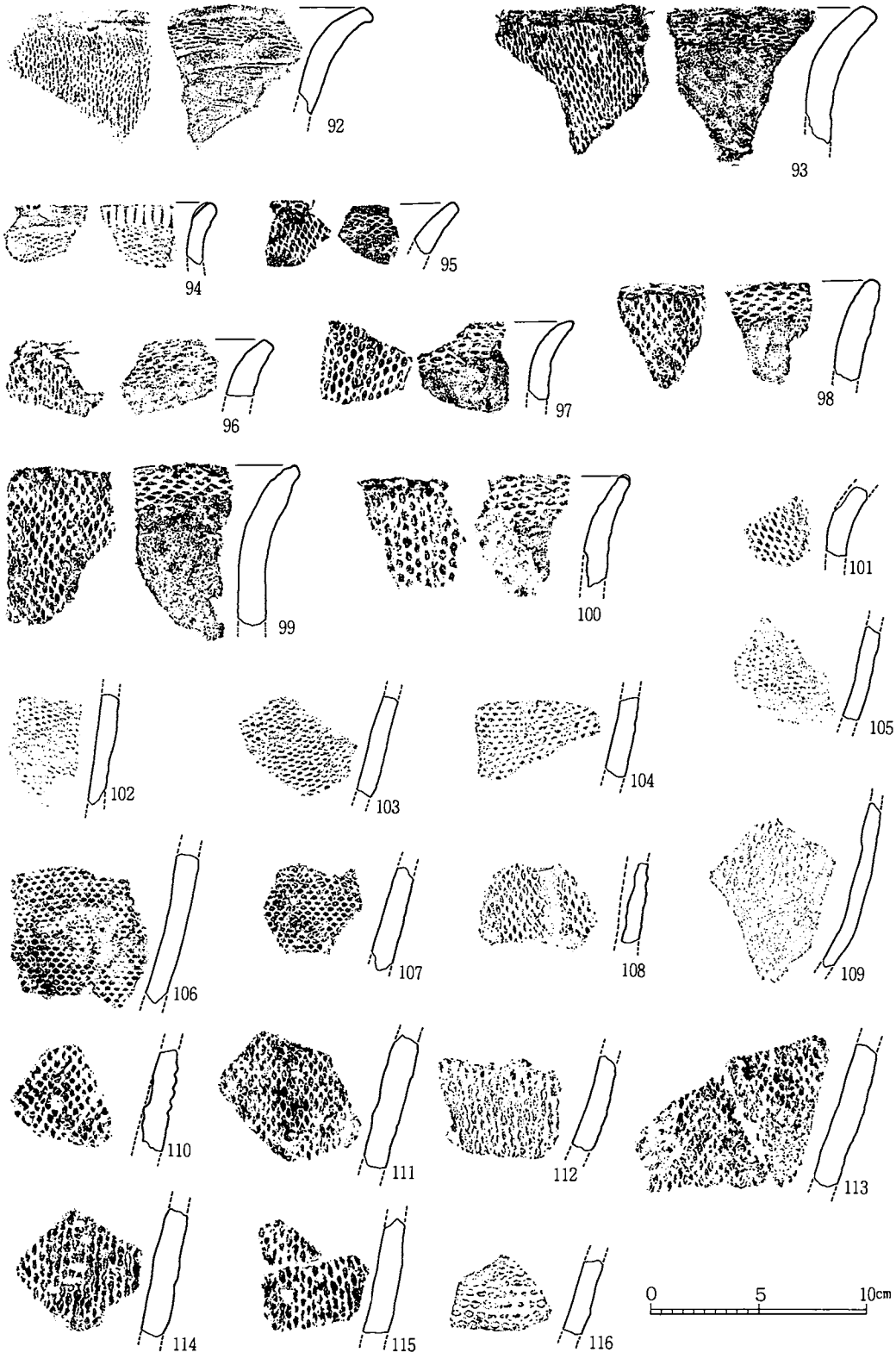
押型文土器の全体的な分布は、大きく三つの群にまとめることができる。つまり、西側平坦部の先端近くにある少量の楕円文のみによって構成された群、丘陵中央部にある楕円文・山形文・格子目文によって構成された群、そして東側平坦部の山形文が中心に分布する群の三つである。さらに文様別にその偏在を検討し直してみると、丘陵西側を中心に分布する楕円文に対して、東側に分布の中心がある山形文とこの二つの土器は、対照的な分布傾向を持ち、格子目文は、それぞれの間に介在する状態を知ることができる(第61図)。このように丘陵における押型文土器の分布は、全体的傾向と文様ごとの傾向において興味ある構造をなしているといえる。

接合関係は、ほぼ南北方向がほとんどで東西方向のものは１例のみである。

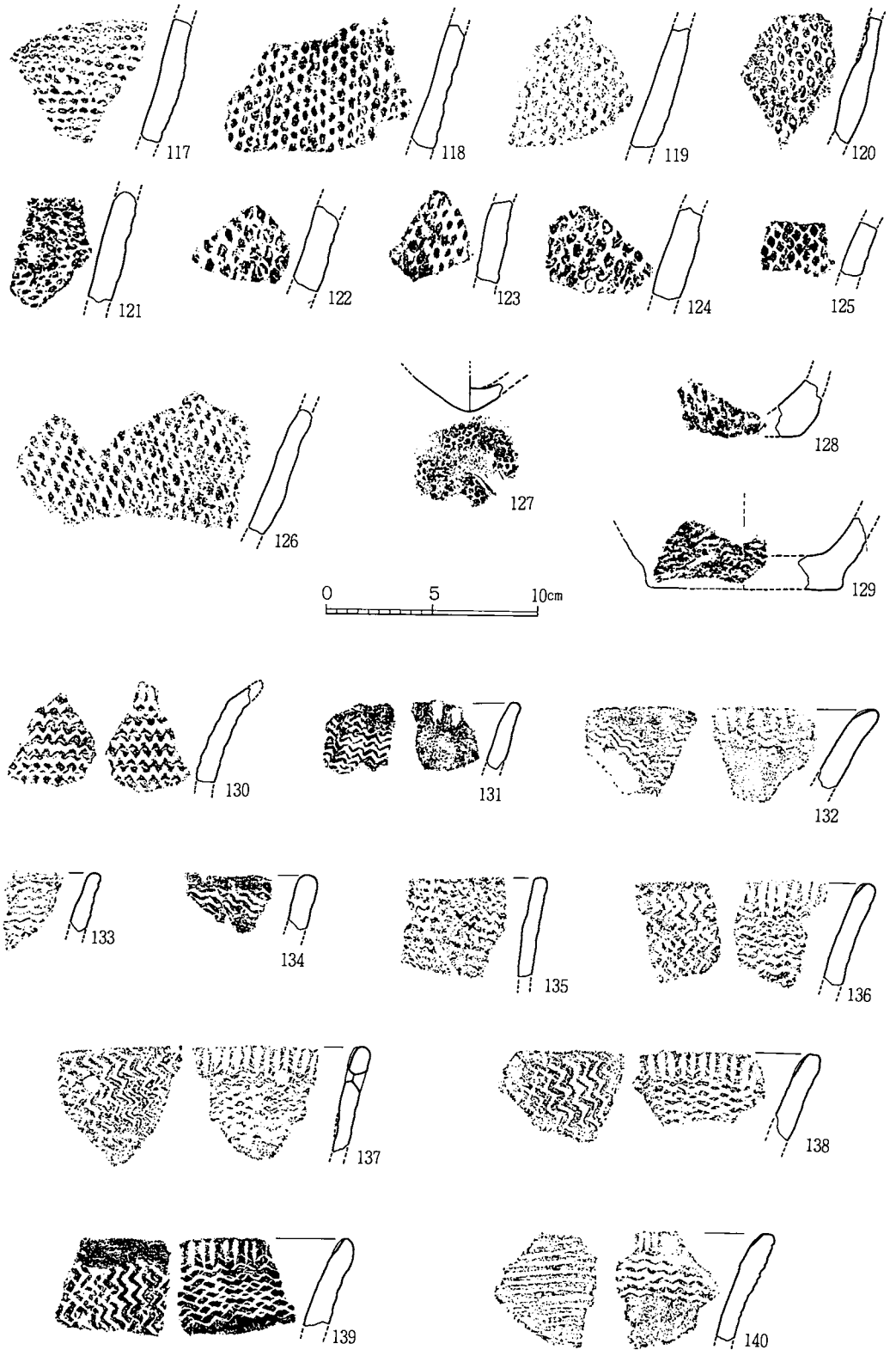
楕円押型文土器として口縁部92～100、胴部101～126、底部127～129を図示している。口縁部には強く外反するもの（92～97・99・100）とほとんど外反しないもの（98）との二つの形状があり、その内面には楕円文が横位施文されているだけのもの（92・93・95～100）と原体条痕が併用されているもの（94）の二つの種類がある。また、94の土器には、外面の口唇部から１cmの幅で無文帯がみられる。底部には、尖底（127）と平底（128・129)がある。



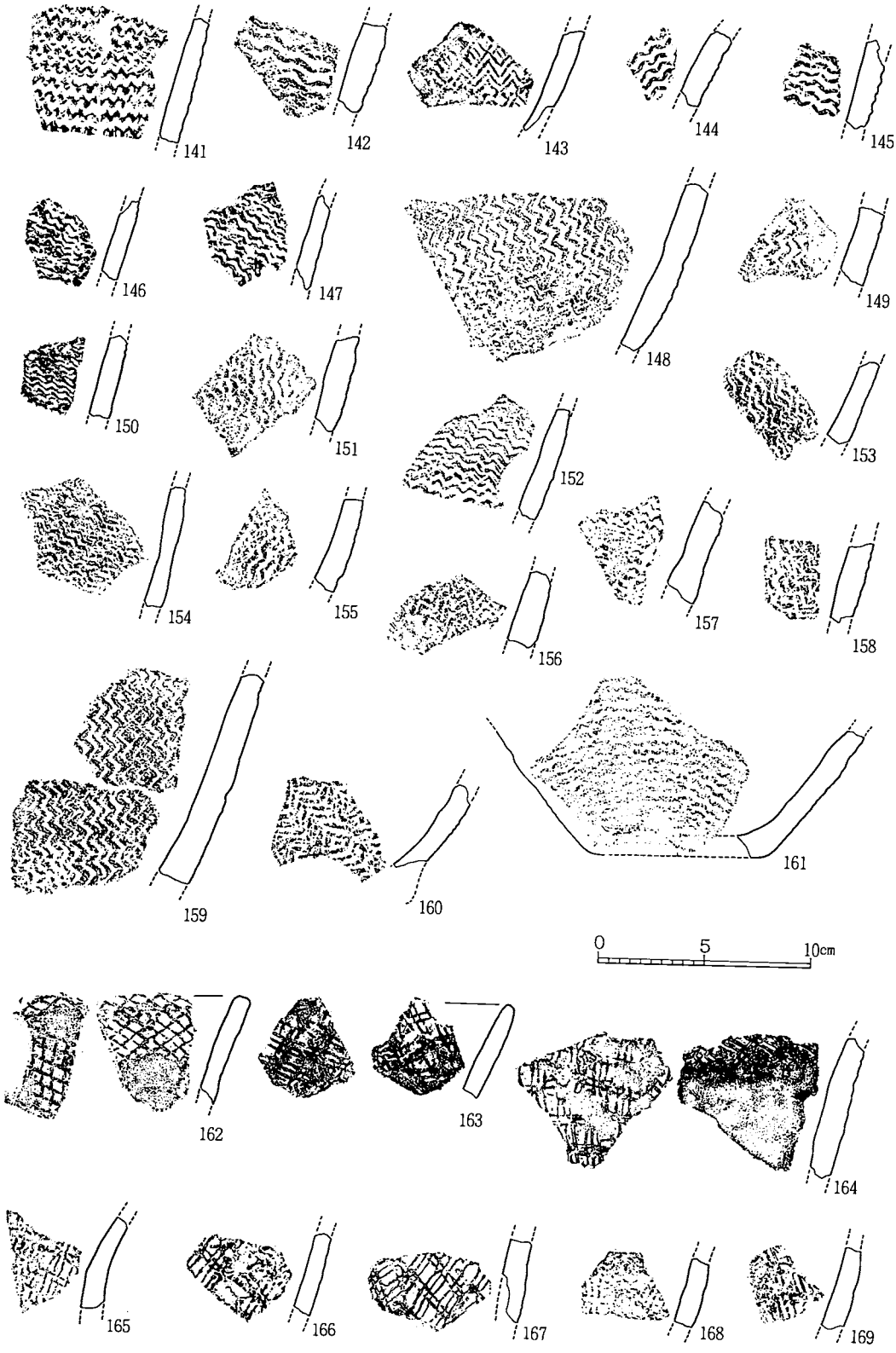
第61図　遺物分布図（押型文土器）



第62図　縄文式土器実測図



第63図　縄文式土器実測図



第64図　縄文式土器実測図

山形押型文土器として口縁部130～139、胴部141～159、平底の底部160・161を図示している。口縁部は、130のように外反したものと直口したものがあり、その内面の特徴には、文様が無いもの（133～135）、原体条痕のみのもの（131）、原体条痕と山形文とが併用されるもの（130・132・136～139）がある。

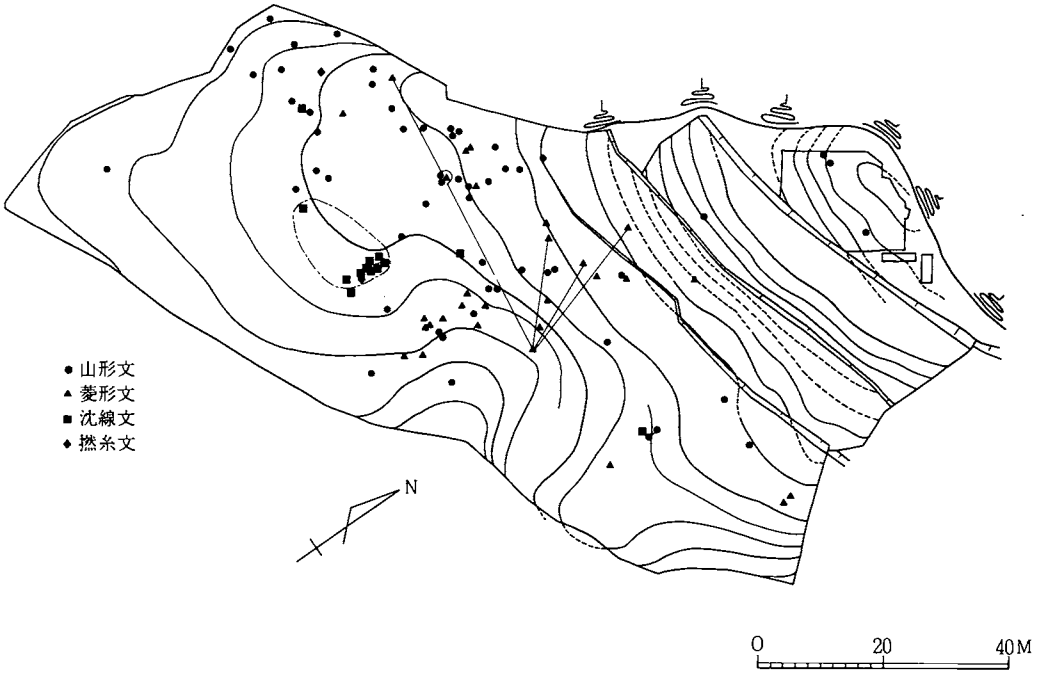
格子目押型文土器として口縁部162～164、胴部165～169を図示している。口縁部は、直口し、その内面には格子目文のみの施文がみられる。

140は、外面に撚糸文そして内面に山形文が施文された口縁部の土器片である。

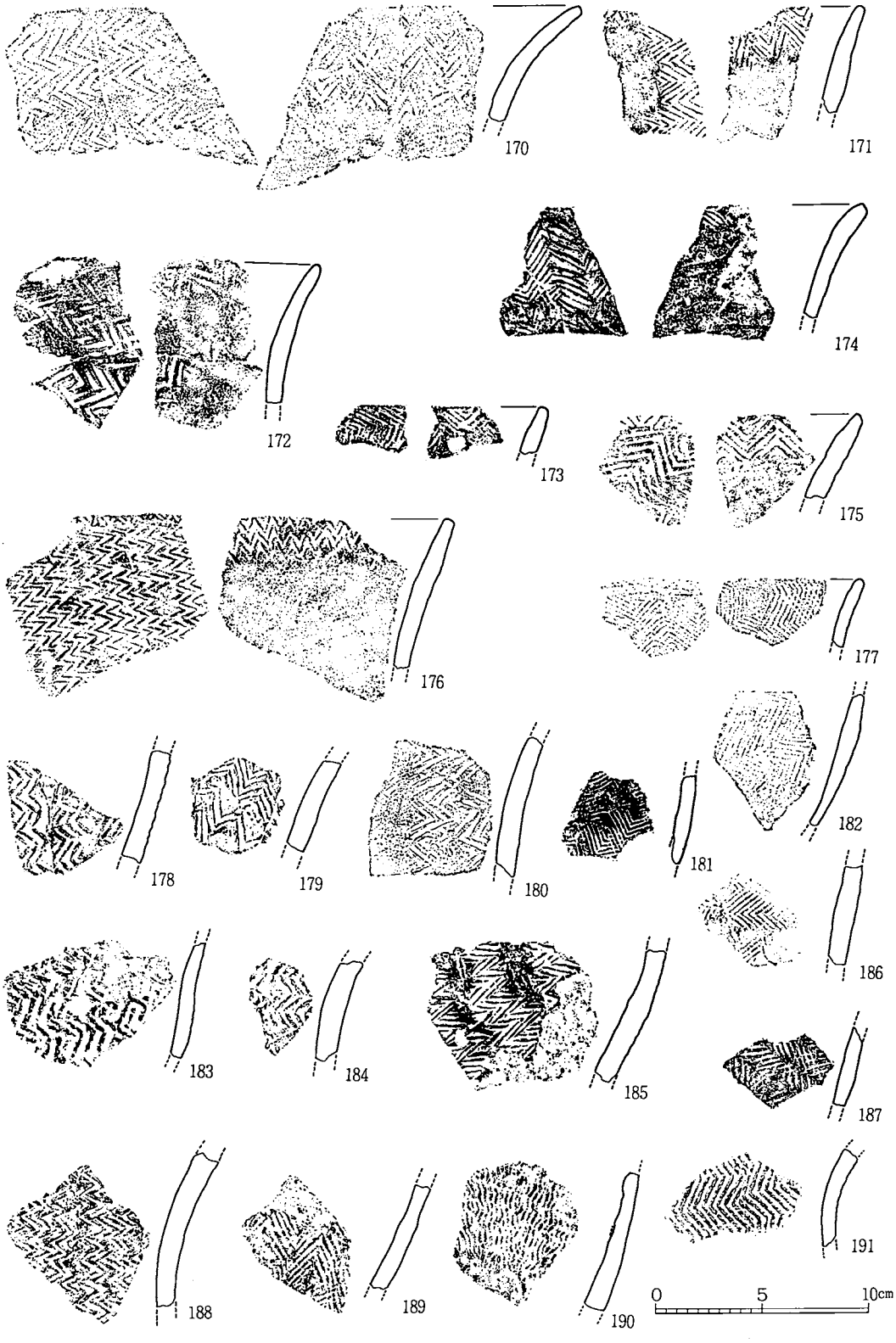
以上のように押型文土器は、文様によって四つの種類に分類できた。しかし、これらの編年的関係については調査事実として具体的に把握することはできなかった。ただ、底部の形態によって尖底を平底より古く、さらに楕円文の粒の大きさと底部の形状にもある程度の対応関係があり、小さい粒のものを古く置くこともできる。また、山形文にも刻みの鋭いもの（130・141）があり、他の土器とは一段階古いと考えられる。このように押型文土器は、底部の形態を中心にして二つの時期に分離が可能である。

手向山式土器（第66図～第68図）

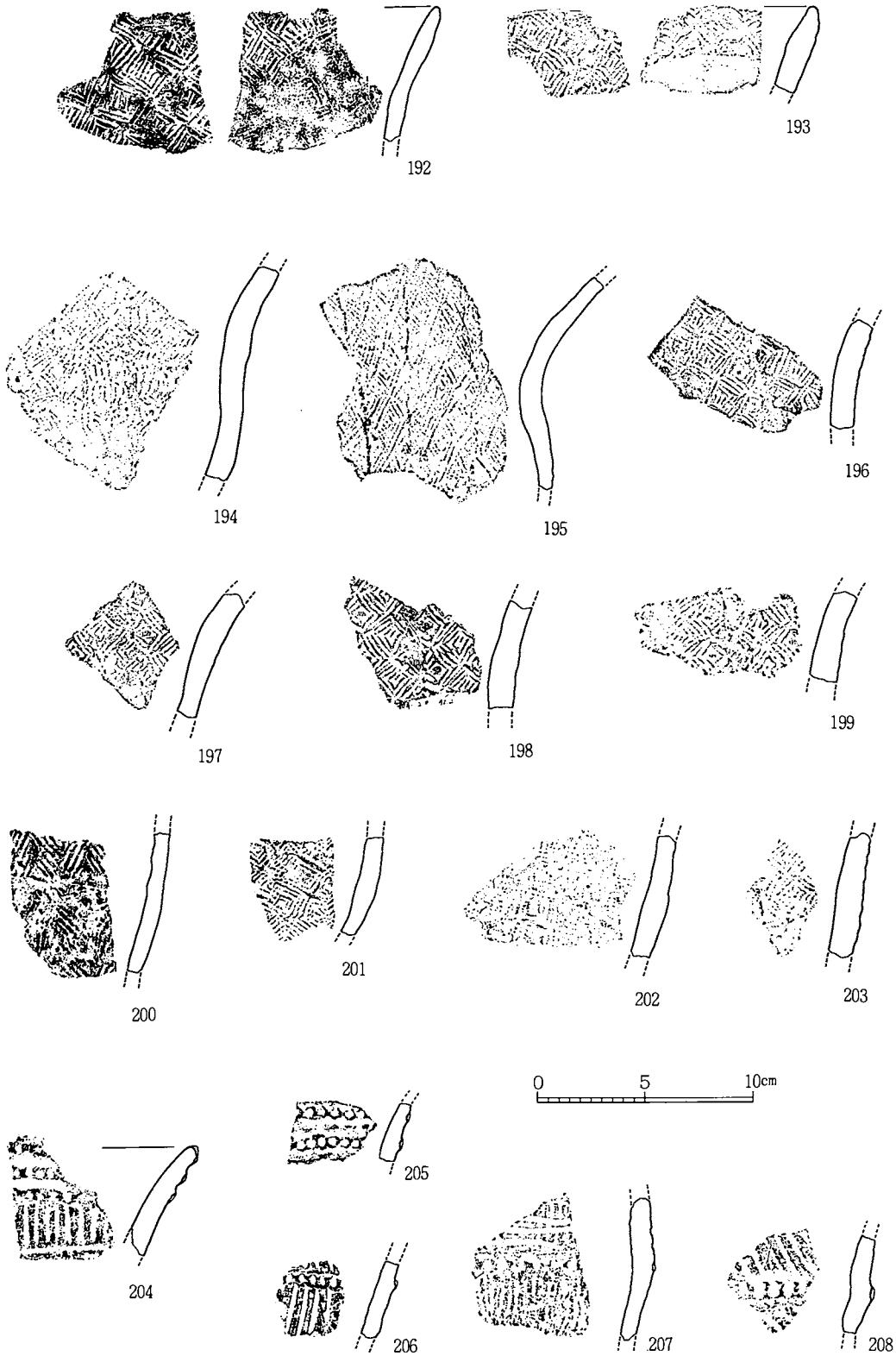
手向山式土器として押型文系（山形文・菱形文）、撚糸文系、沈線文系の四つの種類が出土した。これらは、平坦部東側にわずかにみられるのみで、ほとんどが西側に集中している。その



第65図　遺物分布図（手向山式土器）



第66図　縄文式土器実測図



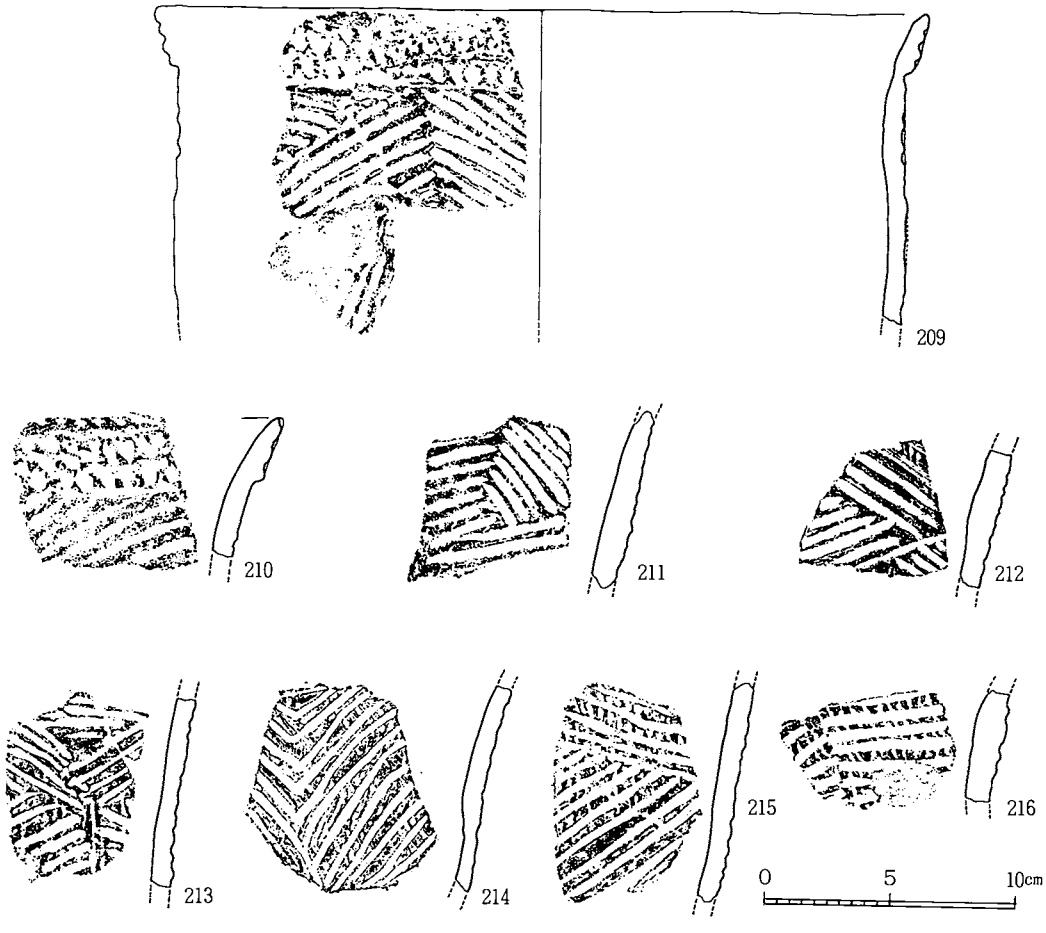
第67図　縄文式土器実測図

西側の分布域は、丘陵の中央部にあり、東西60m と南北40m の楕円形を呈し、その中に長軸20m と短軸12m の楕円形の空白部を持っている。また文様ごとの分布でもこのような全体的状況と類似したあり方を示している（第65図）。

土器の接合例は、菱形文１例と沈線文１例の２例がある。その散布の状況は、最大距離48m という広範囲にわたっている。

170～191は、山形押型文系の土器である。口縁部（171～178）は、外反し、その内面に同一原体での山形文の施文がみとめられる。192～203は、菱形押型文系の土器である。口縁部(192・193)は、山形文の土器と同様に外反して、その内面には同一原体での菱形文が施文されている。この土器の器形は、胴部付近の大型の破片（194・195）と口縁部とによって推定が可能である。それによると、胴張りで頸部が締り、口縁部が外反するという器形をとっていることがわかる。

204～208は、撚糸文系の土器である。土器の特徴は、口縁部と胴部にある沈線や張り付けに



第68図　縄文式土器実測図

よって作られた刻み目突帯部にある。

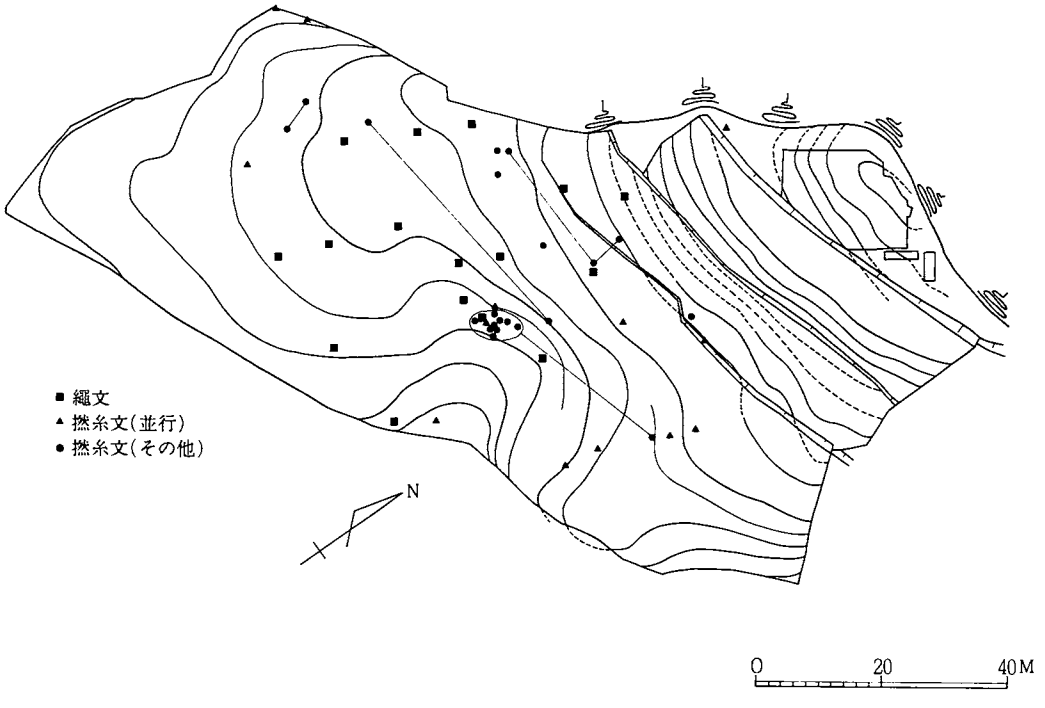
209～216は、沈線文系の手向山式土器にあたり、その中で、209は、口縁部から頸部についてはある程度状態がわかる土器である。文様は、すべて棒状の施文具によっており、口縁部の3段の刺突文と頸部の沈線文によって構成されている。しかし、この土器の胴部以下については資料が無いため知ることができなかった。

撚糸文・縄文土器（第70図・第71図）

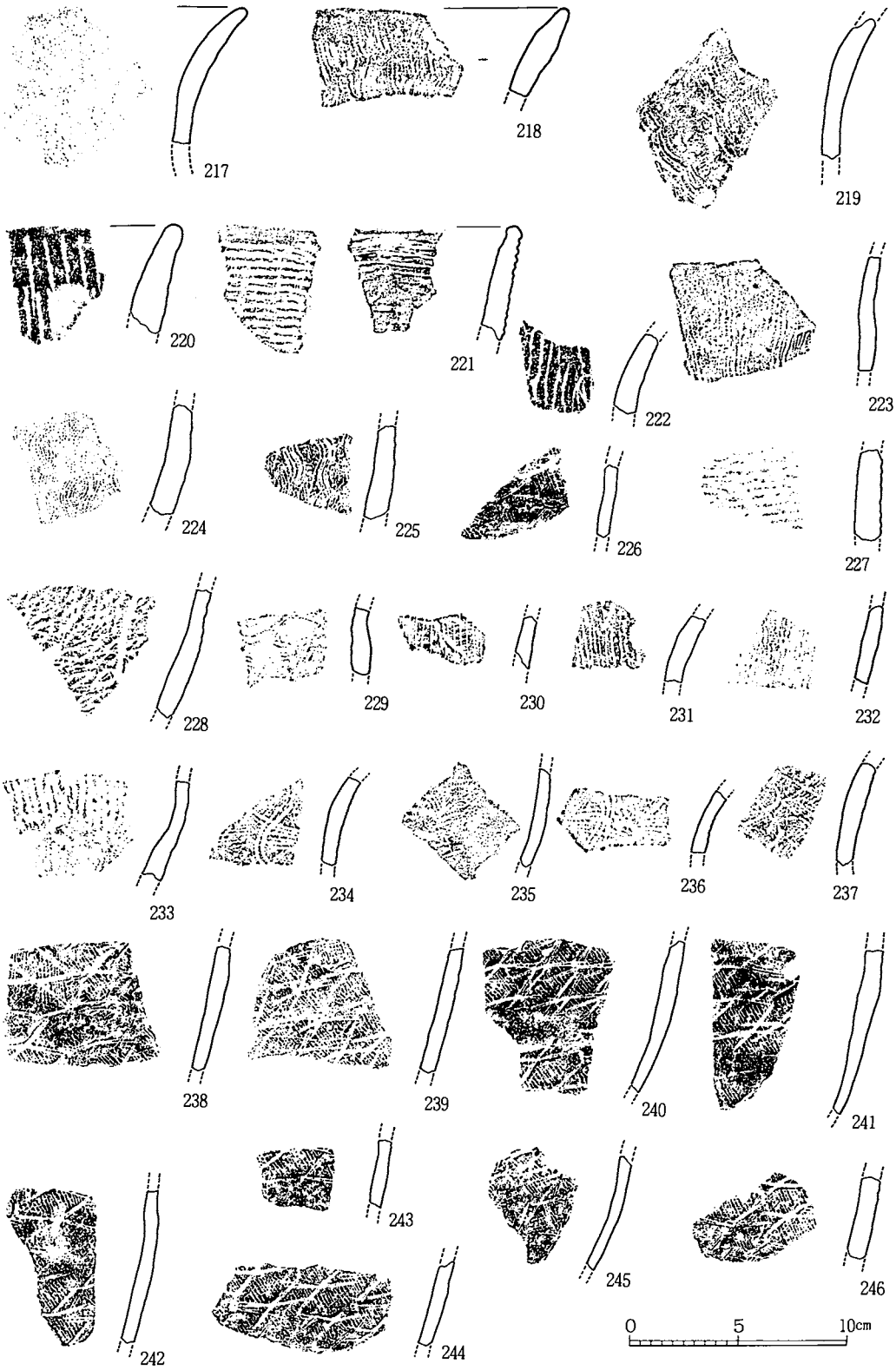
撚糸文土器の分布は、丘陵の平坦部中央部分を中心として長軸88m・短軸40mの楕円形の範囲に散在した状態でみられ、極端な偏在傾向はとっていない。一方、縄文土器も同様に散在的分布をとるが、その分布域は、直径28mの円形の範囲にあり、撚糸文土器の分布域に比べ狭く、比較的小さくまとまっているようである（第69図）。

次に、土器の接合関係についてみてみよう。撚糸文土器の四つの接合例がある。これらの接合関係は、最大距離は48mで、1例を除きすべて東西方向の接合であり、南北方向の接合関係が中心となる押型文土器とは対照的である。

217～246•249は、単軸絡条体による撚糸文土器である。これらは、文様の特徴によって次の7種類に分類できる。すなわち、縦位の並列撚糸文（220・222・223・230～233・249）、横位の



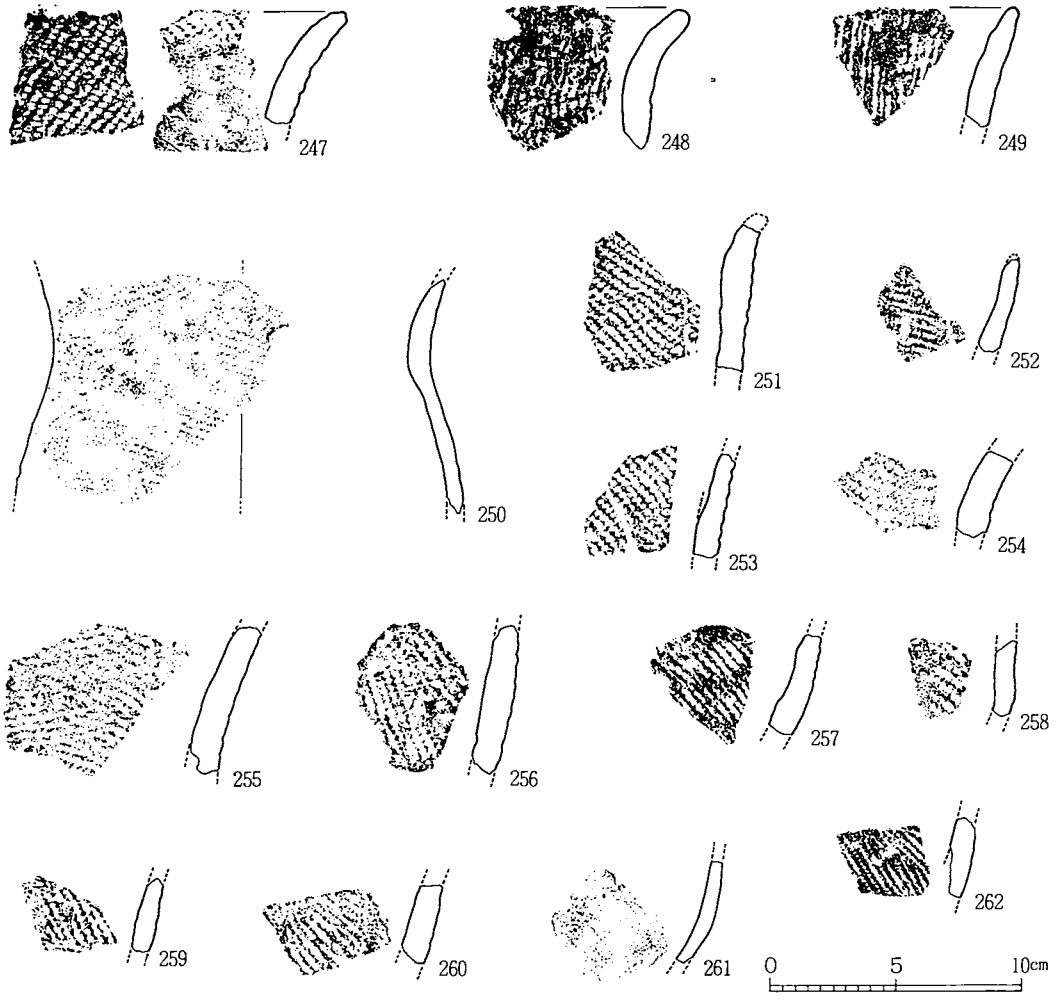
第69図　遺物分布図（撚糸文・縄文土器）



第70図　縄文式土器実測図

238～244)である。このように撚糸文土器は、土器量に比してかなり豊富な種類を持っている。もの(221・227)、連弧状の撚糸文(217～219)、波状の撚糸文(224・225)、網目状の撚糸文(228・229)、木目状ないしそれと組み合わせた撚糸文(234～237)、網目と並列を組み合せた撚糸文(226・

247・248・250～261は、縄文土器である。これらの土器の文様は、すべて単節の縄文であるが、原体の違いにより二つの種類に分けることができる。すなわち，２段のＲＬの原体を使用しているもの（250～262）と２段のＬＲの原体を使用しているもの（247・248）の二つである。このことから本遺跡の縄文では、圧倒的にＲＬの原体を使用しているものが多いことがわかる。器形については、250の資料から胴張りで締まった頸部を持ち、口縁部が大きく外反した形状を推定できる。しかし、これがすべての土器の器形を示しているものではないようで、全体像は不明である。



第71図　縄文式土器実測図

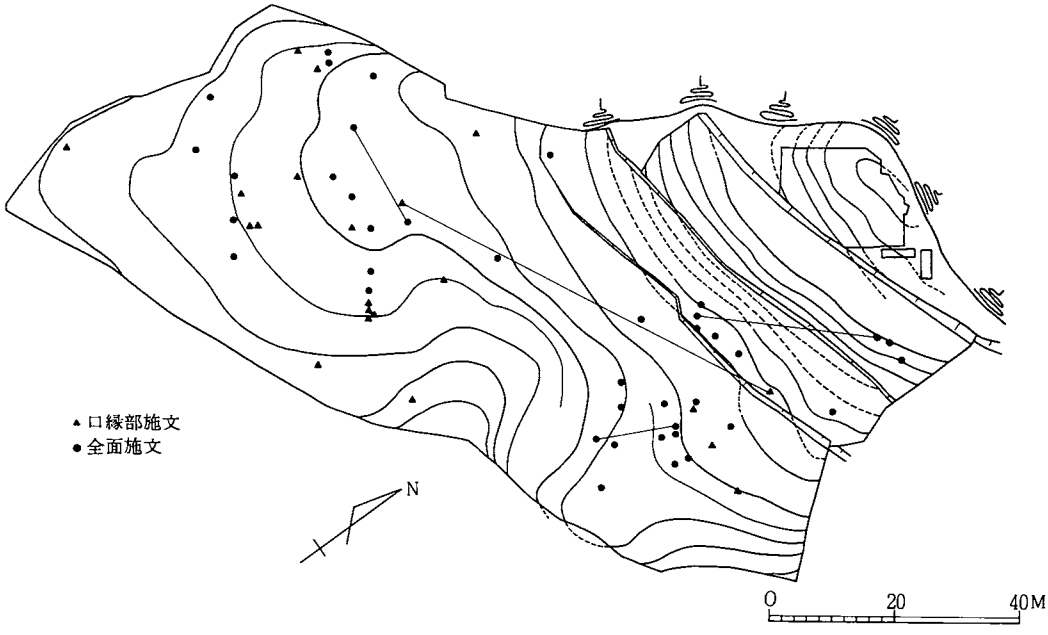
条痕文土器（第73図・第74図）

条痕文土器は、丘陵の東側平坦部と西側平坦部の二つの群に分かれて出土した。それぞれの分布の状態には、東側では長軸50m と短軸30m の楕円形を、西側では長軸70m と短軸50m の楕円形を呈する範囲の中でみられ、より集合的な前者とより散在的な後者という違いがある。

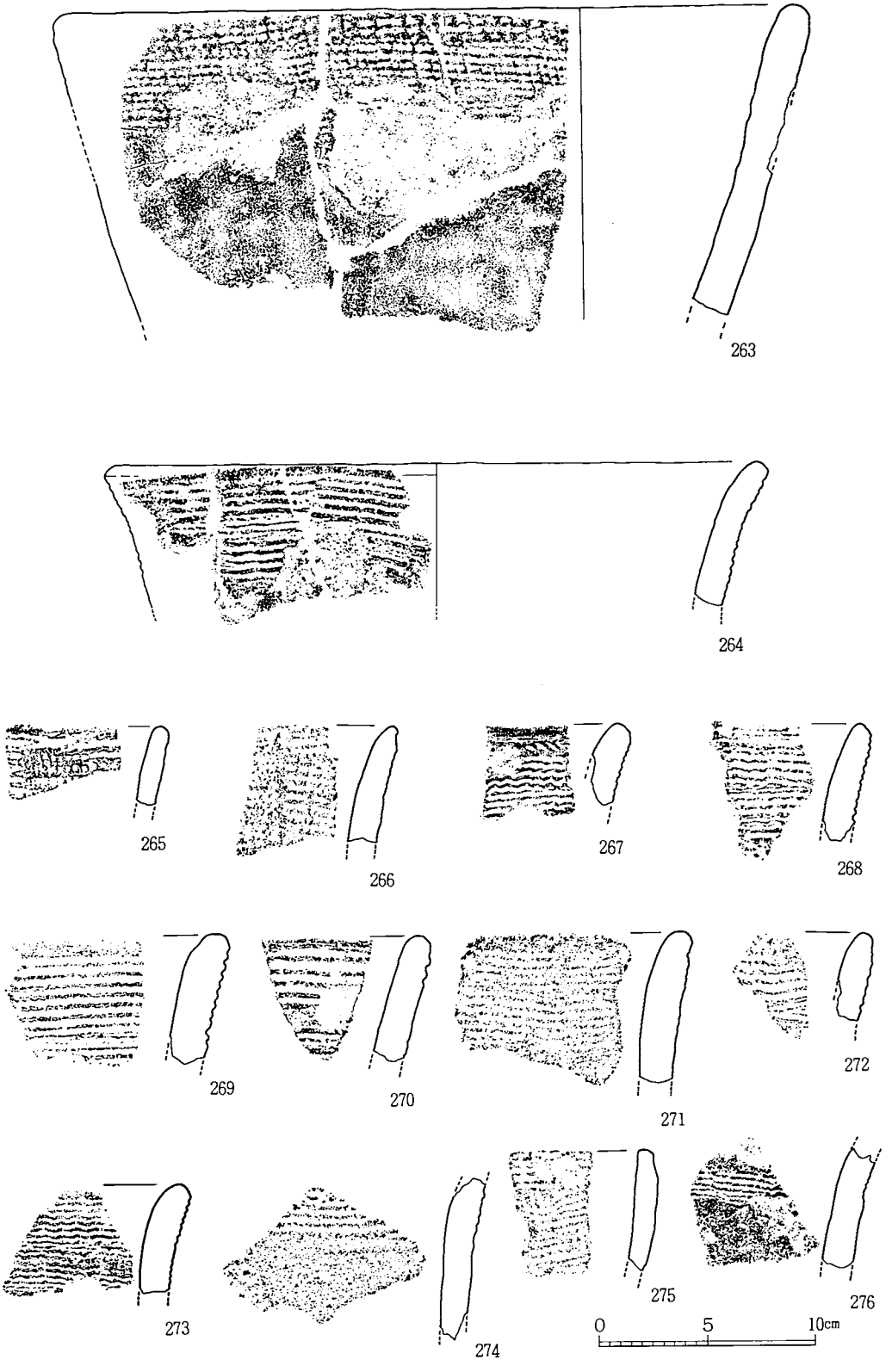
そこで次に土器の種類毎の分布についてみてみよう。出土した条痕文土器には、大きく分けて二つがある。一つに条痕文が口縁部の限られた範囲内に施されている土器（263～274・276）であり、一つに条痕文が器面全面に施されている土器（275・277～295）である。この二つの土器は、分布においてもやや異なった状態を示している。それは、口縁部施文の土器のほとんどが西側の群で出土しているのに対して、全面条痕の土器は東西ほぼ均等に出土しているということである（第72図）。この点で両者は、明確に区別されるかもしれない。

口縁部施文の土器は、296のような底部を持ち、口縁部が直口ないしやや外反した円筒形をとる比較的大型のものである(263・264)。これらは、さらにその文様によって二つに分類される。それは、貝殻による押し引きが施文されているもの（263・265・266）と横位条痕文の土器（264・267～274・276）である。しかし、二つの土器を器形・整形などによって区別することはできない。

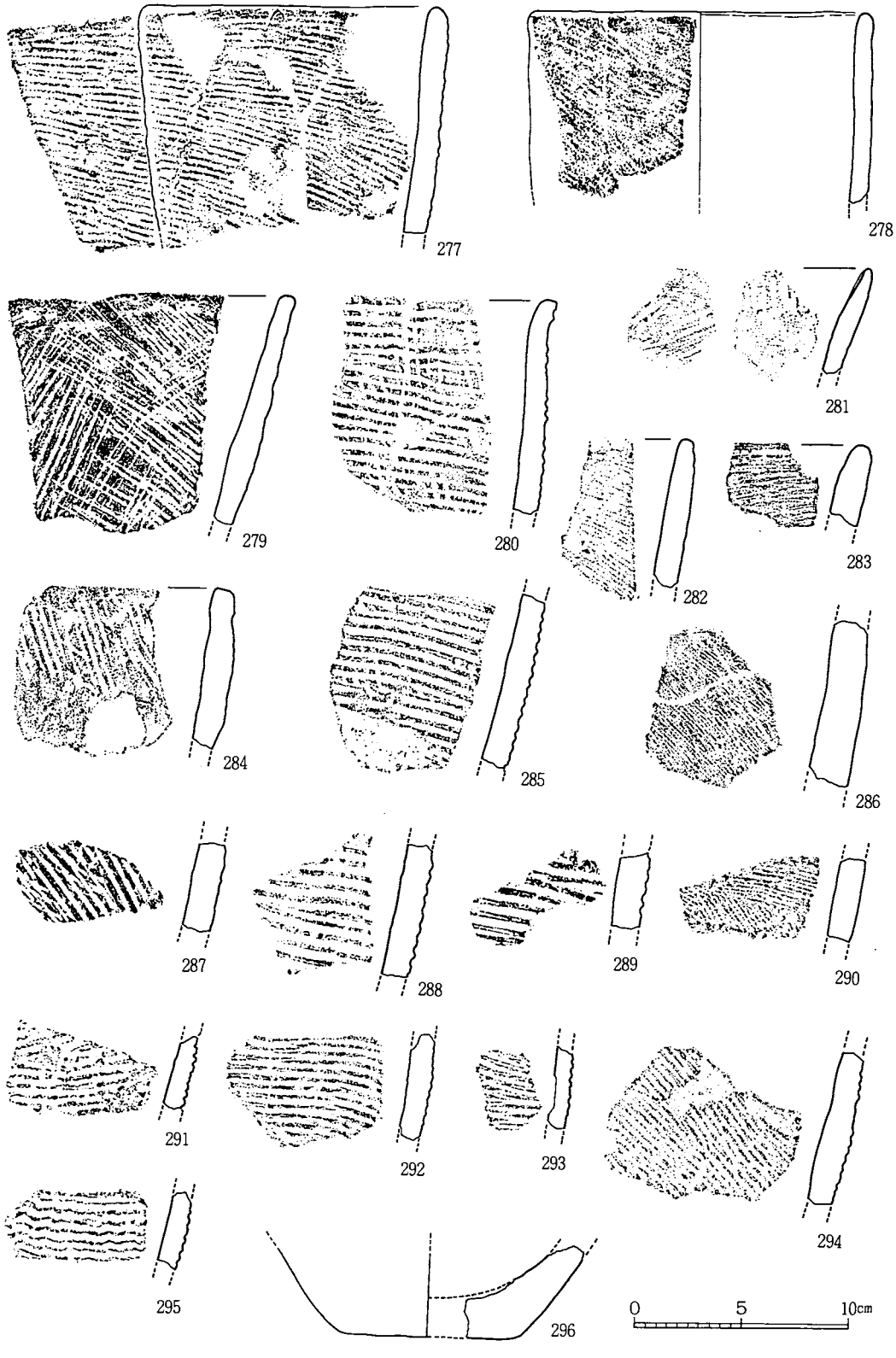
一方、全面条痕の土器は、同じように円筒形を呈してはいるが、口縁部施文のものと比べると小型の土器群である（277・278）。施された条痕には、荒い状態のもの（277・280・284・285・



第72図　遺物分布図（条痕文土器）



第73図　縄文式土器実測図



第74図　縄文式土器実測図

287～289・291～295）と細かいもの（298・299・291～293・296・290）があり、その施文方向にも斜めと横の二つがある。

これらの土器群でも時期比定に必要な調査事実を得ることができなかった。その中で押型文土器の原体条痕に似た文様を内面に持つ281の土器は興味深い。こうした手法の時期的限定が可能となれば、時期決定の基準となるかもしれない。

その他の土器（第76図）

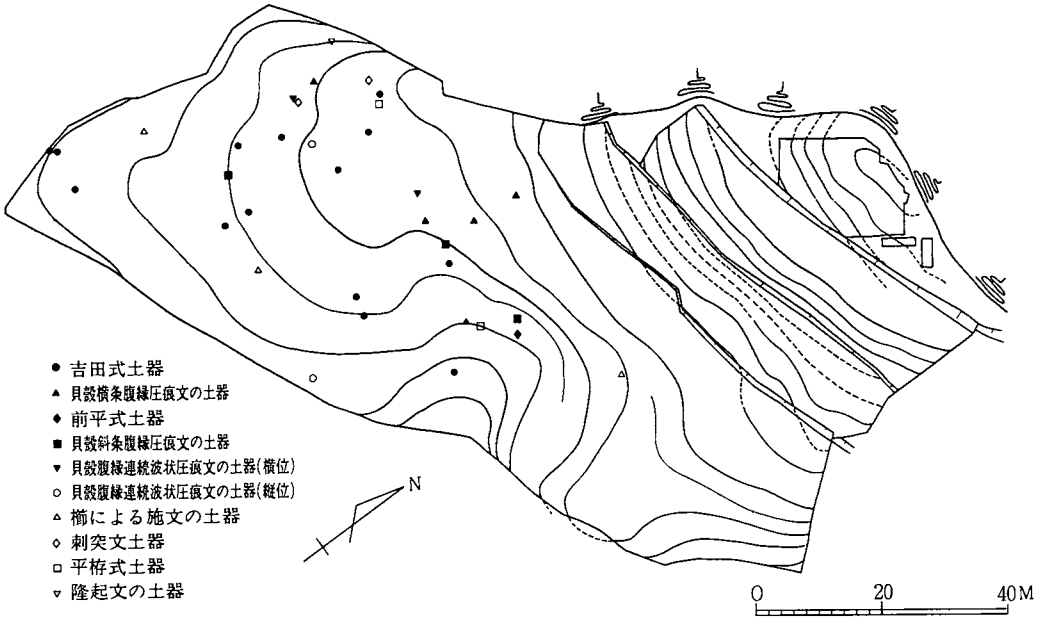
吉田式土器（297～306）　この土器の分布は、すべて丘陵西側に限られ、しかも長軸70m と短軸40m という広範囲にわたり散在した状況である。297～300は口縁部で、301～306は胴部の破片である。器形はほとんどが円筒形をとるが、299だけは、波状の口縁をとることから角筒形の土器と考えられる。また口縁部には、くさび状の張り付け装飾がみられるもの（297～299）とみられないもの（300）がある。

貝殻横条腹縁圧痕文の土器（307～309）　この土器は、丘陵西側にある平坦部分の縁辺から出土している。器形の特徴は、不明である。

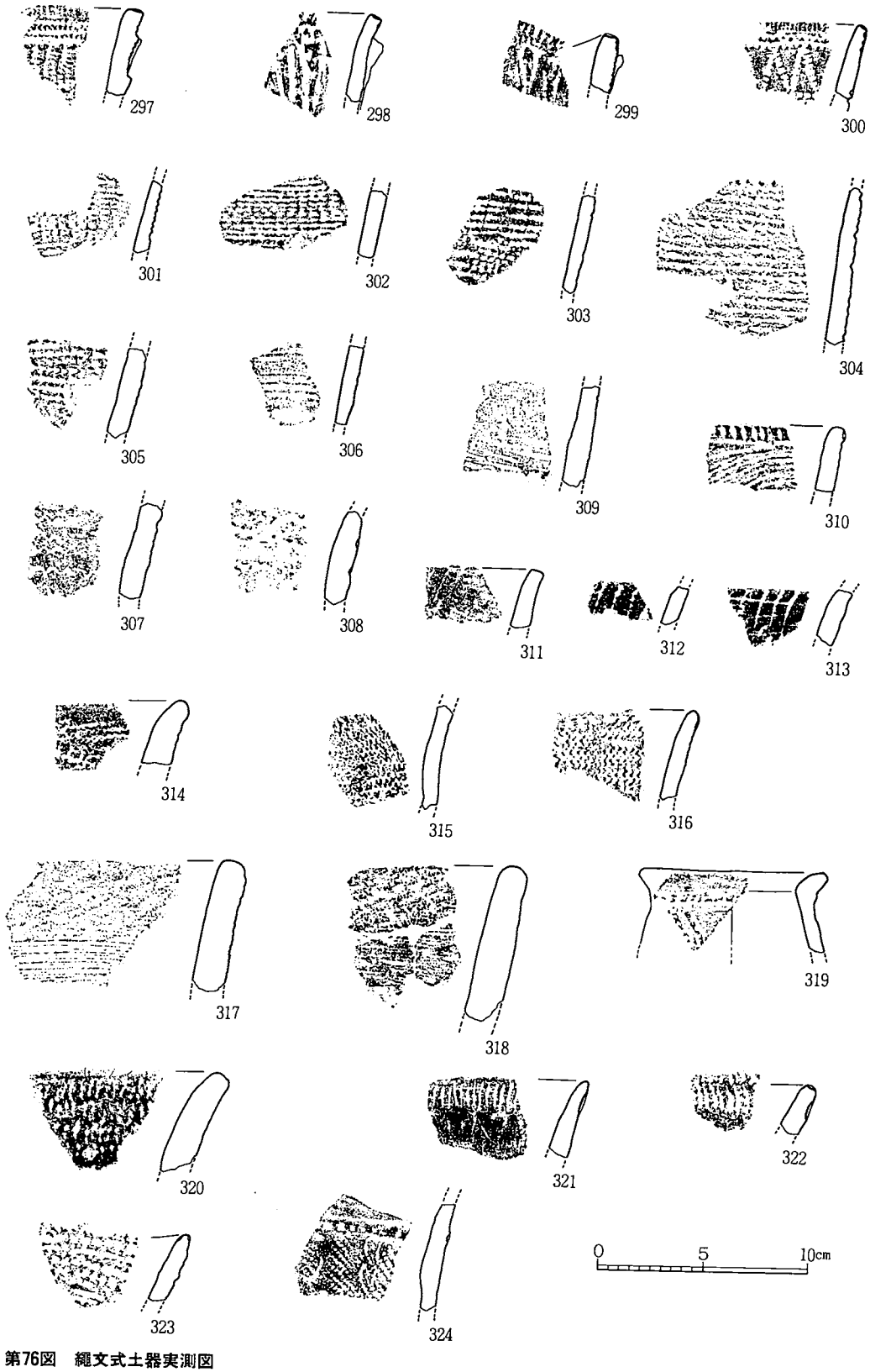
前平式土器（301）　谷部から出土している。地文は条痕で、口縁部に刻み目がある。

貝殻斜条腹縁圧痕文の土器（311～313）　丘陵西側にある平坦部とその縁辺で出土している。口縁部である。

貝殻腹縁連続波状圧痕文を横位に施文した土器（314・315）　丘陵の西側の平坦部分の縁辺近



第75図　遺物分布図（その他の土器）



第76図　縄文式土器実測図

くから出土している。口縁部と胴部の破片である。

貝殻腹縁連続波状圧痕文を縦位に施文した土器（316）　口縁部で、西側の平坦部からの出土である。

櫛による施文の土器（317・318・320）　丘陵の東側および西側の平坦部南縁辺から出土している。非常に細かい櫛を施文具とした連続刺突文と櫛蚤き文があり、これらが併用されるものと刺突文だけのものの二つがある。

刺突文土器（321・322）　丘陵の西端で出土している。口縁部に箆状の工具で刺突文が施されている。

平栫式土器（323・324）　丘陵の西端にあり、口縁部（323）と胴部（324）である。胴部の縄文は、２段のＬＲである。

隆起文の土器（319）　丘陵の西端より出土したものである。隆起文がくの字に折れた頸部（横位）とわずかに膨らんだ胴部（斜位）にみられる土器である。

⑵石器

石器、剝片・砕片は、全体で5258点出土した。その内訳は、剝片・砕片4462点（85％）、石器526点（10％）、石核・原石270点（５％）である。さらに石器についてみてみると、磨石・敲石144点（27％）、石鏃138点（26％）、石皿77点（15％）、石錐21点（４％）、削器20点（４％）、石匙14点（３％）、抉入石器７点（１％）、礫器10点（２％）、磨製石斧７点（１％）、礫石斧３点、尖頭器１点、植刃１点、打製片刃石斧１点、使用痕ある不定形石器82点（16％）という内訳である。このように石器組成の中で石鏃と磨石・敲石・石皿が石器全体の７割近くを占めているところにこの遺跡の特徴がある。

石鏃（第78図～第86図）

石鏃は、138点が出土しているが、そのほとんどが丘陵の西側の平坦部にあり，しかもその北側に偏在している（第77図）。石材としては黒曜石67点、珪岩57点、安山岩14点の３種類がある。

出土した石鏃は、すべて無茎鏃にあたるが、その形状によって正三角形を呈するものと二等辺三角形を呈するものとに大きく二分される。そこで仮に前者をＡ群、後者をＢ群としておこう。次に基部の形状に注目すると平基ないしそれに近いもの（Ⅰ類）、Ｖ字形に抉られるもの（Ⅱ類）そしてＵ字形に抉られるもの（Ⅲ類）の３類にわけることができる。このように大丸・藤丿迫遺跡の石鏃は、六つに分類が可能である。そこで以下それぞれの分類石器ごとにみていくことにする。

ＡⅠ類の石鏃は、平基の正三角形石鏃（53～64）である。これらの石鏃には、加工の状態から素材である剝片の表裏面をよく残しているもの（54・57・58・61）と残していないものの二つの種類がある。

ＡⅡ類の石鏃は、凹基の正三角形石鏃（65～70・72・73）である。ＡⅠ類でみられる加工状

態の差はないが、凹基の状態で浅く入り込むものと深く入るものの二つの種類がある。

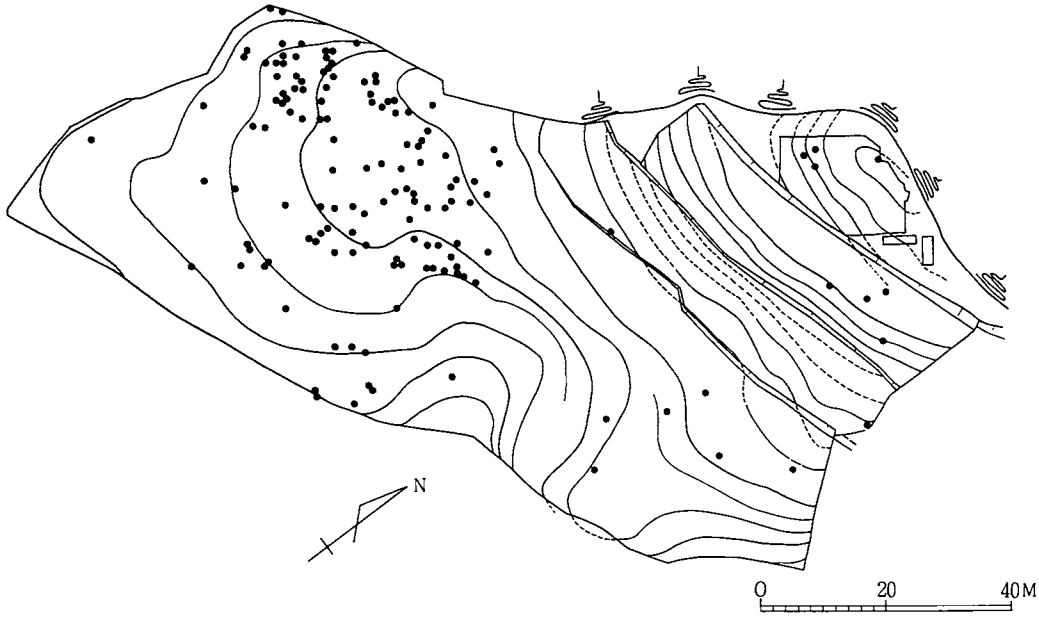
ＡⅢ類の石鏃は、Ｕ字状抉りの入る凹基の正三角形石鏃（71）である。一般に鍬形鏃とされるものに相当する。

ＢⅠ類の石鏃は、平基の二等辺三角形石鏃（74～79）である。この種の石鏃には、74・75のように３ｇを越える大型のものがある。

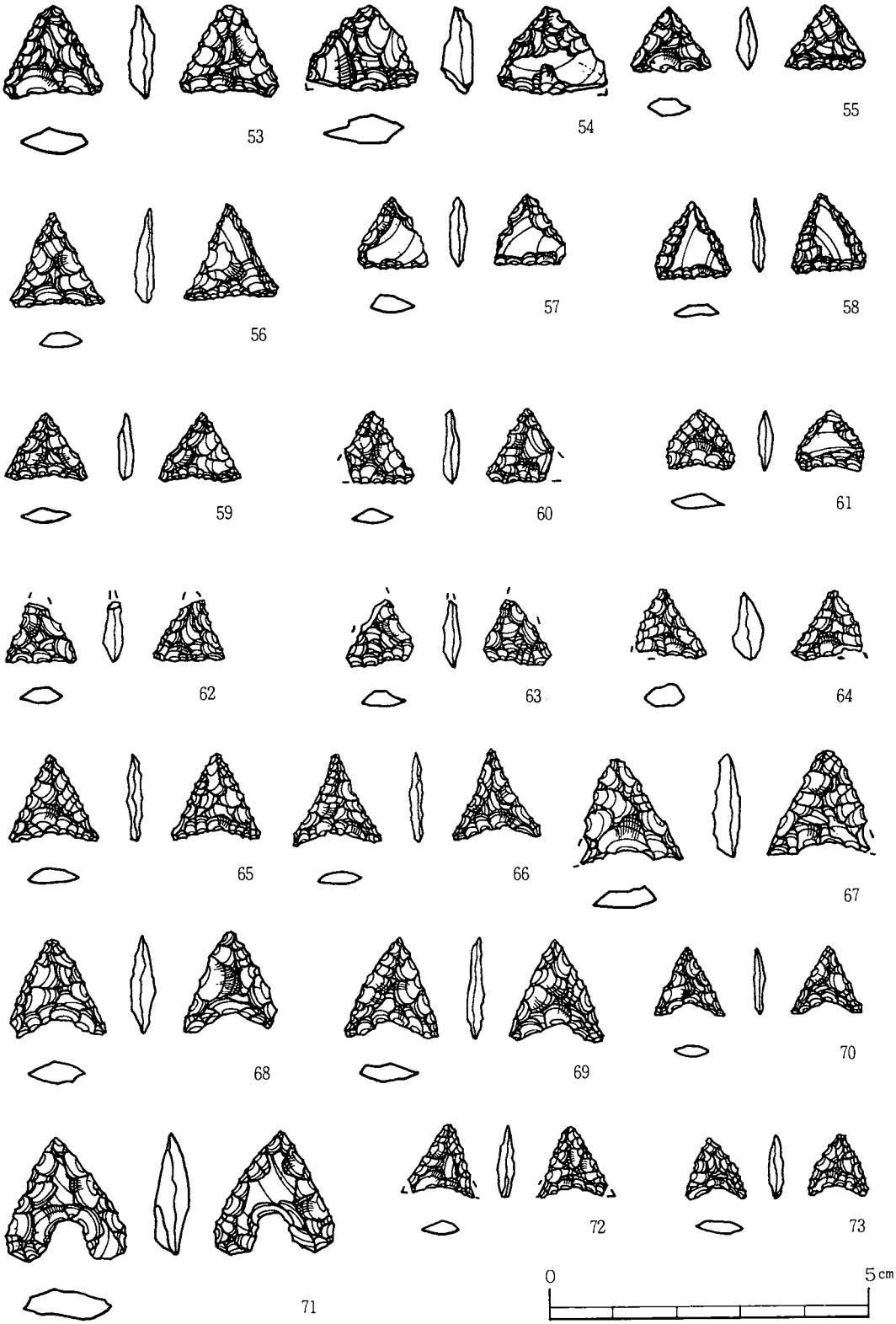
ＢⅡ類の石鏃は、凹基の二等辺三角形石鏃（80～138）である。この石鏃は、さらに凹基の状態によって浅く抉りが入るものと深く入るものの二つの種類がある。また、この他に形状からみれば、さらに多くの種類があるようだ。

ＢⅢ類の石鏃は、Ｕ字状抉りの入る凹基の二等辺三角形石鏃（139～162）である。この石鏃にも凹基の状態によって、浅く抉りが入るもの（139～150）と深く入るもの（151～162）の二つの種類があり、この中で深く抉りが入るものが鍬形鏃に相当する。

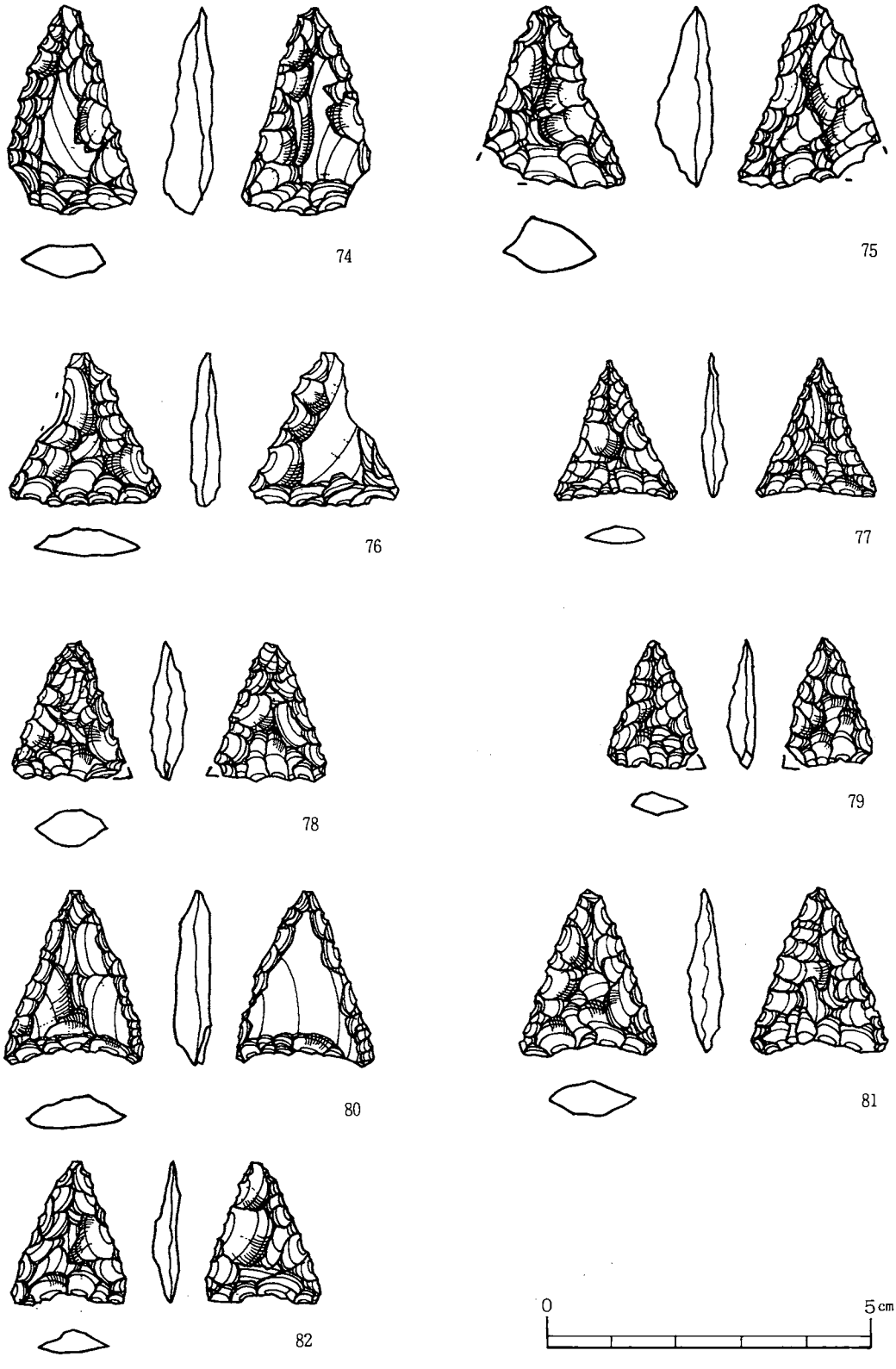
こうした完成品の他に石鏃の未加工品と考えられるものが幾つか出土している（163～170）。166・170は、正三角形の石鏃、その他のものは二等辺三角形の石鏃の未加工品である。なお、177～179の石鏃は、欠損品で類別比定ができなかったものである。



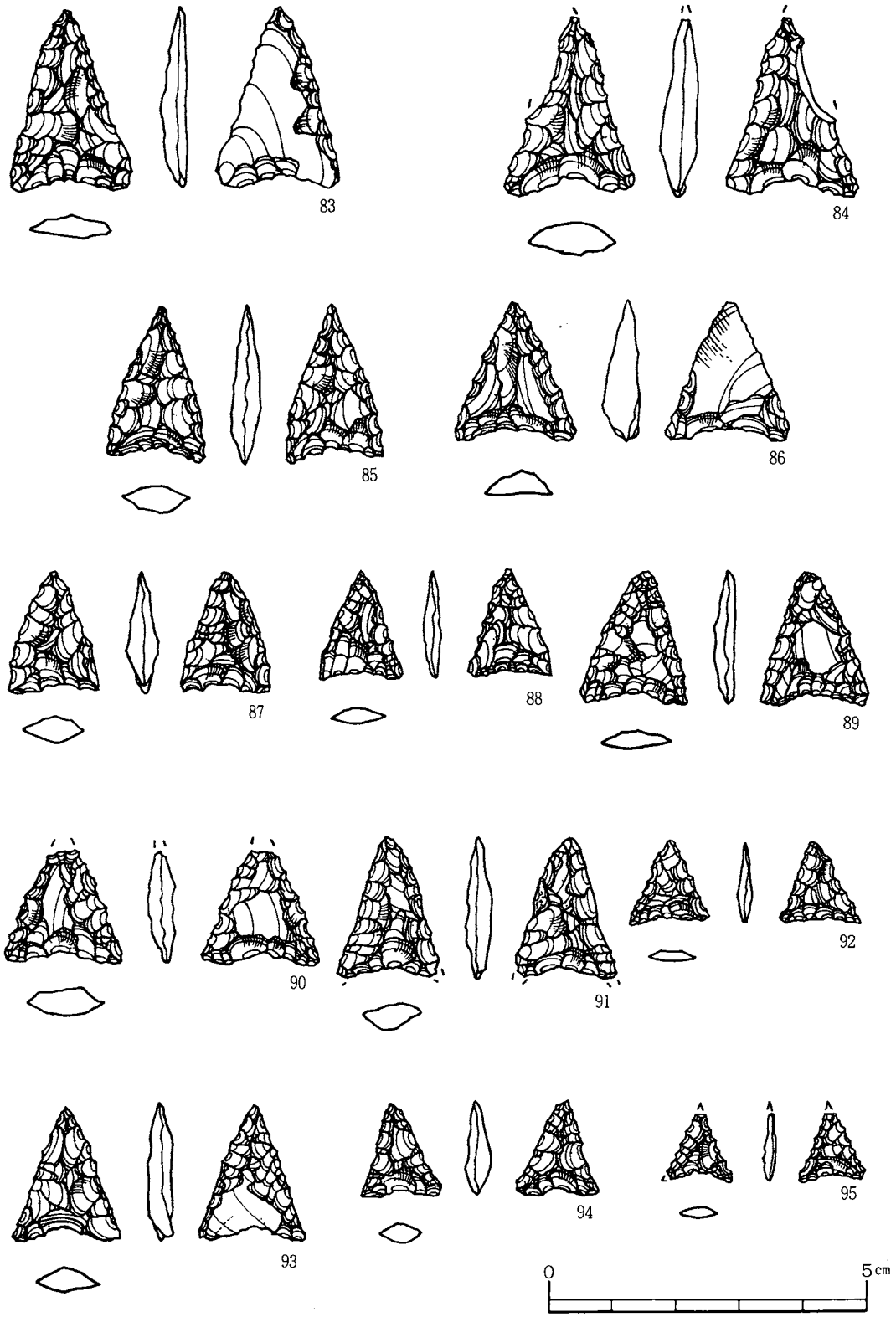
第77図　遺物分布図（石鏃）



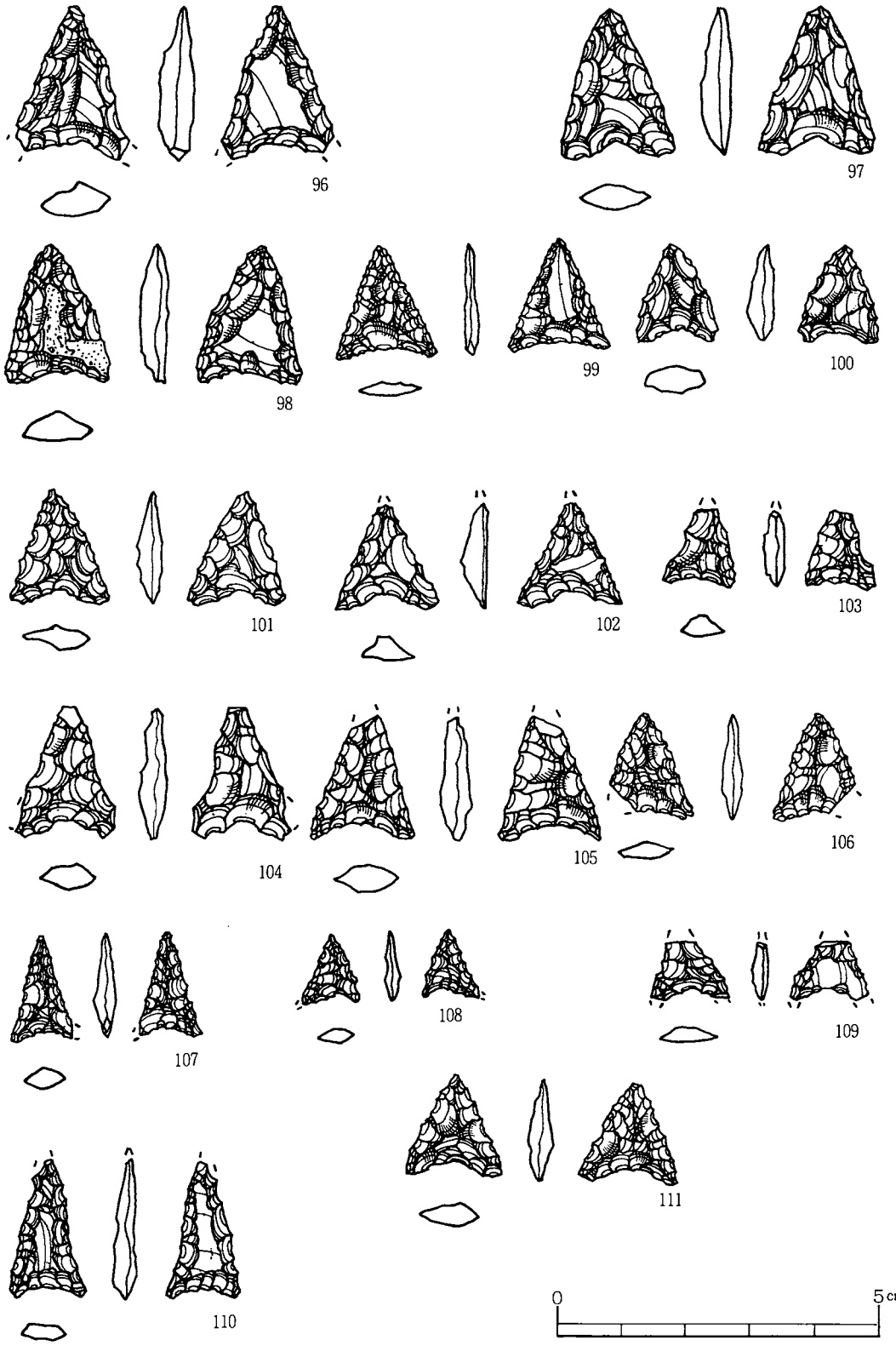
第78図　石器実測図



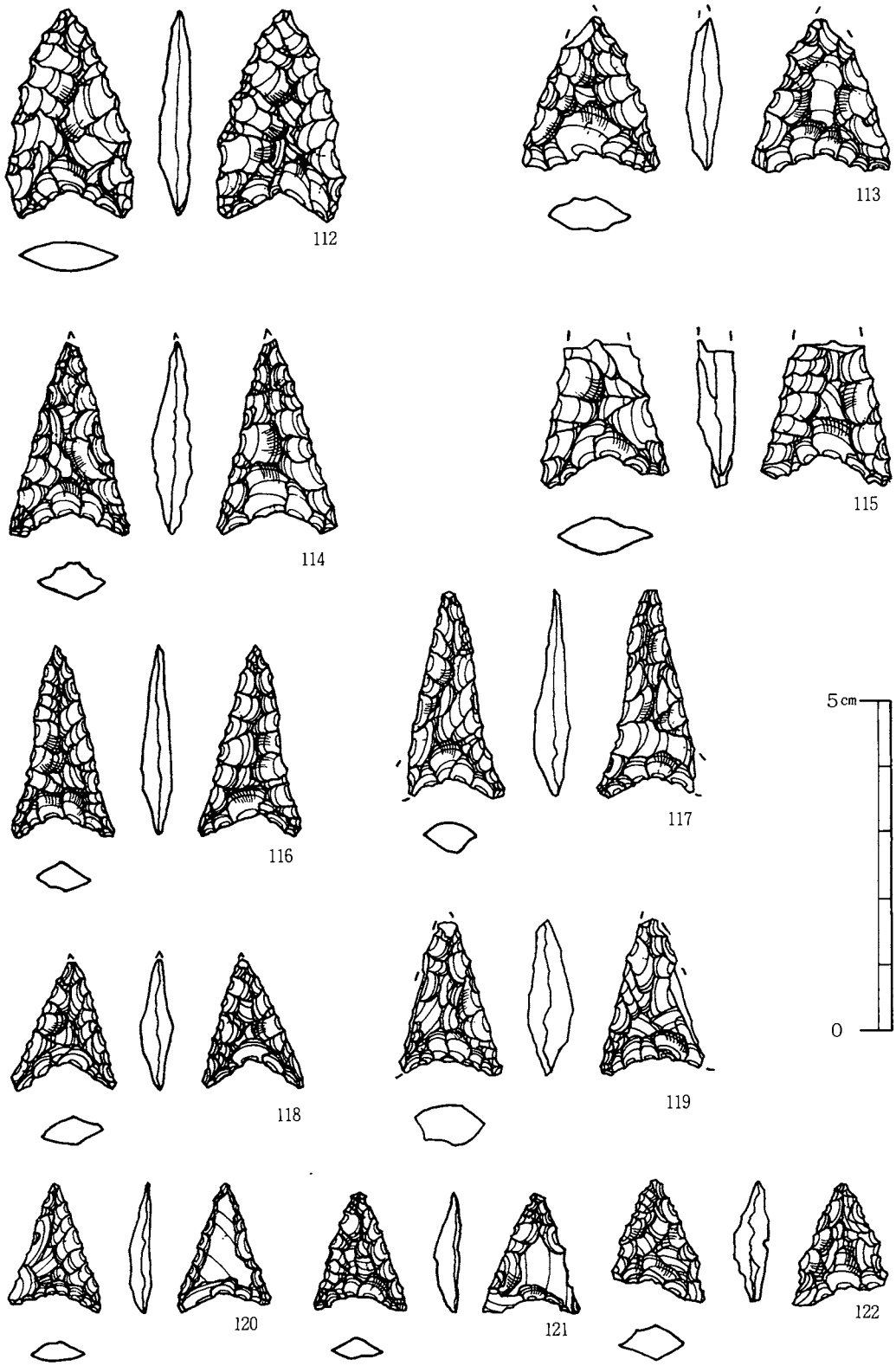
第79図　石器実測図



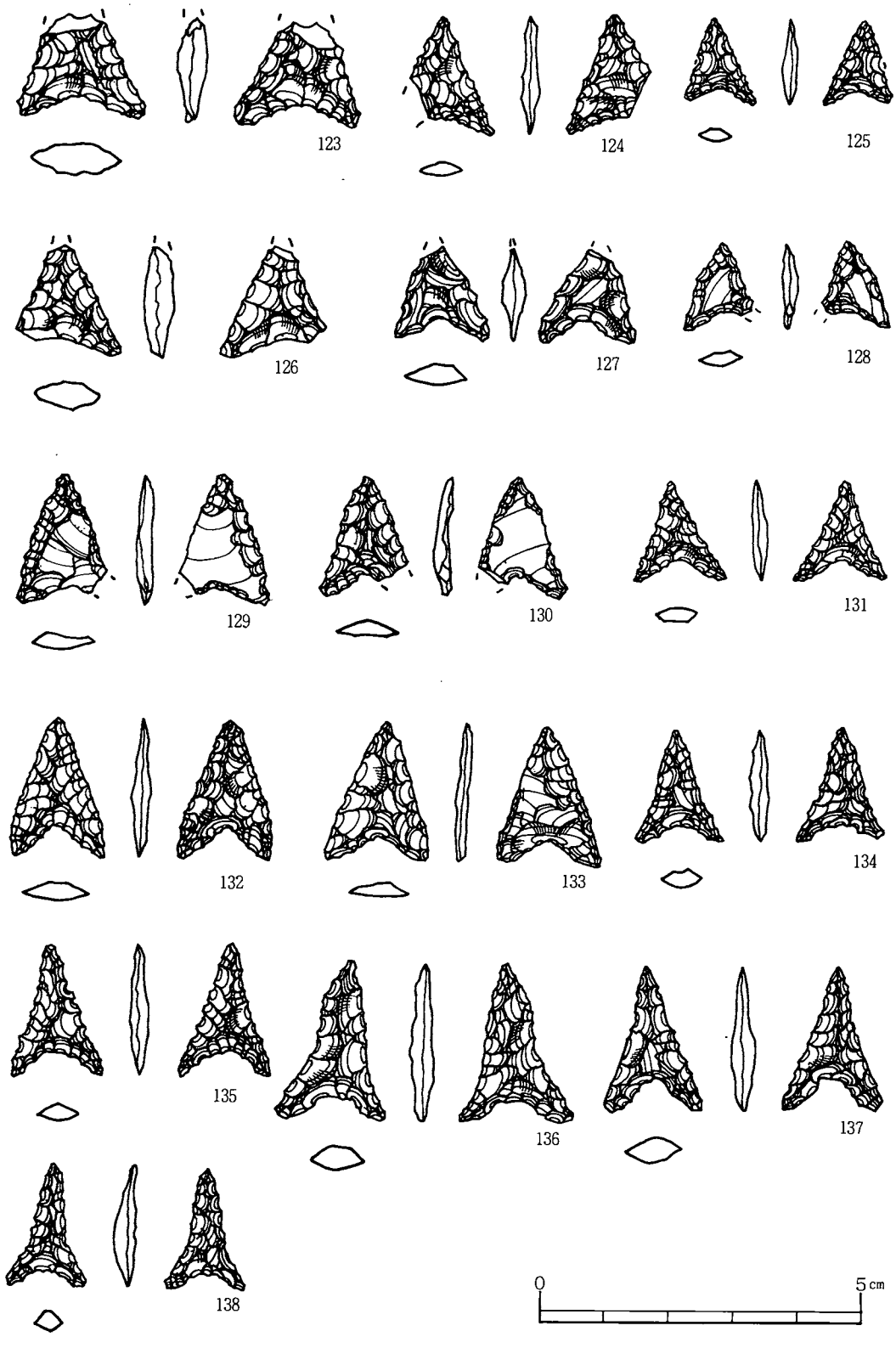
第80図　石器実測図



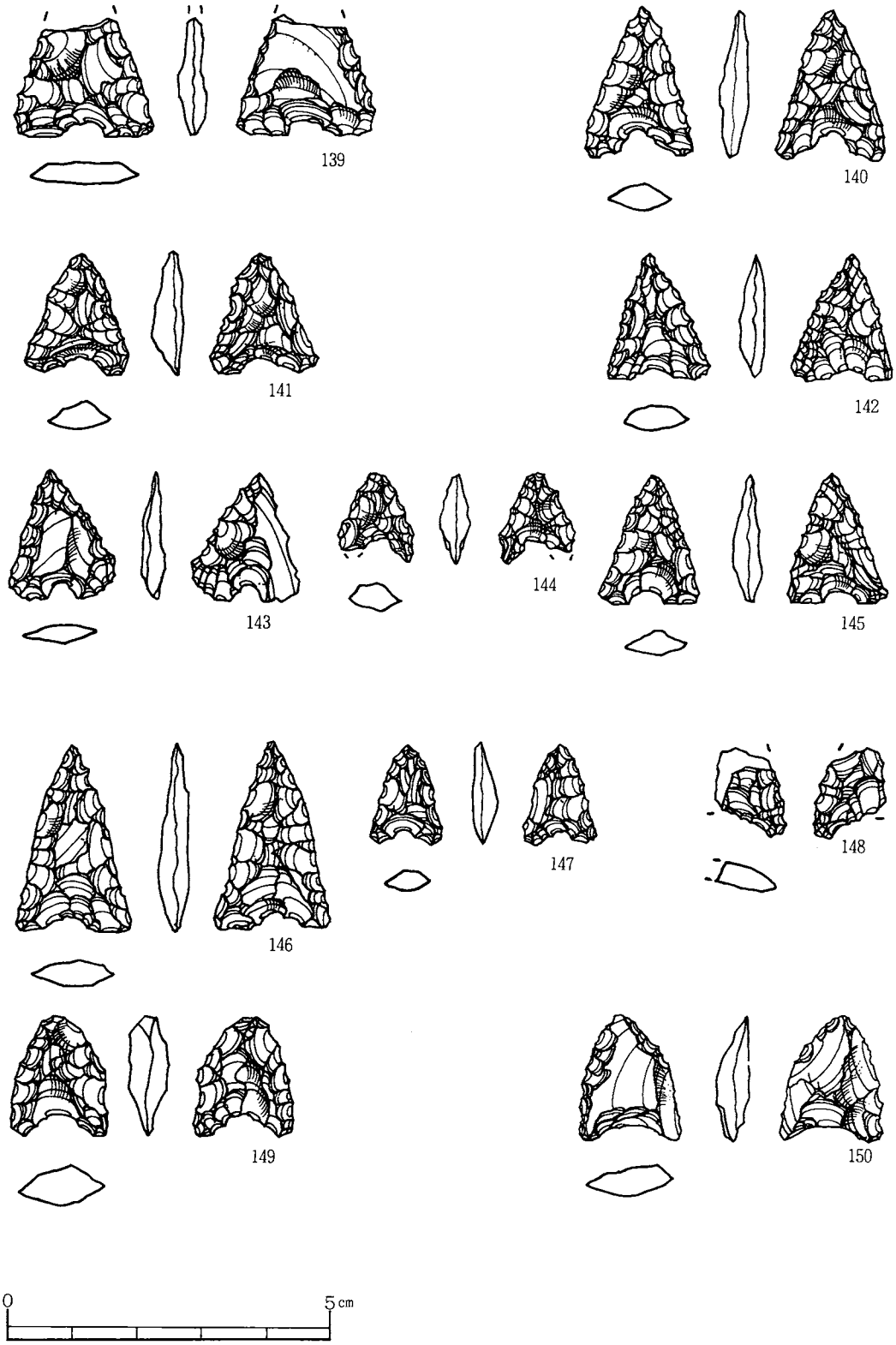
第81図　石器実測図



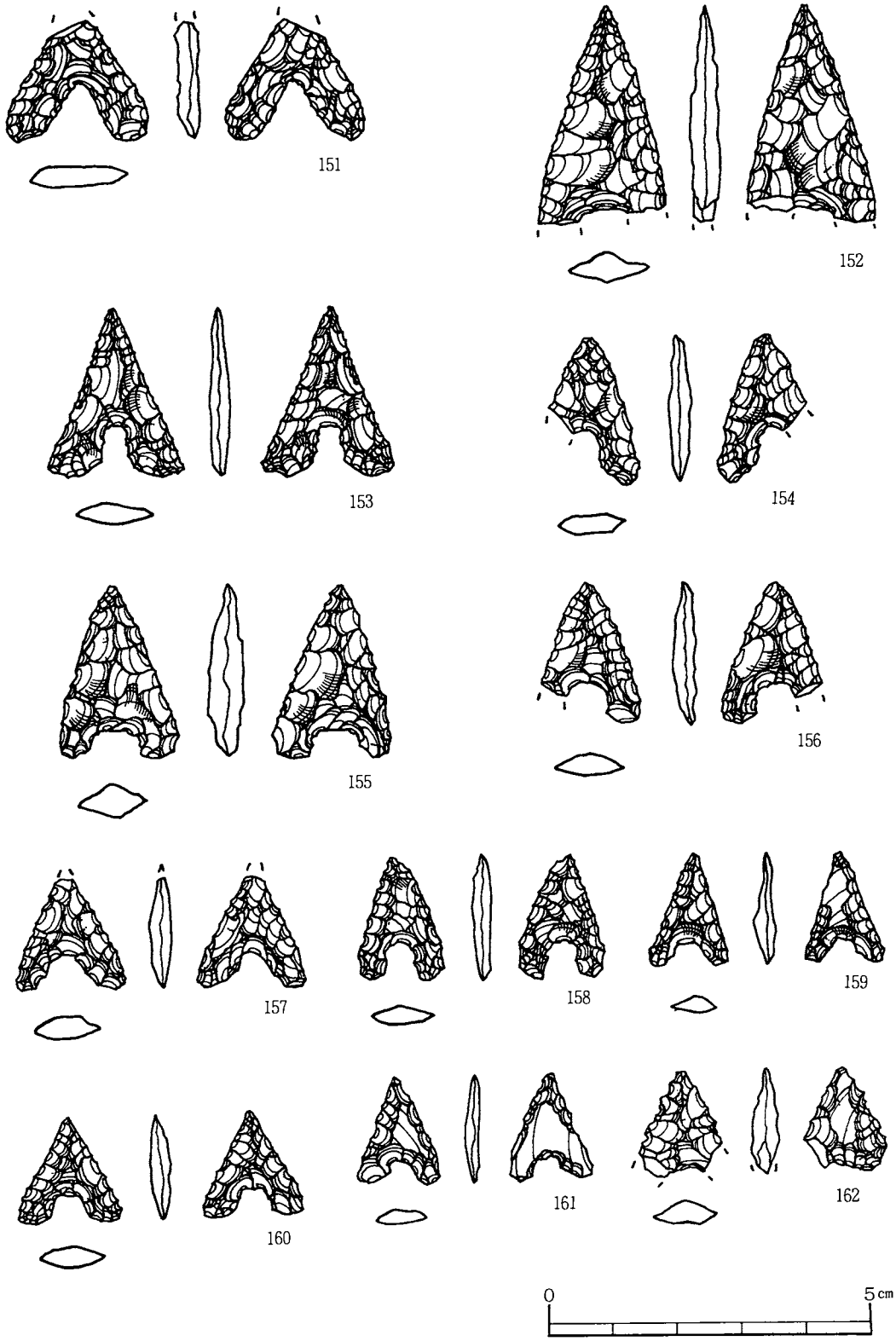
第82図　石器実測図


123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
0
5cm

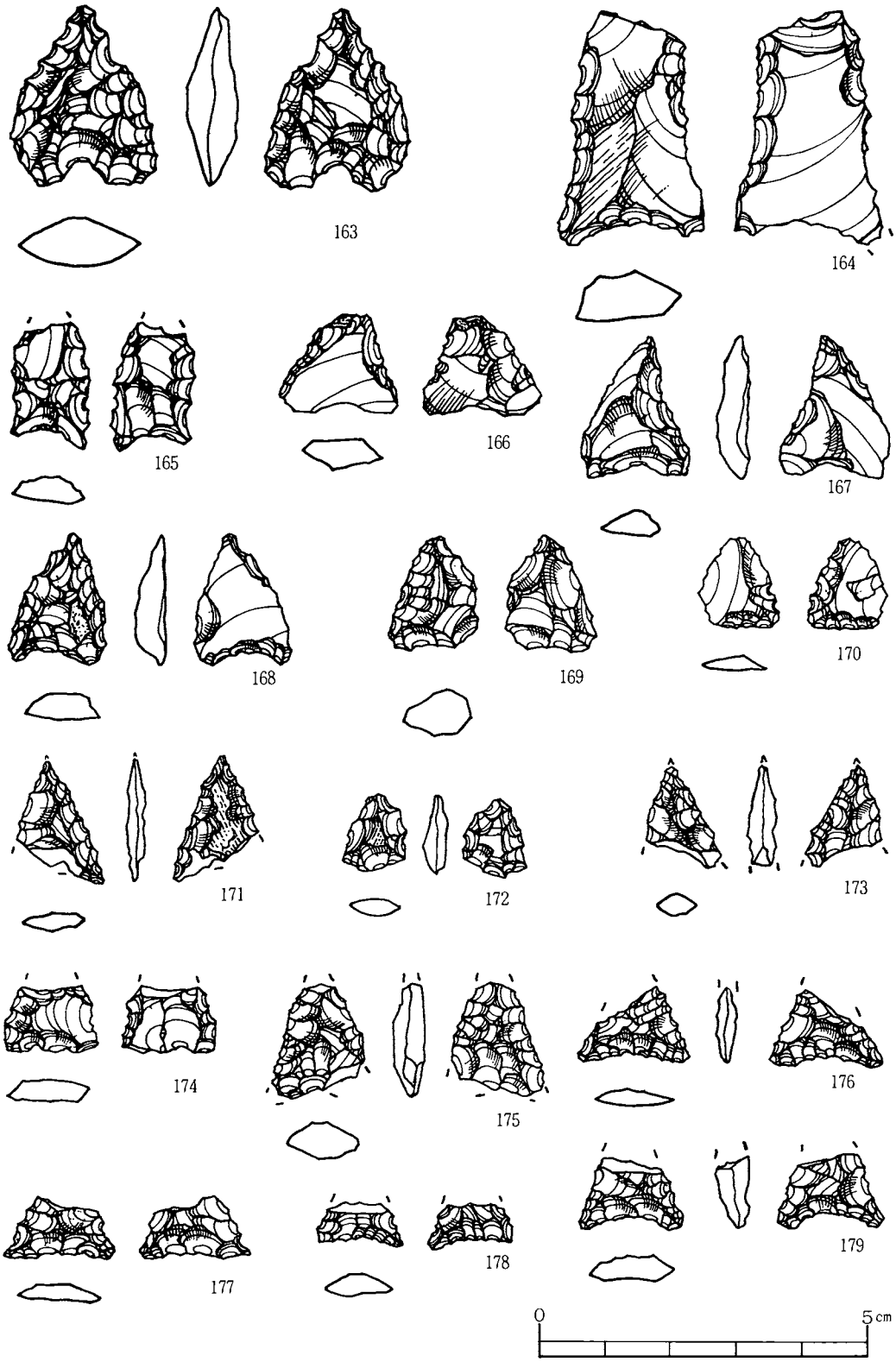
第83図　石器実測図



第84図　石器実測図



第85図　石器実測図


163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
0
5cm

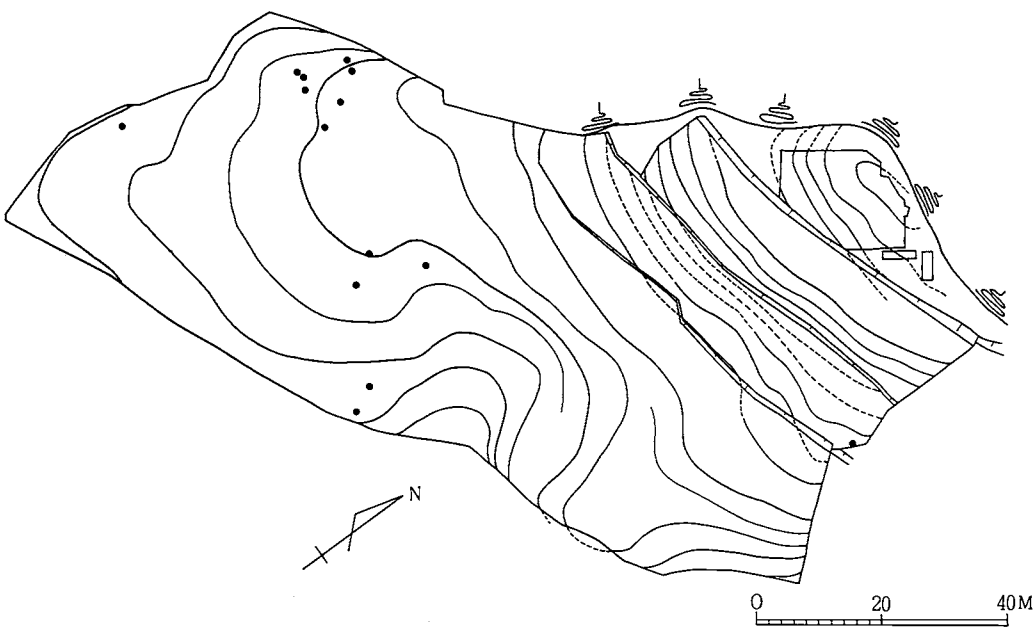
第86図　石器実測図

削器（第88図～第91図）

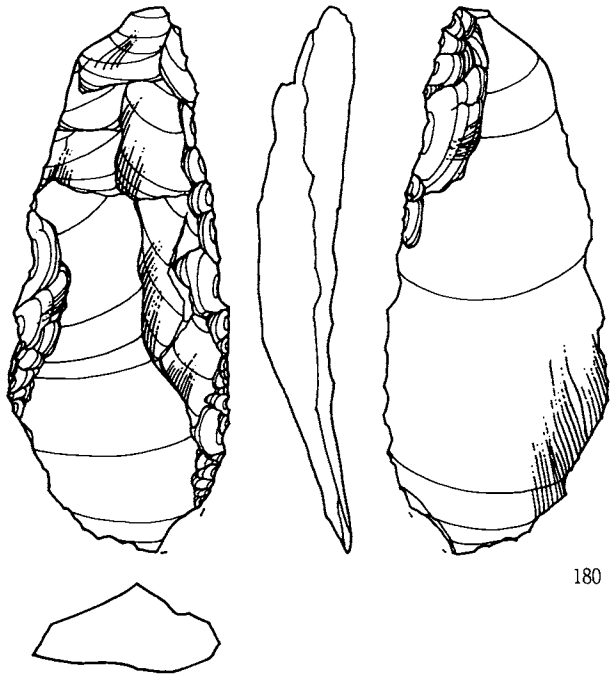
剝片の側縁部に連続的に調整を加えて作られた刃部を持つ石器を一括して扱ったが、調査において20点を検出した。その分布をみれば、ほとんどが丘陵平坦部の西側にあり、しかも三つの群に偏在した状況をとっている。すなわち、平坦部西側縁辺の群、同東側縁辺の群そしてその20m 東南側の群の三つである。この他に丘陵の先端部と基部周辺でそれぞれ１点づつ出土している（第87図）。

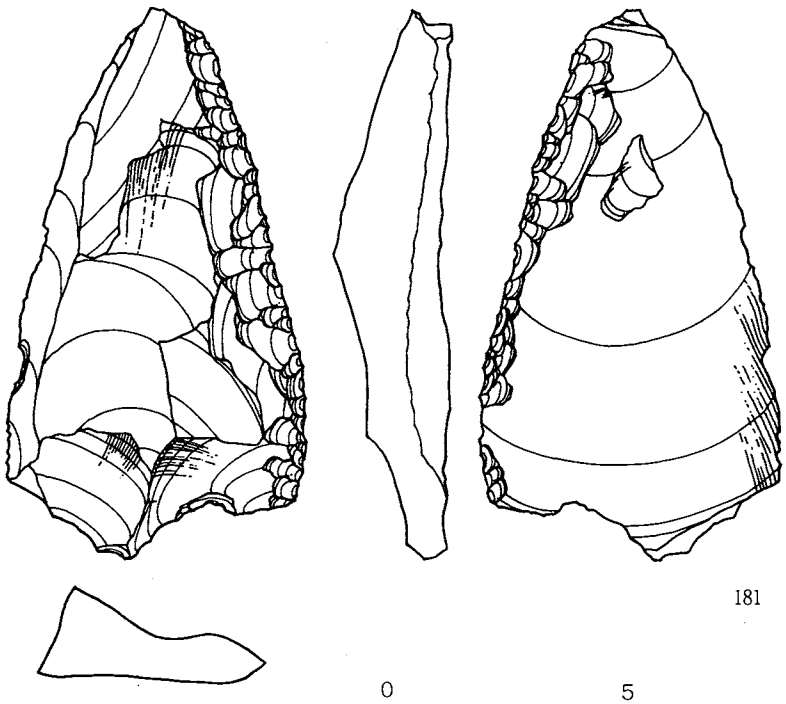
次に、石器の特徴について触れてみよう。これらの石器は、それぞれの大きさで大型のもの（180～183）と中型のもの（192）と小型のもの（184～191）との三つに明確に区分できる。それぞれの重量としては、180の石器を除く大型品で100g を越え、最大190g（182）を量り、中型品で93g、小型品で55g 以下である。また削器の特徴である刃部ではほとんどが丁寧で細かい調整によって仕上げられているが、186と190の石器の刃部では、大きく荒い調整のみが観察される。刃部の形状には、平面形で直線をなすもの（180・181・183・184・186～192）と弧状をなすもの（182・185）の二つの種類があり、またその断面形では片刃（180・182～184・186・190）と両刃（181・185・187～189・191・192）とに分けることができる。

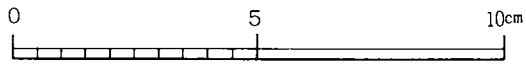
素材となる剝片は、縦長剝片（180・181・185～187）と横長剝片（182～184・188～192）の両者が使われ、すべて珪岩製である。



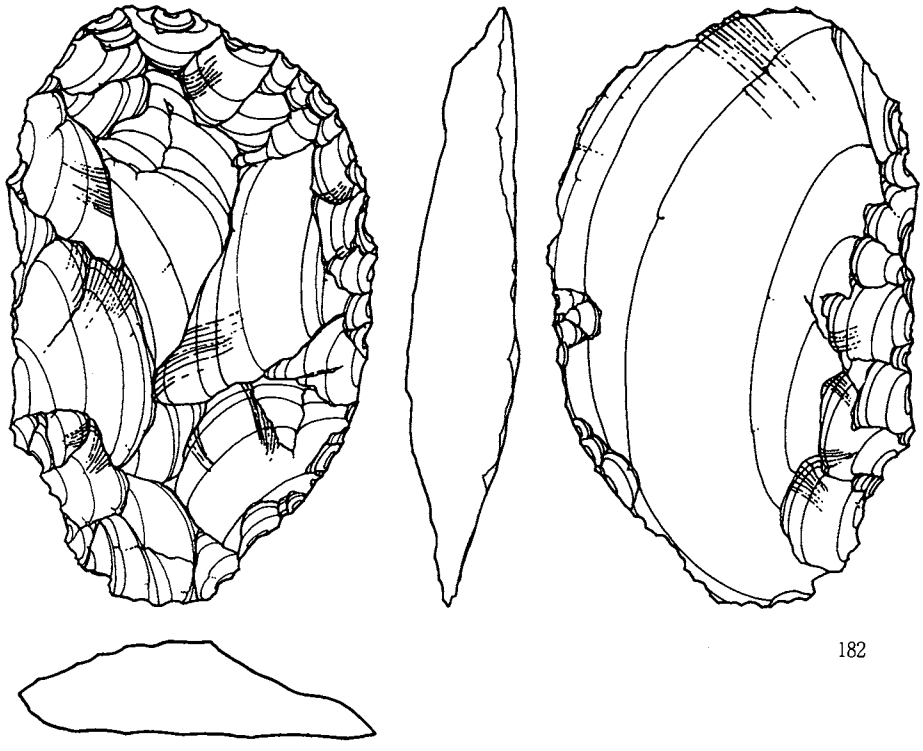
第87図　遺物分布図（削器）

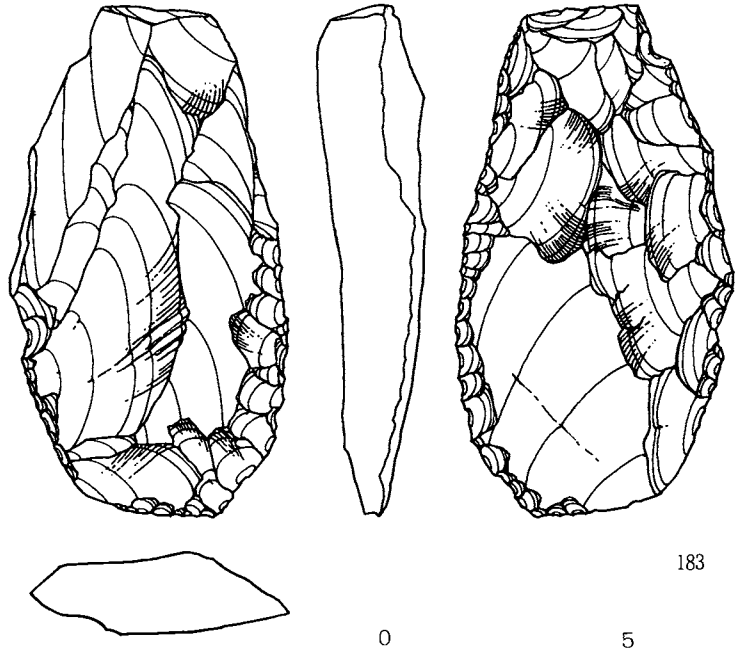


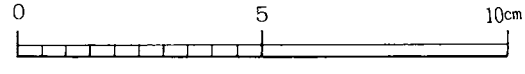




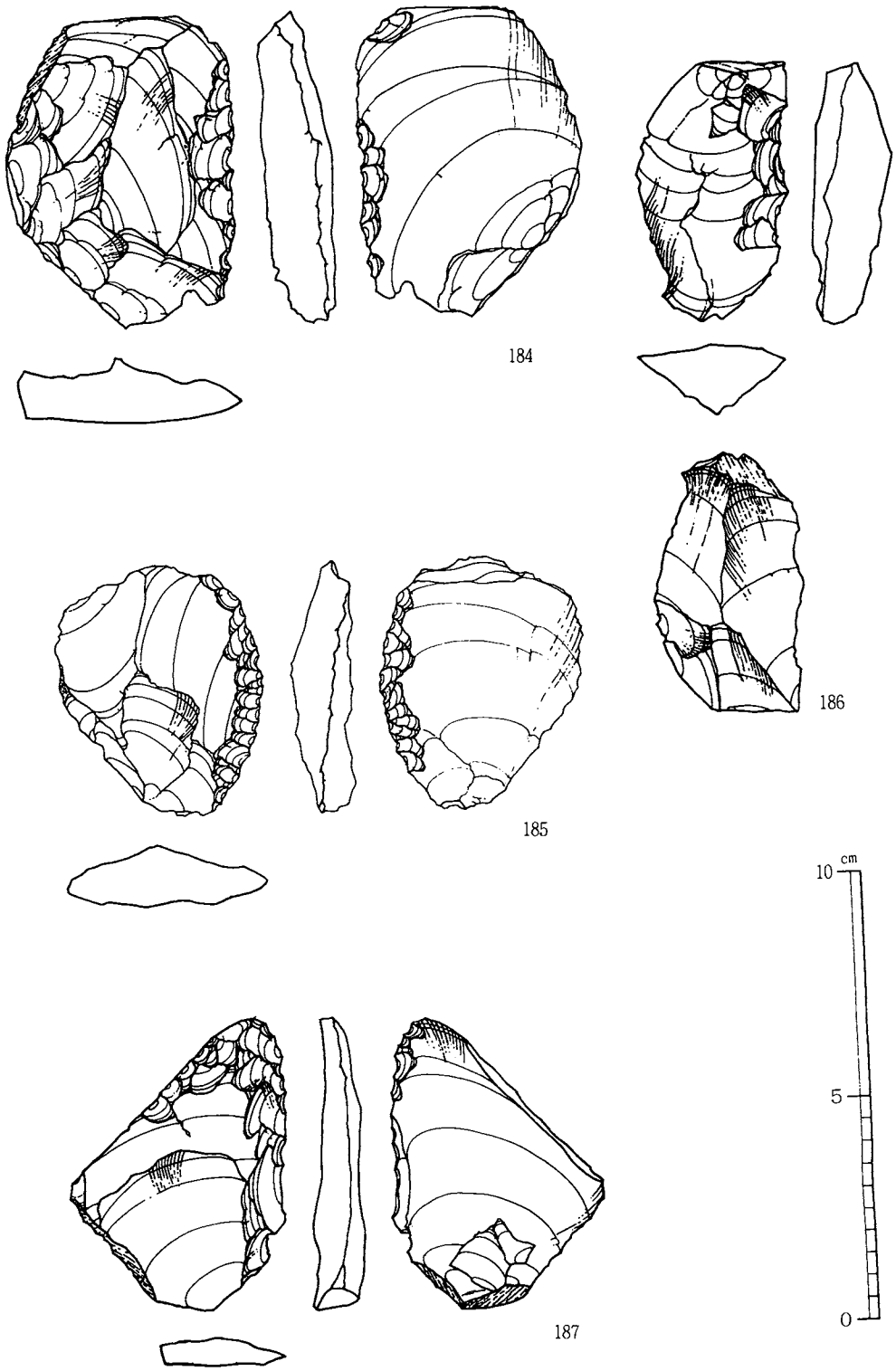
第88図　石器実測図



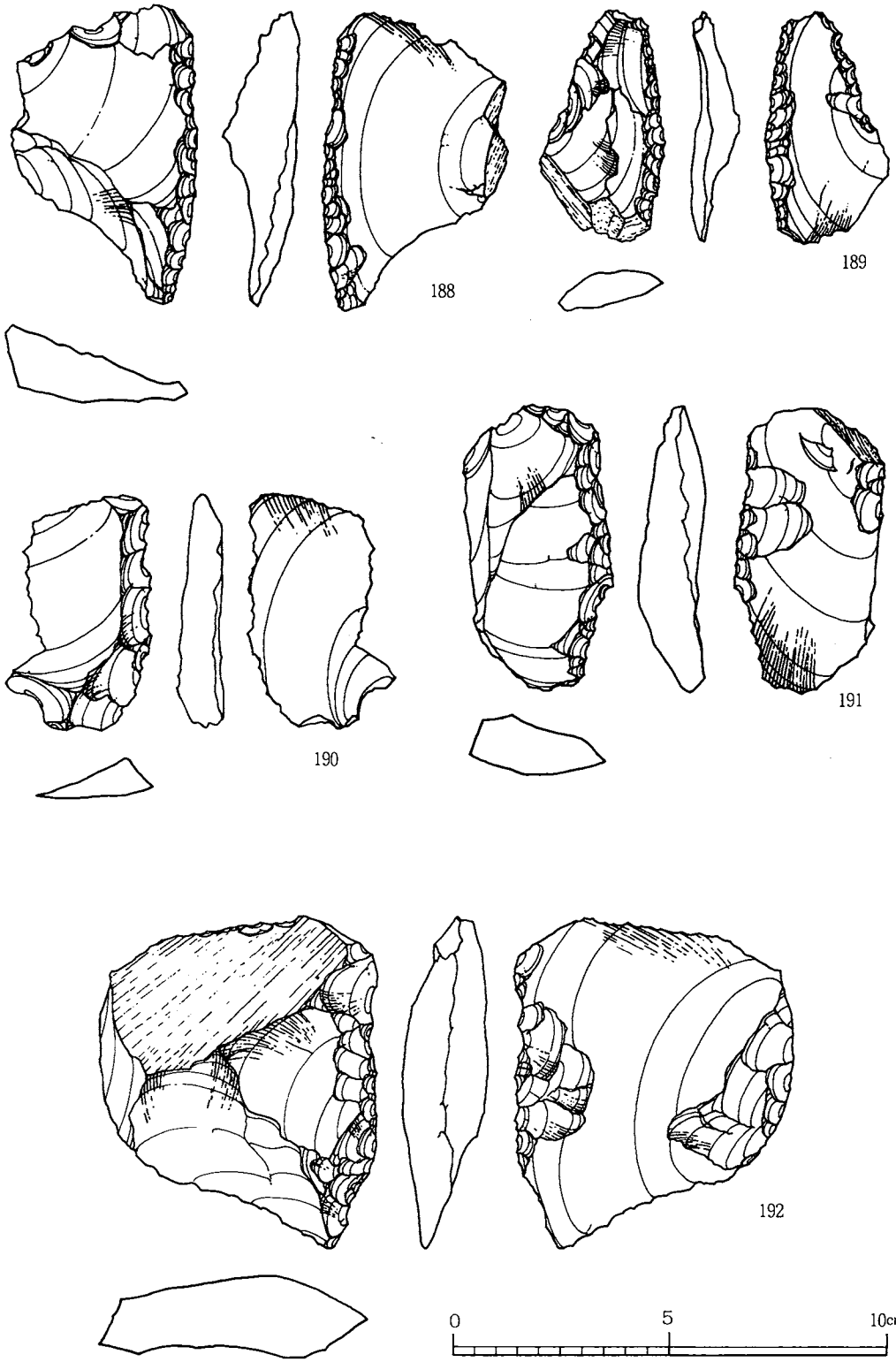




第89図　石器実測図



第90図　石器実測図



第91図　石器実測図

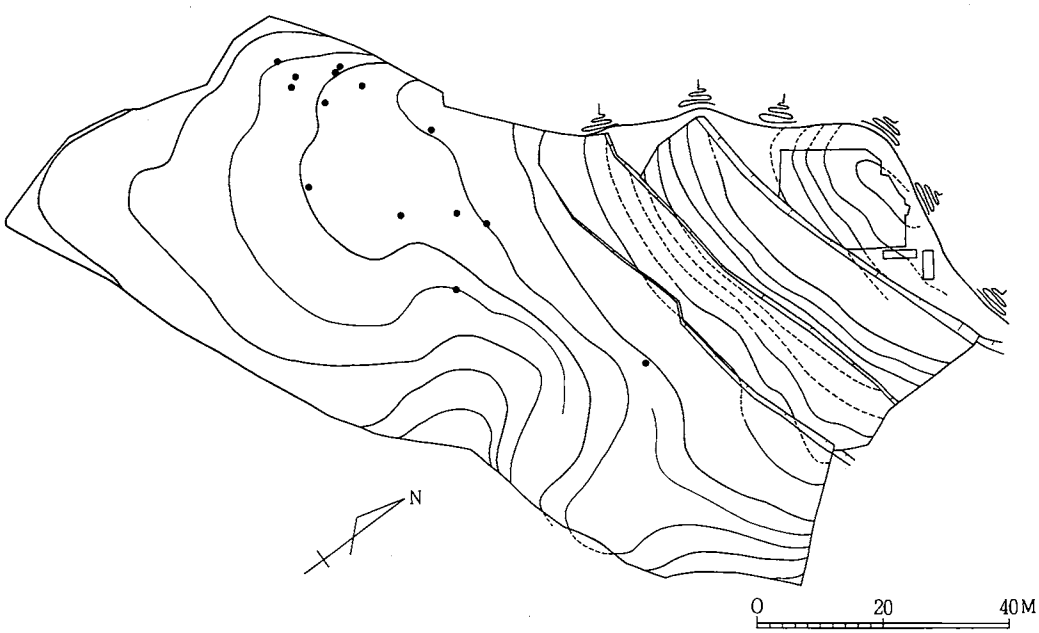
石匙（第93・94図）

出土資料として14点があるが、それらは、丘陵の東側平坦部の１点を除き、すべて西側平坦部から出土し、しかもその北側縁辺部に偏在して一つの群を構成している。その分布域は、長軸46m と短軸20m の楕円形を呈する（第92図）。

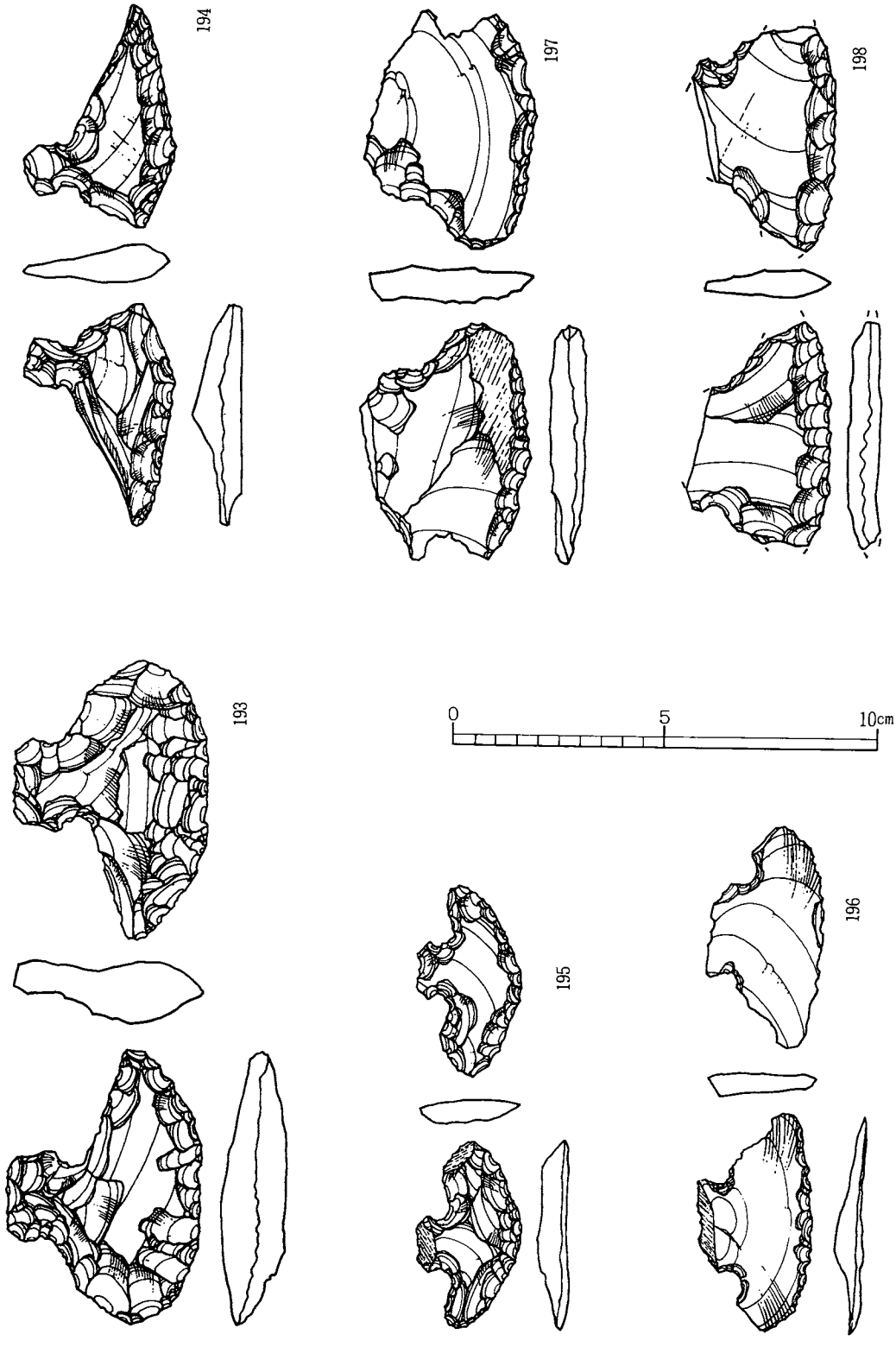
石匙には、その形態的特徴によって横型と縦型の二つの種類がある。遺跡では、この両者ともあり、それぞれ７点と５点が出土している。

193～198・204は、横型の石匙で、珪岩製のもの５点（193・194・197・198・204）、安山岩製のもの２点（195・196）である。石器の形状の種類には、つまみ部がはっきりと作り出されているもの（193～196）、弱いつまみ部を持った台形の形状を呈するもの（197・198）、つまみ部がわずかにみられるもの（204）の三つがある。素材となる剝片の形状は、調整による形状修正の度合が高いものがあって判然としないが、ほとんどが横長の剝片と考えてよさそうである。

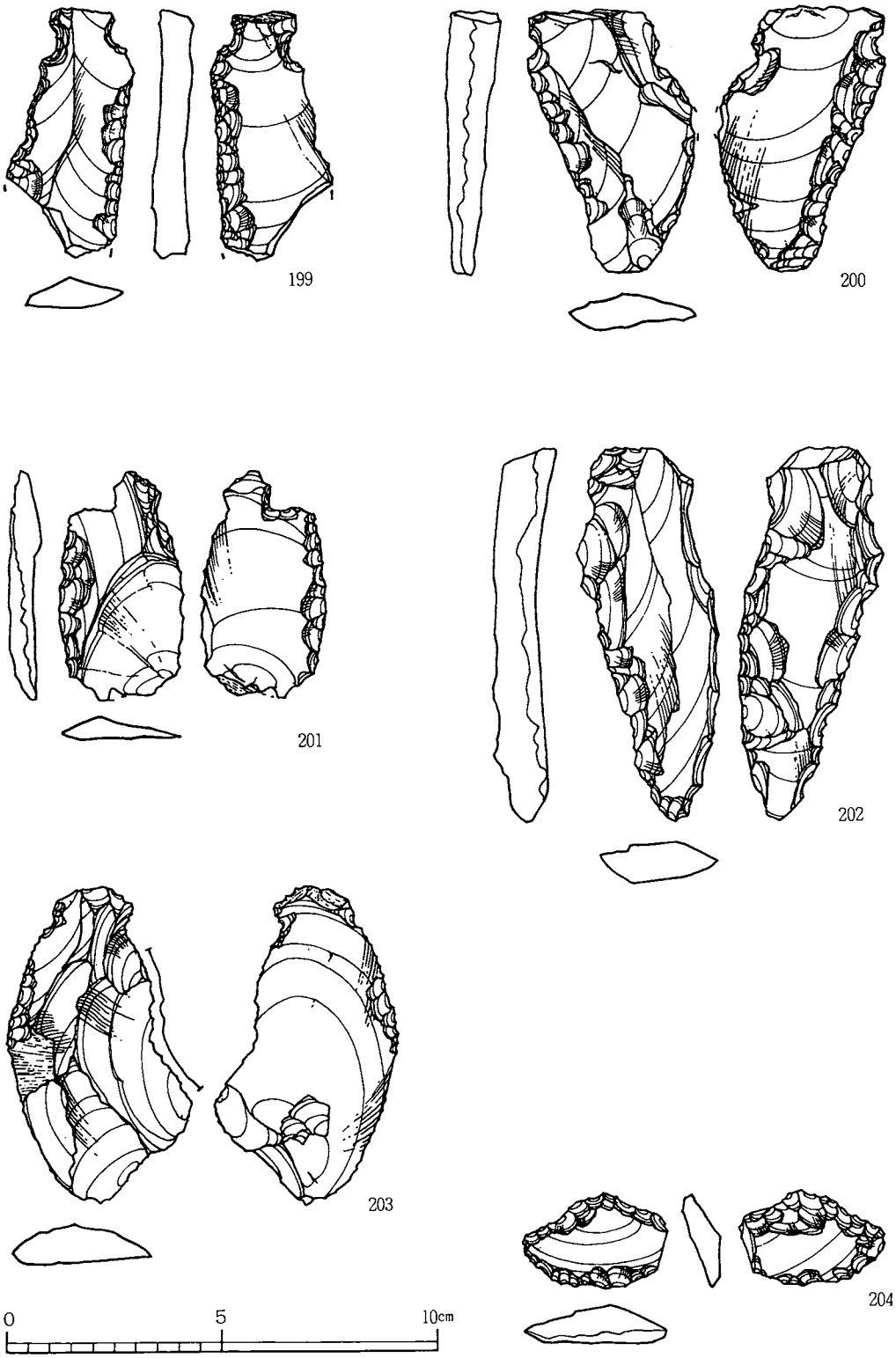
199～203は、縦型の石匙で、珪岩製のもの３点（199・200・203）、安山岩製のもの１点（201）、黒色硬質頁岩製のもの１点（202）である。すべて縦長剝片を素材として、その打面部ないし先端部を上位に置いてつまみ部を作り出している。石器は、このつまみ部の状態によって明瞭に作り出されているもの（199・201）と作り出されていないもの（200・202）の二つに分類することができる。



第92図　遺物分布図（石匙）



第93図　石器実測図



第94図　石器実測図

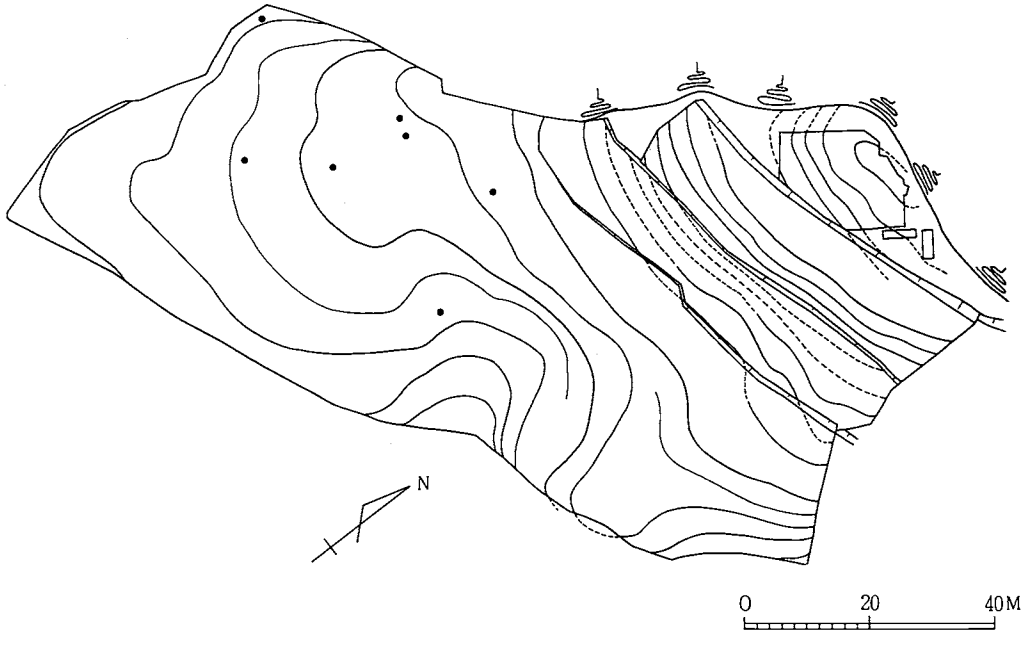
203は、縦長の剝片の打面部を下位に置き、先端部の両側にわずかに抉入状の調整を加えたのみで作業を中止した石匙の未加工品である。またこの資料には、剝片の側縁部に刃こぼれ状の微細な剝離痕が残されている。

抉入石器（第96図）

この石器として認定した資料は、石器本体の一部に抉入加工による湾入部がみられるという特徴を持っているもので、この抉入加工の他に通常削器に施される加工も併せて観察される場合もある。こうした特徴を持った資料は、７点が出土し、その分布は、西側平坦部にあって群を形成せず、東西56m に南北20m という広範囲にわたり散在した状況を呈している。なお分布域の中心は、丘陵の中央部からやや北側に寄った位置にある（第95図）。

そこで以下、資料ごとに説明を加えていきたい。その際の石器の正位置は、抉入加工を横位置とし、つまみ部がある場合にはその部分を上位に、その他のものは素材となる剝片の打面部を上位とする。

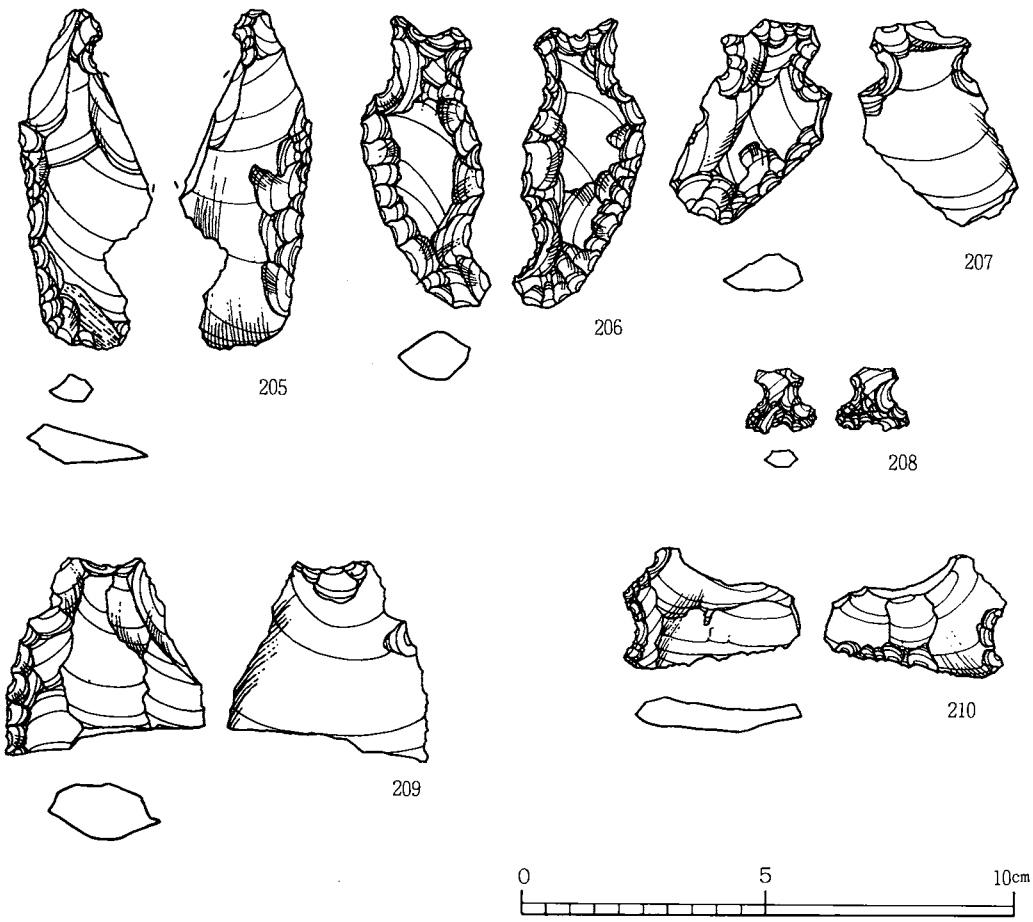
205は、珪岩製の縦長剝片を素材とした石器である。石器の湾入部は、頭部右側縁にあり、表裏両面からの調整によって作られている。その径１cmである。またこの他に、両刃の削器用刃部が左側縁の下半部に作られている。206は、安山岩製の横長の剝片を素材として、その剝片の打面部は右位に置かれている。石器の湾入部は、右側縁下部にあり、その径2.6cmを測る。またこの石器には、この他に頭部につまみ部そして縁辺すべてに両刃の削器用刃部を持つという特



第95図　遺物分布図（抉入石器）

徴がある。207は、珪岩製の縦長剝片を素材とした石器である。石器の湾入部は、左側縁の中位にあり、その径は、0.5cmを測る。この資料にも206と同様につまみ部が付き、右側縁に片刃の削器用刃部がみられる。石匙からの転用であろうか。208は、珪岩製の小型の石器である。石器の湾入部は、3箇所にあり、その径は、すべて0.5cm前後を測る。なお、素材となる剝片は、形状の修正の度合がかなり大きいために知ることができなかった。209は、珪岩製の縦長剝片を素材とした石器である。径0.6cmを測る湾入部は、左側縁の頭部近くにあり、そのまま片刃の削器用刃部へ連続する。しかし、下半分が欠損しているためにその全体像は不明である。201は、珪岩製の横長剝片を素材とした石器である。表裏両面からの加工によって作られた湾入部は、左側縁にあり、径1.6cmを測る。また、この石器の下縁には、片刃の削器用刃部がみられる。

以上、それぞれの石器ごとにその特徴について述べてきた。これらの石器の中には、削器の一種として扱うこともできるものもあるが、特にここでは抉入部が矢柄整形のために使われた可能性に注目して別個の扱いとした。



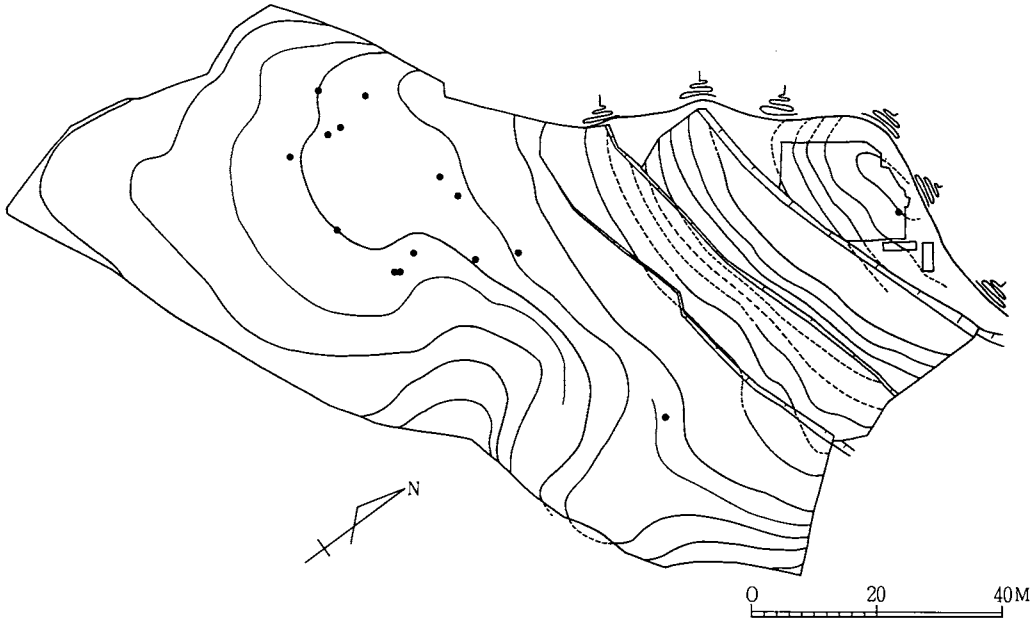
第96図　石器実測図

石錐（第98図）

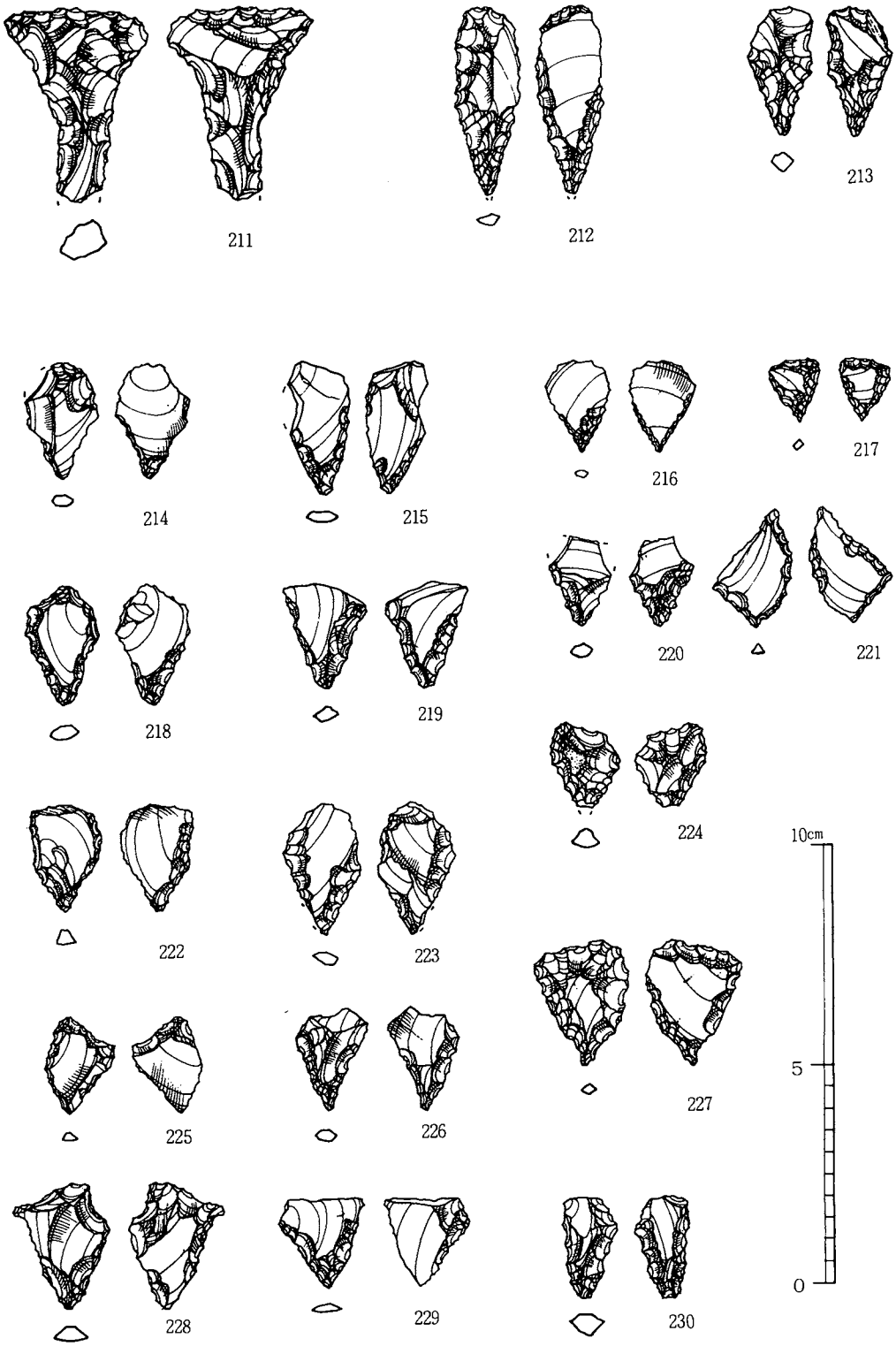
全部で21点（６点表面採集）が出土したが、山部と東側平坦部での２点の他は、すべて西側平坦部の北寄りに集中し、東西40m、南北20mの分布域にある。またこの分布は、東西それぞれに偏在し、対峙した二つの群によって構成され、あたかもその間に20m×20mの空白部を持っているかのようなあり方である（第97図）。

使用された石材は、黒曜石（217・220・224）以外すべて珪岩である。石器の形状は、211のように発達したつまみ部を持ったものとつまみ部を持たないものの二つがあり、さらに後者は、舟形を呈しているもの（212・213・215・230）、菱形を呈しているもの（214・218・223）、三角形に近い形状を呈しているもの（216・217・219・220・222・224～229）の三つに分離することができる。

次に、形状修正の度合を中心にして観てみると、刃部を中心に加工がみられるという形状修正の度合の小さいもの（214～216・218～223・225・226・228・229）とその度合の大きいもの（211～213・217・224・227・230）という分類が可能である。特に、214・218・222は、剝片の形状を大きく修正することなく石器に仕上げられている。一方、これらの石錐には、その石質・形状はもとより規模においてもかなり斉一性がみとめられ、その重量は、ほとんどのものが１g前後～２g前後である。こうしたことを考え合せると、石錐での斉一的な性質と形状修正の度合には、なんらかの相関関係が指摘できるかもしれない。



第97図　遺物分布図（石錐）


211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
10cm
5
0

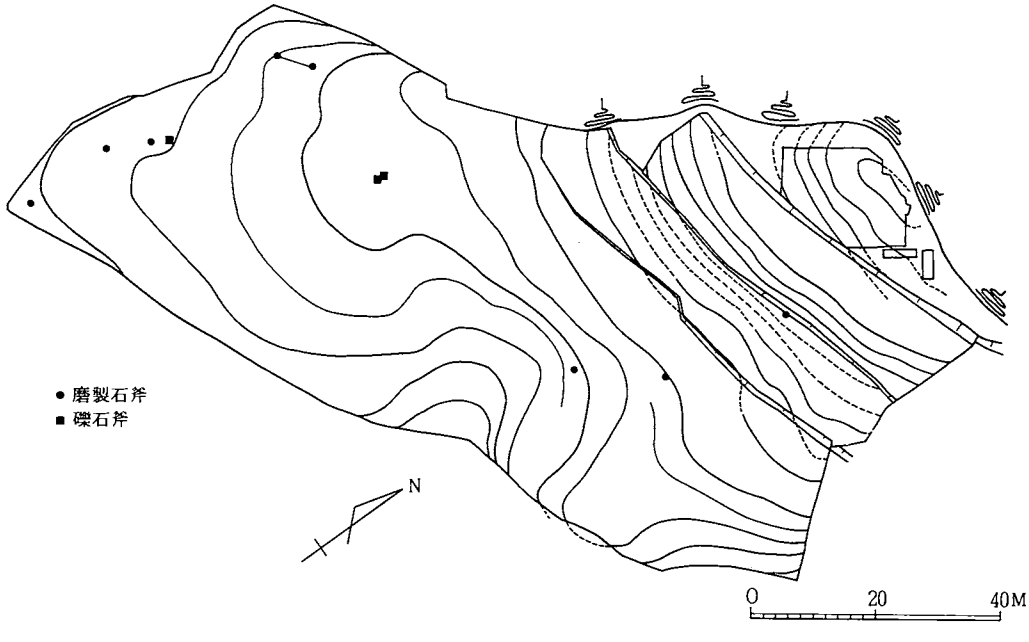
第98図　石器実測図

石斧（第100図）

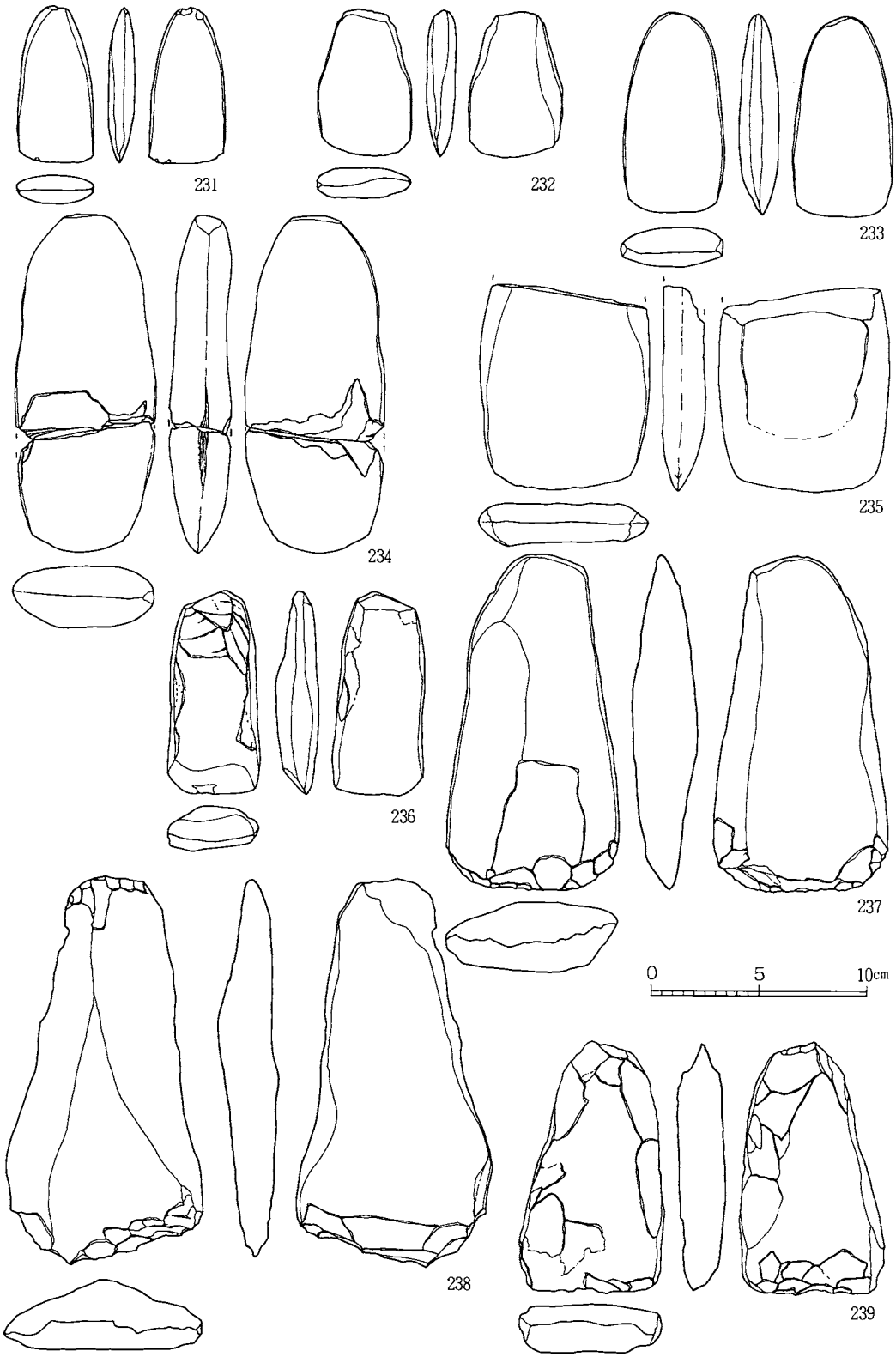
砂岩６点（231～234・236）と安山岩４点（235・237～239）の計10点の石斧が出土し、その種類には磨製石斧（231～236）と礫石斧（237～239）がある。これらの石器はほとんどが単独出土であり、その分布には、偏在の傾向は認められない。ただ、石材の中で安山岩製の石斧は、丘陵の西側平坦部からのみの出土で比較的近接している（第99図）。

出土した磨製石斧には、二つの種類がある。つまり、小型品（231～233・236）と大型品（234・235）である。そしてこれらは、器面の状態でも大きく異なっている。小型品は、定角形の磨製石斧と呼ばれるものに相当し、丁寧な研磨によって表面が滑らかに調整されている。研磨以前の整形は、その痕跡が232・236に一部残されているが、それによると敲打が観察されずに整形剝離のみで、このことから製作工程は、「素材獲得→整形剝離→研磨」の３段階をとるものと推定できる。刃部には、両刃（231～233）と片刃（236）の二つの形態があり、中には刃縁に対して直角方向の刃こぼれ状の細かい欠損が観察されるものもある（231・232・236）。これに対して大型品は、研磨の状態が荒く、肌触りの悪い器面を持ち、その製作工程は、敲打の段階を加え、「素材獲得→整形剝離→敲打→研磨」の諸段階によっている（234）。

礫石斧は、素材である礫の加工の状態によって刃部を中心にみられるもの（237・238）と周辺部分にもその加工が及ぶもの（239）に分類される。刃部は、いずれも激しい使用によって生じた剝離・欠損が観察される。



第99図　遺物分布図（石斧）



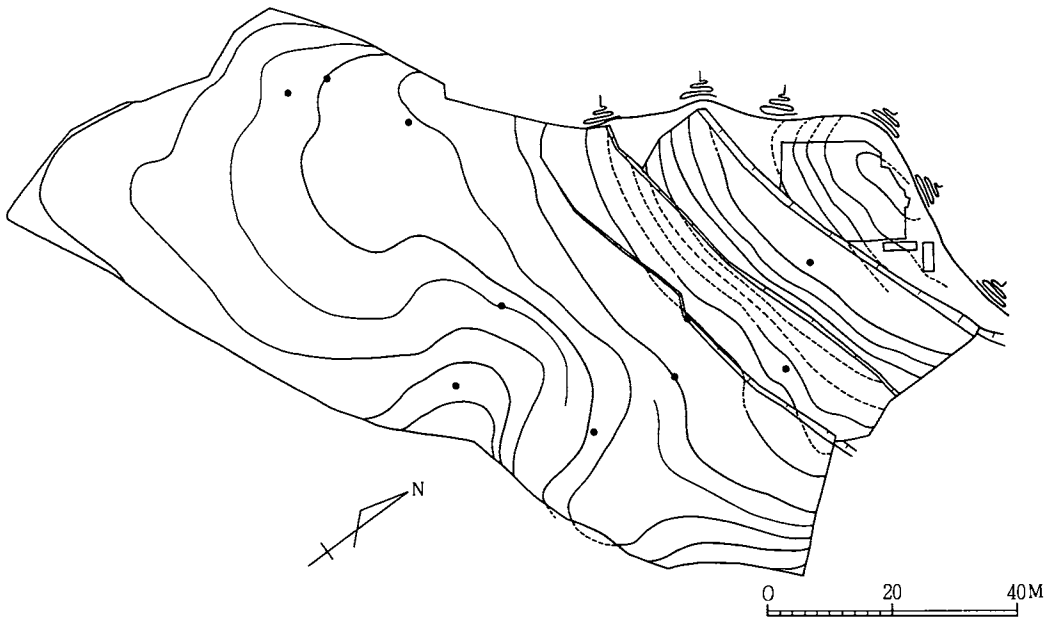
第100図　石器実測図

礫器（第102図～第104図）

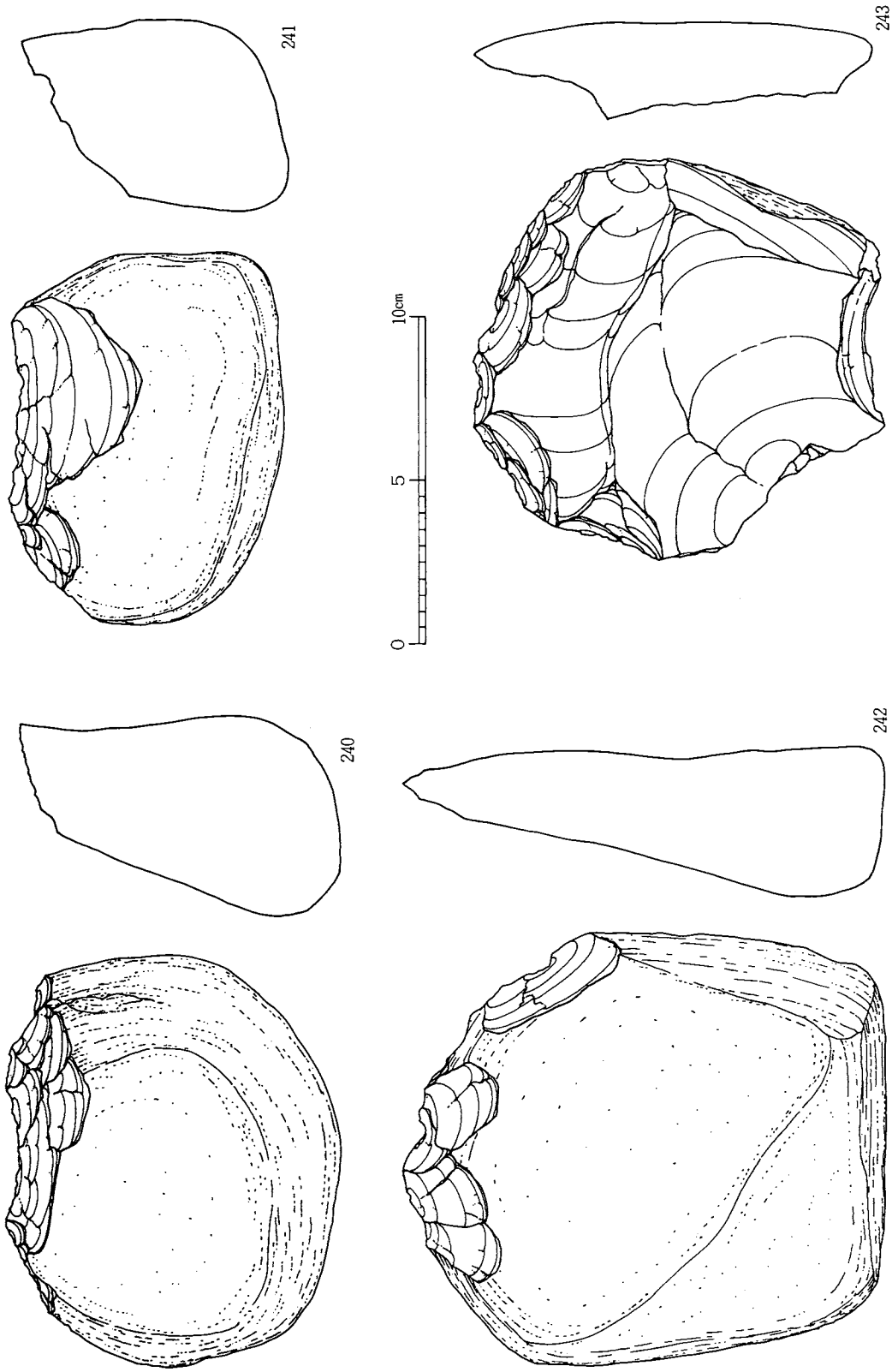
砂岩製の礫器が10点出土しているが、それらの分布は、大きく丘陵の谷部から東側部分にかけてみられる群と西側部分北側にみられる群の二つに分かれている。そしてその構成は、丘陵の谷部から東側部分にかけてのものが７点で、西側のものは３点によっている。このように石器が東側に多く分布しているという点では他の石器の集中傾向とは対照的である。なお東側の石器分布は、南北60m・東西20m と広範囲に及び、その傾向は散在的である（第101図）。

出土した10点の礫器は，すべて片刃礫器で、その素材の状態によって三つの礫器に分類することができる。すなわち、円礫をそのまま素材としているもの(240～242)、表面に礫面を残した剝片を素材としているもの（243～245）そして分割礫を素材としているもの（246～248）である。そこでそれぞれについてみてみよう。

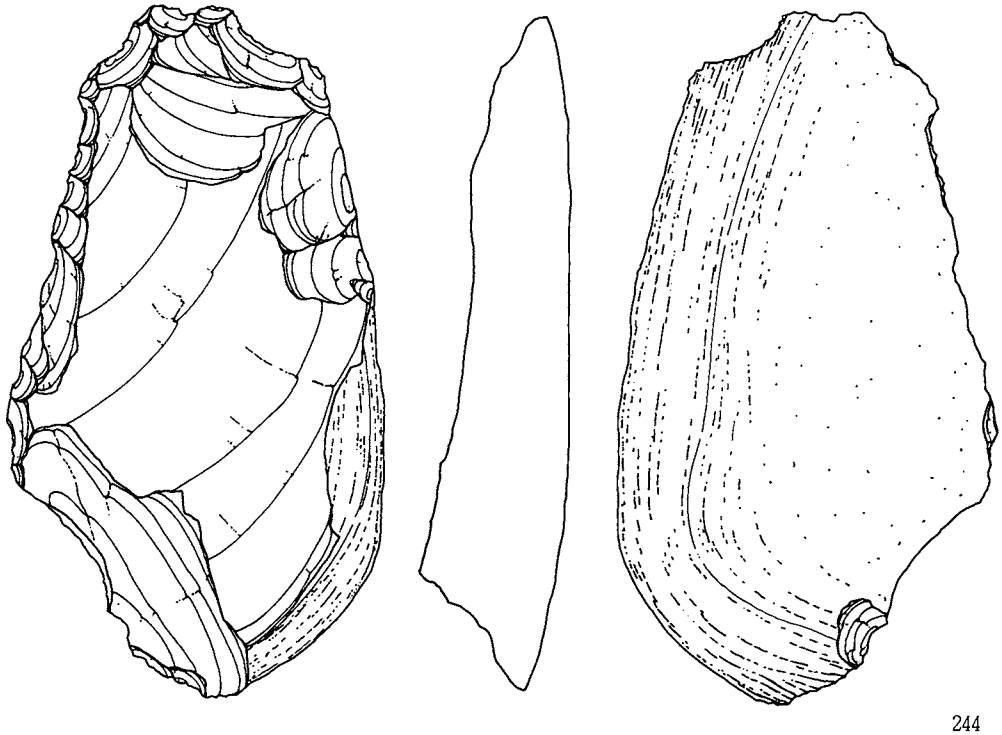
円礫を素材としているものは、素材の短軸側の一端に刃部が作られているもの（240・241）と長軸側の一端に刃部があるもの（242）の二つがあるが、石器の刃部側は，いずれも素材となる礫の端部が薄くなっている部分にあたっている。剝片素材の礫器は、円形(243)と楕円形(244・245）の形状をとるものがある。その中で後者は、刃部の位置が短軸の一端にあるもの（245）と長軸の一端にあるもの（244）と刃部の位置が異なっている。分割礫素材の礫器は、断面形が三角形をとるもの（246）と四角形をとるもの（247・248）があるが、それらは、その規模・形状の点でも比較的近似している。



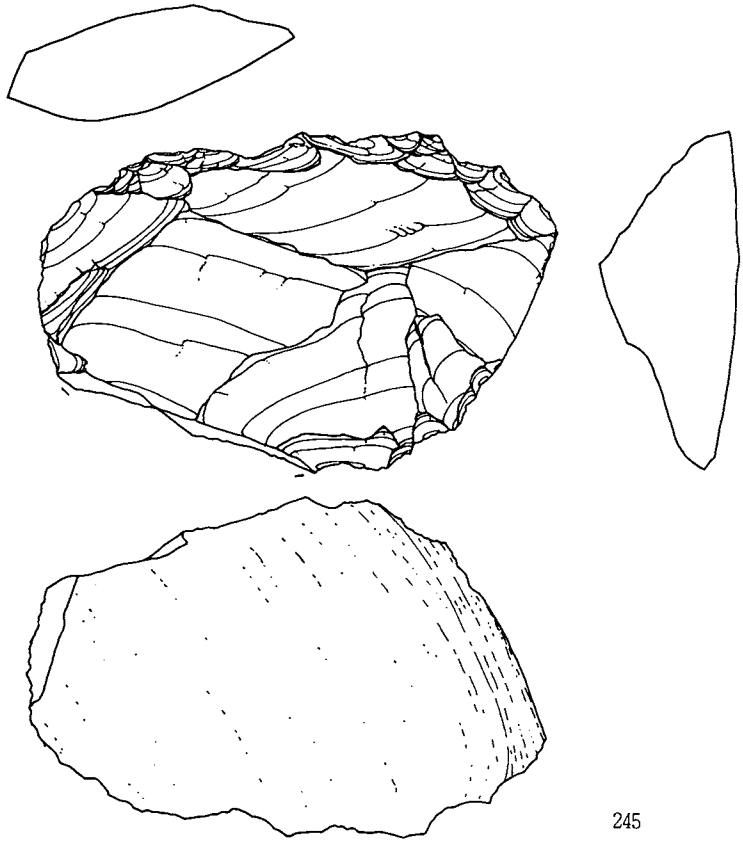
第101図　遺物分布図（礫器）



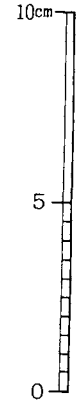
第102図　石器実測図



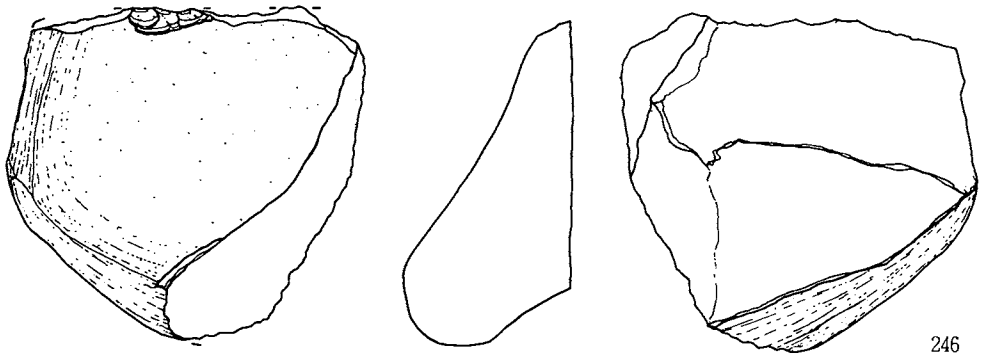
244

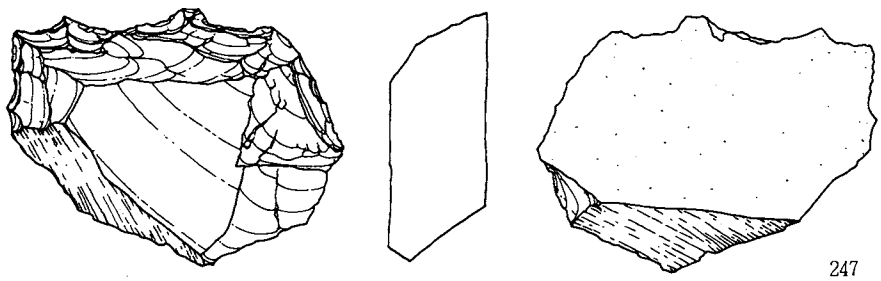


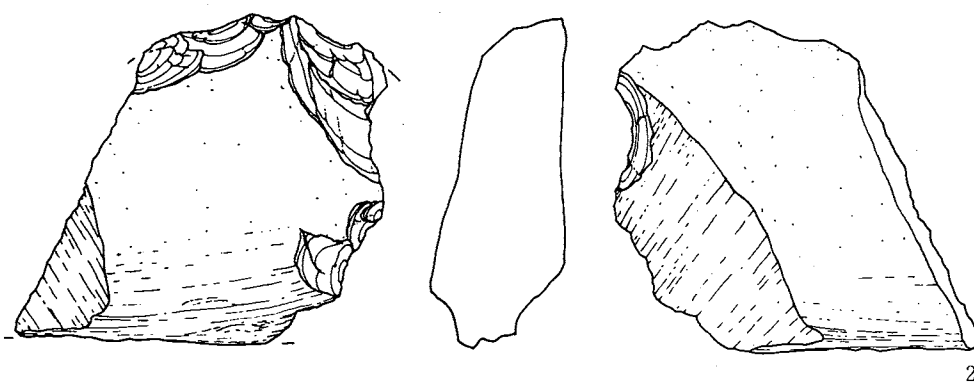
245



第103図　石器実測図







第104図　石器実測図

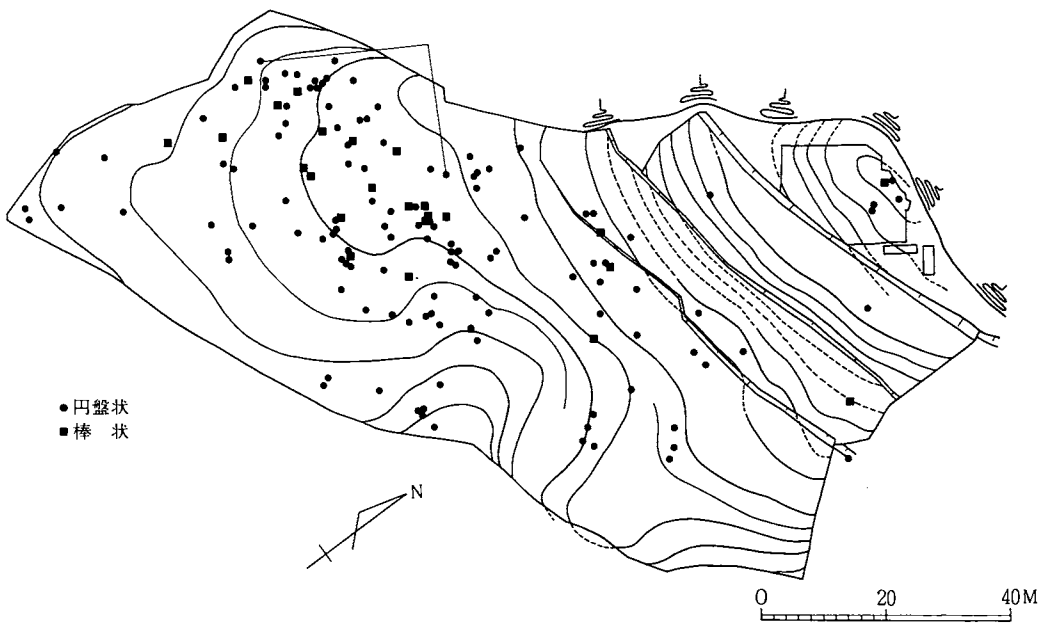
磨石・敲石（第106図～第112図）

磨石・敲石は、円盤状のものと棒状のものの二つの形状があり、円盤状のもの121点と棒状のもの23点の計144点が出土した。そしてこれらは、丘陵の平坦部を中心としてその西側に多く分布し、その分布は群を構成するような偏在の傾向ではない（第105図）。石材としては、砂岩を中心として安山岩と花崗岩が使われている。

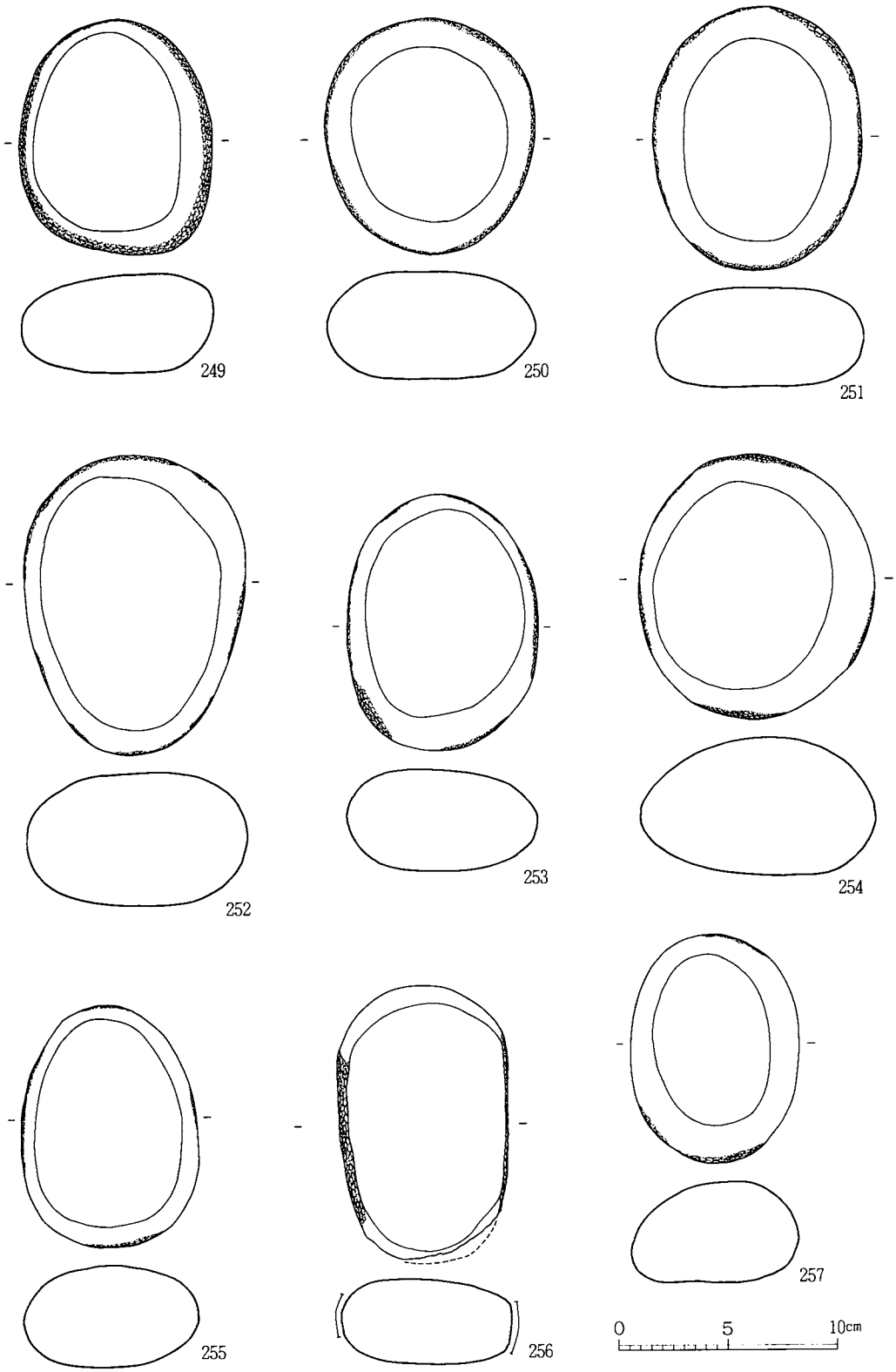
磨石・敲石は、上記したように二つの形状がある。これらは、さらにそれぞれの状態によって分類が可能である。以下、それぞれの形状ごとに観察していきたい。

円盤状の磨石・敲石は、完形品56点・欠損率が50％までのもの17点・60％までのもの38点・それ以上のもの９点という状態である。そこで完形品を中心に敲打の状態で分類した。それによると次の二つに区分することができる。すなわち、敲打の痕跡を持つもの（249～272）とそれを持たないもの(273～295)である。さらに前者は、側縁部のみに敲打痕跡を持つもの(249～261・267～272)と平面部にまで認められるもの(262～265)そして平面部のみに認められるもの(266)の三つに区分できる。

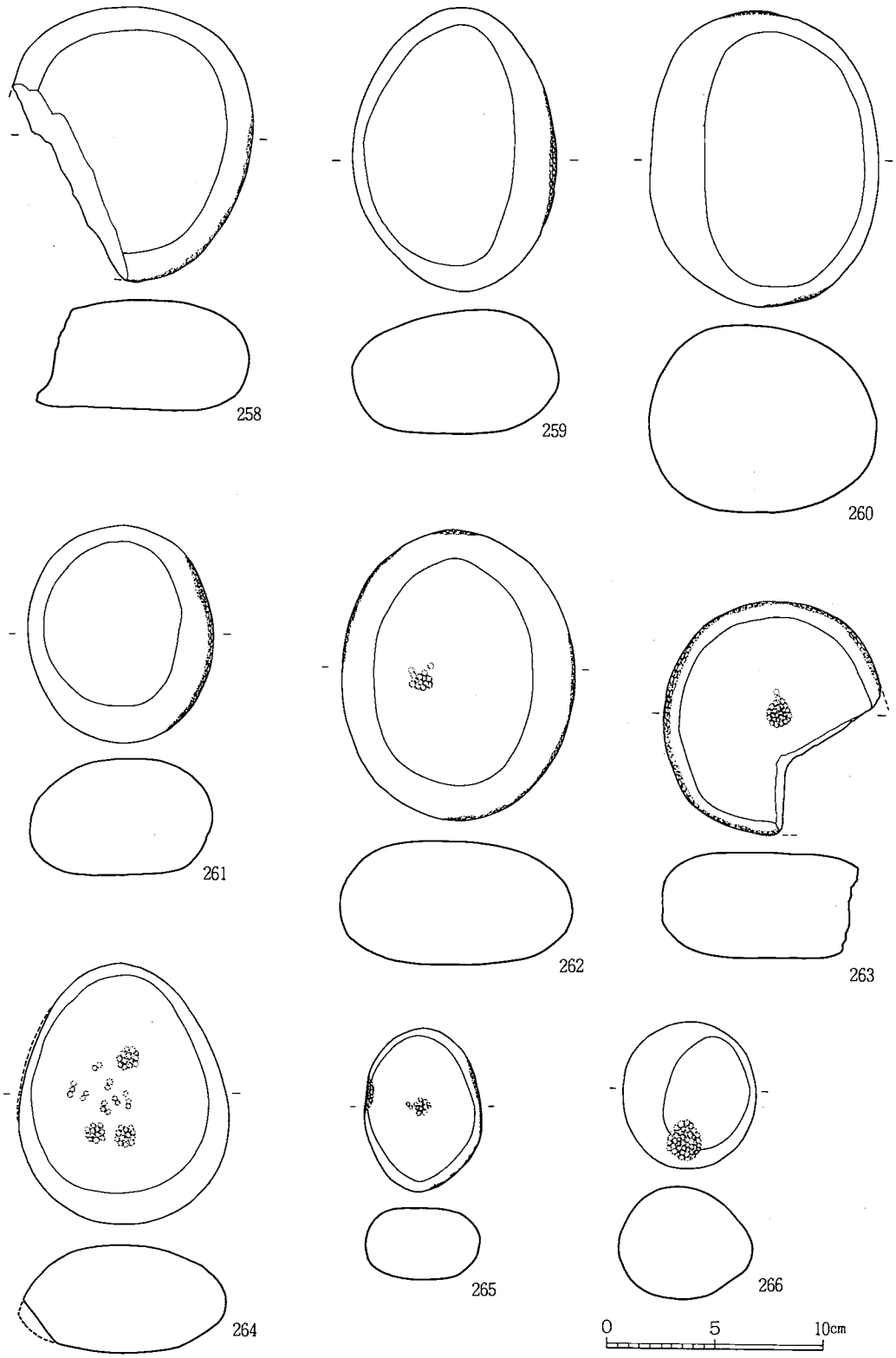
棒状の磨石・敲石は、完形品10点・一部欠損３点・欠損品10点である。そこで前二者を対象として分類すれば、両端部に敲打痕跡ないし使用裂痕があるもの（297・299・302～307・309・312・315）と一端にあるもの（308・313）そして298のように敲打痕跡の他に擦れた部分があるものの三つに区分できる。



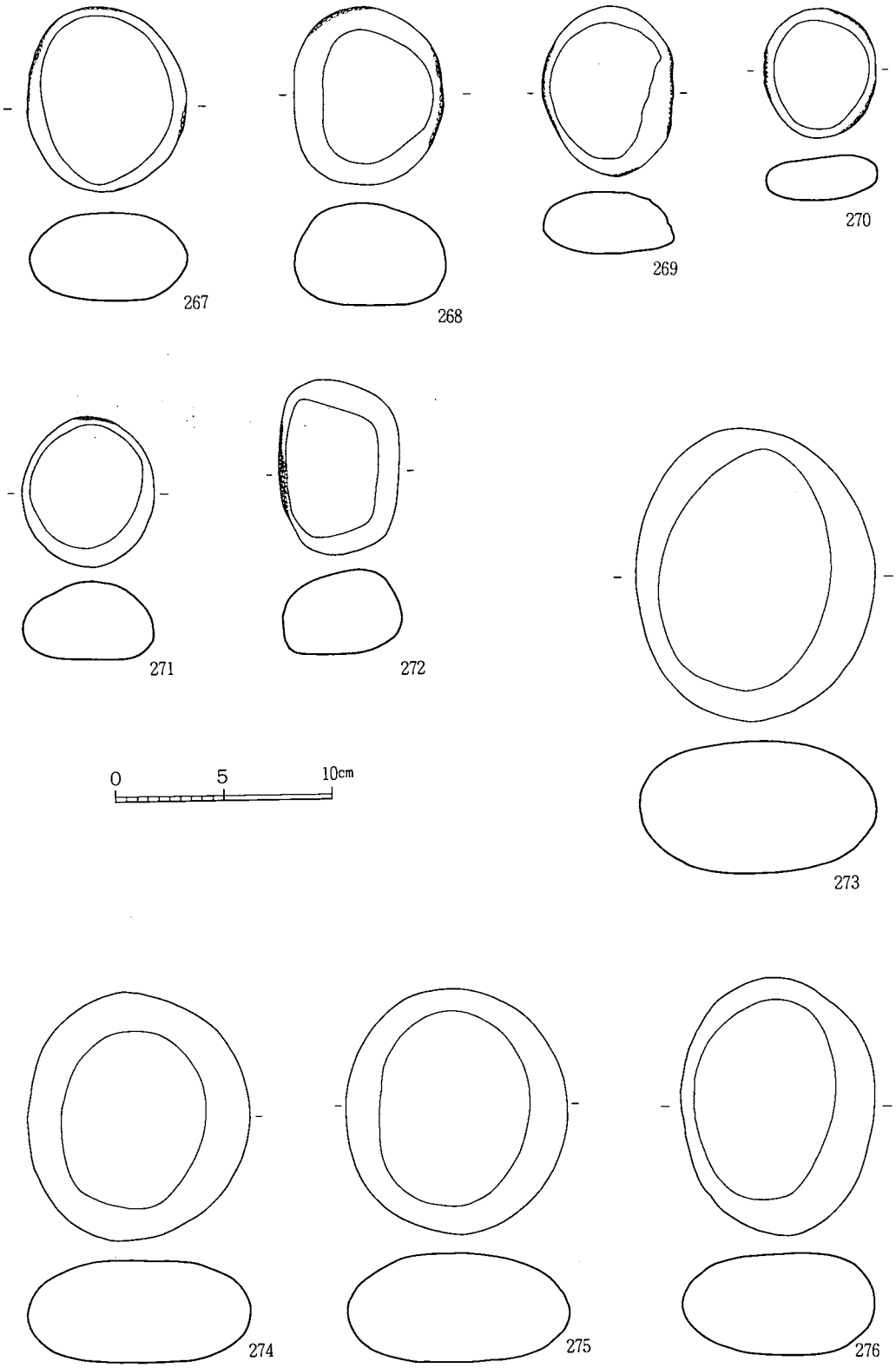
第105図　遺物分布図(磨石・敲石)



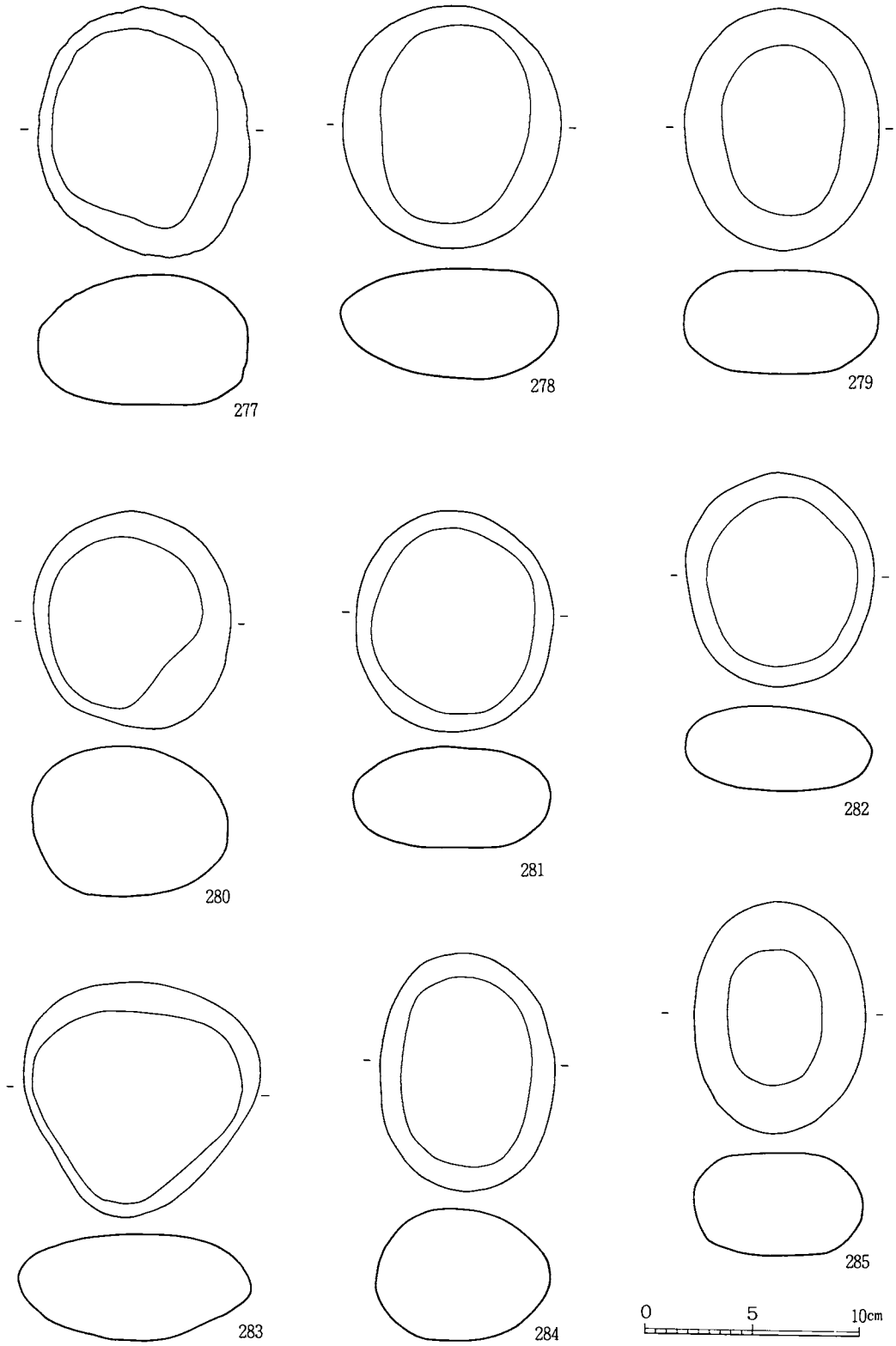
第106図　石器実測図



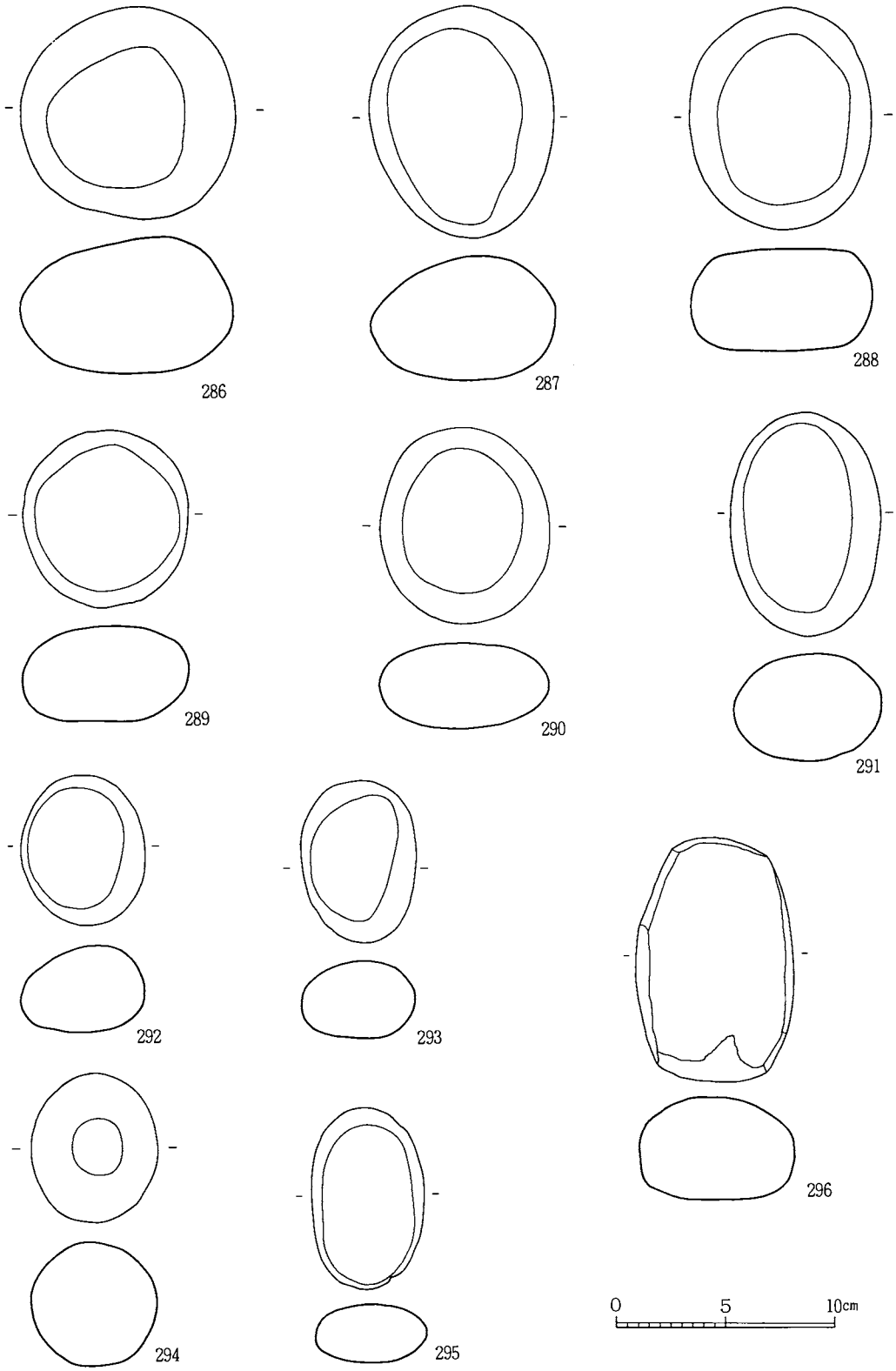
第107図　石器実測図



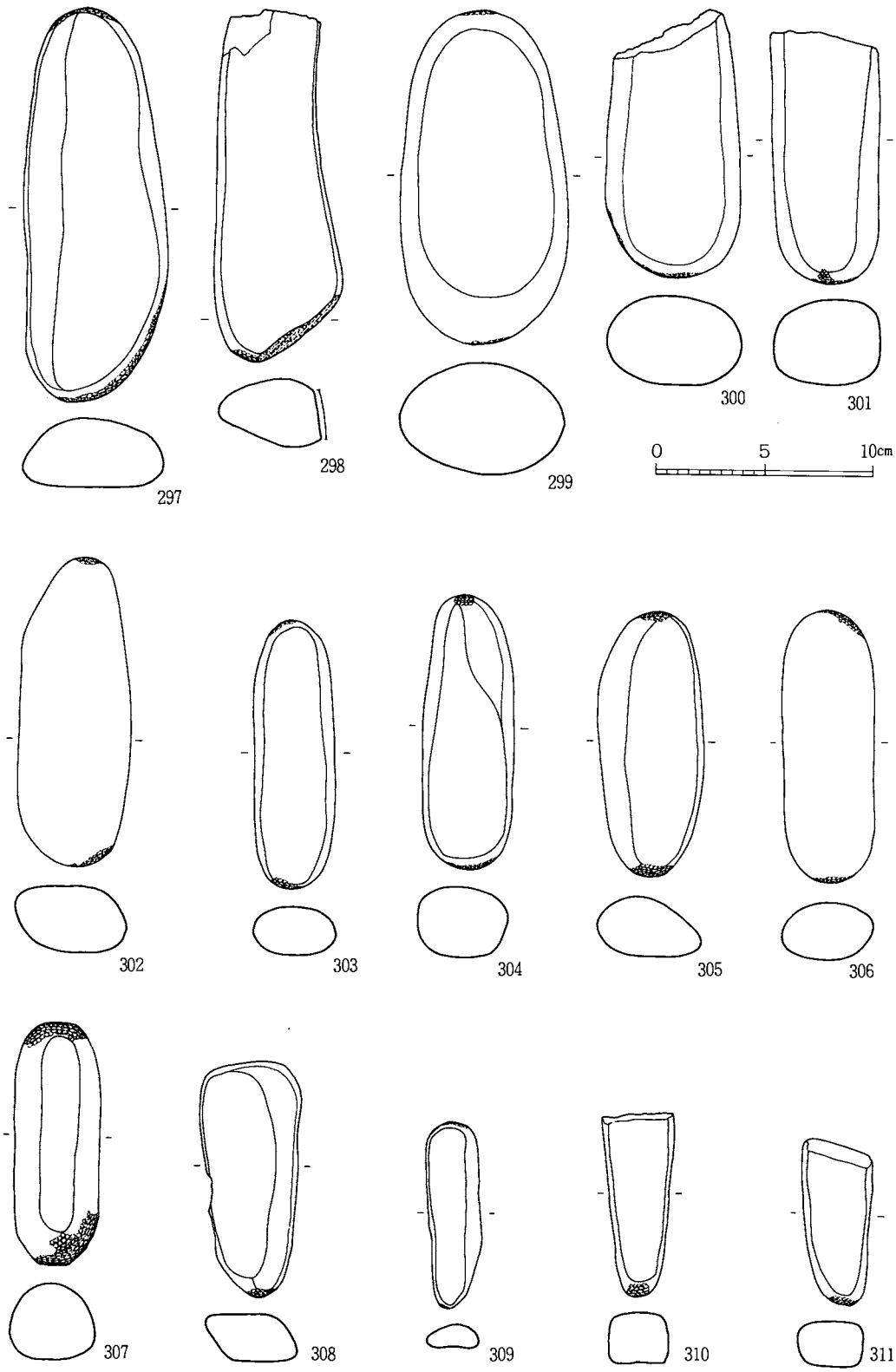
第108図　石器実測図



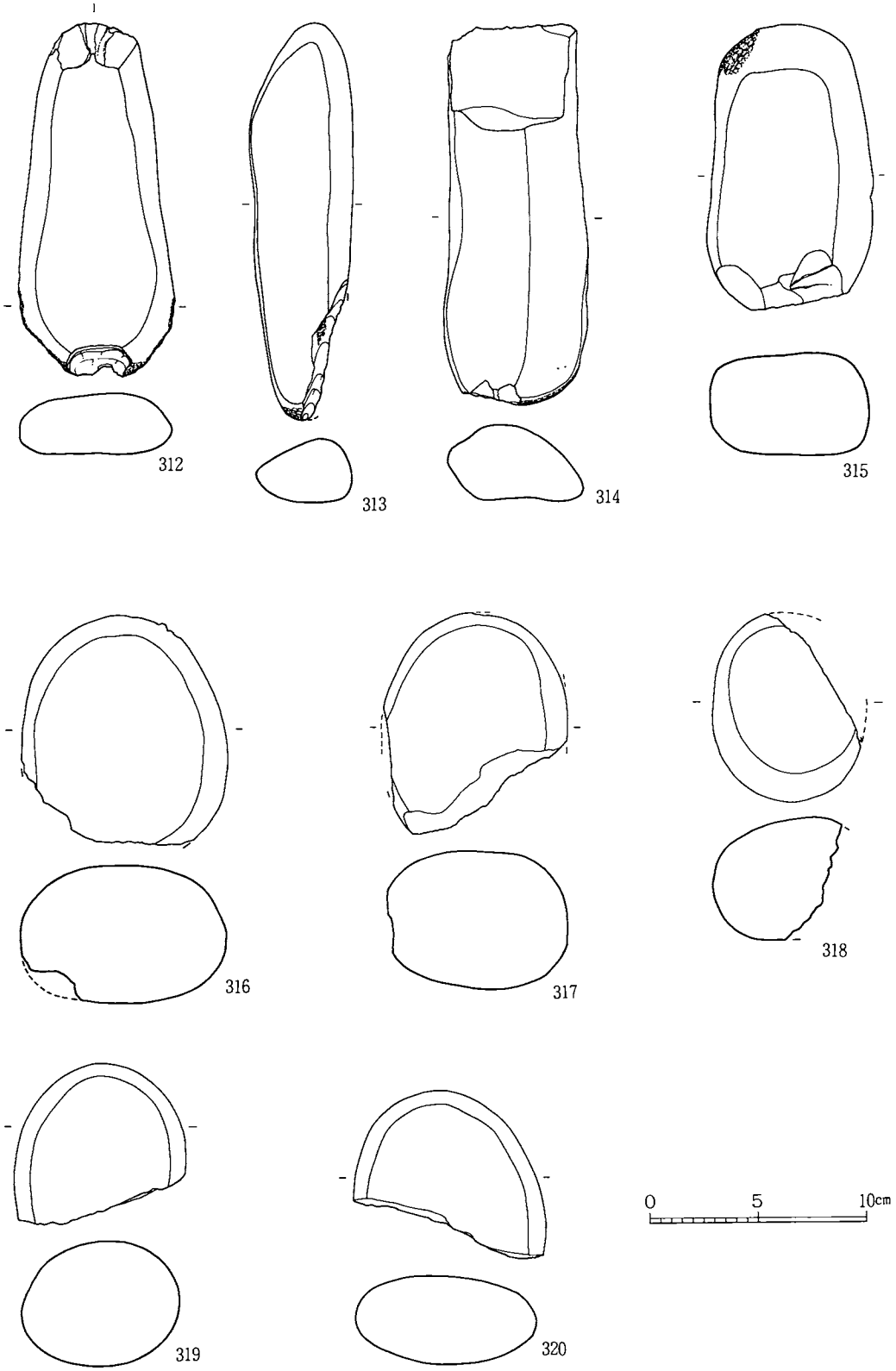
第109図　石器実測図



第110図　石器実測図


297
298
299
300
301
0
5
10cm
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311

第111図　石器実測図

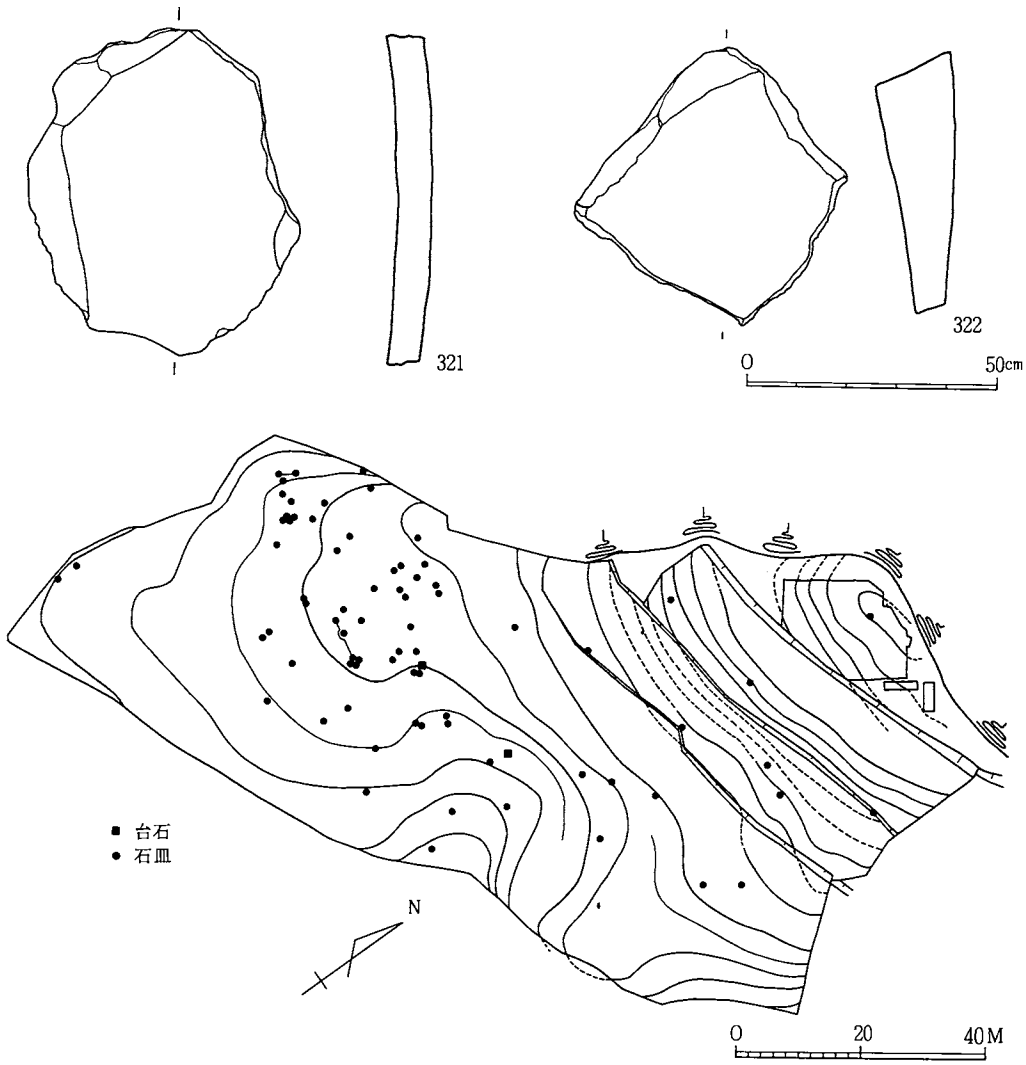


第112図　石器実測図

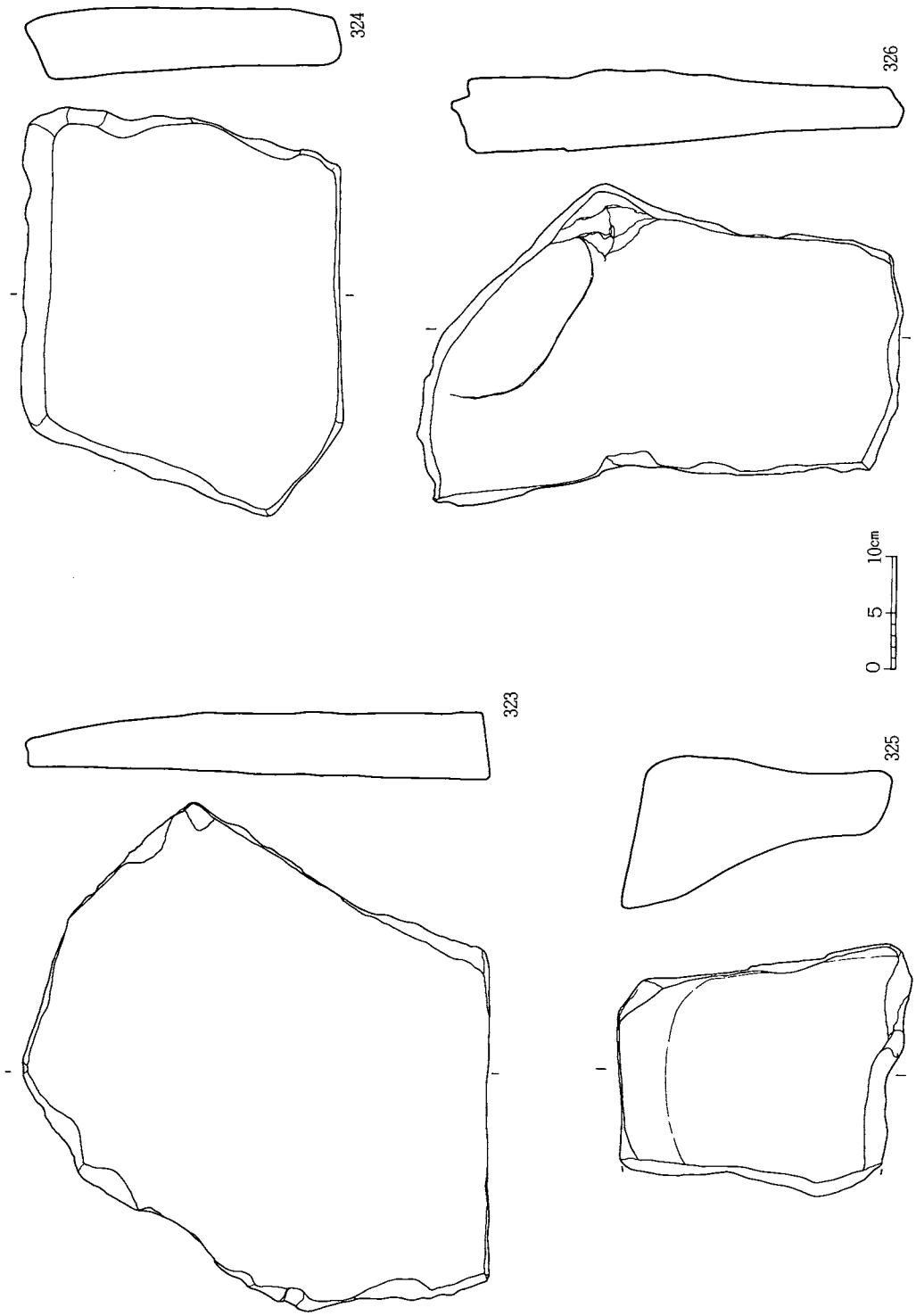
石皿・台石（第113図～第117図）

石皿・台石は、丘陵の平坦部しかもその西側を中心にして分布し、77点が出土している（第113図）。石質には、砂岩と凝灰岩の二つの種類があり、数量では砂岩の方が多い。

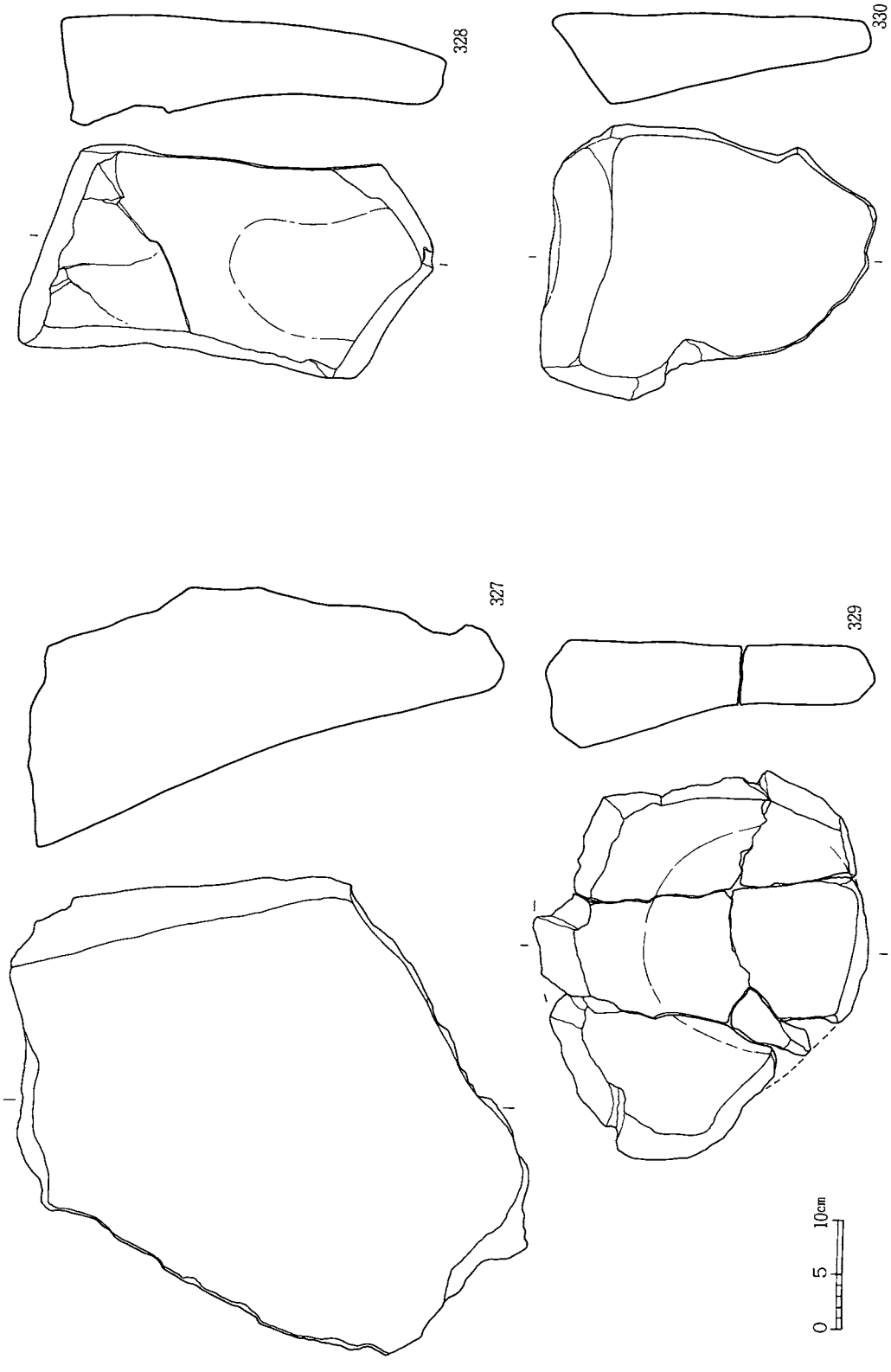
石皿（321～336）は、ほとんどが欠損品で、加熱されているためか赤変しているものも多くある。またその大きさは、大型のもので長軸が50cmないしそれを越えるもの（321・322）があり、小型のものでは長軸20cm前後（完形品）のもの（335・336）とその規模において極端な差があるようだ。この差がどのような意味を持つのかはわからないが、後者には携帯性があり、前者にはそれが無いことだけは確かである。こうした石皿には、その作業面の状態から窪みが顕著なもの（321・325・328・329・331～333）とそうではないもの（322～324・326・327・330・



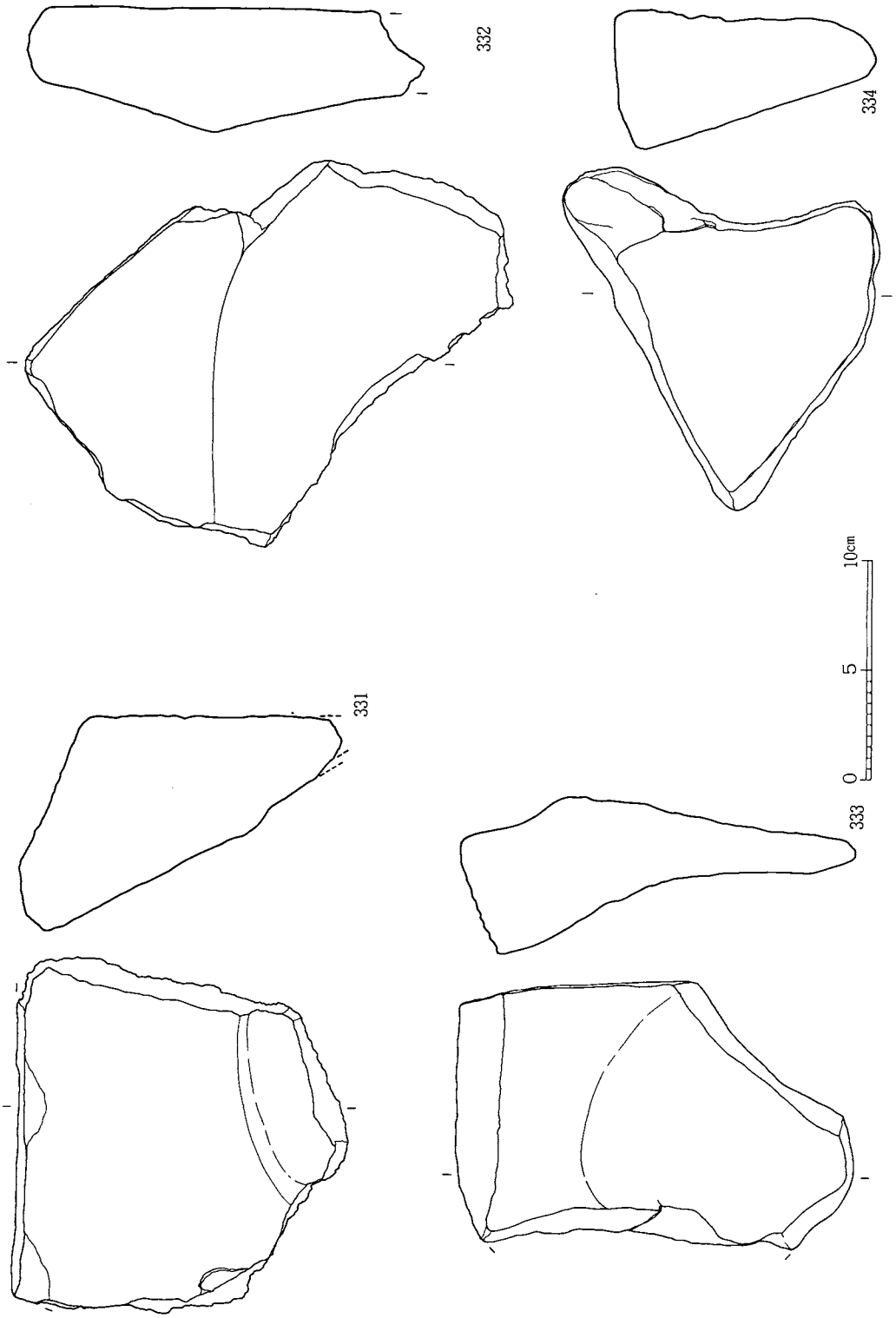
第113図　遺物分布図・石器実測図



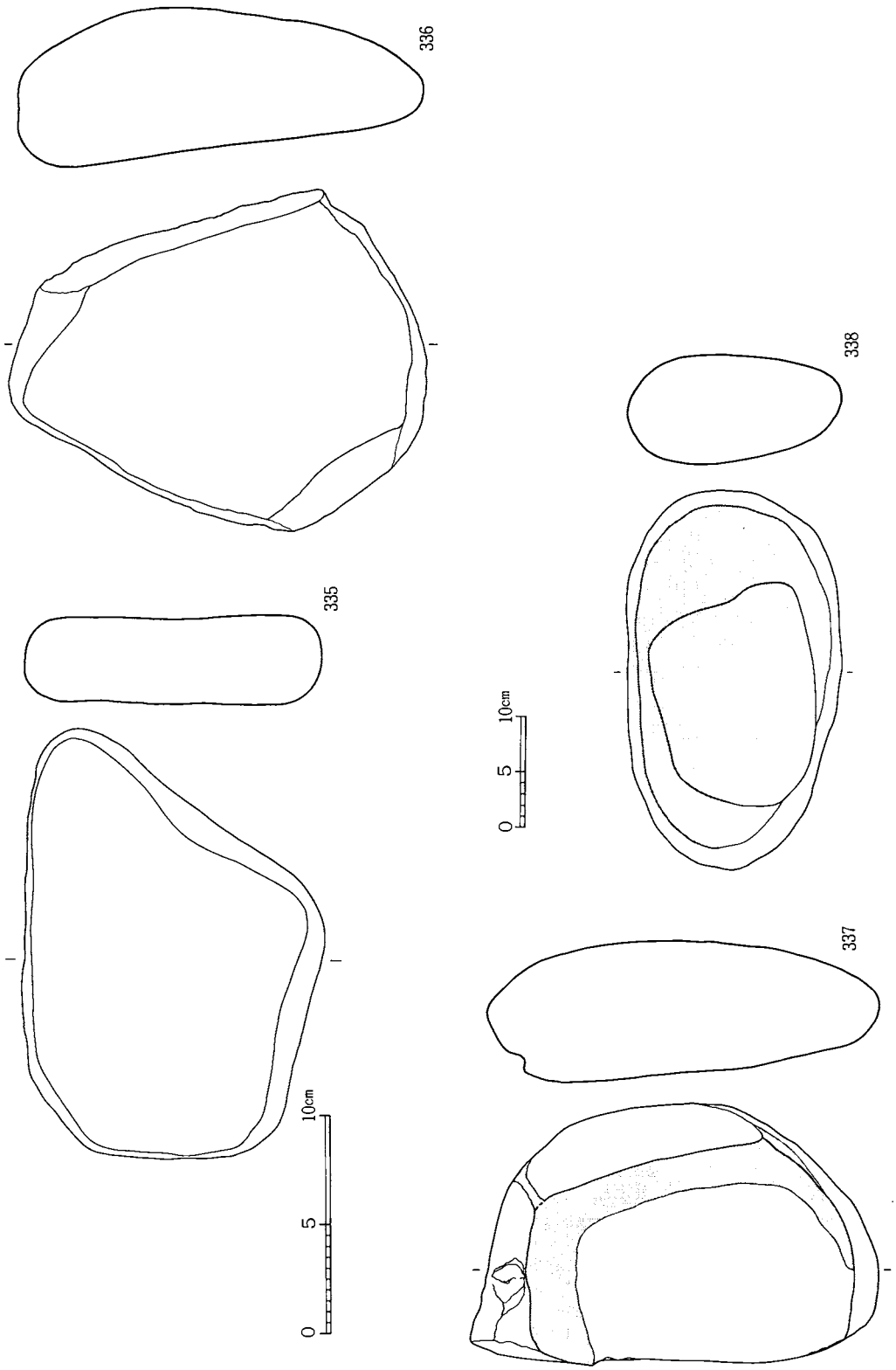
第114図　石器実測図



第115図　石器実測図



第116図　石器実測図



第117図　石器実測図

334～336）の二つの種類がある。

台石（337・338）は、石器表面に磨痕の他に敲打痕跡が残されているもので、2点が西側丘陵部より出土している。石質は、337が砂岩で、338が凝灰岩である。

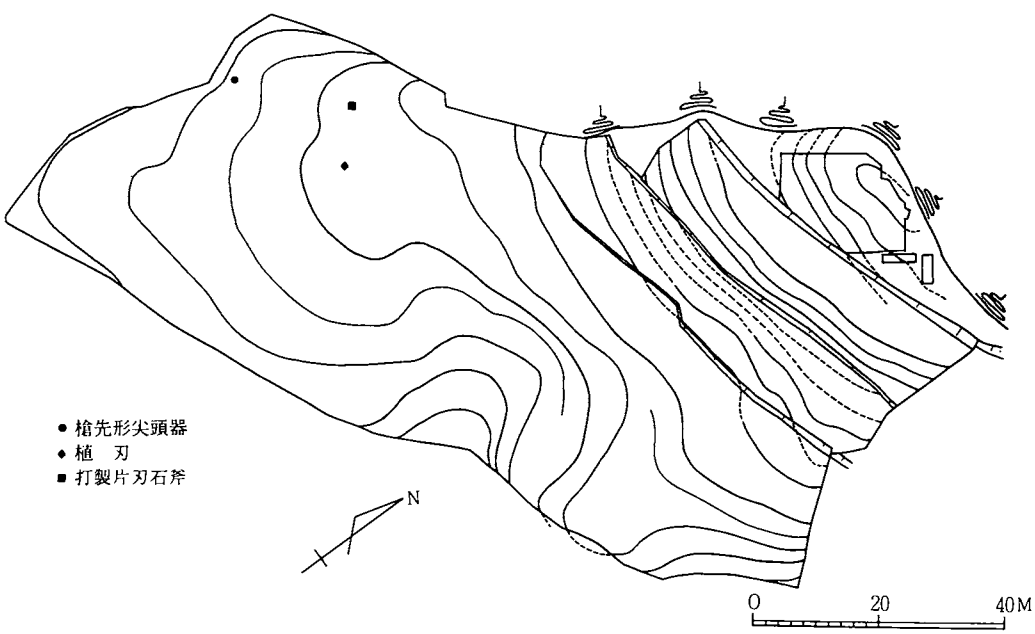
その他の石器（第119図）

以上のような定形石器の他に、打製片刃石斧・尖頭器・植刃が1点づつ出土している。

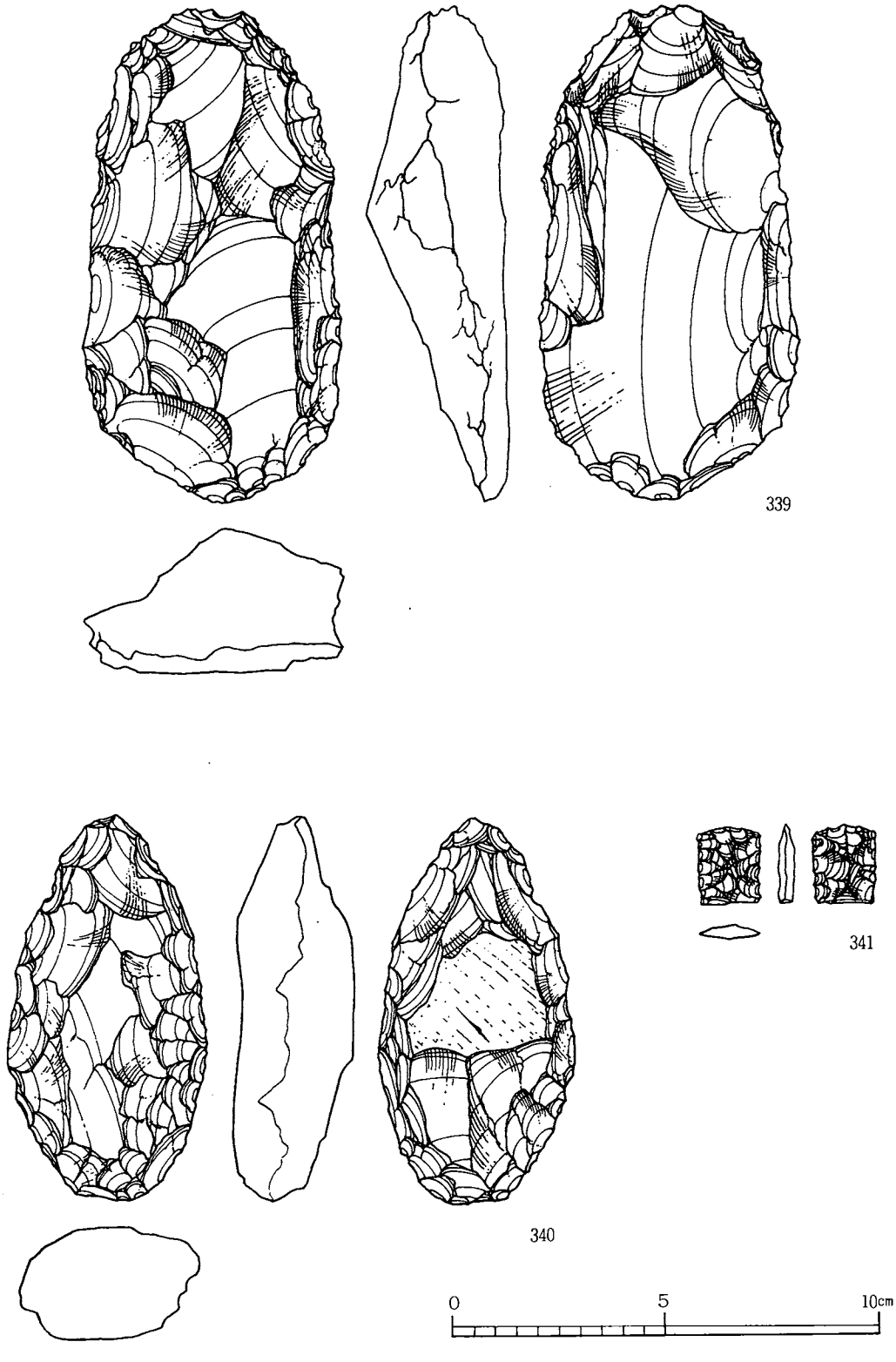
打製片刃石斧（339）　この石器の出土地点は、丘陵西側平坦部の北縁辺部にあり、多量の遺物が出土した部分にあたっている（第118図）。石器は、安山岩製の横長の厚手の剝片を素材とし、素材である剝片の形状を活かし、側縁部を中心に調整を施して楕円の形状に仕上げている。特に刃部は、縁辺部に調整があるだけで、その刃の角度は、剝片の段階のものがそのまま残されている。

槍先形尖頭器（340）　この石器の出土地点は、丘陵西側平坦部の西縁辺部にあり、打製片刃石斧の出土地点から南西方向へ20m行った所にある（第118図）。石器は、表面に礫面が残された安山岩製の横長の厚手の剝片を素材としている。調整はかなり荒く、石器の両側縁では階段状剝離となり、全体としてずんぐりとした状態である。おそらく未加工品であろう。

植刃（341）　この石器の出土地点は、丘陵西側平坦部にあり、打製片刃石斧の出土地点から南東方向へ10m行った所にある（第118図）。石器は、珪岩製の剝片を素材として表裏両面に調整を加えて仕上げられ、その断面形は、凸レンズ状を呈している。



第118図　遺物分布図（その他の石器）



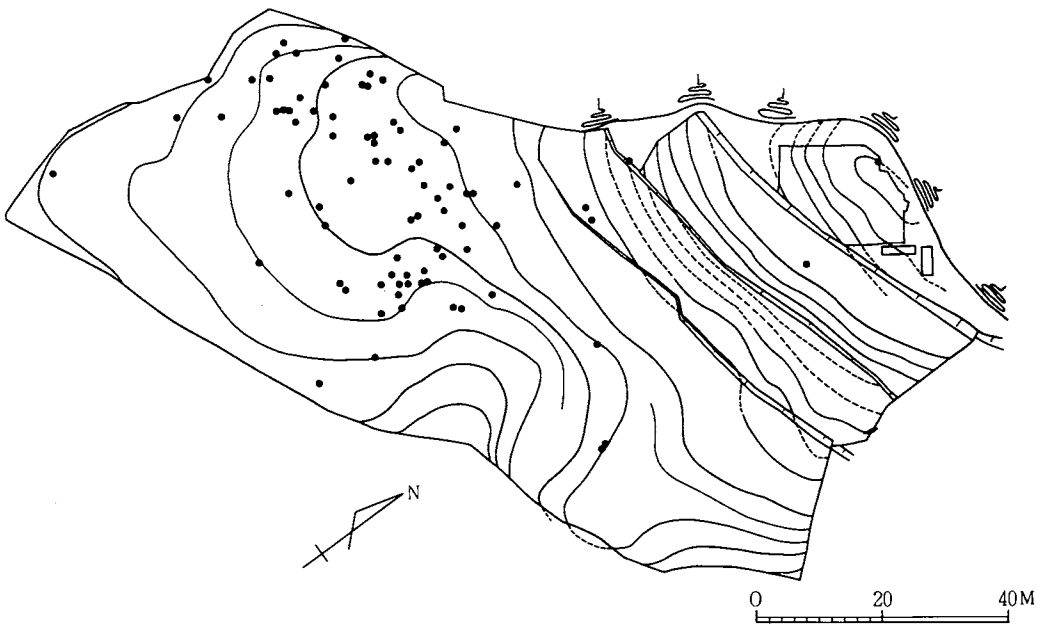
第119図　石器実測図

使用痕ある不定形石器（第121図～第127図・第135図）

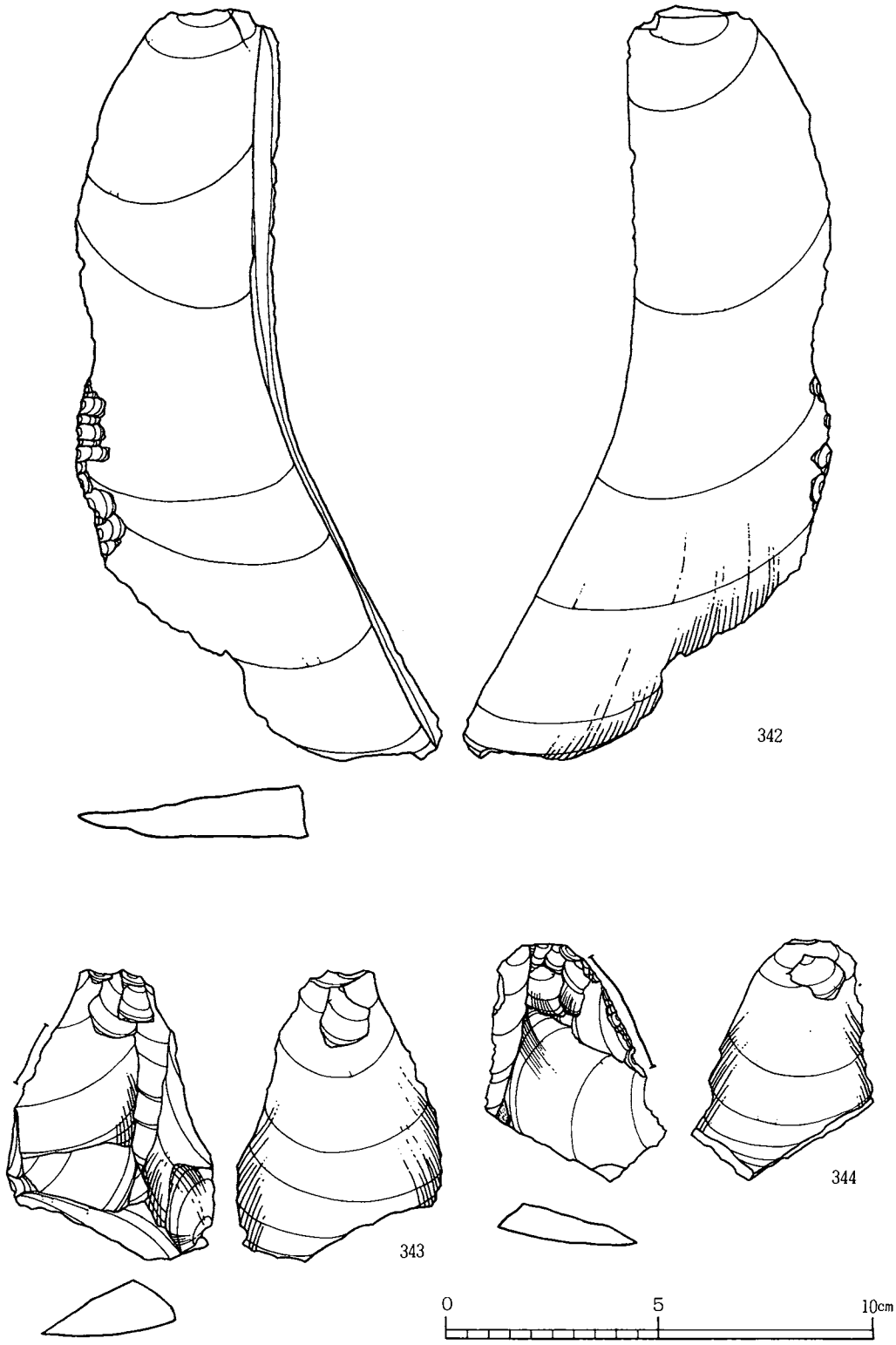
この石器は、刃こぼれ状の痕跡のみが観察されるもので、82点（剝片全体での２％）が出土した。これらは、ほとんどが丘陵の西側平坦部に分布し、長辺55m と短辺30m の長方形を呈する分布域に特に集中している。そして、その分布域の中心は、平坦部の中心部よりやや北側にずれ、縁辺部近くにある（第120図）。石材には、珪岩（324～337・400）と黒曜石（378～382）がある。

石器は、両側縁がほぼ平行している刃器状剝片を使用しているもの（342・345～351・353・355・360・379・380）とそれ以外の不定形剝片を使用したもの（343・344・352・354・356～378・381～383）の二つに分類することができる。そして、さらに後者には、縦に長い不定形剝片（343・344・352・354・356～359・361・378・381・383）と横に長い不定形剝片（360・362～377・382）がある。このように、石器として使用されている剝片には、刃器状剝片とそれ以外の縦長の剝片と横長の剝片の三つの種類があることがわかる。しかし、それぞれの剝片の形状・大きさにおける規格性は、ないようである。

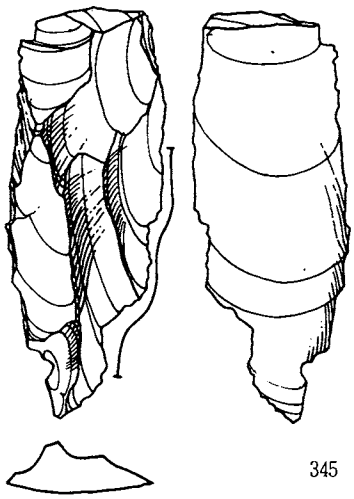
次に、石器表面に残された剝離痕の状態について触れておきたい。残された剝離痕は、その方向によって同一方向・上下方向・直行したもの・上下左右方向・求心的な多方向とさまざまである。しかし、こうした剝離痕の種類は、そのまま異なった石核に対応するものではなく、剝片剝離の進行過程によってそれぞれ生じる可能性もある。そこで、次の石核の項で剝片との対応が可能なように、ここでは上記した順で剝片Ａ～Ｅと仮称しておきたい。

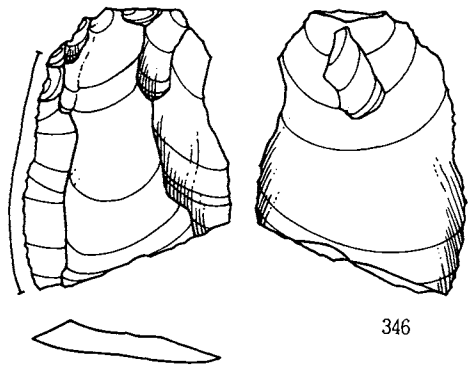


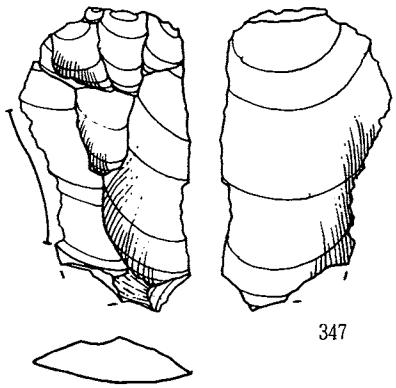
第120図　遺物分布図（使用痕ある不定形石器）

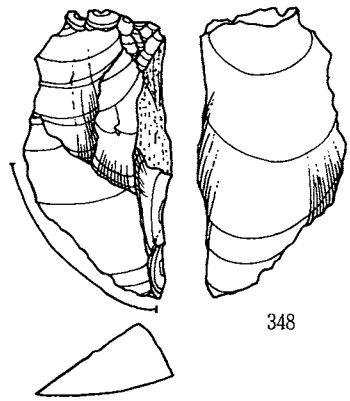


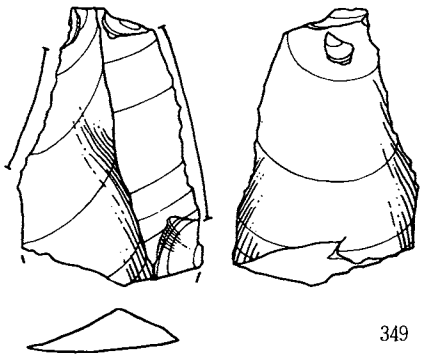
第121図　石器実測図

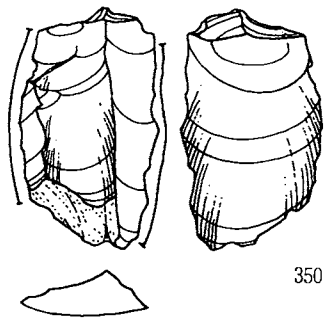


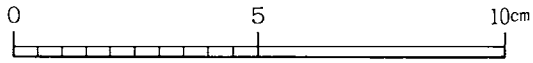




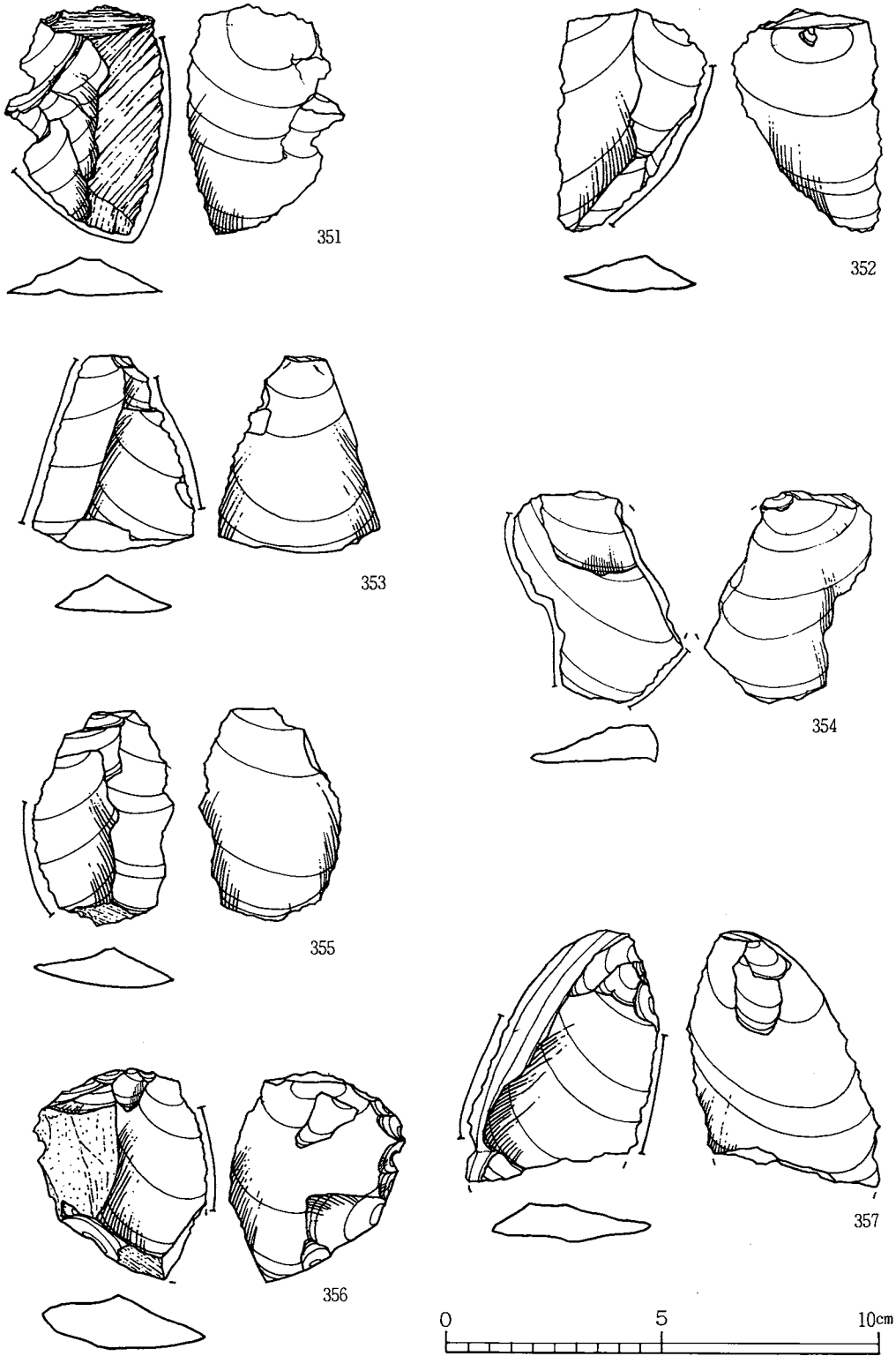




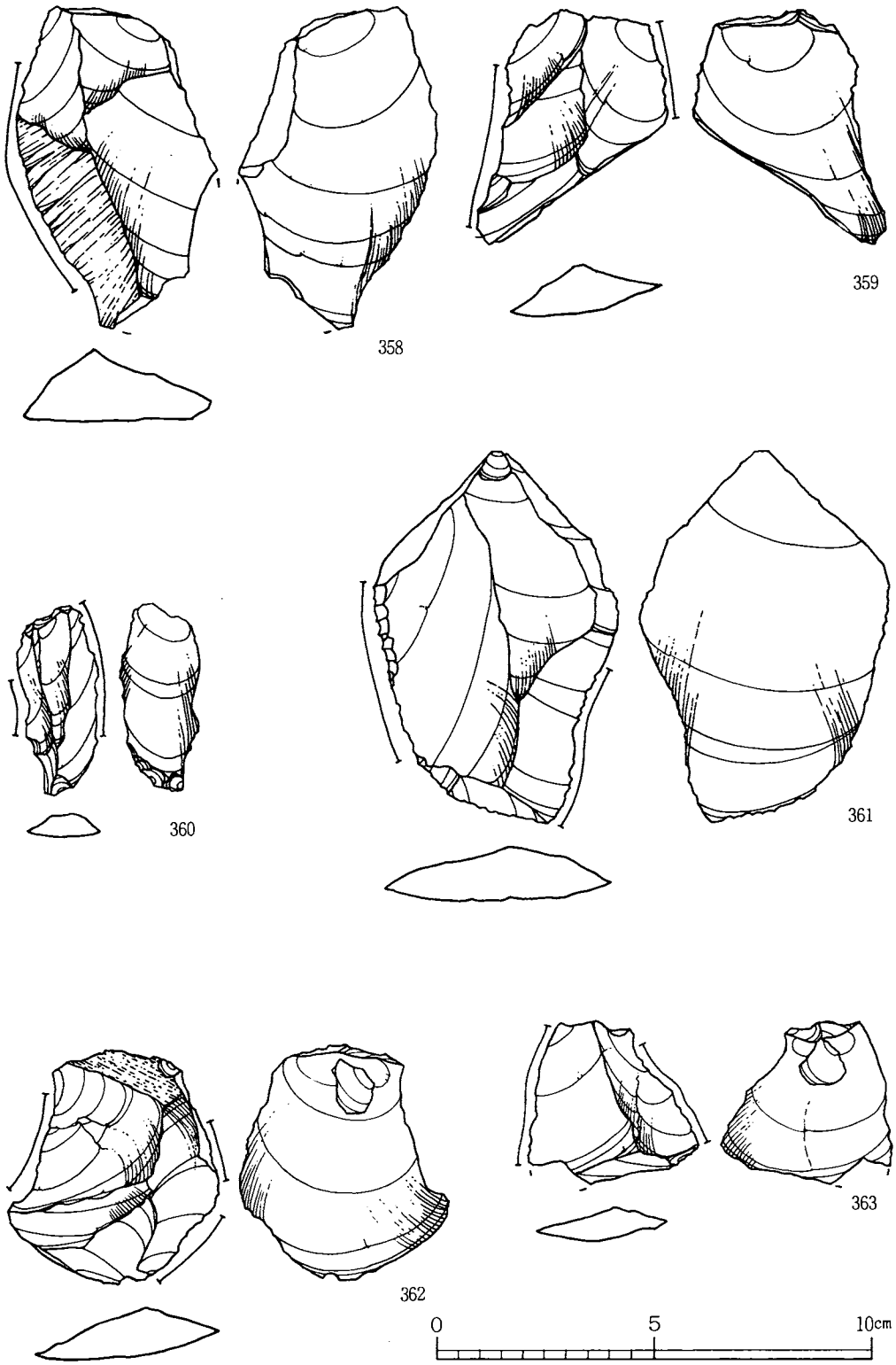




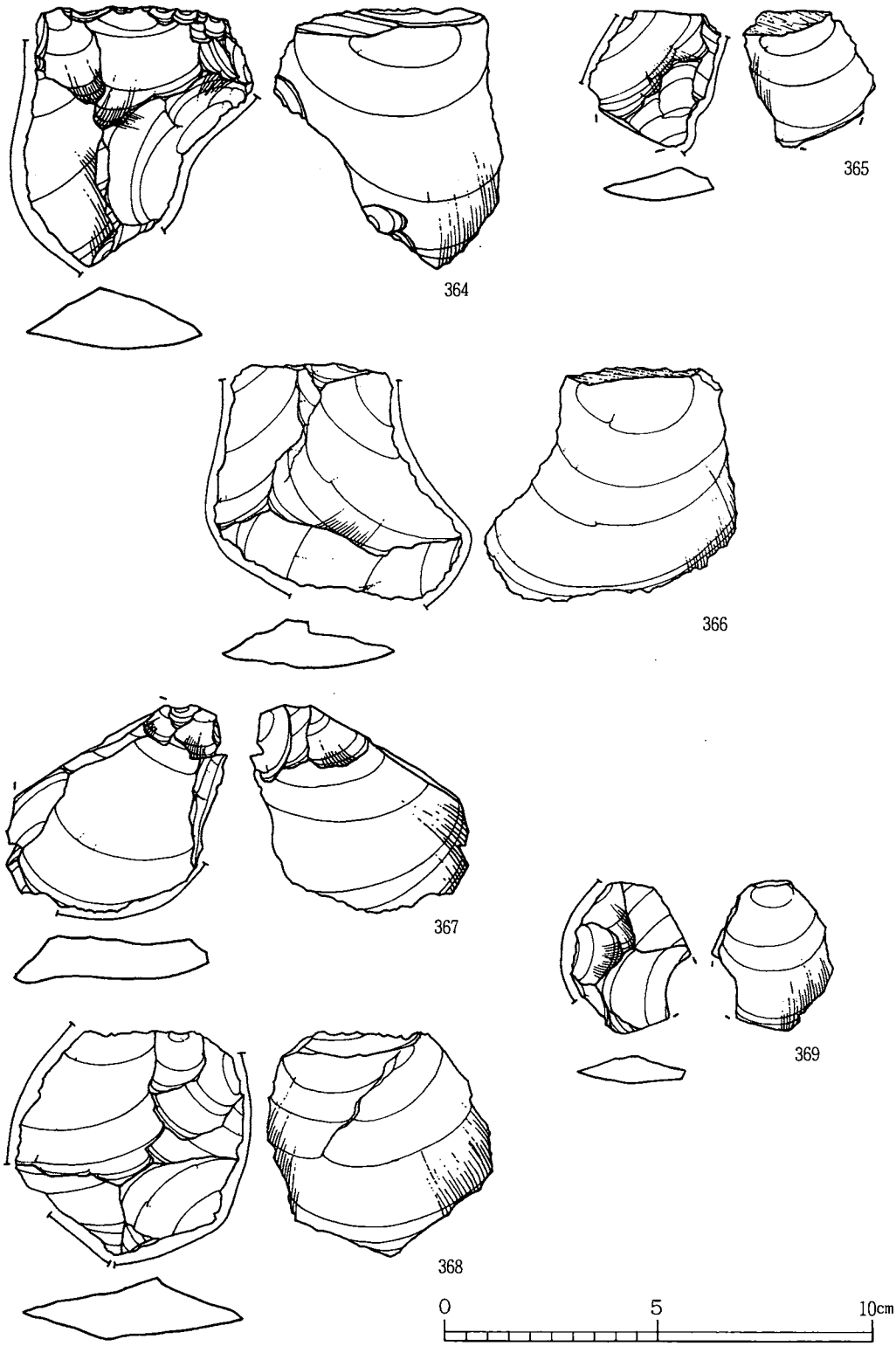
第122図　石器実測図



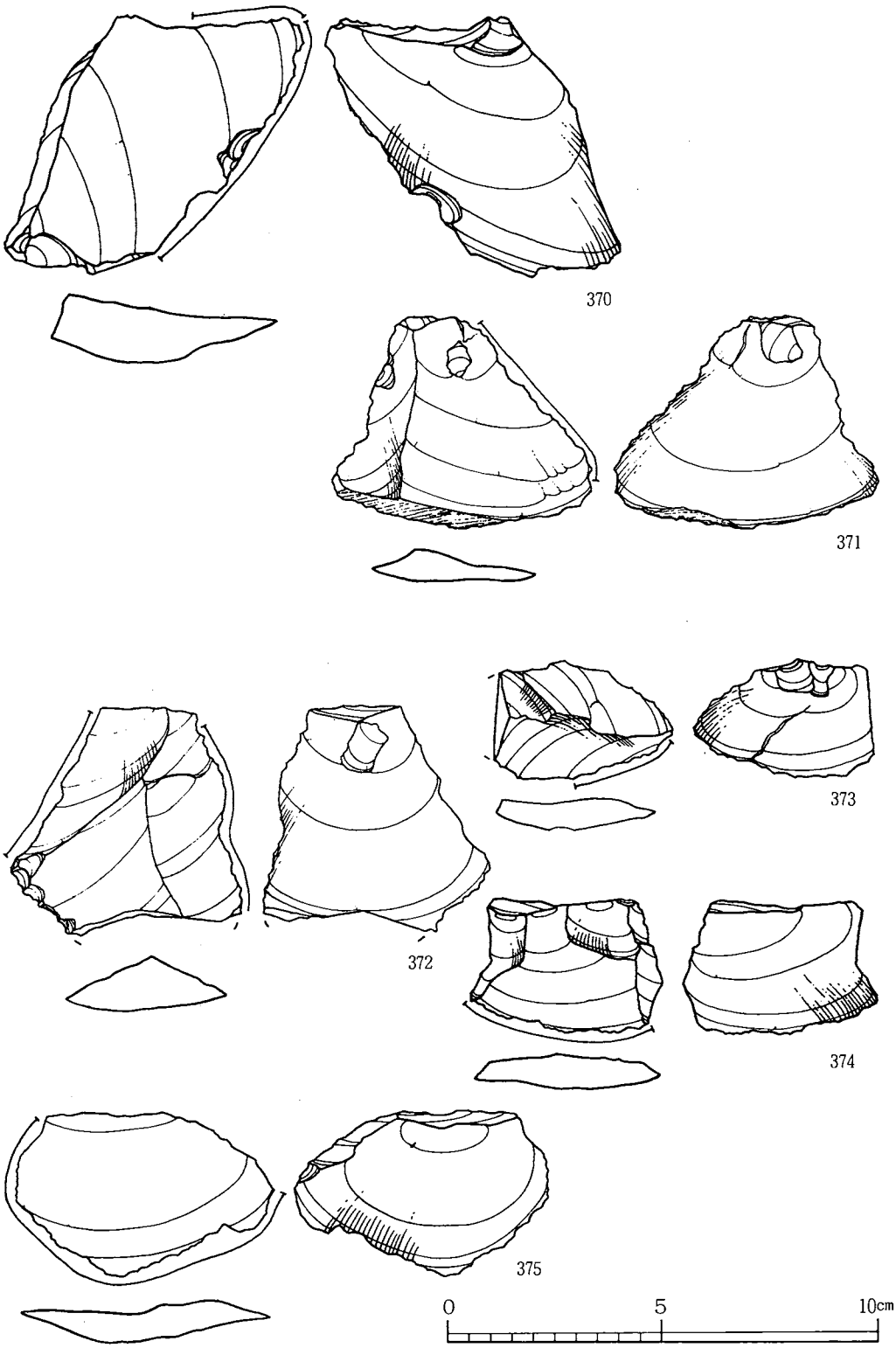
第123図　石器実測図



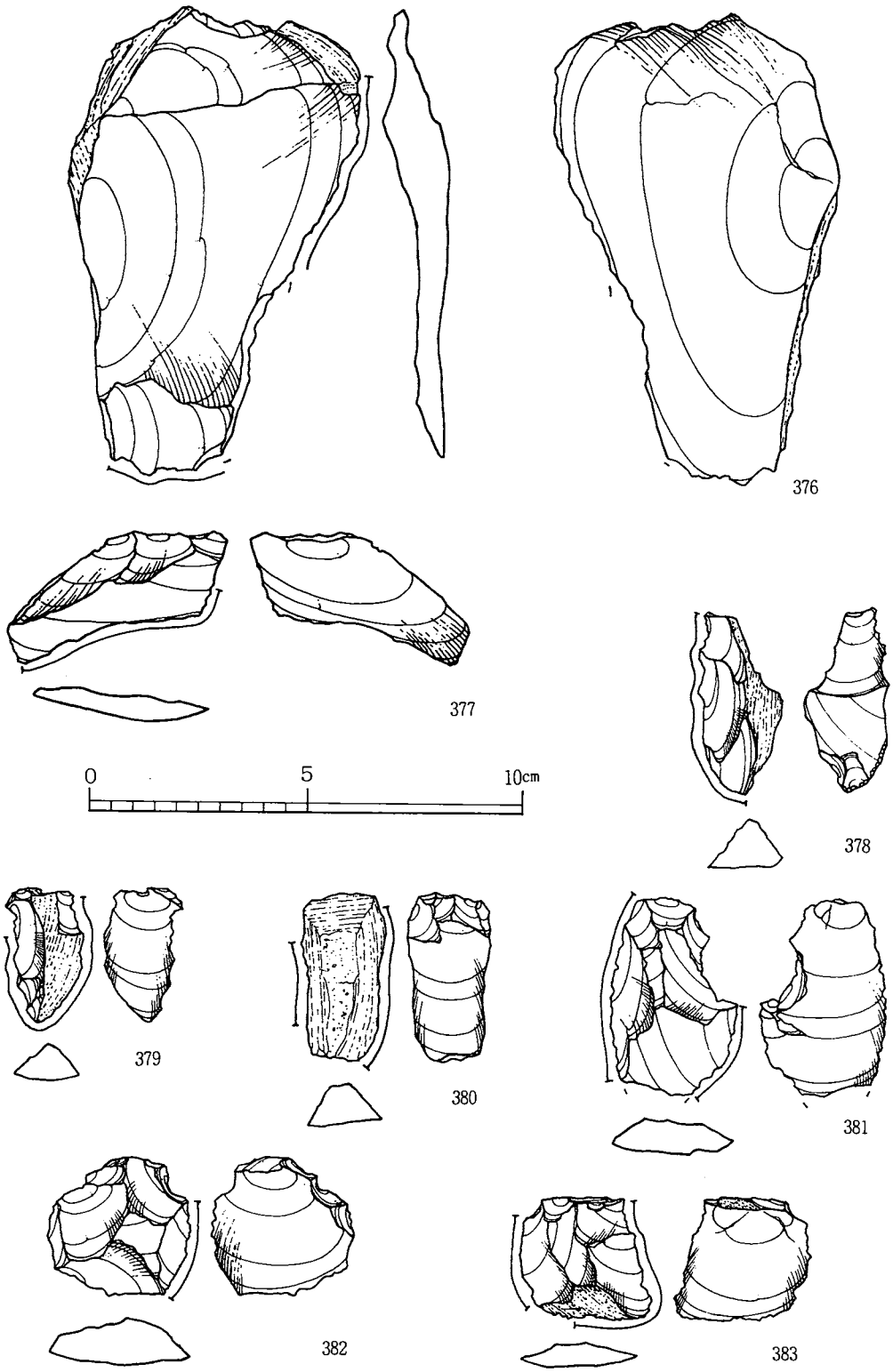
第124図　石器実測図



第125図　石器実測図



第126図　石器実測図



第127図　石器実測図

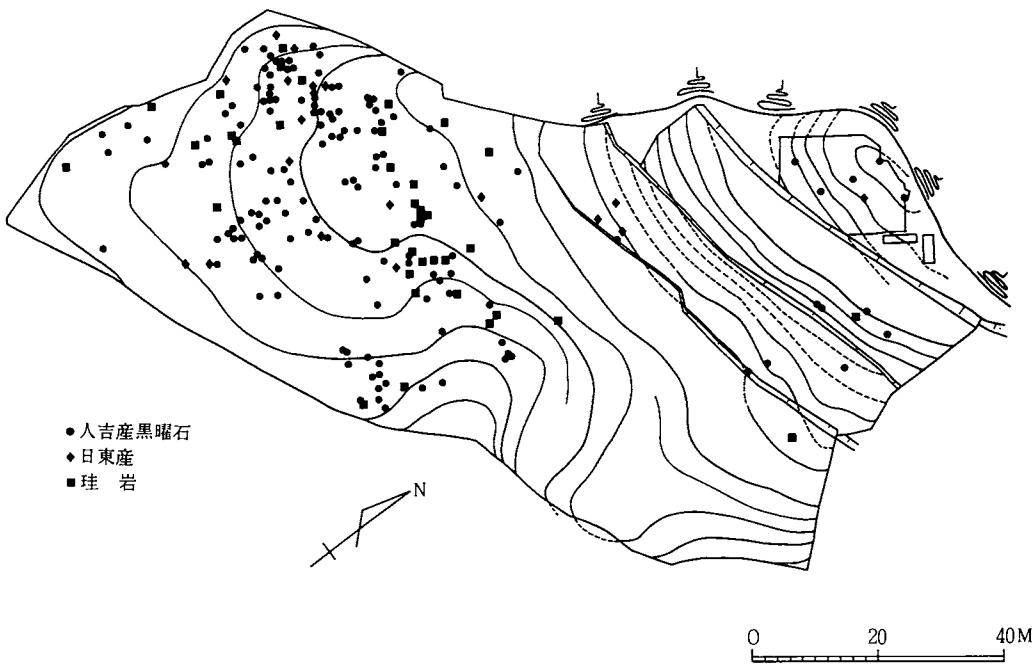
石核・原石（第129図～第131図）

石核・原石は、全体で270点出土している。それらは、山頂上部とその斜面部東寄りに僅かに出土しているのみで、ほとんどが丘陵西側平坦部に分布している。その分布域は、長辺80m と短辺45m の長方形を呈している。そして、その分布は、さらに西側・中央・東側という三つの群にまとまる傾向があるようでもある（第128図）。石質は、黒曜石と珪岩が中心となっているが、その中でも黒曜石が最も多く、さらにそれらは、小型の良質なものと白い粒子が多く含まれるものの二つに識別できる。そして、この両者は、前者が遺跡近くの原産地で産出するものに、後者が鹿児島県日東産のものにそれぞれ対応し、出土数では、前者が圧倒的に多くを占めている。

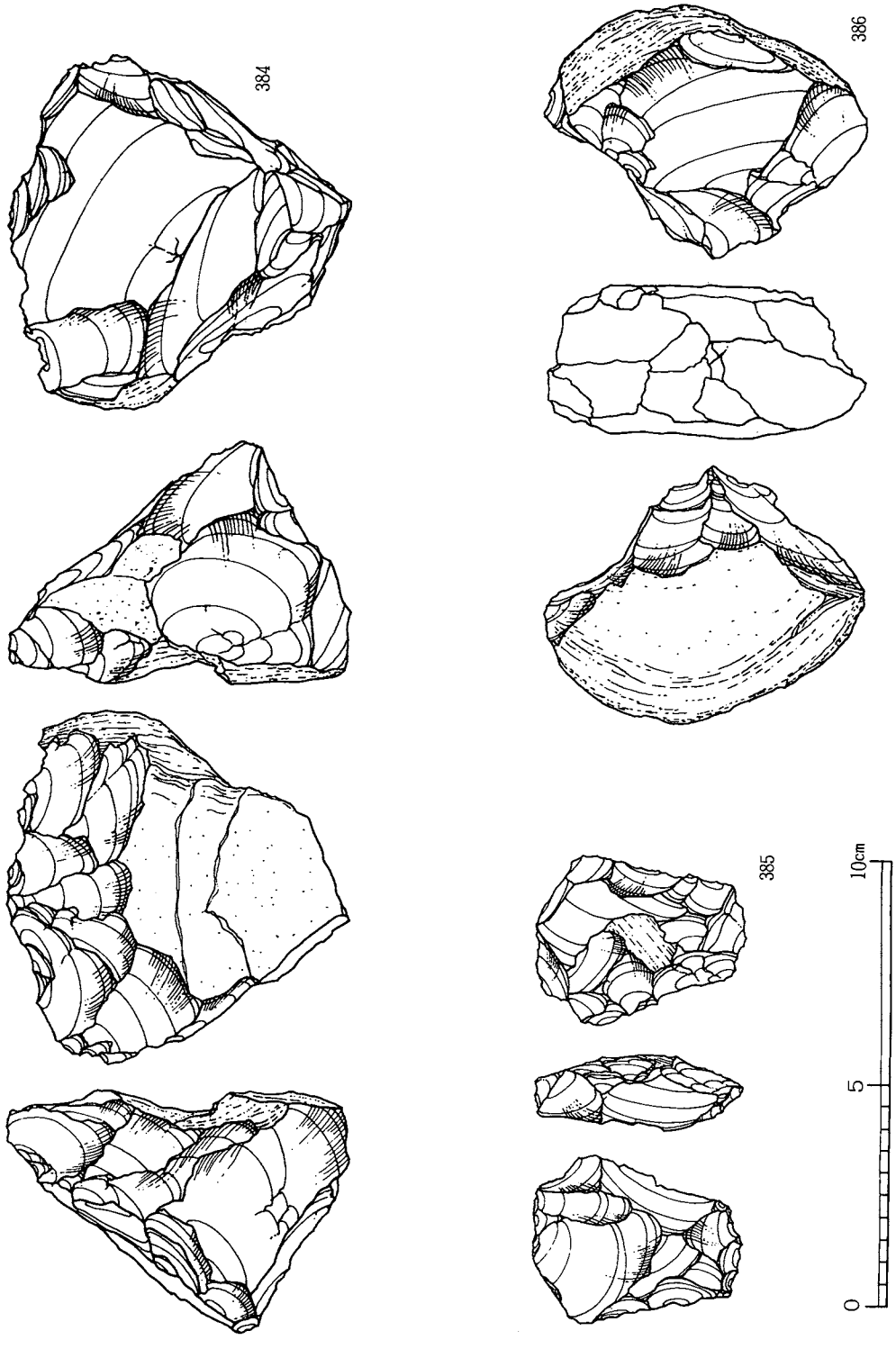
珪岩製石核（384～389・396）

石核Ⅰ（384・386・387・389）は、原石ないし分割礫を素材としたものである。そして、この石核は、さらに打面の転移が繰り返し行われた多面体のもの（a）（384・387・396）・両刃礫器状に交互剥離で行われるもの（b）（386）・所謂両極打法によるもの（c）（389）に分けることができる。そして、これらと剥片との関係を想定すれば、Ⅰa石核と剥片A～D、Ⅰb石核と剥片A、Ⅰc石核と剥片Bが対応する可能性が高いといえる。なお、石核は出土していないが、打点を後退させるだけのもの（401）もあり、剥片Aが対応する。

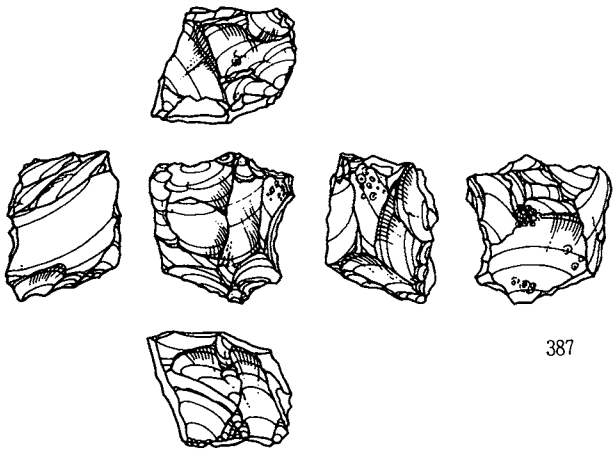
石核Ⅱ（385・388）は、剥片を素材としたものである。この石核の特徴は、剥片の側縁部か

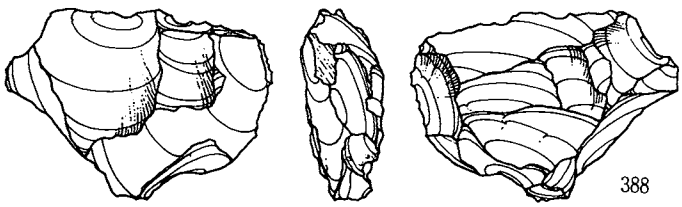


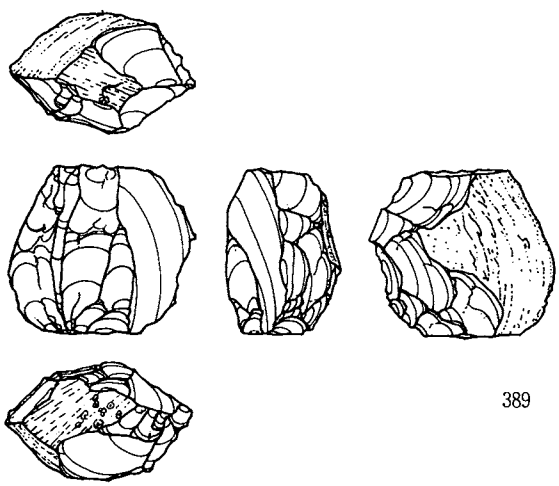
第128図　遺物分布図（石核・原石）

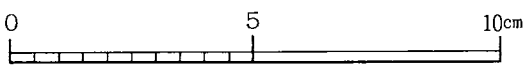


第129図　石器実測図

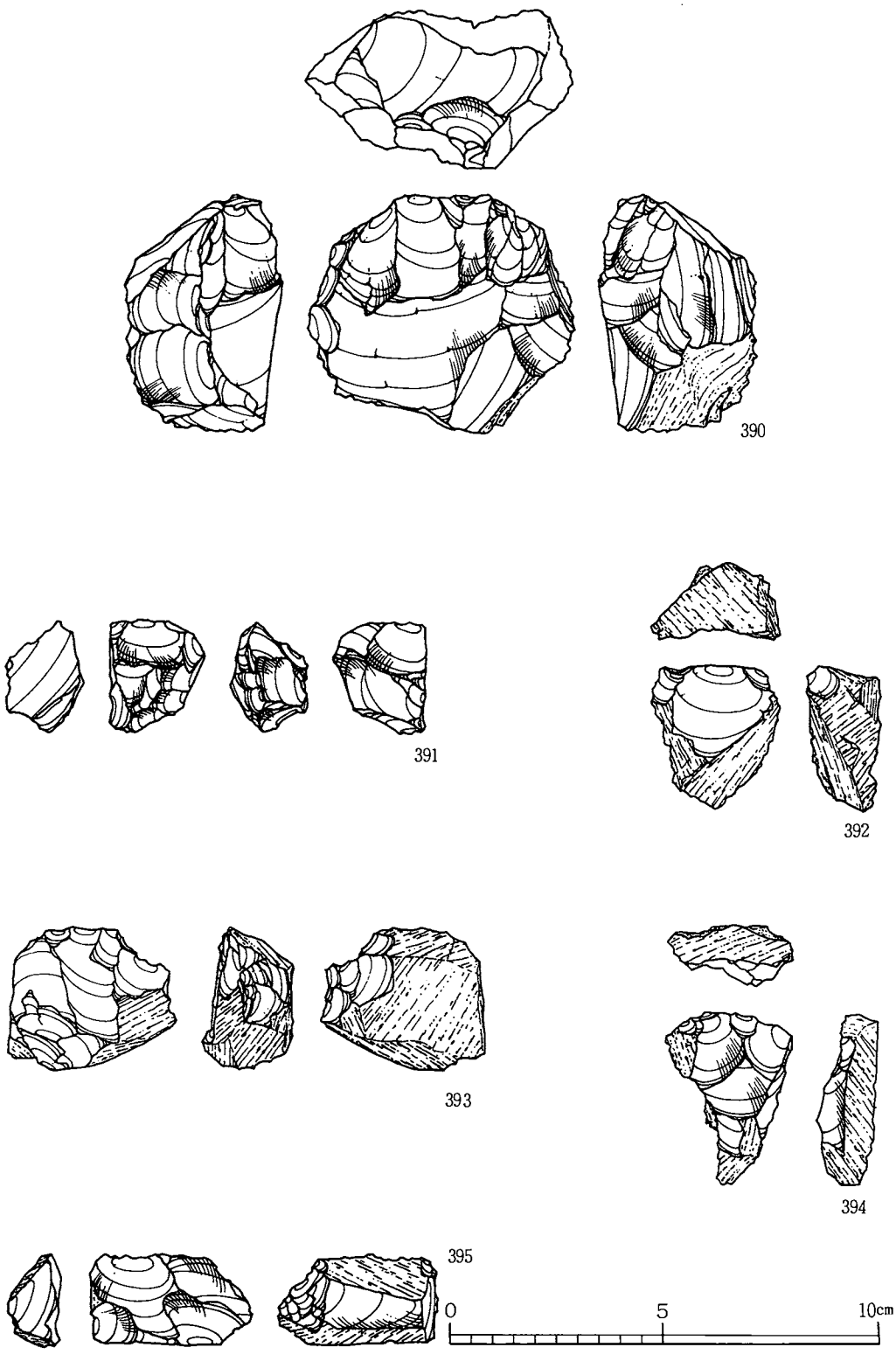








第130図　石器実測図



第131図　石器実測図

ら求心的に剥片を取るという点にある。従って、その過程で剥片A・B・Eが生産される。

黒曜石製石核（390～395・397）

総て石核Ⅰに属するものである。そしてこれらは、剥片剥離が継続的に行われるもの（390・391・397）と極めて小型の原石であるために剥片剥離の回数が限定されるもの（392～395）に分類できる。特に、後者は、遺跡出土の石核の93%を占めるものである。なお、対応する剥片は、A～Dである。

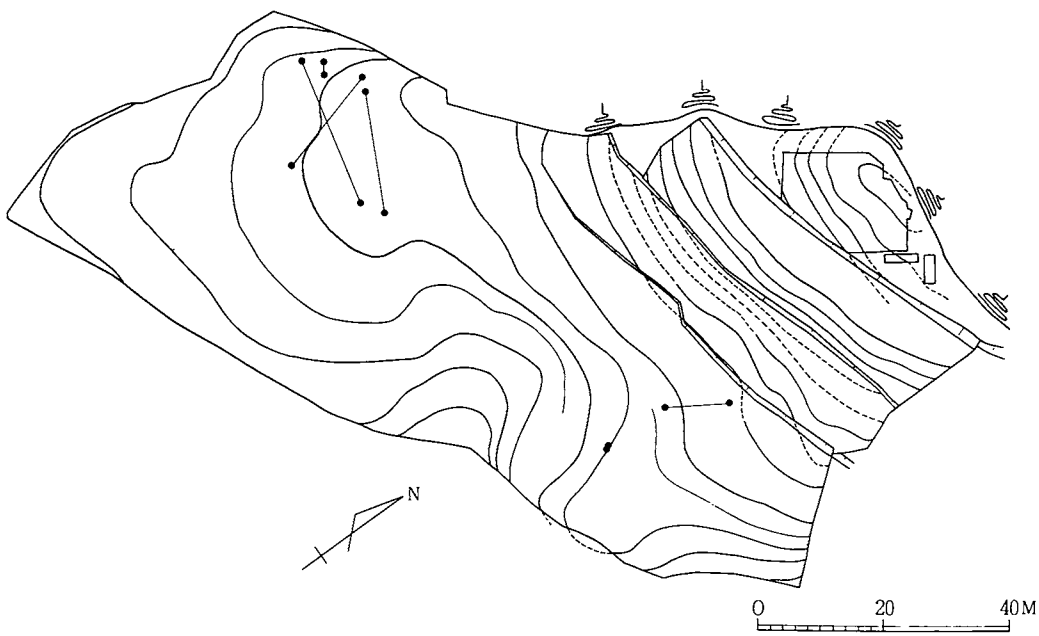
接合資料（第133図～第136図）

遺跡出土の接合可能な資料を対象にして接合の調査を実施した。その結果、6例の資料を確認した。その出土地点は、すべて丘陵平坦部にあたり、東側で2例、西側で4例である。また、接合した資料の関係は、石核と剥片（1例）・石核と石器（1例）・剥片と剥片（1例）・同一剥片（2例）という内訳である。そこで以下、資料ごとに述べていくことにする。

396は、西側平坦部にある資料で、ほぼ東西に24mの最も遠い距離で接合した石核と削器である。石核Ⅰaと剥片Aの接合関係である。石質は、珪岩である。

397は、西側平坦部にある資料で、ほぼ南北に近い方向で18mの距離を持って接合した石核と剥片である。石核Ⅰaと剥片Cとの接合関係である。石材は、鹿児島県日東を原産とする黒曜石である。

398は、西側平坦部にある資料で、ほぼ東西に近い方向で接合した剥片である。その距離は、



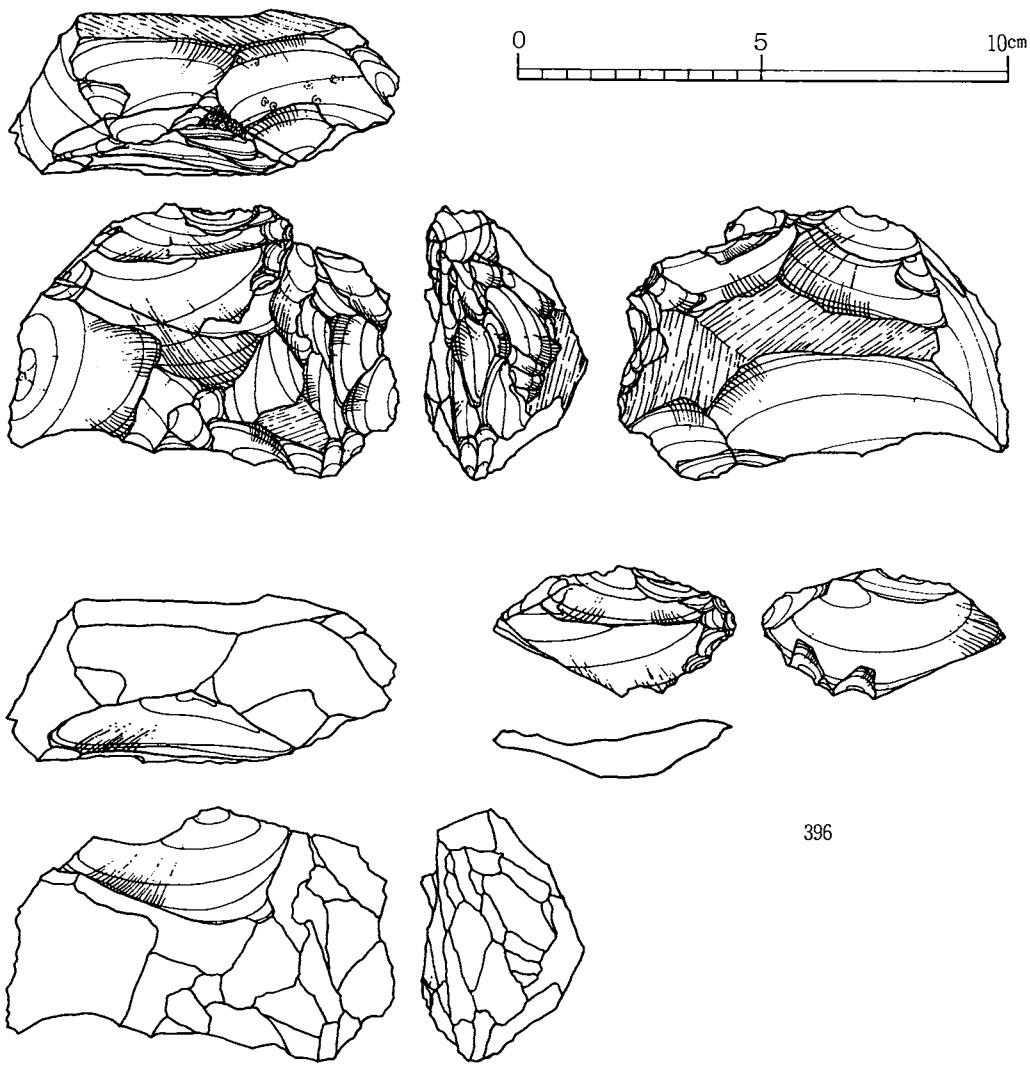
第132図　遺物分布図（接合資料）

19m を測る。珪岩製の剝片Ｃである。

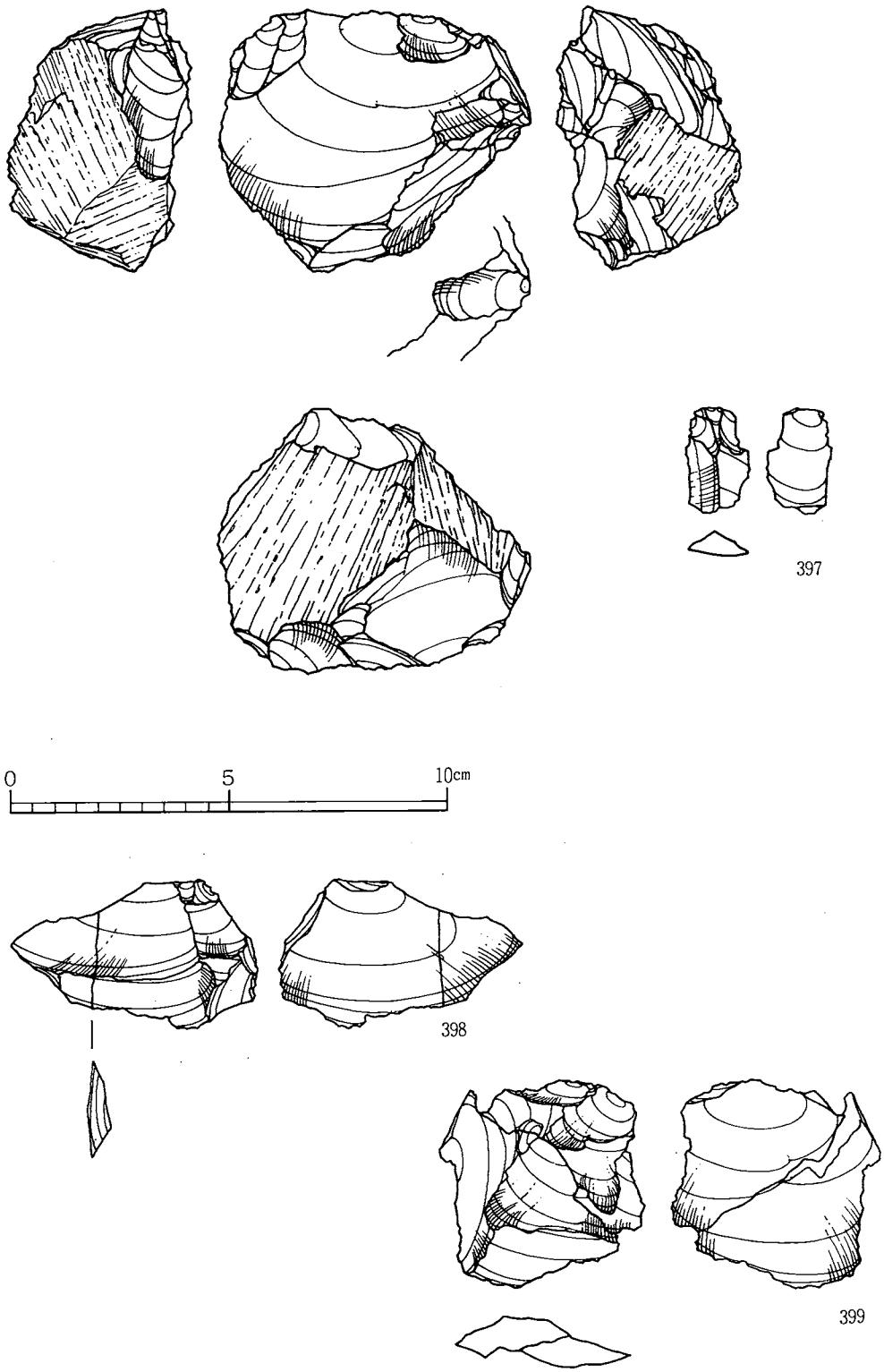
399は、東側平坦部にある資料で、約10m の距離を持って接合した剝片である。珪岩製の剝片Ｃにあたる。

400は、東側平坦部にある資料で、同一地点の出土資料である。この２点の資料は、珪岩製の使用痕のある不定形石器で、剝片Ｃを使用している。

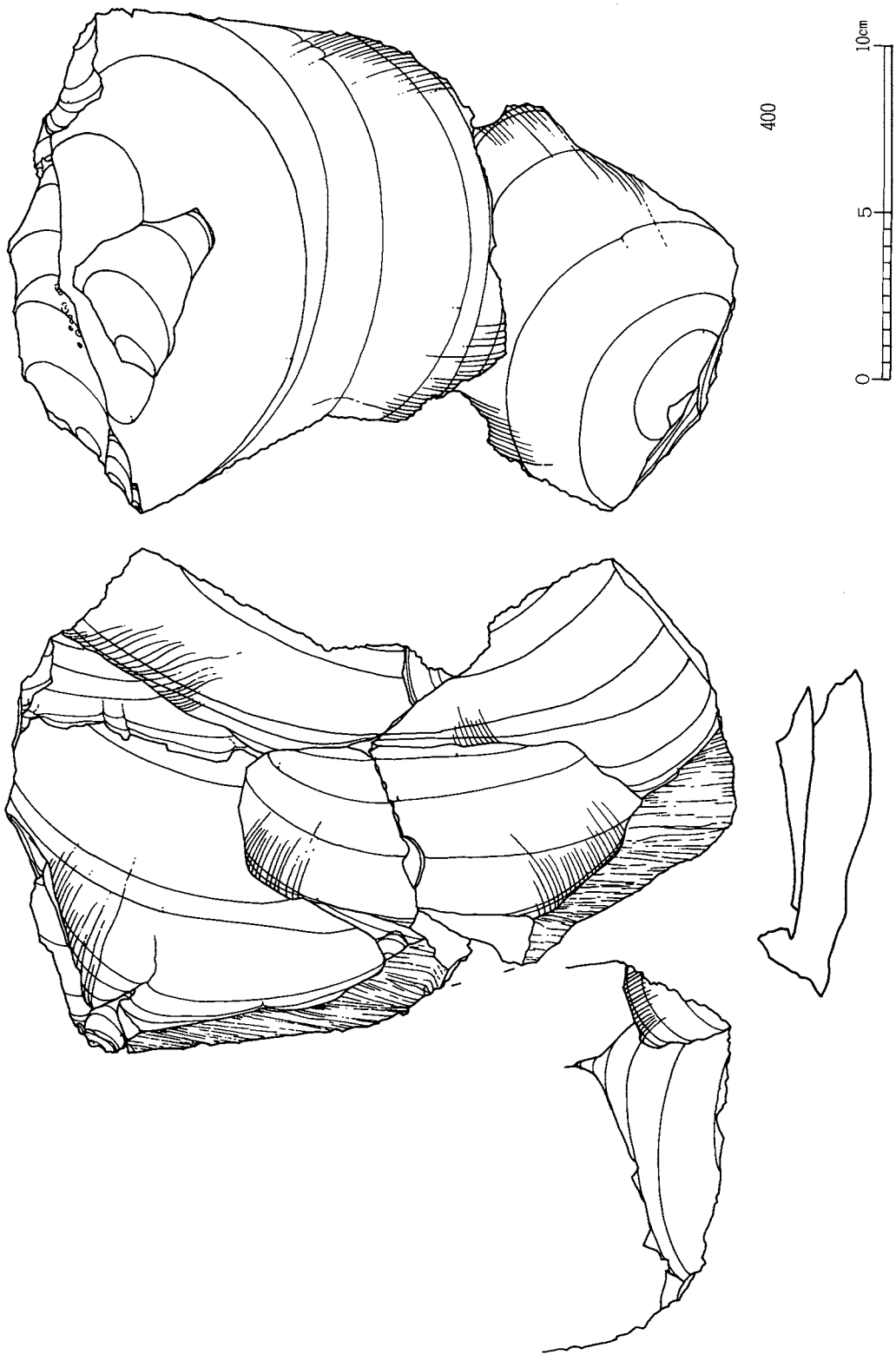
401は、西側平坦部にある資料で、約４ｍの距離をもって接合した剝片である。石質は、珪岩で、剝片の種類は、いずれもＡにあたる。この資料は、打点をジグザグに後退させながら立方体の原石を裁断していくように進む剝片剝離の状態を示している。



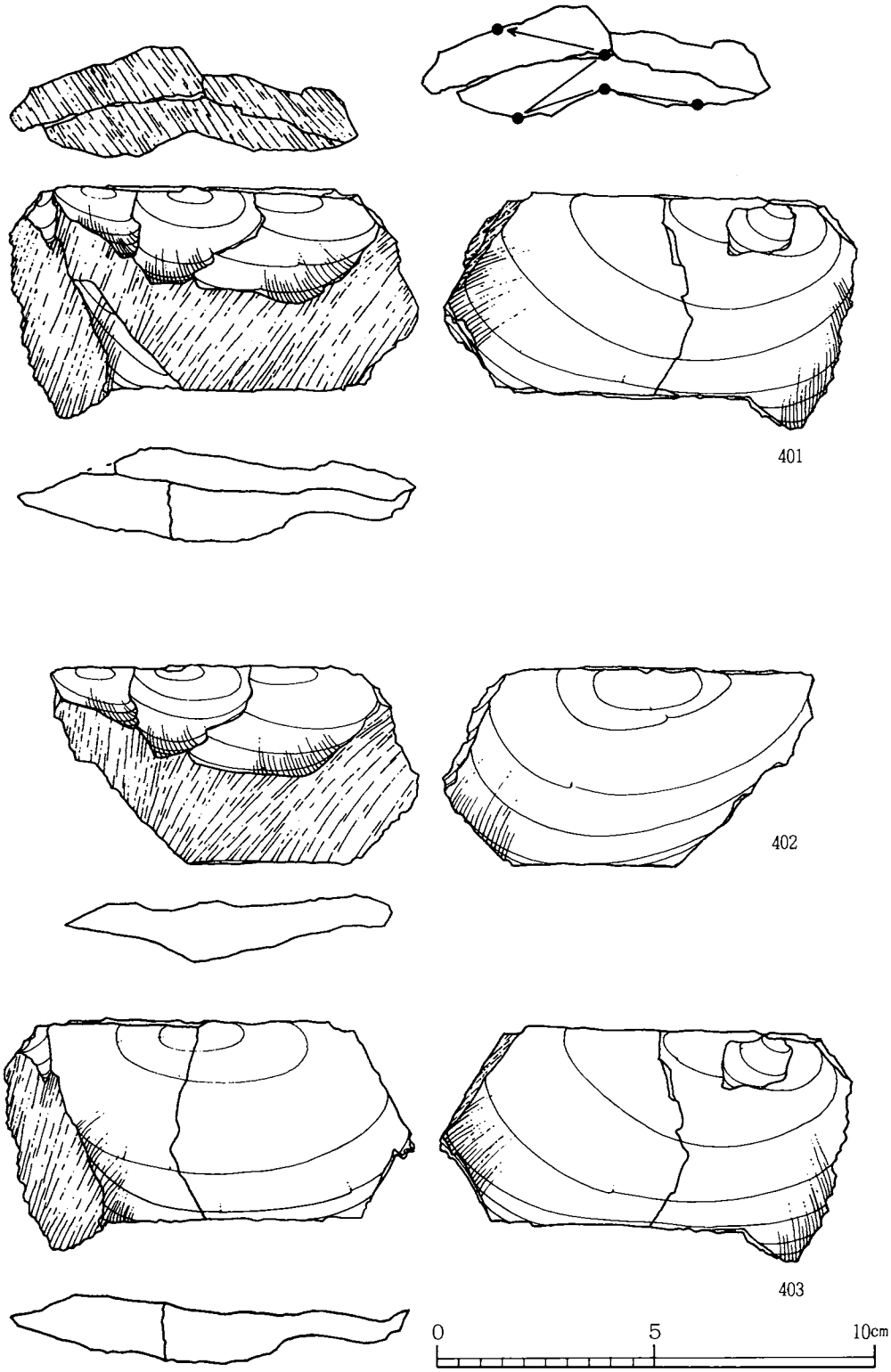
第133図　石器実測図



第134図　石器実測図



第135図　石器実測図



第136図　石器実測図

以上の他に、定型石器の接合が４例ある。すなわち、石皿の２例と磨石・敲石の１例そして磨製石斧の１例である。これについては、それぞれの石器の分布図のなかで示しておいた。そして、それらの方向の関係は、共に東西に近い状態にある。

⑶土製品・石製品

調査において僅かではあるが、土製品と石製品が総計18点出土した。それらは、土製品として土製円板８点、石製品として垂飾品９点・線刻礫１点という内訳である。

土製円板（第138図）

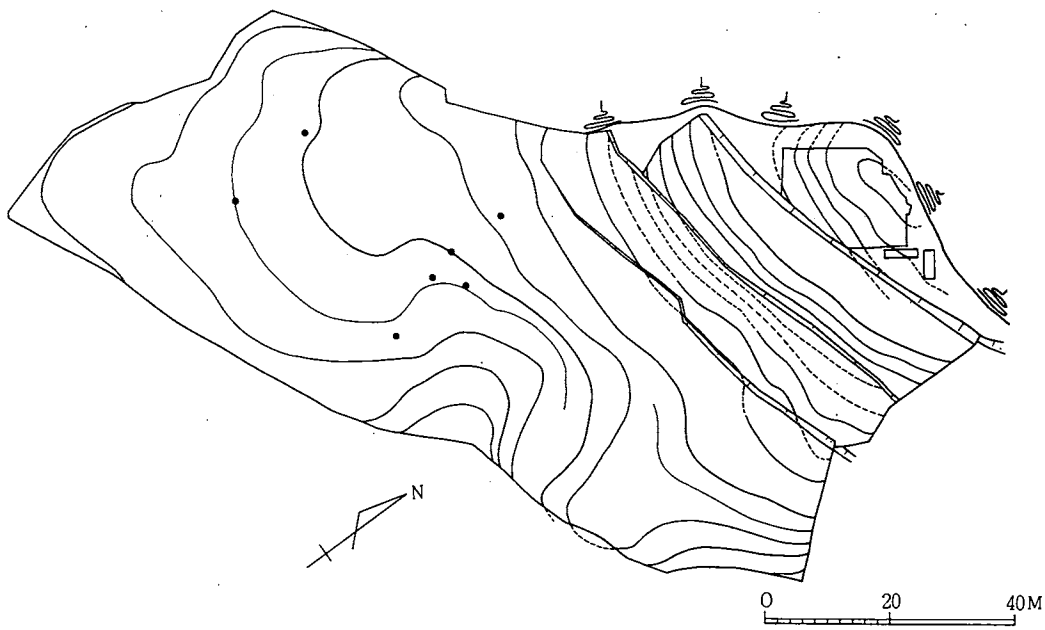
土製円板は、土器片の周辺を打ち欠いたもので、すべて西側丘陵部から出土している。そして、その分布は、平坦部の西側縁辺部（２点）と東側縁辺部（５点）の二つの群に偏在し、それぞれがあたかも対立しているかのようである（第137図）。

１は、表面に貝殻の押し引き文を残していることから、塞ノ神式土器の胴部上半部を利用していることがわかる。直径４cmの円形を呈し、重さ20g を量る。

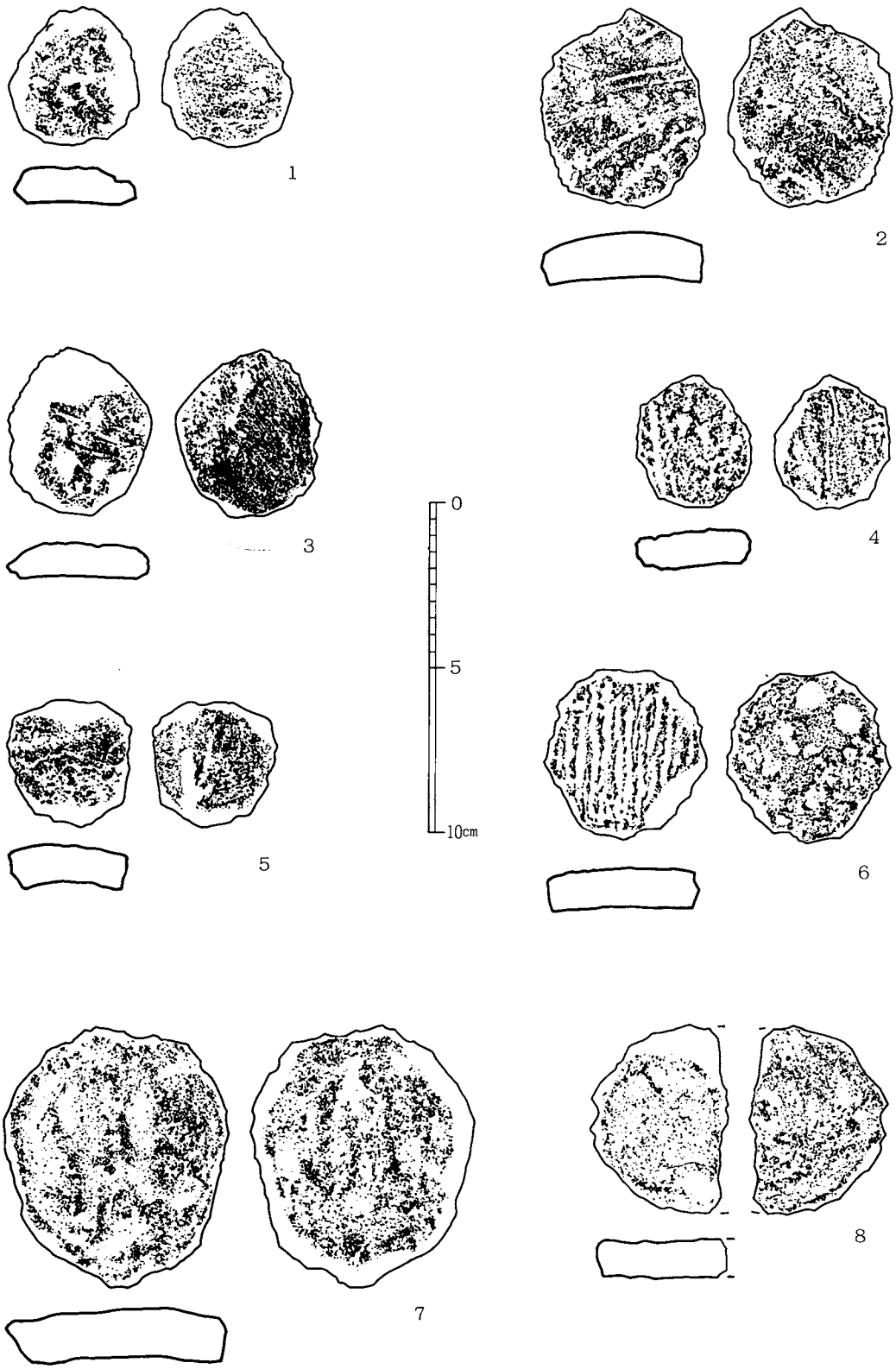
２は、表面が無文であるが、胎土・焼成によって塞ノ神式土器利用のものであることがわかる。直径５cm～６cmの円形を呈し、重さ46g を量る。

３もまた無文であるが、塞ノ神式土器利用のものであることがわかる。直径4.5cm～５cmの円形を呈し、重さ23g を量る。

４・５も同様に塞ノ神式土器利用のものである。４は、直径3.5cm～４cmの円形を呈し、重さ



第137図　遺物分布図(土製品)



第138図　土製品実測図

13g を量る。５は、直径3.5cm～４cmの円形で、重さ19g を量る。

６は、撚糸文土器利用のもので、表面には並列の撚糸文が観察される。直径５cmの円形を呈し、重さ36g を量る。

７・８は、土器の底部を利用したもので、塞ノ神式土器の胎土・焼成の特徴を持っている。７は、直径７cm～８cmの円形で、重さ85g と出土資料中最大のものである。８は、欠損品であるが、直径6.7cmの円形を呈するものと考えられる。

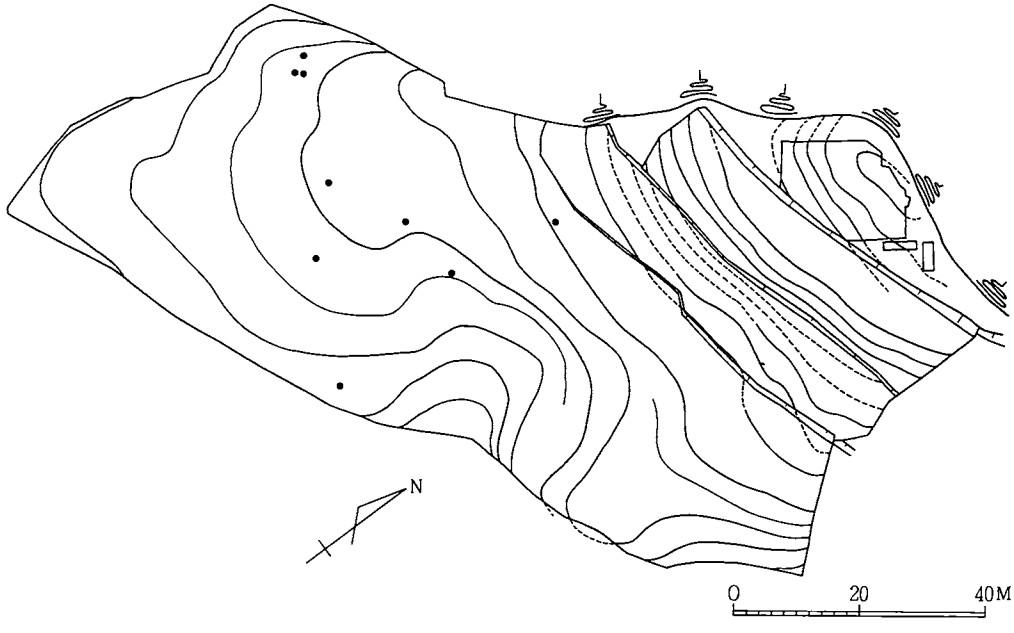
垂飾品（第140図）

調査において検出した垂飾品は、千枚岩の偏平礫に１～２個の孔をあけたもので、すべて西側平坦部からの出土である。そして、それらは、近接した僅か３点以外はすべて11m～25m の距離を保ちながら点在している（第139図）。

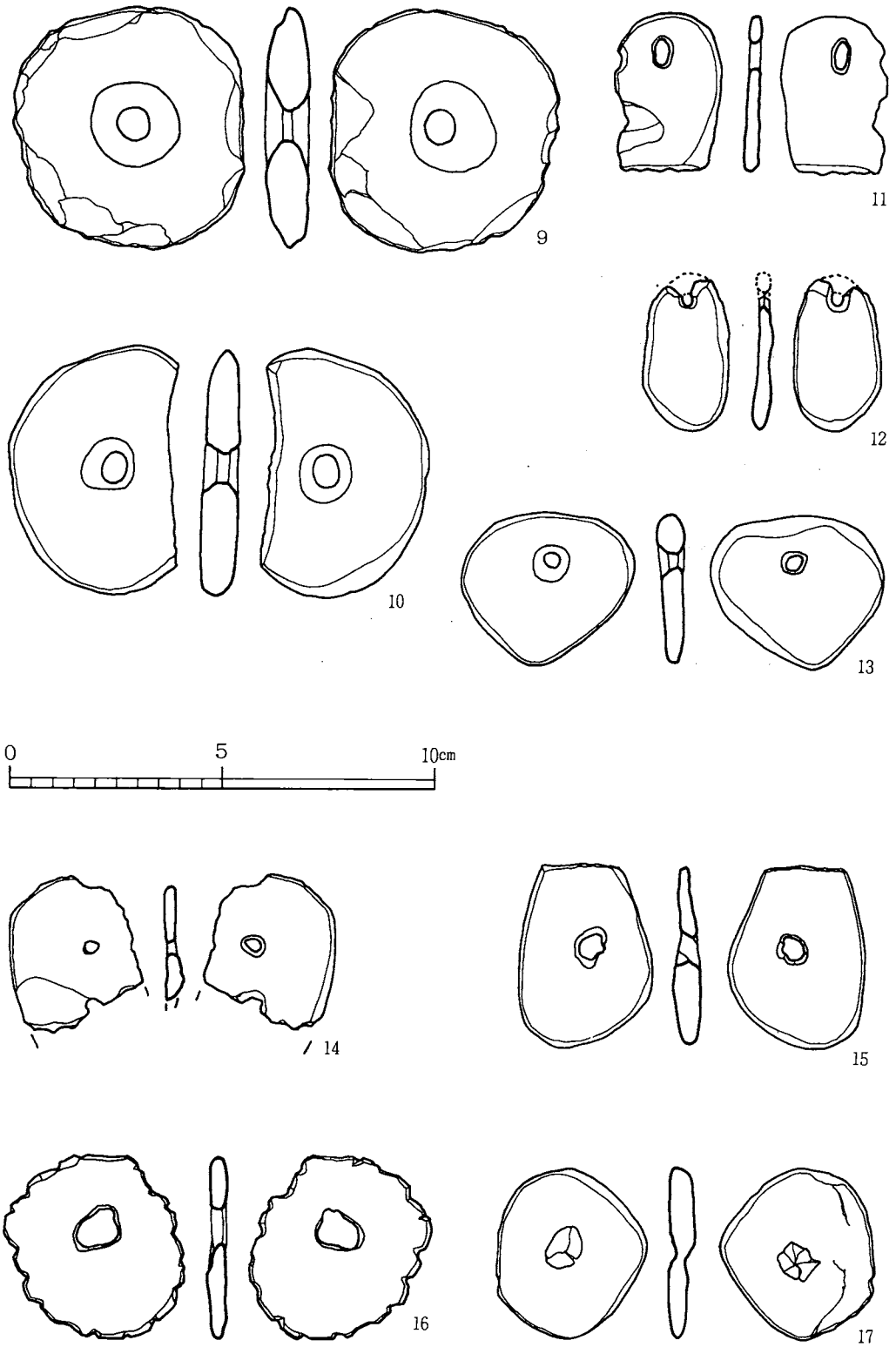
９は、直径5.5cmの円形を呈し、重さ62g を量る。穿孔は、上端1.9cm～2.1cm(裏面２cm～2.1cm）と下端0.7cmの円孔で、偏平礫の中心部の表裏両面から行われている。

10は、形状・穿孔の位置において９の資料に類似し、長軸5.7cmで短軸4.7cm（推定値）の楕円形に近い形状を呈している。穿孔部は、上端1.2cm（裏面1.2cm～1.3cm)と下端0.6cm～0.7cmの表裏両面からの不整の円孔である。

11は、偏平礫の上端部に穿孔のあるものである。平面形は、長軸3.6cm（現存値）と短軸2.5cmとの楕円を呈し、重さ４.５gを量る。穿孔は、上端0.5cm～0.7cm（裏面も同じ）と下端0.4cm



第139図　遺物分布図(石製品)



第140図　石製品実測図

～0.6cmの楕円形を呈し、表裏両面から行われている。

12は、形状・穿孔の位置において11の資料に類似し、長軸3.6cm（推定値）短軸２cmの楕円形を呈し、重さ3.8gを量る。穿孔部は、上端0.4cm（裏面0.5cm）と下端0.25cmの円孔である。

13は、胴張りの三角形を呈する偏平礫を使用し、その上部に孔をあけたもので、長径4.1cm、短径3.5cm、重さ12gである。穿孔部は、円孔で、上端0.9cm（裏面0.5cm～0.6cm）と下端0.4cmを測る。

14は、楕円形を呈する偏平礫を利用した２個の穿孔を持つもので、長軸3.1cm(現存値)、短軸2.9cmである。穿孔は、片面からあけられた円孔で、上端0.5cmと下端0.3cm～0.4cmのものと上端0.7cmと下端0.4cmのものがある。

15は、偏平礫のほぼ中心部に穿孔がある資料で、長軸4.2cm(現存値)、短軸3.1cmの楕円形を呈し、重さ11gを量る。穿孔部は、上端0.6cm～１cm（裏面0.6cm～0.8cm）と下端0.5cm～0.7cmの楕円形を呈しているが、さらにこの穿孔部を観察してみると、これが直径0.2cmというさらに小さい孔の集合によっていることがわかる。このことは、穿孔が基本的な単位としての0.2cmの孔を幾つか集合させて孔をあけるという方法で行われていることを示している。

16は、擦り切りによって作られた鋸歯状の縁辺部に特徴がある。平面形は、長軸4.5cm、短軸４cmの楕円を呈し、重量9.7gを量る。穿孔は、15の資料と同じような方法で行われ、上端１cm～1.2cm(裏面0.9cm～1.2cm)と下端0.8cm～1.1cmの楕円形を呈している。

17は、15・16の方法とは異なり、のみ状工具での打ち込みによる穿孔作業を途中で中断した未加工品である。こうした打ち込みによる穿孔方法は荒仕上げの段階であり、回転穿孔による整形段階が次に来るとすれば、この資料は、９・10・13に近い状態をとるようになると考えられる。

線刻礫（第141図）

石製品には、上記した垂飾品の他に、丘陵の西側平坦部の東縁辺より出土している線刻礫１点がある。この線刻礫は、千枚岩の偏平礫を素材として、その表裏面に２～３本を単位とする直線によって線刻を施したもので、その後の廃棄段階において表面方向からの打撃で上部と下部を叩き割られている。そこで以下、表・裏面ごとの文様について観ていきたい（第141図)。

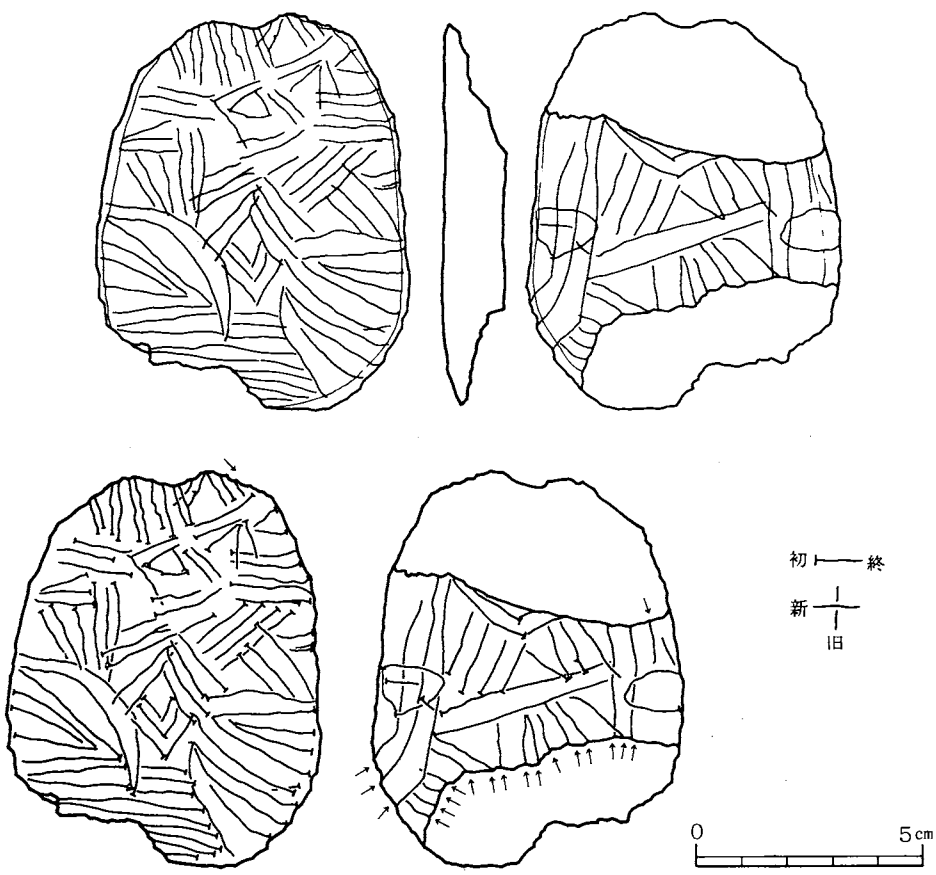
表面の文様では、礫の中央部に施された２～３本の直線文を単位として組み合わせた大型の菱形文とその上位３cmの部分にある１～２本の直線を単位とした小型の菱形文とが目立って観察され、線刻礫の文様は、この二つの主文様が構成上の基本となっているようでもある。小型の菱形文の周辺では、１～３本の直線を単位とした平行線文が中心となり、上位では縦方向(内側→外側）と斜方向（内→外・外→内)、左位の文様部では横方向（内→外・外→内)、右位では主文様へと向かう横方向である。大型の菱形文の周辺では、左位で２本を単位とした弧線文（大型の菱形文よりも先に描かれているもの）と「く」の字状の文様（内→外・外→内)、右位

では横ないし斜方向で菱形文へ集束する文様、下位での横方向の平行文がある。そして、これらの他に、上位と下位の文様群とを埋めるように施された縦方向（左側）と斜方向（右側）の直線文が観察される。

このように、表面の文様は、上位及び下位の菱形文を中心とした二つの文様群によって構成されている。

これに対して裏面の文様は、単純な構成をとっている。その文様は、礫の左右両側では楕円形に近い文様と楕円文の前に描かれた平行の直線文とそれらを結ぶように描かれた2本の直線による横位の平行文とが中心となっている。そして、その後に縦方向の直線文（下→上）が施されている。こうした文様の他、礫上部にV字状の文様が観察されるが、欠損によって全体像は不明である。

裏面の文様は、その欠損率が大きく、その全体の構成を知るところまではいかないが、表面のものとは大きい違いがあるようでもある。



第141図　石製品実測図(線刻礫)

３．ま と め

縄文時代早期の調査は、アカホヤ火山灰層下の第Ⅳ層褐色土層を対象とした。この調査の結果、100基に及ぶ遺構群と土器・石器・土製品・石製品等の多量の遺物群が検出された。その具体的状態については、これまで記述して来たとおりである。

遺構　検出された遺構100基の内訳は、竪穴式住居跡１基・小穴を有する土坑13基・土坑（穴も含む）71基・集石12基・炉穴３基である。そして、これらの遺構は、それぞれに傾向を異にした分布をとっている。

土坑・穴・集石は、西側平坦部を分布の中心にして、その縁辺部の北側に偏在・分布している。つまり、丘陵のより平坦性の強い部分に沿って、そこを取り巻くような状態で分布がみられるのである。特に、土坑・穴の分布は顕著で、あたかも南方に開口した馬蹄形を呈するかのようである。これに対して小穴を有する土坑（以下、小穴土坑）は、丘陵平坦部の南側縁辺部を中心に分布し、土坑・穴・集石とは対峙した分布の状態をとっている。また、遺物の全体的分布は、丘陵の西側平坦部の北寄りに偏在し、土坑・穴の分布の偏在傾向と同じ状態である。

以上のことを整理・比較してみると、遺物分布の中心部分と土坑・穴の分布が重なり合い、それらの分布と対峙して小穴土坑があるということがわかる。小穴土坑の性格を考える上での一つの材料となるものとも言えようか。

遺物　遺跡からは貝殻文系の塞ノ神式土器を主体とした16種類の土器群と石鏃を始めとする石器群そして土製品・石製品が出土した。それらの編年的関係については、層位的検出ができる状態ではなく、しかも平面分布の上での有意な偏在傾向も把握できないという点から確認することができなかった。ただ、土器の出土状態で前記している「類型Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳ」という遺跡形成の過程から考えていけば、激しい拡散状況を示す土器分布や個体数の少ない土器は、古く位置付けられる可能性が高い。こうした点からの検討も可能となろうが、土器・石器等の共伴関係については、依然として不明である。

この他に遺跡を特徴付ける遺物として、回転手法によって穿孔された垂飾品と複雑な文様構成をもった線刻礫が丘陵の西側平坦部で検出された。これらは、類例も少なく、墓地等の遺跡内の場の性格を考える上で、注目される資料となろう。

参考文献

河口　貞徳　「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第６号 1972

木崎　康弘　「熊本県大丸・藤ノ迫遺跡の塞ノ神式土器について」『塞ノ神式土器』所収 1985

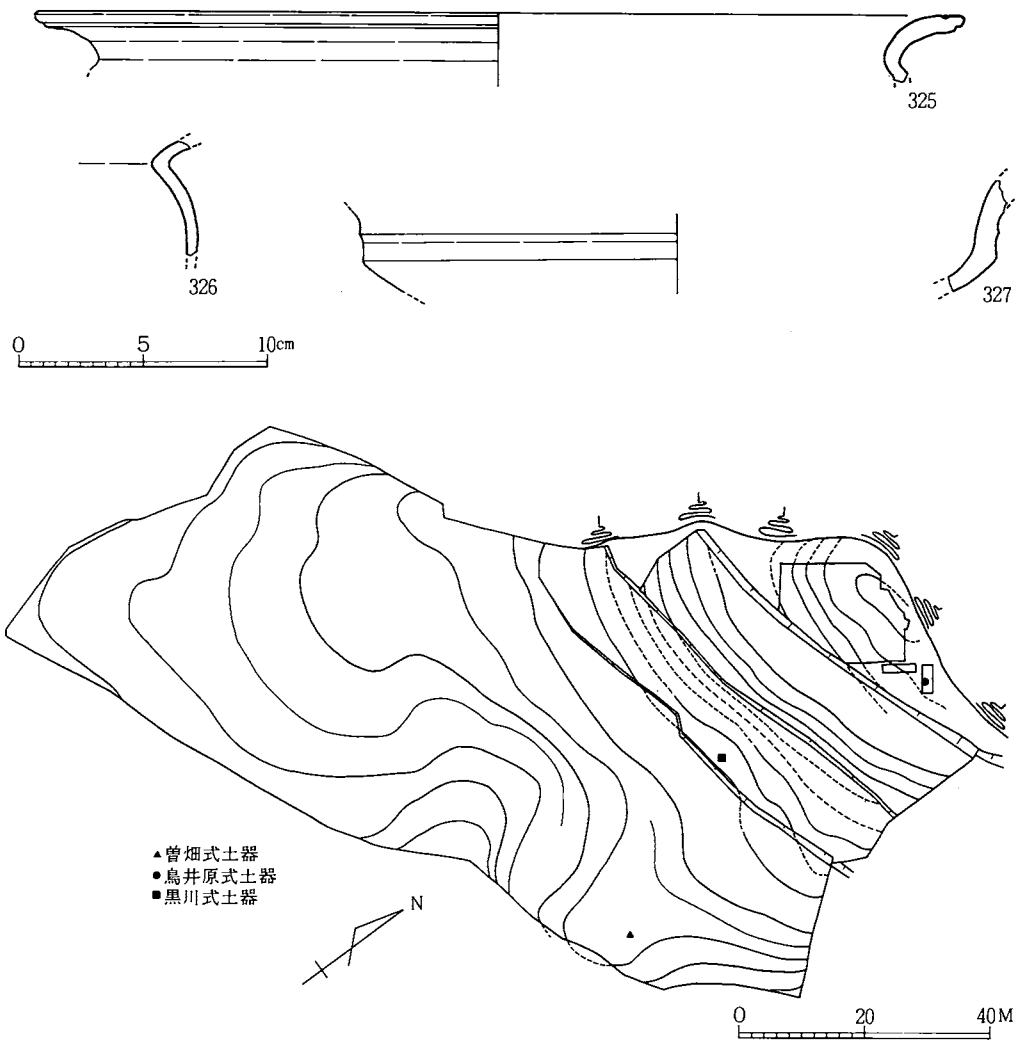
新東　晃一　「塞ノ神式土器」『縄文文化の研究』第３巻 縄文土器Ⅰ 1982

第３節　縄文時代前期・後期・晩期の遺物

縄文時代前期・後期・晩期の調査は、鬼界カルデラ起源であるアカホヤ火山灰の二次堆積土による第Ⅲａ層黄褐色土層を対象として実施された。その結果、僅かではあるが、当該時期の遺物を検出した。なお、これらの遺物と縄文時代早期のものとは、純粋なアカホヤ火山灰による第Ⅲｂ層という無遺物層を介して層位的に分離されている。

１．遺物とその分布

出土した遺物は、４点の土器片のみで、型式別では曽畑式土器１点・鳥井原式土器１点・黒



第142図　縄文式土器実測図・遺物分布図

川式土器2点という内訳である。これらの遺物の包含状態は、包含層である第IIIb層が二次堆積土層であるという点で不安定で、しかも後世の攪乱等が入り不良である。

曽畑式土器　土器は、図示していないが、器面が明褐色を呈し、比較的焼成の良いものである。出土地点は、丘陵の東側平坦部の南側突端部付近にある（第142図）。

鳥井原式土器（325）　出土地点は、山の頂上部にある（第142図）。資料は、浅鉢形土器の口縁部下半から胴部上部の部分で、器面は、黒褐色を呈し、荒い磨きによって調整されている。そして、口縁部の文様には、U字状の凹線がみられ、それぞれの凹線は幅を広げて接し、その接した部分が稜線を成している。この特徴よりこの土器は、縄文時代後期後半の三万田式土器と御領式土器との中間期の土器型式である鳥井原式土器と認定できる。

黒川式土器（326・327）　出土地点は、山部の麓のほぼ中央部にある（第142図）。資料は、浅鉢形土器2点である（325・326）。325は、大型の浅鉢形土器の口縁部から頸部にかけての資料である。器形は、頸部から湾曲しながら強く外半して口縁部へ至るという状態をとり、そして、口縁部内外に1条の沈線を加えている。器面は、暗褐色を呈し、荒い磨きによって調整されている。326は、小型の浅鉢形土器の頸部から胴部上半部にかけての資料で、やや張った胴部から強く屈曲し、外半して口縁部へ至るという器形をとっている。器面は、褐色を呈し、磨きによって調整されている。この2点の土器は、その特徴から、縄文時代晩期中葉の黒川式土器に相当するものと考えられる。

2．ま　と　め

第IIIa層から出土した縄文時代の前期以降の資料は、すべて丘陵の東側に偏って出土している。そして、その出土量は、僅か4点である。その点でも縄文時代の早期の資料とは、大きく掛け離れた内容である。さらに、それぞれの土器の関係をみてみると、土器型式と土器型式との間に多くの土器型式が介在するはずで、極めて断続的である。と同時に、遺物の分布する場所は、丘陵の広い平坦部ではなくて山部・麓・狭い平坦部であり、その占地において不安定である。このような縄文時代前期以降は、早期のものとは異なり、一過性の遺跡の様相を呈するようになり、鬼界火山の噴火の影響を色濃く残していたものとも考えることができよう。

参考文献

島津義昭・清田純一　「天城遺跡－熊本県菊池市大字赤星字天城出土縄文土器の報告－」　『古保山・古閑・天城』熊本県文化財調査報告　第47集　1980

第４節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、第Ⅲｂ層の上面で確認したが、本来の生活面は、第Ⅲａ層の上部にあるものと考えられる。調査は、丘陵の西側平坦部から開始して、その後東側平坦部へと進んでいった。その結果、弥生時代後期後半に属する42基に及ぶ遺構を検出することができた。その内訳は、竪穴式住居跡10（＋１？）基、土坑・穴類32基で、それらは麓部から平坦部にかけての全域に分布している。

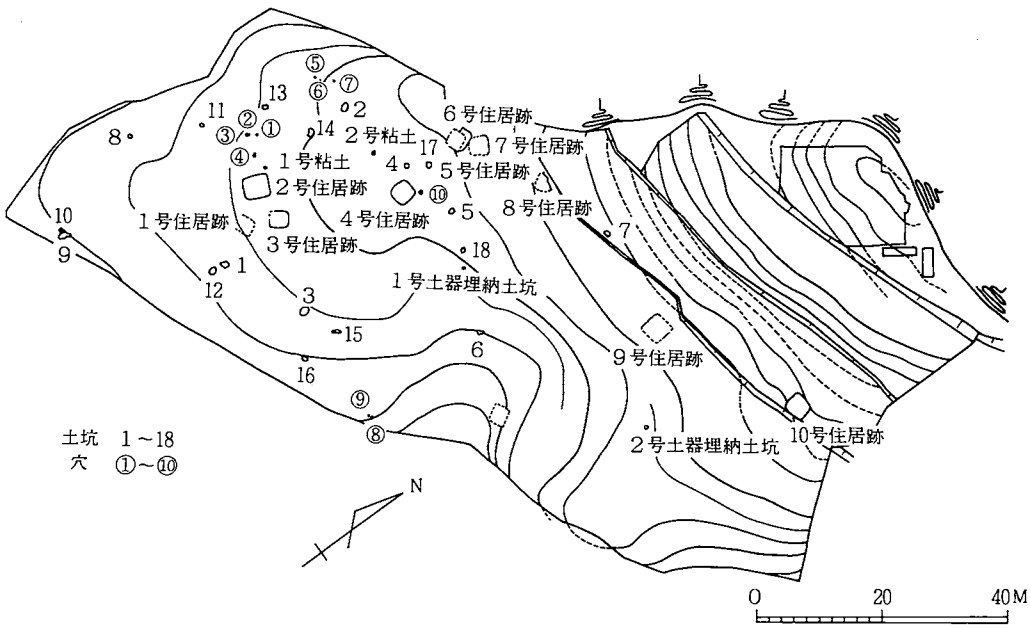
１．遺構と遺物

(1)竪穴式住居跡（第144～155図）

住居跡は全部で10（＋１？）基検出した。山部を除く平坦部ほぼ全域にわたり位置するが、その分布状態により、西側平坦部に位置するもの（４基）、東側平坦部のやや縁辺寄りに位置するもの（４基）、北東の麓部附近に位置するもの（２＋１？基）の３群に分けられる。

１号住居跡（第144図）

丘陵の平坦部西側に位置する（第143図）。北西に２号住居跡、北東に３号住居跡があり、この３つの住居跡はほぼ三角形に並んでいる。



第143図　遺構配置図

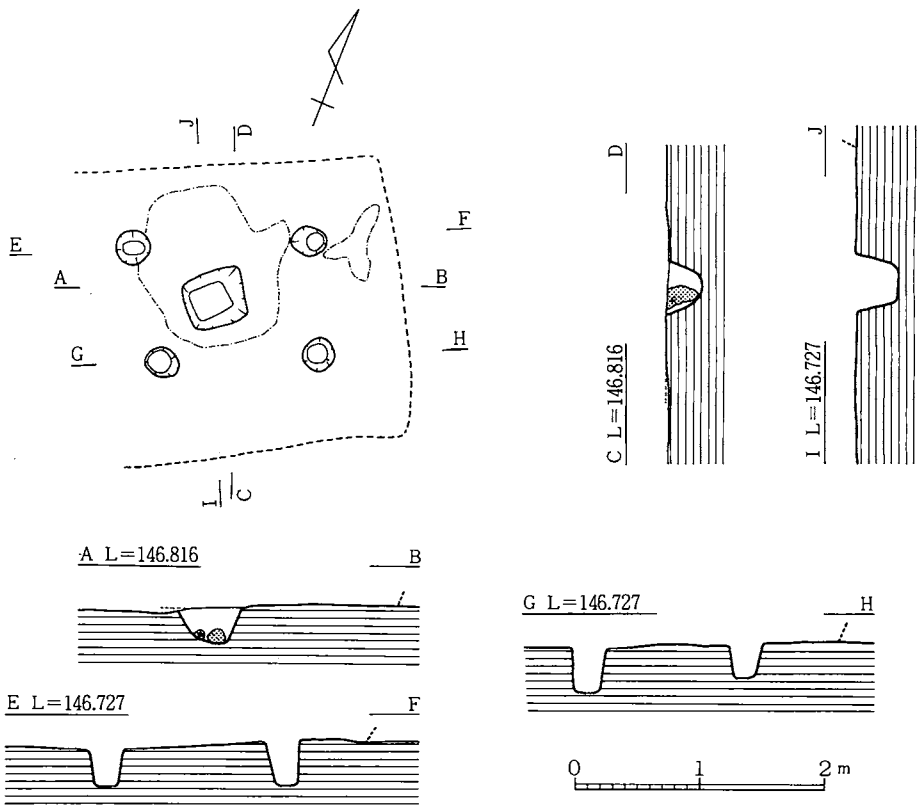
西壁は確認できず、残り三壁も削平を受け失われているが、推定される床面から、Ｃ－Ｄ線上で2.32m を測る長方形のやや小型の住居であったと考えられる。

住居跡からは４個の柱穴が検出された。これらの配列から４本柱の竪穴式住居が想定される。炉は住居のほぼ中央に設けられていた。0.50m×0.44m の方形を呈している。断面はＵ字形で、硬化した焼土の堆積が見られた。炉の周辺及び住居跡北東部隅にわずかの硬化面が確認できた。主軸方向はＮ－25°－Ｗである。

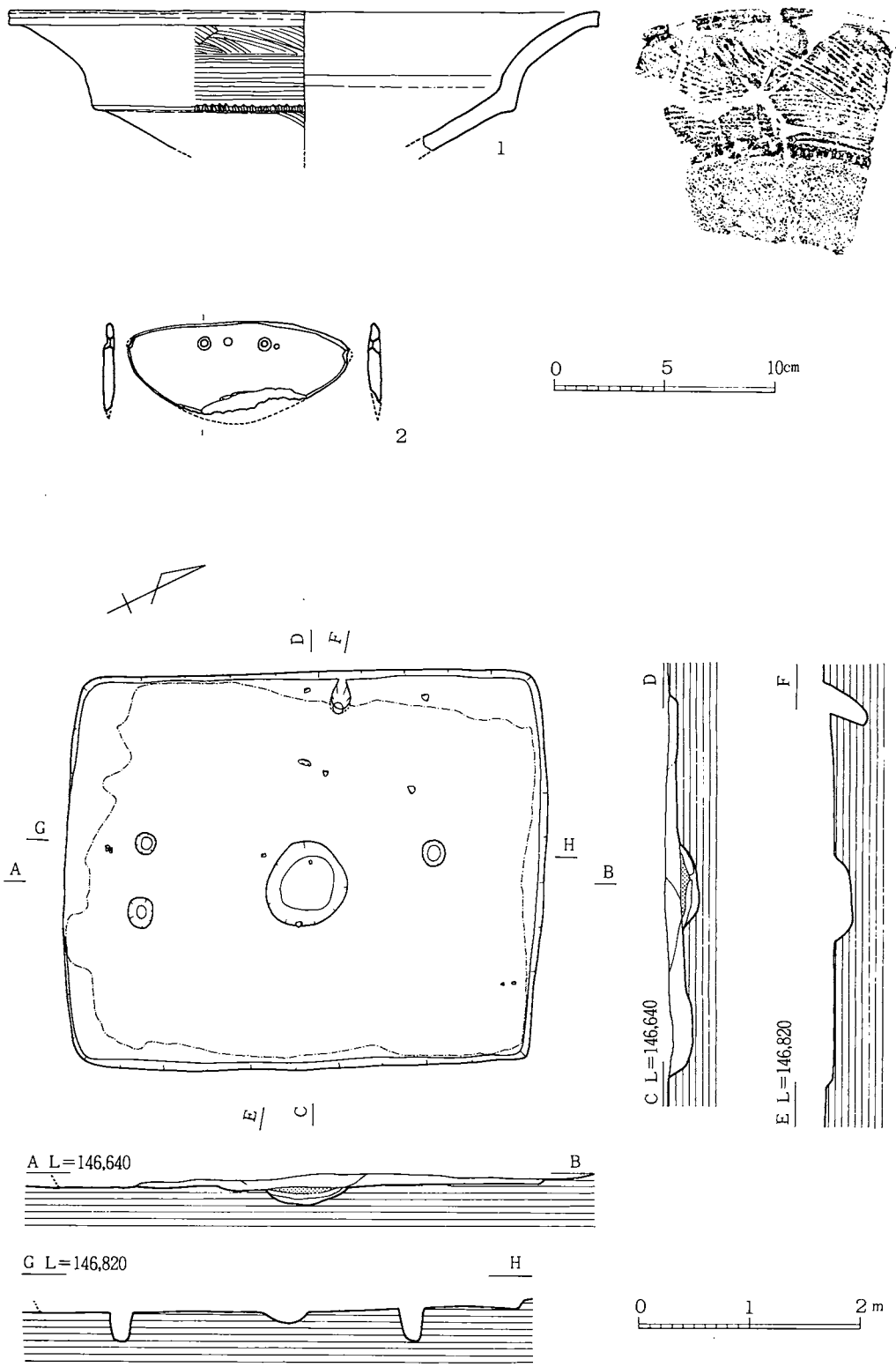
この住居跡からは、遺物は出土しなかった。

２号住居跡（第145図）

１号住居跡の北東に位置している（第143図）。規模は、Ａ－Ｂ線上で4.38m、Ｃ－Ｄ線上で3.54m、床面積約15.5m²を測り、本遺跡中では最大である。壁高は、東壁で最高16cmを測った。残存状態はかなりよく平面形態は整美な長方形を呈している。床面にはほぼ全範囲にわたり硬化面が認められた。西壁ほぼ中央に出入り口部と思われる小さな掘り込みがある。炉は住居跡の中央に検出された。平面形態は、0.76m×0.74m の円形を呈し、断面は浅い擂鉢形で焼土・炭化物が堆積している。柱穴は３個、炉をはさんで北側に１個、南側に２個検出されたが、北側の１個とそれに対応する南側の１個を主柱穴とする２本柱の構造が想定される。主軸方向は、Ｎ－



第144図　１号住居跡実測図



第145図　2号住居跡・出土遺物実測図

61°－Wであった。

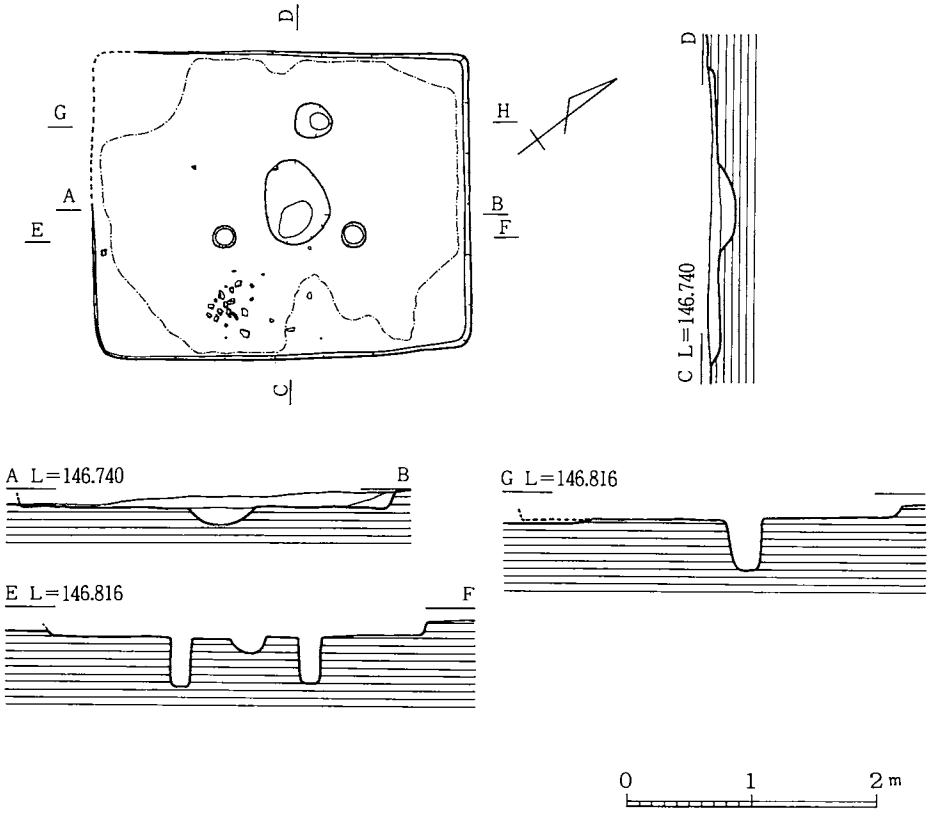
遺物は、炉と西壁の間から石庖丁が１点、住居内に散在した形で土器片数点が出土した。１（第145図）は、脚部を欠いた高坏の坏部である。下半部と上半部との屈曲部は、明瞭で、そこに刻み目が施されている。整形は、下半部で刷毛目の後に弱いナデ、上半部で刷毛目である。２は、千枚岩製の半月形石庖丁で、背部近くには、穿孔途中の２孔と両面から穿たれた２孔がある。

３号住居跡（第146図）

１号住居跡、２号住居跡に隣接している（第143図）。

西側偶が削平により失われているが、規模はＡ－Ｂ線上で3.06m、Ｃ－Ｄ線上で2.44m、床面積約7.47㎡を測った。壁高は全体的に低く北壁で最高14cmを残していた。平面形態は整美な長方形を呈するやや小型の住居跡である。

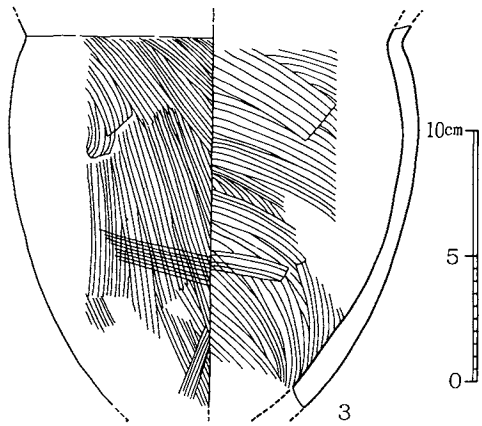
炉は住居跡の中央に１ヶ所設けられている。平面形態は0.50mの東西に長い楕円形を、断面は浅い擂鉢形を呈し、炭化物混じりの焼土が堆積している。柱穴は炉を囲むように３個検出さ



第146図　３号住居跡実測図

れたが、炉をはさんで南北に並ぶ2個が主柱穴であると考えられ、2本柱の構造が想定される。硬化面は西側隅、南側隅と東壁側の一部を除く床面のほぼ全面に認められた。主軸方向はN－53°－Wであった。

遺物は、炉の南側に集中して土器片が出土した。3（第147図）は、その土器で、口縁部のほとんどと底部とを欠損した甕形土器である。胴部は、胴部上半に最大径があり、その部分で16.5cmを測る。整形は、胴部で斜めないし横方向の刷毛目により、口縁部では横方向のナデによっている。なお、胴部の下半部では多量の煤の付着が観察される。



第147図　3号住居跡出土遺物実測図

4号住居跡（第148図）

西側平坦部に位置している（第143図）。

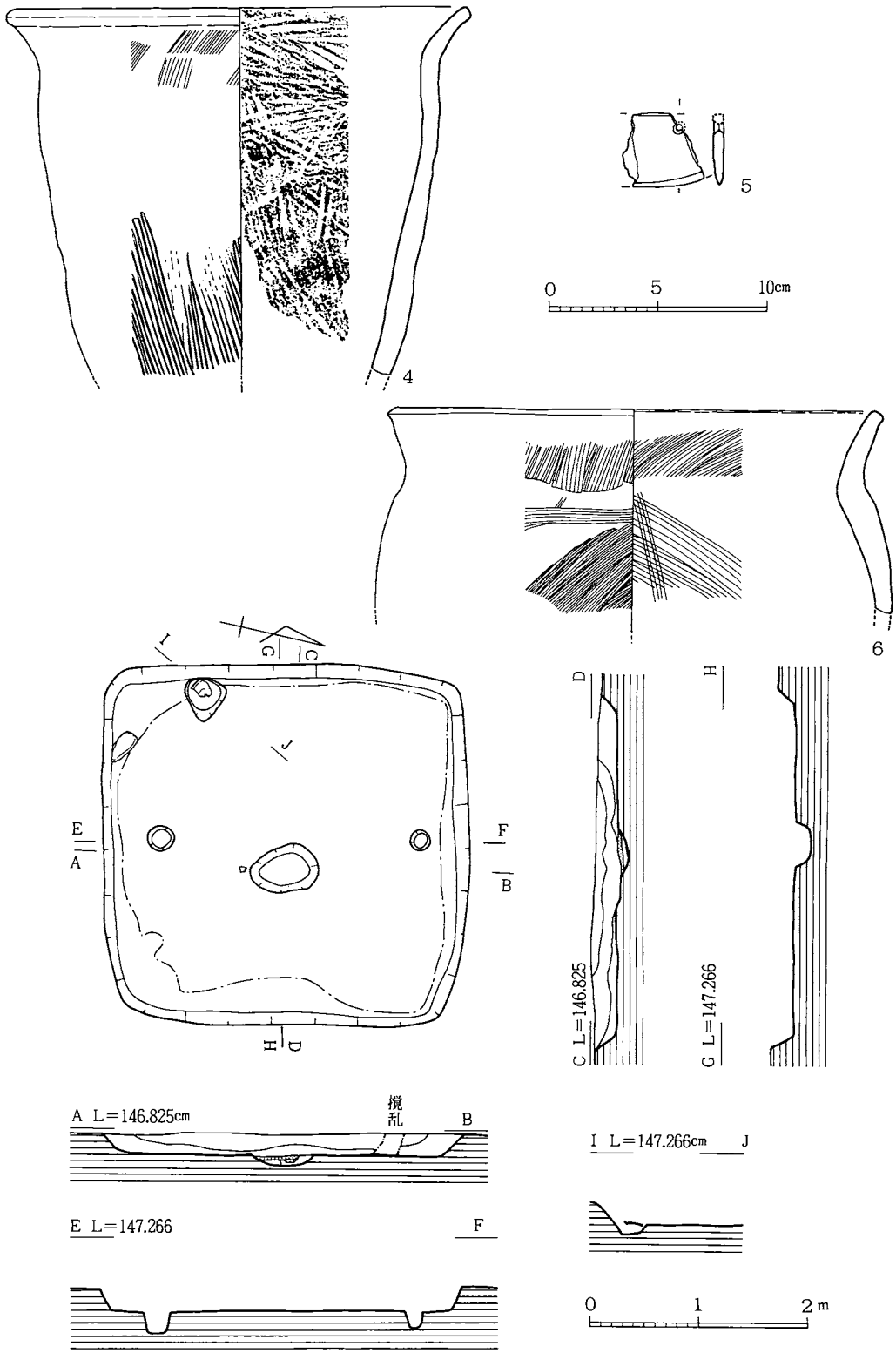
平面形態は正方形を呈する。削平も受けておらず、残存状態は良好である。壁高は東壁側がやや低いものの、全体に平均して約20cmを残している。規模はA－B線上で3.40m、C－D線上で3.28m、床面積11.2m²を測った。

炉は住居跡のほぼ中央に1ヶ所設けられている。長径0.64m、短径0.42mの南北に長い楕円形を呈す。断面は浅い皿状を呈し、焼土と炭化物が堆積している。柱穴は西壁に一部接しているものと炉をはさんで南北にほぼ等間隔に並ぶ2個の計3個を検出した。住居跡はおそらく、後者の2個を主柱穴とする2本柱の構造であったと想定される。硬化面は床面のほぼ全面に認められた。主軸方向はN－78°－Eであった。

遺物は西壁に接する柱穴内、炉周辺より少量ではあるが出土している。4と5（第148図）は、住居跡内からの出土遺物である。4は、胴部下半の一部と底部を欠損した甕形土器である。胎土は荒く、焼成も不良である。器面は、口縁部から胴部上半にかけて刷毛目（頸部では細かい刷毛目）の後にナデによって整形され、胴部下半では（荒い）刷毛目のみによっている。5は、千枚岩製の半月形石庖丁の欠損品である。孔は、1個が残っているが、両面からの穿孔によっている。6は、住居跡の北側周辺部で出土した、甕形土器の口縁部から胴部上部である。器面は、ナデによる口唇部を除き刷毛目によって整形されている。特に、口縁部では、頸部からの縦方向の刷毛目が残っている。

5号・6号・7号住居跡（第149図）

5号住居跡は、東側平坦部の縁辺付近、4号住居跡から北へ約9mのところに6号住居跡と



第148図　４号住居跡・出土遺物実測図

重複して位置している（第143図）。削平によりほとんどの部分が失われており、わずかに南壁を一部残すのみである。推定される平面形態は正方形であり、規模はA－B線上で2.62m、C－D線上で2.48m、床面積約6.50m²を測る小型の住居跡である。柱穴は9個検出されたが、主柱穴となるものは不明である。炉も検出できなかった。中央北寄りで円形に焼土の部分が検出されたが、これは重複する6号住居跡の炉と考えられる。南西隅に硬化面の範囲がまた中央部付近にも、わずかに硬化面が認められた。

遺物では、石庖丁が1点出土した（第150図18）。

6号住居跡は、5号住居跡と重複し、住居跡の半分以上が失われている。残存部から想定される規模は、南北に2.80m、東西に2.62m、床面積約7.34m²を測る正方形に近い、やや小型の住居跡である。壁高は西側隅で最高14cmを測り、北壁と東壁で平均10cm程の壁高を測る。東壁に接して貯蔵穴と思われる穴1個と、それをはさんで、やはり東壁に沿うように溝状の落ちこみが2個検出された。住居跡内に柱穴はもう1個検出されたが、この住居跡を2本柱の構造と想定した場合、主柱穴の1つであると思われる。

炉は確認できなかったが、5号住居跡で検出された焼土の部分が、この住居跡の炉であった可能性もある。硬化面は確認できなかった。主軸方向はN－9°－Wであった。

この住居跡からは出土遺物はなかった。

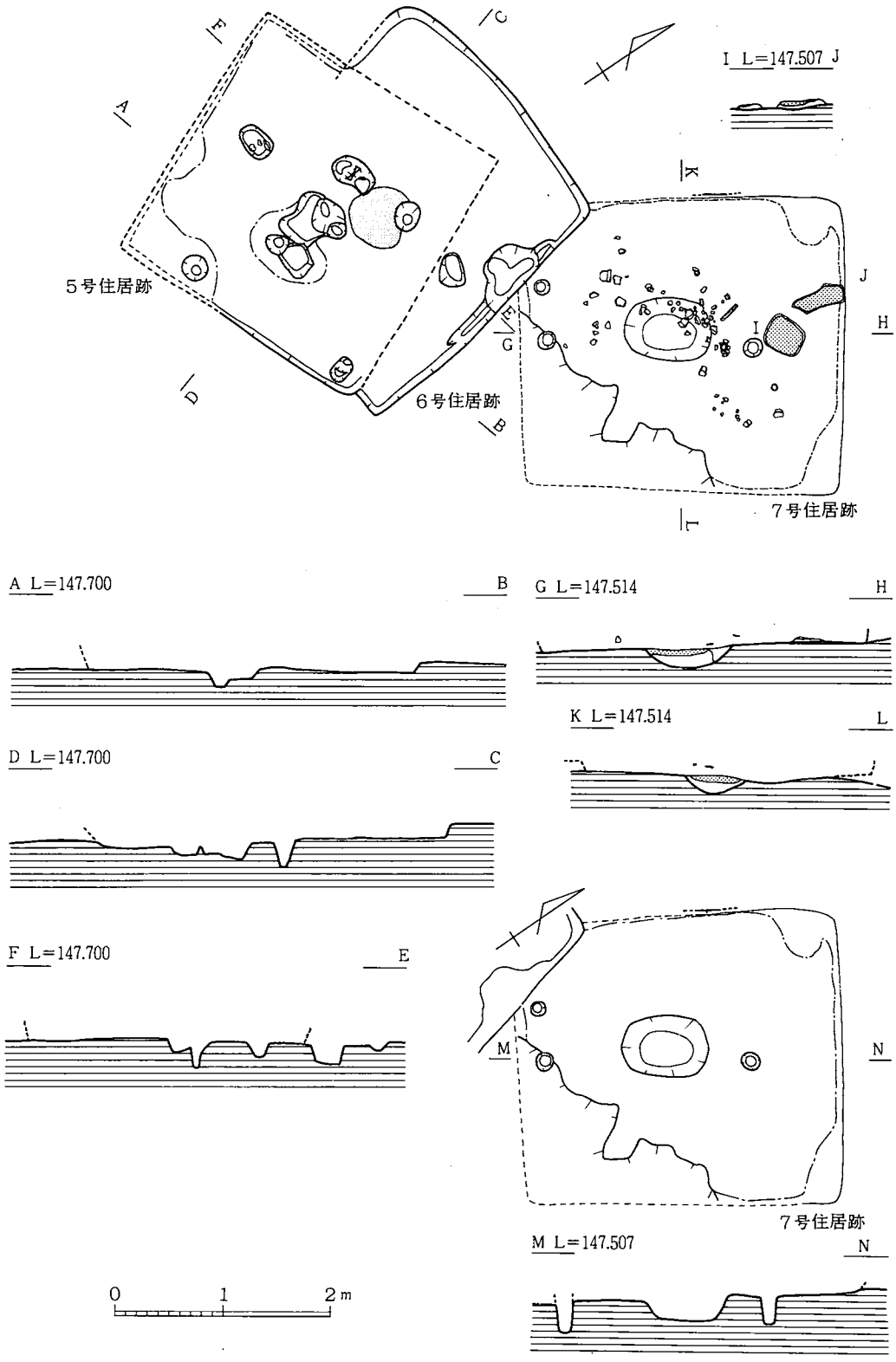
7号住居跡は、5号住居跡、6号住居跡に隣接し、西側隅で一部6号住居跡と重複している。全体的に削平を受けており、北辺と西辺の一部で床面を確認したのみである。予想される平面形態は正方形に近い長方形、規模は、G－H線上で、2.98m、K－L線上で2.66m、床面積約8.03m²を測る。

炉は、住居跡の中央部やや西寄りの位置に検出された。長径0.80m、短径0.56mの南北に長い整美な楕円形を呈する。断面は浅い擂鉢形で焼土の堆積が見られる。また炉の北側の床面に2ヶ所、焼土、炭化物の堆積がみられる。

柱穴は、3個検出した。そのうち、炉をはさんでほぼ対称に並んだ2個を主柱穴とする2本柱の竪穴式住居であったと想定される。南側の一部を除く床面ほぼ全面に硬化面が確認された。主軸方向は、N－56°－Wであった。

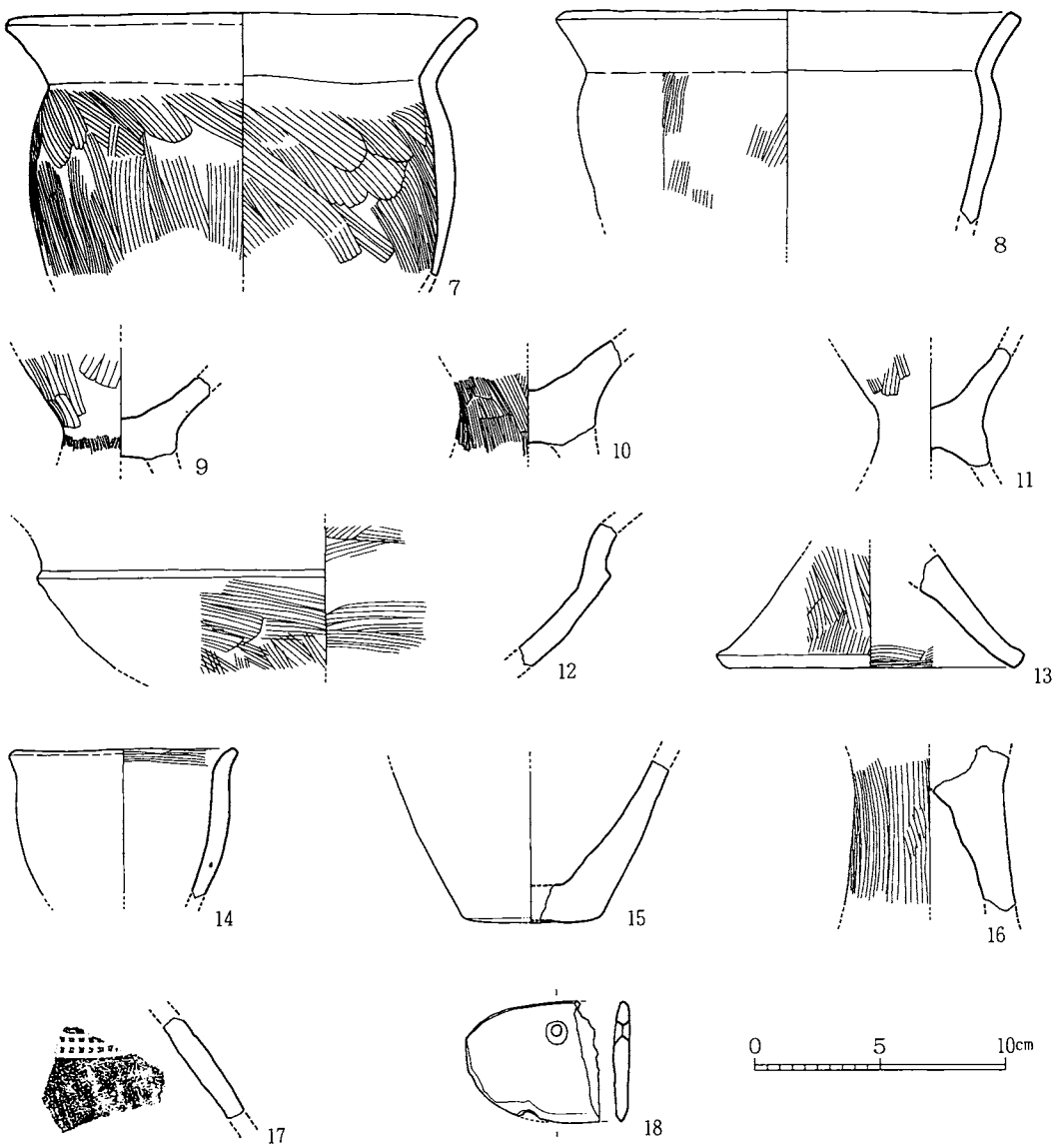
遺物は、硬化面の範囲、特に炉周辺に多く集中して出土したが、そのほとんどが器形復元の不可能な資料である。従って、ここでは比較的良くその形状・特徴を留めているものに限って図示している（第150図）。なお、7～17の土器は7号住居跡から、18の資料は5号住居跡から出土したものである。

7～11・13は、甕形土器である。7は、口縁部～胴部上半部の土器である。土器の器面には、口縁部で横方向のナデが、胴部内外面で刷毛目が残されている。胴部下半には、煤の付着が認められる。8は、7とは大きく形状を異にしているもので、器面は、胴部に僅かに刷毛目を



第149図　第５・６・７号住居跡実測図

残すのみで、ほとんどの部分はナデによって整形されている。9～11・13は、胴部から脚部の上部にかけてのものである。器面の整形は、刷毛目が中心で、その後にナデ整形を行なうもの（11）がみられる。12は、坏部下半の高坏である。下半部と上半部との境は、明瞭であり、胴張り気味の下半部から上半部では直立気味に折れて、その後急激に口縁部に向けて開いていくという器形をとる。14は、小型の鉢形土器である。器面は、口縁部の内側に刷毛目を残すのみで、すべてナデによって整形されている。15は、凸レンズ状の壺形土器の底部で、器面には丁寧なナデがみられる。16は、高坏の脚部と考えられる。表面は、刷毛目がみられる。17は、免田



第150図　5・7号住居跡出土遺物実測図

式土器の胴部上半部の破片である。器面は、灰褐色の色調を呈している。

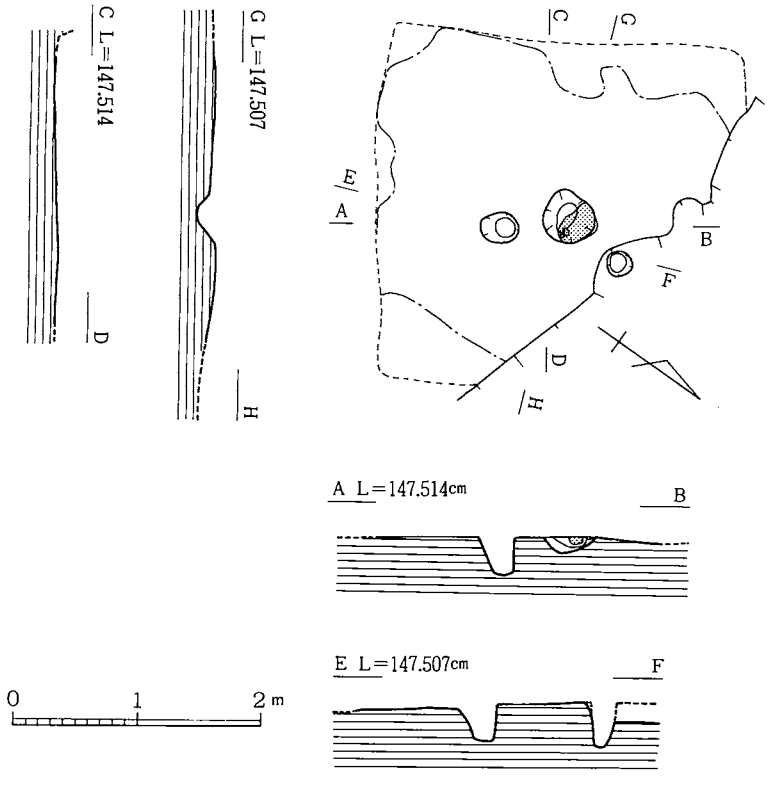
18は、楕円形の形状に近い石庖丁の欠損品で、石材は、千枚岩が使用されている。孔は、背部側に１個が両面より穿たれている。

８号住居跡（第151図）

７号住居跡の東方約９ｍ、東側平坦部に位置する（第143図）。全体的に削平を受けており、住居跡の北側1/3程度は完全に失われている。硬化面の広がりから推定される平面形態の規模は南北方向で2.90m、東西方向で2.80m、床面積8.12m²ほどの正方形を呈した住居跡が想定される。

炉と思われる施設は、住居跡のほぼ中央に位置し、0.42m×0.44m の円形を呈している。他の住居跡の炉と比べるとやや小型である。断面は浅い擂鉢形を呈し、焼土を少量含む。柱穴は炉をはさんで削平で失われた部分に１個、炉の南側に１個検出された。この２つが主柱穴になるものと想定される。硬化面は削平で失われた部分を除く床面全面に認められた。主軸方向はＮ－64°－Ｅであった。

この住居跡からは、遺物は出土しなかった。



第151図　８号住居跡実測図

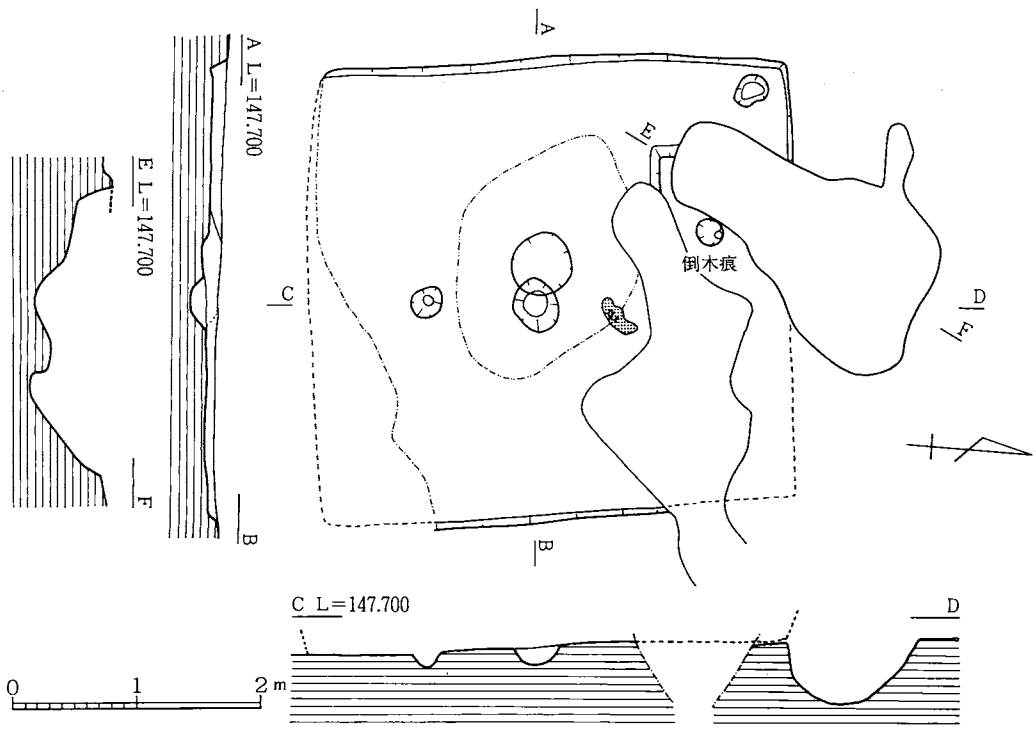
9号住居跡（第152図）

丘陵の東側、麓部付近に位置し、8号住居跡の東方26mのところにある（第143図）。

住居跡の南辺および、北辺、東辺の一部は削平により失われているが、ほぼ正方形の形態が確認できた。規模はA－B線上で3.68m、C－D線上で推定3.90m、推定床面積14.36m²を測る。壁高は西壁で最高14cm、東壁で10cmを測った。床面は丘陵の斜面に沿って、北から南へゆるやかに傾斜している。住居跡は北側1/3程度を倒木痕によって破壊されている。

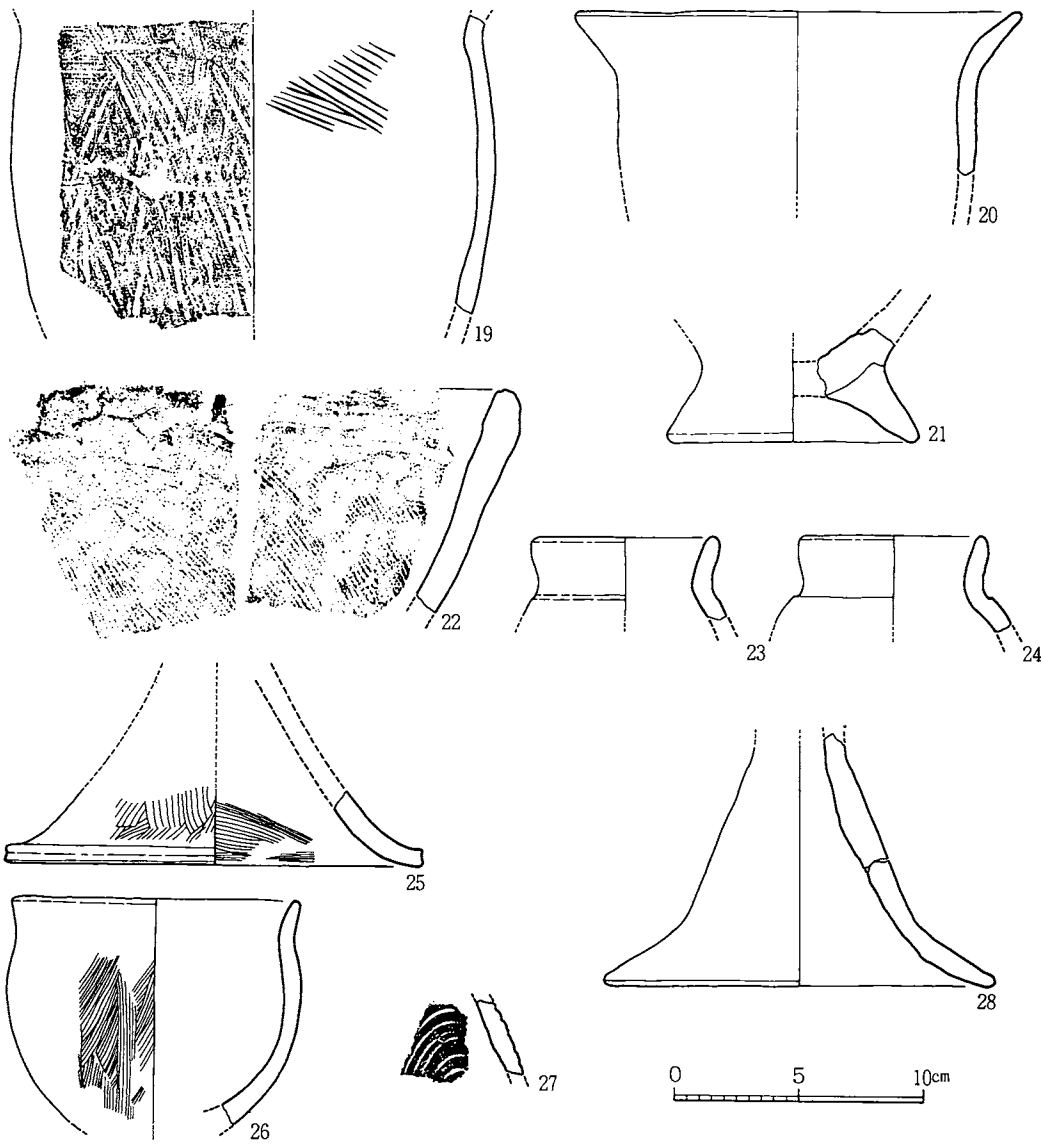
炉は、住居跡中央部にあり、平面形態は0.42m×0.36mの小さな円形、断面は擂鉢形を呈し、炭化物、焼土を含む黒褐色土が堆積している。炉の周辺にも焼土、炭化物の分布が見られた。柱穴は1個が残されて、それに対応するものは、倒木痕によって消失している。おそらく、2本柱の構造をとるものであろう。また住居跡の北側には、ベッド状遺構の一部かと思われる段が検出された。硬化面は、南辺でその範囲が確認され、住居中央部、炉の周辺にも1ヶ所確認された。主軸方向はN－85°－Eであった。

遺物は、住居跡内、特に南西隅に集中して出土した。ほとんどが床面直上である。19～21は、甕形土器である。19は、口縁部を欠いた胴部上半の土器で、頸部からあまり胴を張らずに底部へ至るという器形をとっている。整形は、内外面とも荒い刷毛目によっているが、内面には不



第152図　9号住居跡実測図

定方向のナデが観察される。20は、口縁部から胴部上半部で、19のように胴を張らないという器形を持つ小型の土器である。器面は、すべてナデによって整形されている。21は、脚部である。成川式土器のものに類似する。22は、刷毛目によって整形された鉢形土器である。23・24は、強いナデによって整形された小型の壺形土器である。25・28は、高坏の脚部である。26は、外面胴部に刷毛目を残す小型の鉢形土器である。27は、免田式土器の重弧文部分であろう。



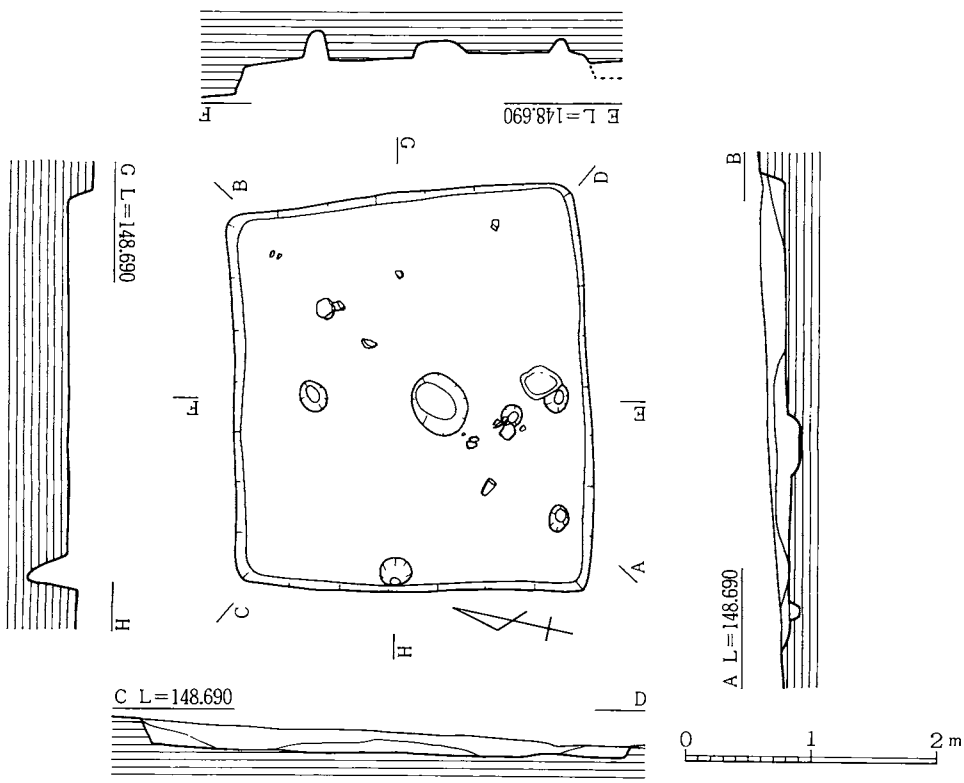
第153図　９号住居跡出土遺物実測図

10号住居跡（第154図）

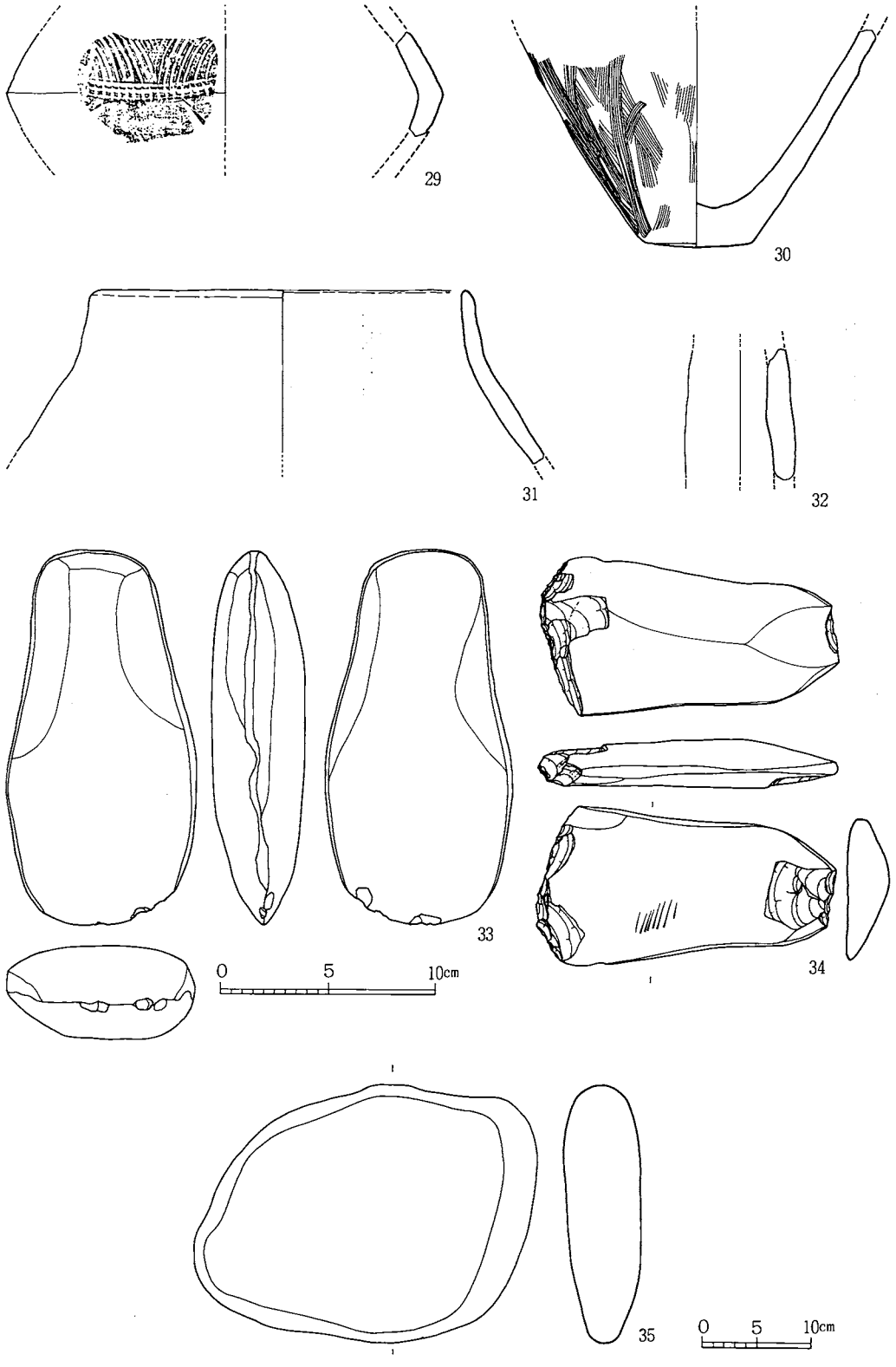
丘陵の北東側の麓部に位置し、本遺跡中では最も山部に近いところにある住居跡である（第143図）。斜面に構築されている為、北側から南側へかけて緩やかに傾斜しているが、削平等の度合いが少なく、残存状態は良好である。規模は、G－H線上で3.16m、E－F線上で2.88m、床面積9.10m²を測り、平面形態は、やや台形に近い形を呈している。壁高は、北壁で最高26cmを残し、平均すると約15cm程を測る。

炉は、住居跡の中央やや南寄りの位置に設けられていた。長径0.50m、短径0.42mの南北にやや長い楕円形を呈する。断面は皿状で底面に薄く焼土が堆積している。柱穴は5個、いずれも中心より西側に集中して検出された。そのうち、北壁側の1個と炉跡をはさんでそれとほぼ対称に位置する1個を主柱穴とする2本柱の構造が想定できる。この住居跡では、硬化面の広がりは認められなかった。主軸方向は、N－77°－Eであった。

遺物は炉の周囲を中心に出土した。30～35が10号住居跡より出土した遺物である（第155図）。30は、底部が凸レンズ状に膨らんだ壺形土器の底部である。外面に刷毛目がみられる。31は、ナデ整形によった口縁部から胴部上半の壺形土器である。口縁は、直口している。32は、高坏の脚部で、明褐色の色調を呈している。33は、砂岩製の太形蛤刃の磨製石斧である。刃部は、



第154図　10号住居跡実測図



第155図　10号住居跡出土遺物実測図

主に右寄りの部分が研ぎ直しによって擦り減り、しかもこの部分を中心に刃こぼれ状の小剝落痕が観られる。34は、砂岩製の砥石で、表面に擦痕状の使用痕が観察される。この他、長軸の両側辺には打撃による剝離痕が観察される。35は、砂岩製の台石である。表面には、弱い磨きがあり、一部に敲打痕が観察される。

29は、試掘調査の際に出土した免田式土器の胴部破片である。なお、この土器の出土地点は、試掘坑の位置から10号住居跡の周辺部にあたるものと考えられる。

この他に、東側平坦部の南側縁辺付近、丘陵の谷部に１ヶ所、弥生時代のものと思われる硬化面が検出され、この部分から弥生式土器が出土している。(第158図38)。この土器は、高坏の坏部で、表面はナデ、裏面は刷毛目およびナデによって整形されている。器形は、下半部から上半部へとやや垂直に傾きを変え、その後口縁部に向けて大きくラッパ状に開くという特徴を持ち、外面における坏部の上半部と下半部との境は比較的明瞭である。また、内面ではその境はさらに明瞭で、稜線を持つ状態である。

⑵土器埋納土坑（第156・157図）

土器埋納土坑は、２基検出された。その配置は、東西両側の平坦部にそれぞれ１基が点在するという状況である（第143図)。

１号土器埋納土坑（第156図）

１号土器埋納土坑は丘陵の西側平坦部東側縁辺付近に位置している。平面形態は楕円形を呈し、東側に１個の小穴を持つ。規模は長径0.51m、短径0.36m、深さ0.21m を測る。埋土は炭化物を多く含む褐色土層であった。

土器の出土状況は、口縁部～胴部屈曲部の部位が土坑上部に、わずかではあるが底部が土坑中～下部に出土するというものであった。更に上にあるものは表側を向け、下になっているものは裏側を向けていた。このような状況から、土圧により押し潰され、その後散逸したものと想定された。

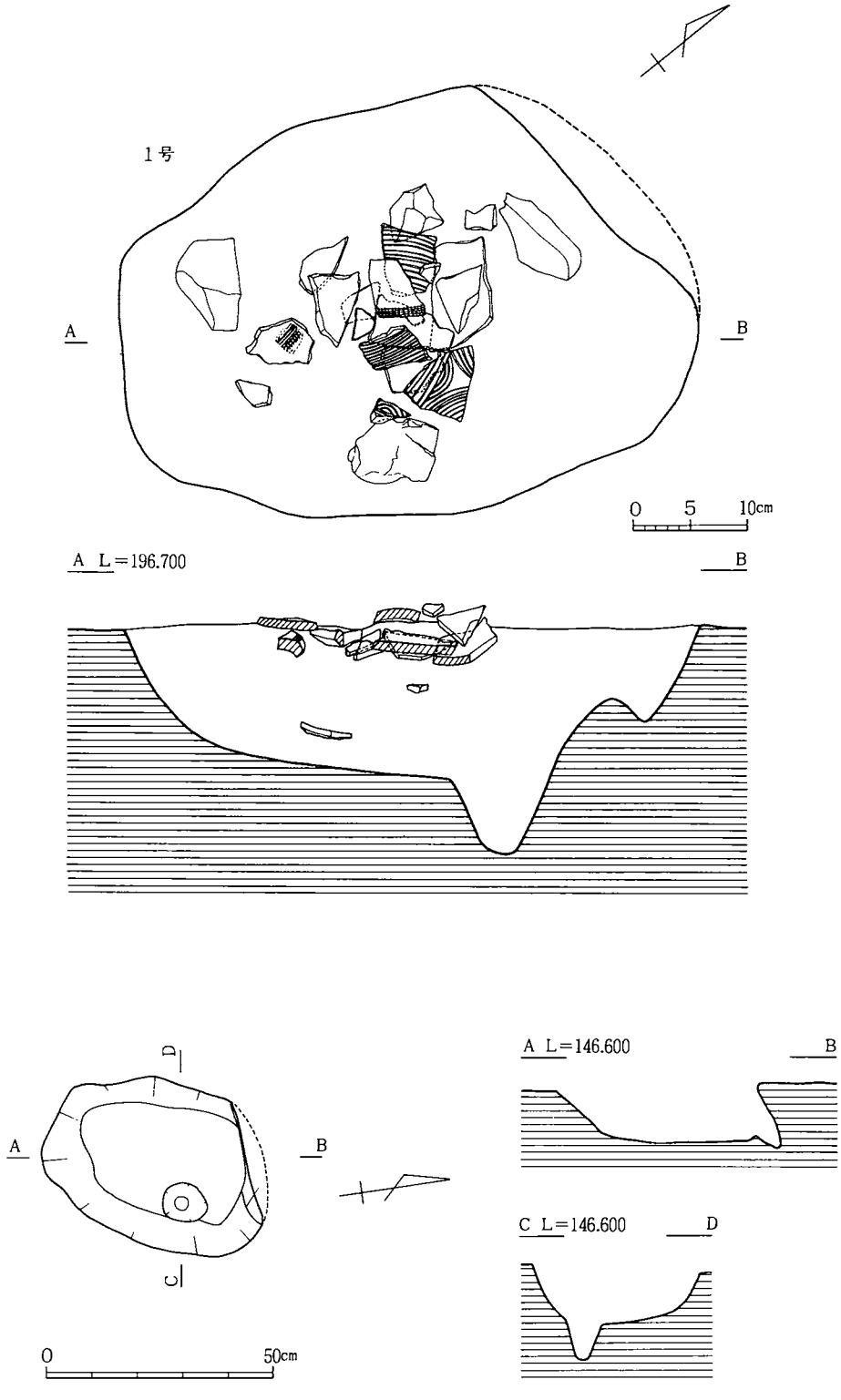
36(第158図)が出土した免田式土器である。頸部を欠き、胴部上半部を中心として下半部～底部の一部が出土している。文様は、屈曲部近くでの横位沈線と縦位刻み目、肩部での横位沈線、そしてその間の下向き・上向きの重弧文という構成を持ち、文様施文は、器面研磨の後に行なわれている。文様単位は、９単位である。

２号土器埋納土坑（第157図）

２号土器埋納土坑は、東側平坦部に位置し、直径0.36m～0.35m、深さ0.05m ほどの規模を持つと思われる円形土坑である。埋土はアカホヤ火山灰を基調とする褐色土であった。

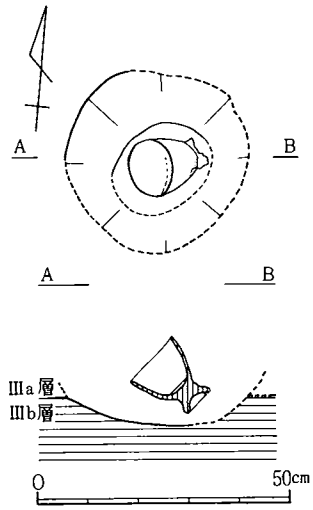
土器は、水平方向から43°傾き、しかも口縁部を西の方向へ向けて、土坑底面より２cm浮いた状態で出土した。完形品である。

37(第158図)がその出土した脚台付きの小型の鉢形土器の完形品である。その法量を示せば、



第156図　土器埋納土坑実測図

器高11.2cm(脚台高2.9cm)、口縁部径11cm、底部径7.2cmである。土器は、荒いナデによって整形された鉢部と手づくね状の荒い作りの脚部の二つの部位に分かれ、この両者の接合部は、篦状の工具によって強く撫でられている。



第157図　土器埋納土坑実測図

⑶土坑（第159図～第162図）

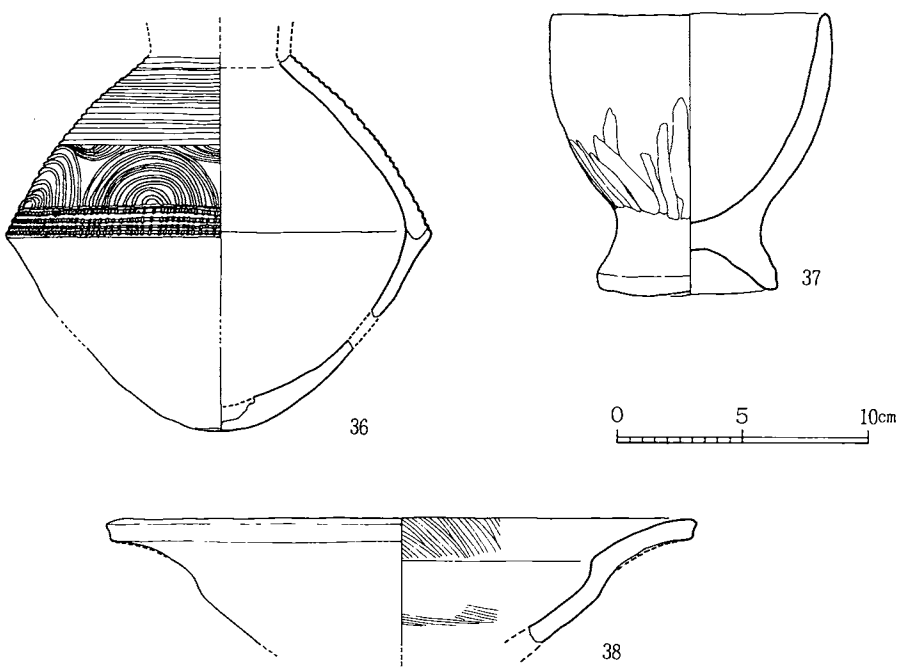
土坑は、すべて丘陵の西側平坦部に集中して分布し、しかもその分布域は、平坦部の外縁を中心に環状に配置された状況を呈している（第143図）。

1号土坑（第159図）

西側平坦部の南側に位置し、12号土坑と隣接している。全体の1/3ほど攪乱を受けているが、平面形態は円形を呈し、規模は、直径1.00m～0.98m、深さ1.46m を測った。埋土は赤褐色土で細かい砂礫をわずかに含む。土坑内より土器片が出土した。

2号土坑（第159図）

西側平坦部の北側縁辺付近に位置する。平面形態は不整な楕円形を呈し、規模は長径1.54m、短径1.27m、深さ1.59m を測る。埋土は、上層で少量の炭化物を含む黄褐色土、下層では褐色土であり、底面よりやや上位に粘土が検出された。遺物の出土はなかった。



第158図　土器実測図

３号土坑（第159図）

西側平坦部の南側に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.51m、短径1.12m、深さ1.54m を測る。埋土は上層がアカホヤ火山灰を基本とした褐色土、下層がしまりの弱い暗褐色土であった。出土遺物は無い。

４号土坑（第159図）

西側平坦部の東側縁辺付近に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は直径1.11m～1.02m、深さ1.32m を測る。埋土は、上層でアカホヤ火山灰の粒子を多く含む黄褐色土、下層で褐色土である。出土遺物は無かった。

５号土坑（第160図）

西側平坦部の東側縁辺付近に位置する。平面形態は長方形に近い不整形を呈し、規模は長径0.80m、短径0.71m、深さ1.37m（推定値）を測る。埋土は、上層でアカホヤ火山灰を基本とした黄褐色土、下層で砂質の褐色土である。土坑の下端は未確認である。

６号土坑（第160図）

西側平坦部の東側、谷部の縁辺付近に位置する。平面形態は不整な楕円形を呈し、規模は長径1.21m、短径1.03m、深さ1.68m を測る。埋土は、上層でアカホヤ火山灰を基本とした黄褐色土、下層でしまりがなくサラサラした褐色土である。遺物は出土しなかった。

７号土坑（第160図）

丘陵の麓部西側に位置している。平面形態は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸1.04m、短軸0.82m、深さ1.29m を測る。埋土は、アカホヤ火山灰を基本とした黄褐色土である。遺物の出土は無かった。

８号土坑（第161図）

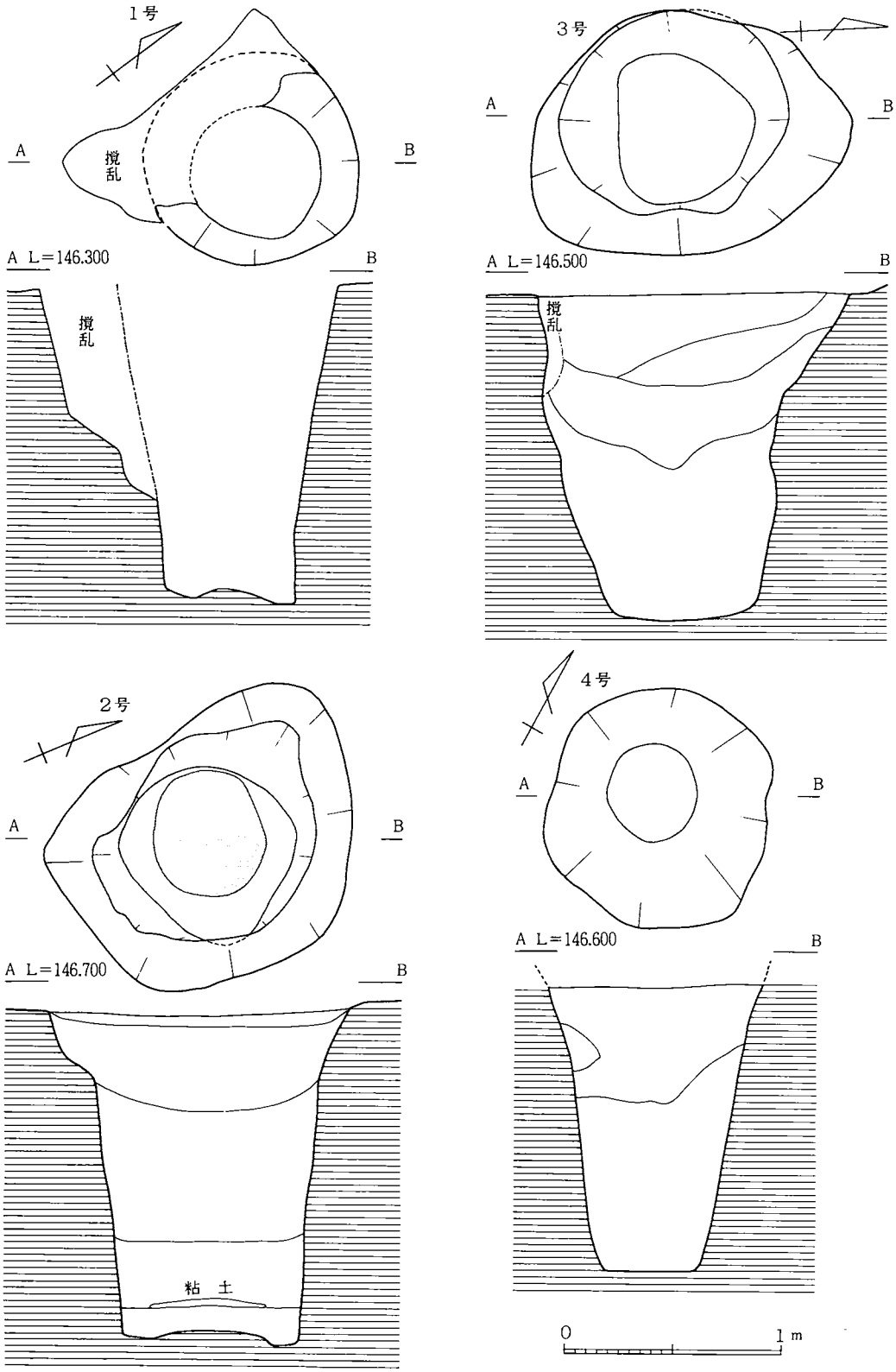
西側平坦部に位置する。直径0.57m～0.51m の規模を持つ円形の平面形態を呈するが、斜めに掘り込まれており、、他の土坑とは違った形態を示す。埋土は、上層がアカホヤ火山灰を基本とする粘質の黄褐色土で、下層では粘質の明褐色土となる。出土遺物は、無い。

９・10号土坑（第161図）

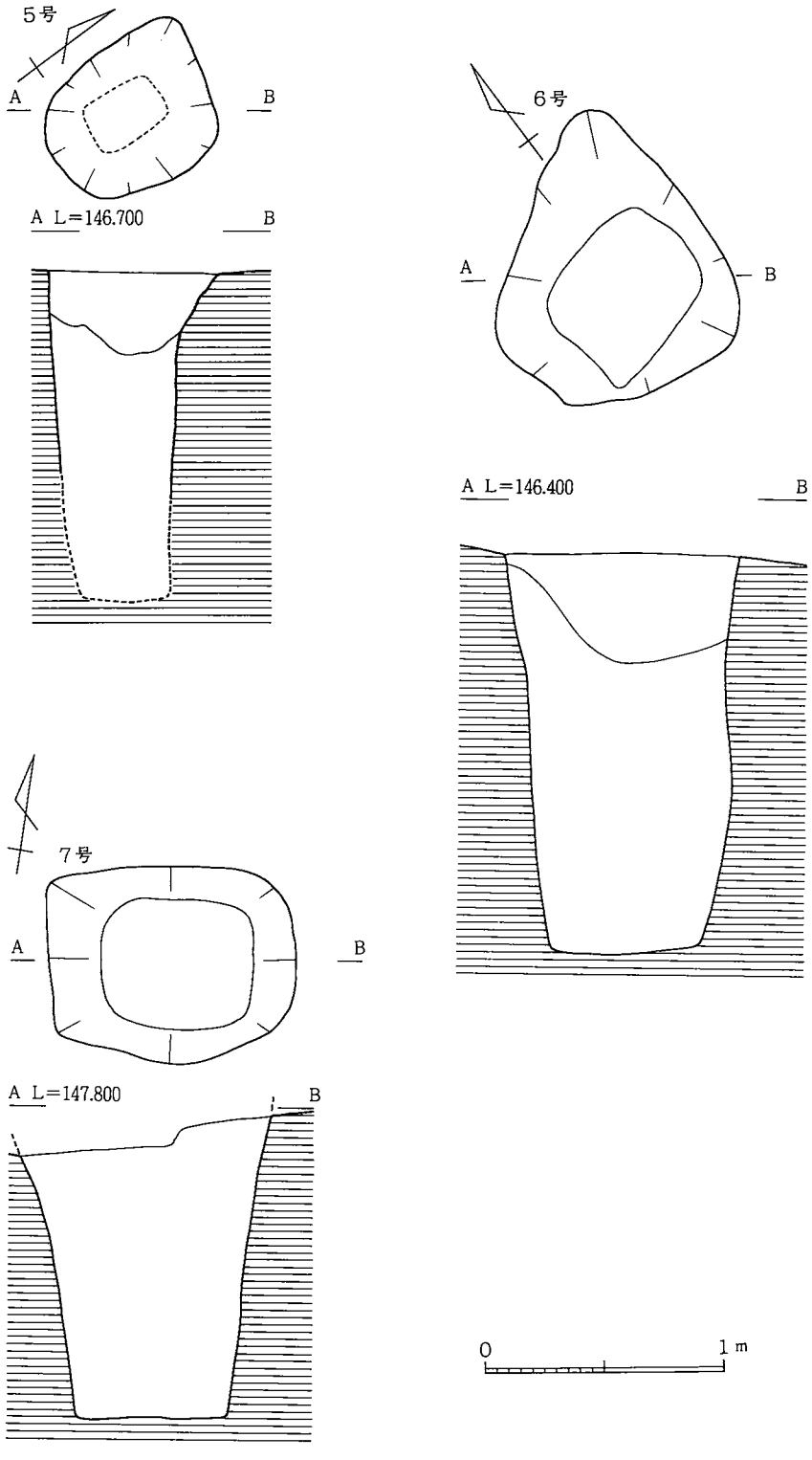
西側平坦部の最も南寄りの縁辺部に隣接して位置する。９号土坑は、かなり不整な長楕円形を呈し、規模は長径2.04m、短径0.93m、深さ0.30m を測る。埋土は、褐色土と黄褐色土から成る。10号土坑の平面形態は、楕円形を呈し、規模は長径0.42m、短径0.29m、深さ0.17m を測る。かなり小型の土坑である。９号・10号いずれの土坑からも、出土遺物は無かった。

11号土坑（第161図）

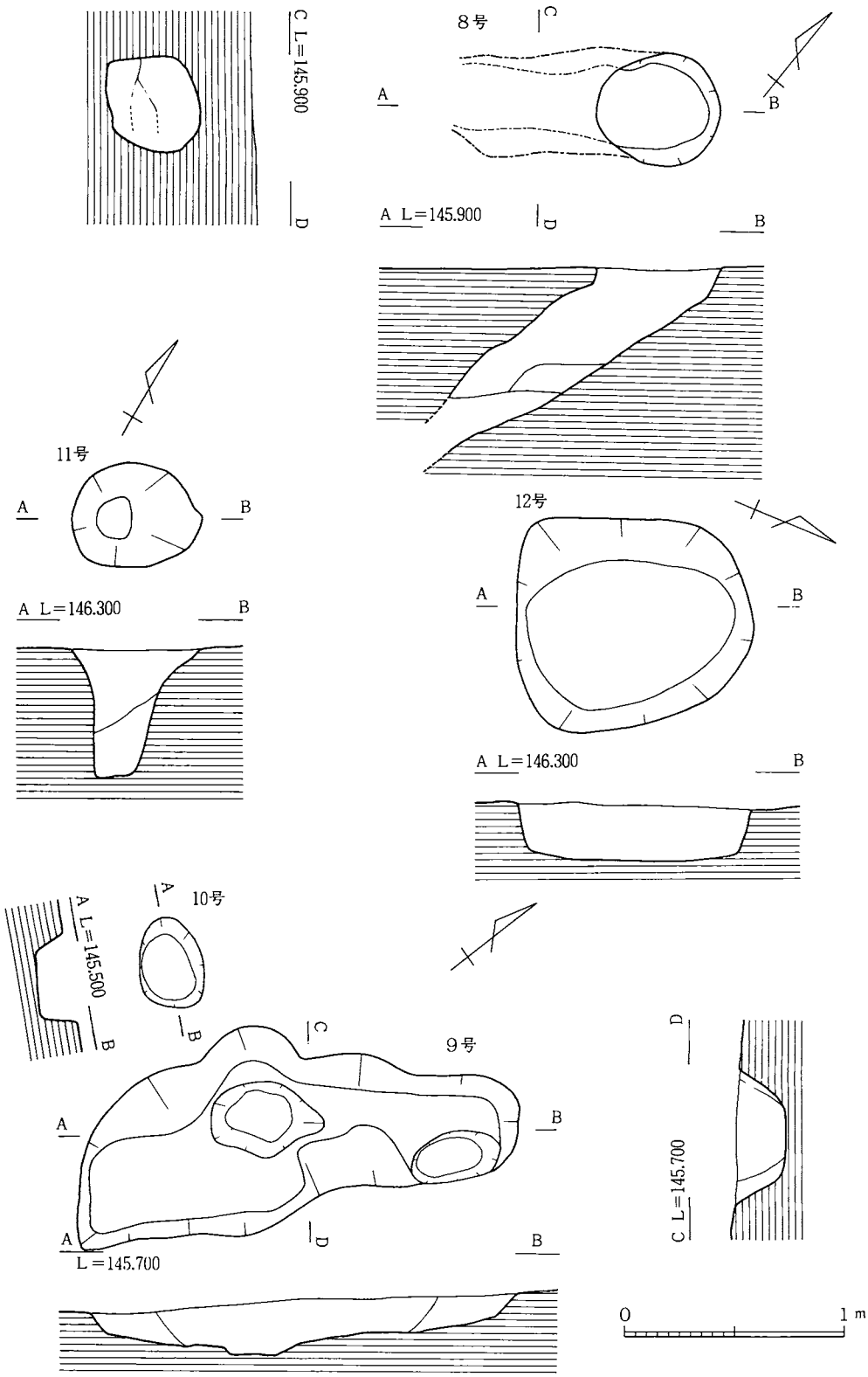
西側平坦部の西部に位置する。平面形態は、円に近い楕円形を呈し、規模は長径0.60m、短径0.47m、深さ0.59m を測る小型の土坑である。埋土は、上層がアカホヤ火山灰を基本とする明褐色土で、下層ではややしまりの強い褐色土となる。出土遺物は無かった。


1号
A
B
撹乱
A L=146.300
B
撹乱
3号
A
B
A L=146.500
B
撹乱
2号
A
B
A L=146.700
B
粘　土
4号
A
B
A L=146.600
B
0
1 m

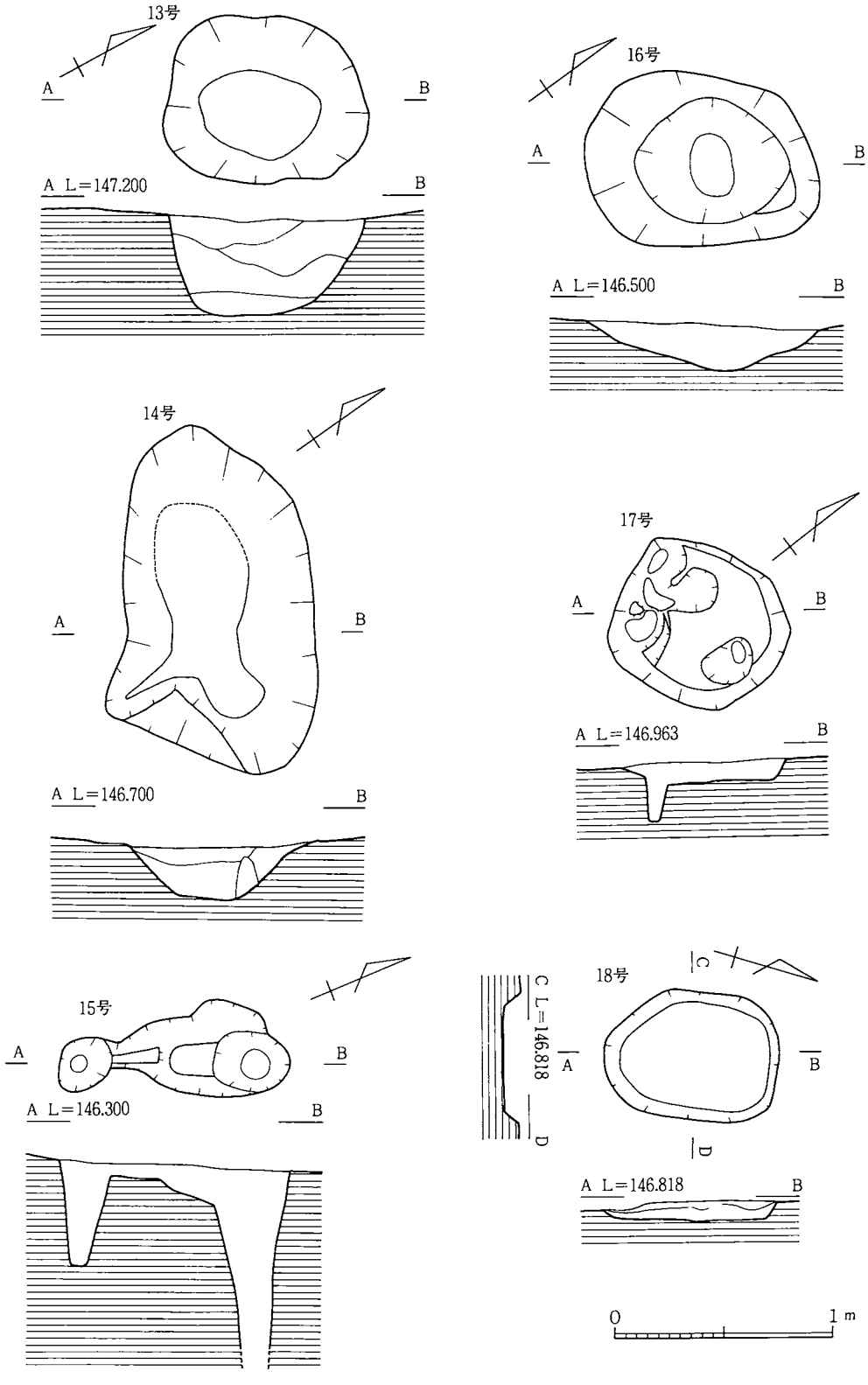
第159図　土坑実測図



第160図　土坑実測図


C L=145.900
D
8号
C
A
B
A L=145.900
D
B
11号
A
B
A L=146.300
B
12号
A
B
A L=146.300
B
A L=145.500
B
A
10号
B
C
9号
A
B
A
D
B
L=145.700
D
C L=145.700
0
1 m

第161図　土坑実測図


13号
A
B
A L=147.200
B
16号
A
B
A L=146.500
B
14号
A
B
A L=146.700
B
17号
A
B
A L=146.963
B
15号
A
B
A L=146.300
B
C L=146.818
A
D
18号
C
A
B
D
A L=146.818
B
0
1 m

第162図　土坑実測図

12号土坑（第161図）

西側平坦部に、１号土坑と隣接して位置している。平面形態は不整な楕円形で、規模は長径1.08m、短径0.97m、深さ0.27m を測る。埋土は、ややしまりのある褐色土である。遺物の出土は無かった。

13号土坑（第162図）

西側平坦部に位置し、11号土坑の北10m のところにある。平面形態は方形に近い楕円形を呈し、規模は長径0.95m、短径0.77m、深さ0.49m を測る。埋土は、上層からアカホヤ火山灰に類似する黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土となっている。遺物の出土は無い。

14号土坑（第162図）

西側平坦部、13号土坑の東方８ m のところに位置する。平面形態は、北西側が尖った不整な長方形を呈し、規模は長軸1.60m、短軸0.98m、深さ0.27m を測る。埋土は、上層がアカホヤ火山灰主体の黄褐色土、下層がしまりのある黒褐色土である。遺物の出土はなかった。

15号土坑（第162図）

西側平坦部の南部、３号土坑の東６ m に位置する。平面形態は、不整の長楕円形であり、北側と南側に小穴を持つ。規模は長径1.05m、短径0.44m、深さは南側の小穴で0.54m を測る。埋土は、アカホヤ火山灰に類似したにぶい黄褐色土である。遺物の出土は無かった。

16号土坑（第162図）

西側平坦部の南側縁辺付近、15号土坑の南６ m にある。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.05m、短径0.80m、深さ0.24m を測る。埋土はしまりのない明褐色土である。遺物の出土は無かった。

17号土坑（第162図）

西側平坦部に位置し、４号土坑の３ m 北東に隣接している。平面形態は円形を呈し、西側に２個、東側に１個、計３個の小穴を持つ。規模は直径0.84m～0.81m、土坑中央付近で深さ0.12 m を測った。埋土は、暗褐色の砂質土である。この土坑からは、石庖丁が出土した。

18号土坑（第162図）

西側平坦部東側縁辺付近に位置している。平面形態は、隅丸の長方形を呈し、規模は長軸0.79 m、短軸0.58m、深さ0.09m を測る。埋土は、上層で炭化物を多量に含む暗褐色土、下層では上層に比べてしまりのよい褐色土である。遺物の出土は無かった。

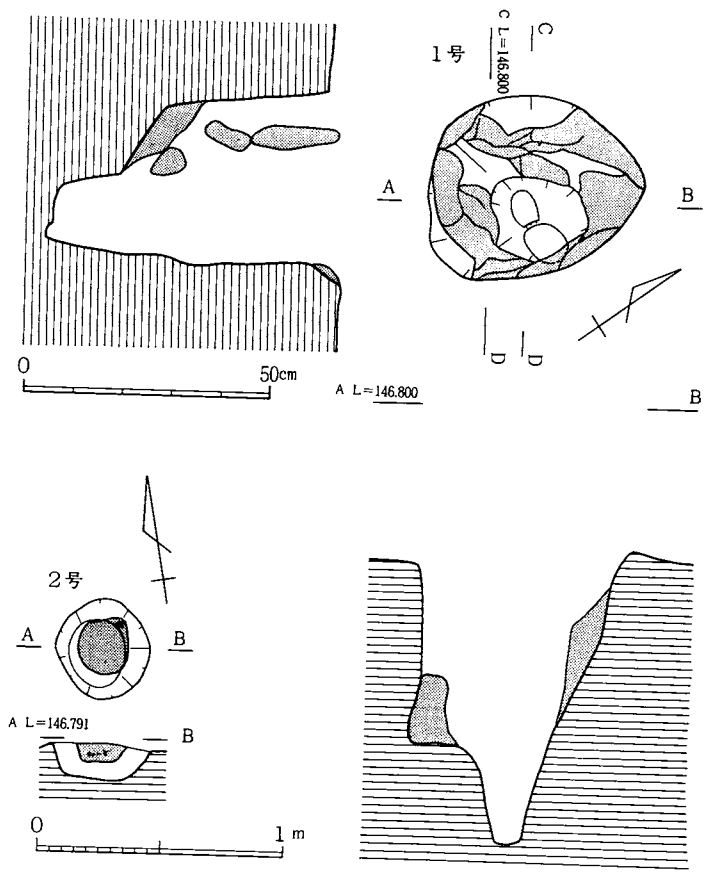
⑷粘土貯蔵穴（第163図）

粘土貯蔵穴は、２基検出された。この遺構は、穴の中に白色の粘土が入っているという点で、他の遺構とは異なっている。遺構は、いずれも丘陵の西側の平坦部にあり、しかもその中央部分に位置している（第143図）。

１号粘土貯蔵穴は、２号住居跡に隣接して検出された。ほぼ円形の形態を持ち、規模は直径

0.43m～0.38m、深さ0.46mを測る。埋土は上層で砂質の暗褐色土、下層では粘質の褐色土である。粘土は平面的な広がりを持ち、部分的に厚くみられ、穴中央よりもむしろ、縁辺に沿って多く見られた。

２号粘土貯蔵穴は、西側平坦部中央付近に位置し、近くには４号住居跡がある。平面形態は円形を呈し、直径0.40m～0.39m、深さ0.18mを測る。埋土は褐色土であった。粘土は、穴の上部に直径約21cm、厚さ７cmの塊で検出された。この粘土の堆積の状態は、１号粘土貯蔵穴とは大きく異なっている。



第163図　粘土貯蔵穴実測図

⑸**穴**（第164図）

土坑の中で小型のものである。遺構は、すべて丘陵の西側平坦部の縁辺部にあり、10基を検出した。

１～４号穴

１号穴の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.45m、短径0.38m、深さ0.54mを測る。埋土は上層が多量の炭化物を含む褐色土、下層はやや明るめの褐色土である。

２号穴は、楕円形の平面形態を呈し、長径0.37m、短径0.30m、深さ0.15mの規模を持つ。埋土は焼土、炭化物を多く含む褐色土である。

３号穴は、２号穴に西側半分程を切られている。規模は短軸0.26m、深さ0.12mを測った。埋土は２号穴のものよりやや暗い褐色土で、上部で弥生式土器が出土した。

４号穴は、長楕円形の形態を呈し、規模は長径0.38m、短径0.24m、深さ0.25mを測った。

５～７号穴

５号穴は、楕円形の平面形態を呈し、長径0.48m、短径0.29m、深さ0.45mを測った。

６号穴は小さな円形を呈し、規模は直径0.31m～0.26m、深さ0.33mを測った。

７号穴の平面形態は、不整な楕円形を呈し、規模は長径0.54m、短径0.30m、深さ0.51mを測

った。

埋土はいずれの遺構も、上層からアカホヤ火山灰に類似する黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土から成る。

8・9号穴

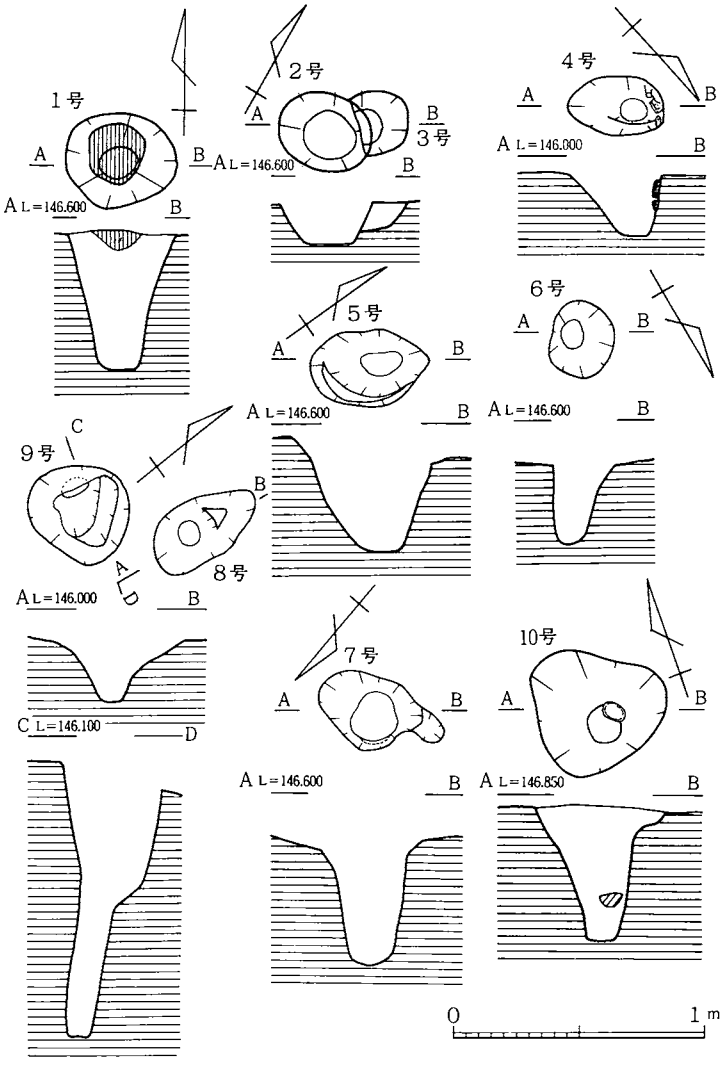
西側平担部の東側縁辺部、谷部の開口部付近に位置する。

8号穴は長楕円形の形態を呈し、規模は長径0.46m、短径0.25m、深さ0.25mを測る。

9号穴は円形の形態を呈し、直径0.42m～0.39m、深さ1.09mの規模を測った。埋土は砂質の暗褐色土である。

10号穴

西側平担部に位置し、4号住居跡に隣接している。平面形態は、隅丸の三角形状を呈し、規模は、長軸0.52m、短軸0.48m、深さ0.53mを測る。埋土は、炭化物を含む暗褐色土であった。



第164図　穴実測図

2. ま と め

弥生時代後期後半に属する10（＋1？）基の竪穴式住居群は、3基（5号～7号）による切り合い関係から、さらに三つ以上の時期に分けられる可能性が強い。そこで、一つの手掛りとして、住居跡の構造・規模そして主軸方向について整理してみたい。

住居は、ほとんどのものが２本柱であるが、１基だけ４本柱の構造をとるもの（１号）がある。しかもこの４本柱の住居には、他の住居とは異なり、長方形の平面形態を呈し、掘り方も深く、硬化した焼土が詰った炉穴がある。こうした構造の１号住居は、遺跡の中では特異な性格をもったものだといえようか。

規模（床面積）では、15m²前後の大型住居（２号・９号）と11.2m²の中型住居（４号）そして６～９m²の小型住居（１号・３号・５～８号・10号）の三つがある。また、主軸方向及び位置関係では、〔２号・７号〕、〔４号・５号〕、〔９号・10号〕、〔１号・６号・８号〕にまとめられ、３号住居は、４号・５号住居との関係が深いようでもある。しかし、これらが時間的関係として捉えられるかどうかは、出土資料も少なく、しかも遺構と遺物との共伴関係が明確ではないために、不明である。唯、これらを時間的関係と仮定して、切り合い関係から前後関係を引き出せば、〔２号・７号〕→〔１号・６号・８号〕→〔３号？・４号・５号〕ということになろうか。

以上、上記仮定の下で整理をすれば、大丸・藤ノ迫遺跡の住居群は、大型（２号・９号）・中型（４号）・特殊住居（１号）と小型住居による２～３棟の構成とすることができる。そして、この他に集落内の遺構には、土器の埋納土坑、粘土の貯蔵穴、円形ないし方形の深さ1.3m～1.6mの土坑（１号～７号）そしてその他の土坑・穴がある。これらは、集落内での祭・貯蔵等の役割そして集落構成を考える上での資料となろう。

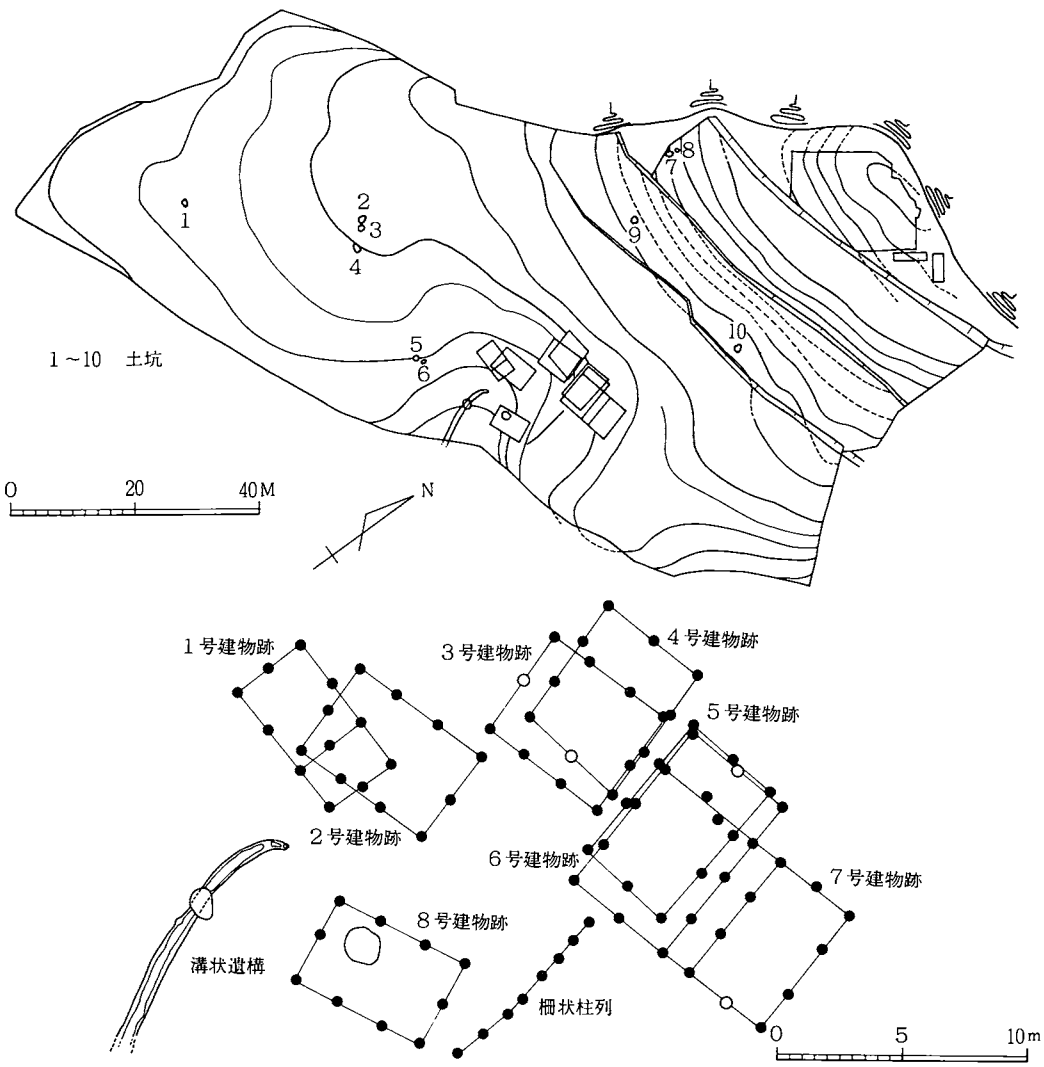
第5節　歴史時代の遺構と遺物

歴史時代の包含層は、第II層黒色土層にあたるが、ほとんどが削除されて丘陵の土層堆積状態の良好な部分に僅かに残存するのみである。歴史時代の調査は、この第II層を埋土とする遺構が対象であった。その結果、複数の掘立柱建物による屋敷跡とその付属施設が検出された。

1．遺構と遺物

(1)掘立柱建物跡（第166～169図）

掘立柱建物跡は、8棟を数え、すべて丘陵の中央部に南を向いて開口する谷部に位置してい



第165図　遺構配置図

る（第165図）。これら８棟に及ぶ建物群は、数回の建て替えの結果であろうが、その空白部を中心とした配列の状態から考えてみれば、一つの屋敷として全体を捉えることができる。

１・２号掘立柱建物跡（第166図）

最も西寄りに位置する掘立柱建物跡２棟で、両者は切り合っている（第165図）。

１号建物跡は、桁行３間（6.05m、20尺）、梁行２間（3.05m、10尺）の5.59坪の面積を持つもので、東側に間敷切の柱がある。桁行方向は、N－90°－Eである。柱穴は、直径25cm～40cm、深さ20cm～50cmの規模を持ち、そこに直径13cm～15cmの柱痕跡が残されている。柱間寸法は、桁行で西より6.5尺＋6.5尺＋７尺、梁行で５尺である。

２号建物跡は、桁行３間（６ m、20尺）、梁行２間（４ m、13尺）の7.27坪の面積を持つもので、桁行方向は、N－70°－Eである。柱穴は、直径30cm～38cm、深さ15cm～70cmを測り、そこに直径18cmの円形を呈する柱痕跡がみられる。柱間寸法は、桁行で西より6.5尺＋７尺＋6.5尺、梁行で6.5尺である。

３・４号掘立柱建物跡（第167図）

１・２号建物跡の北隣の掘立柱建物跡２棟で、切り合い関係が認められる（第165図）。

３号建物跡は、桁行３間（5.53m、18.5尺）、梁行２間（4.7m、15.5尺）の7.87坪の面積を持つもので、桁行方向は、N－70°－Eである。柱穴は、直径25cm～40cm、深さ30cm～75cmの規模を持ち、そこに12cm～20cmの柱痕跡がある。柱間寸法は、南桁行で西より5.5尺＋６尺＋6.5尺、北桁行で6.5尺＋６尺＋６尺、梁行で北より８尺＋7.5尺である。

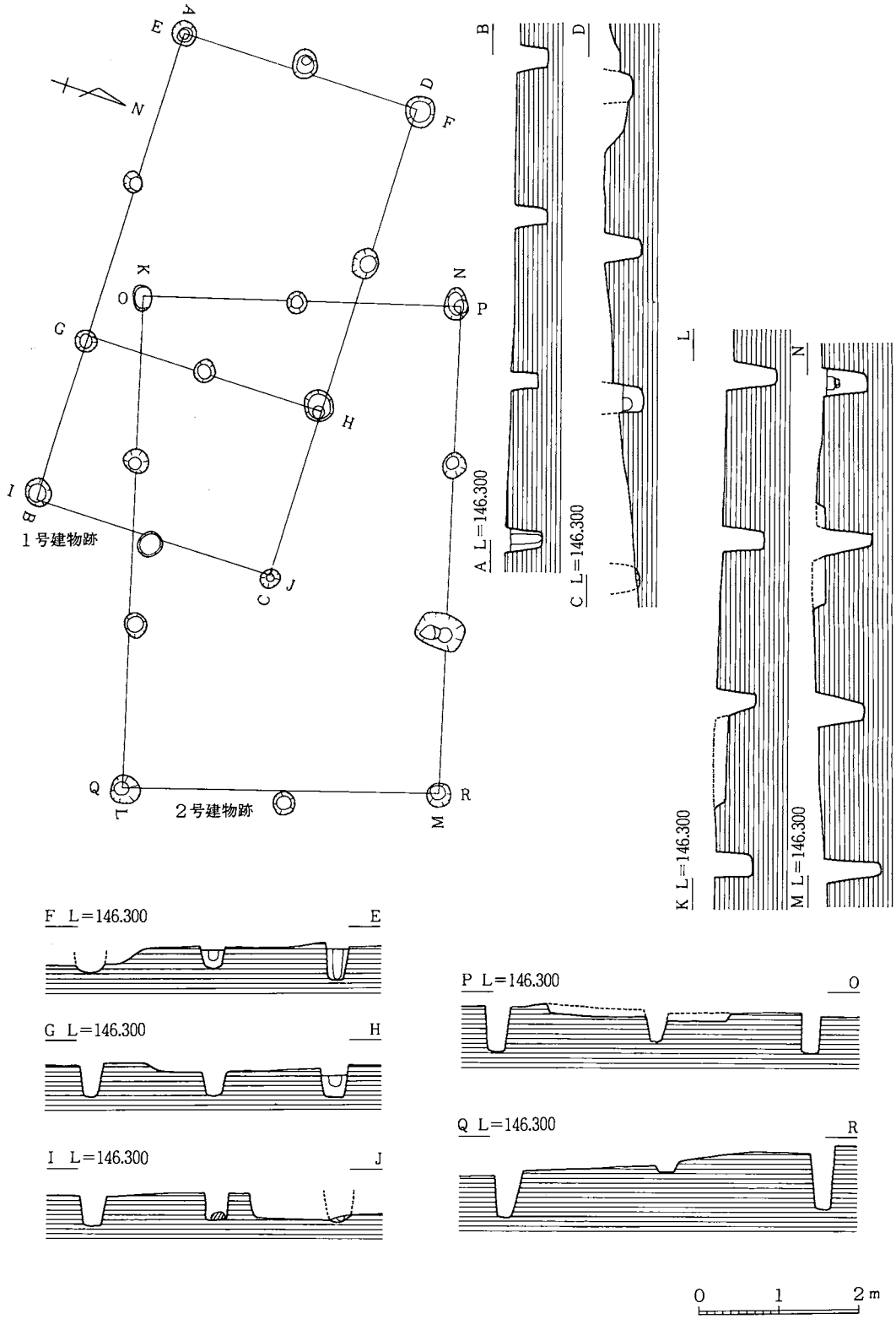
４号建物跡は、桁行３間（5.7m、19尺）、梁行２間（4.65m、15.5尺）の8.03坪の面積を持つもので、桁行方向は、N－15°－Wである。柱穴は、直径25cm～55cm、深さ35cm～70cmの規模を持ち、そこに20cmの柱痕跡がある。柱間寸法は、西桁行で北より６尺＋6.5尺＋5.5尺、東桁行で６尺＋6.5尺＋6.5尺、梁行で西より7.5尺＋８尺である。

５・６・７号掘立柱建物跡（第168図）

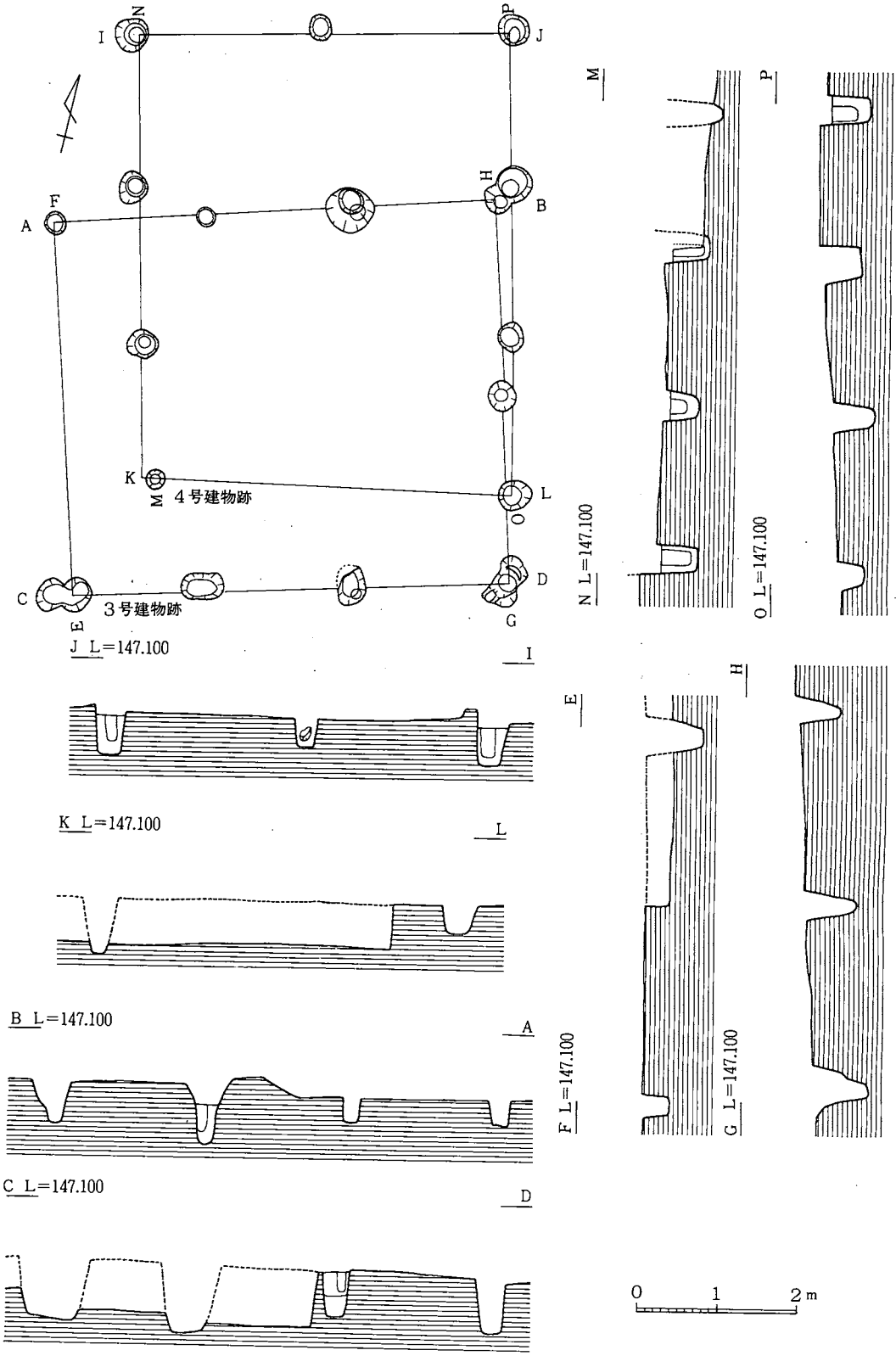
３・４号建物跡の東に隣接したもので、５号と６号建物跡が切り合っている（第165図）。

５号建物跡は、桁行３間（6.78m、22.5尺）、梁行２間（4.2m、14尺）の8.63坪の面積を持つもので、桁行方向は、N－15°－Wである。柱穴は、直径28cm～50cm、深さ10cm～60cmを測り、そこに18cm～20cmの柱痕跡が確認される。柱間寸法は、桁行で北より7.5尺＋７尺＋８尺、梁行で７尺である。

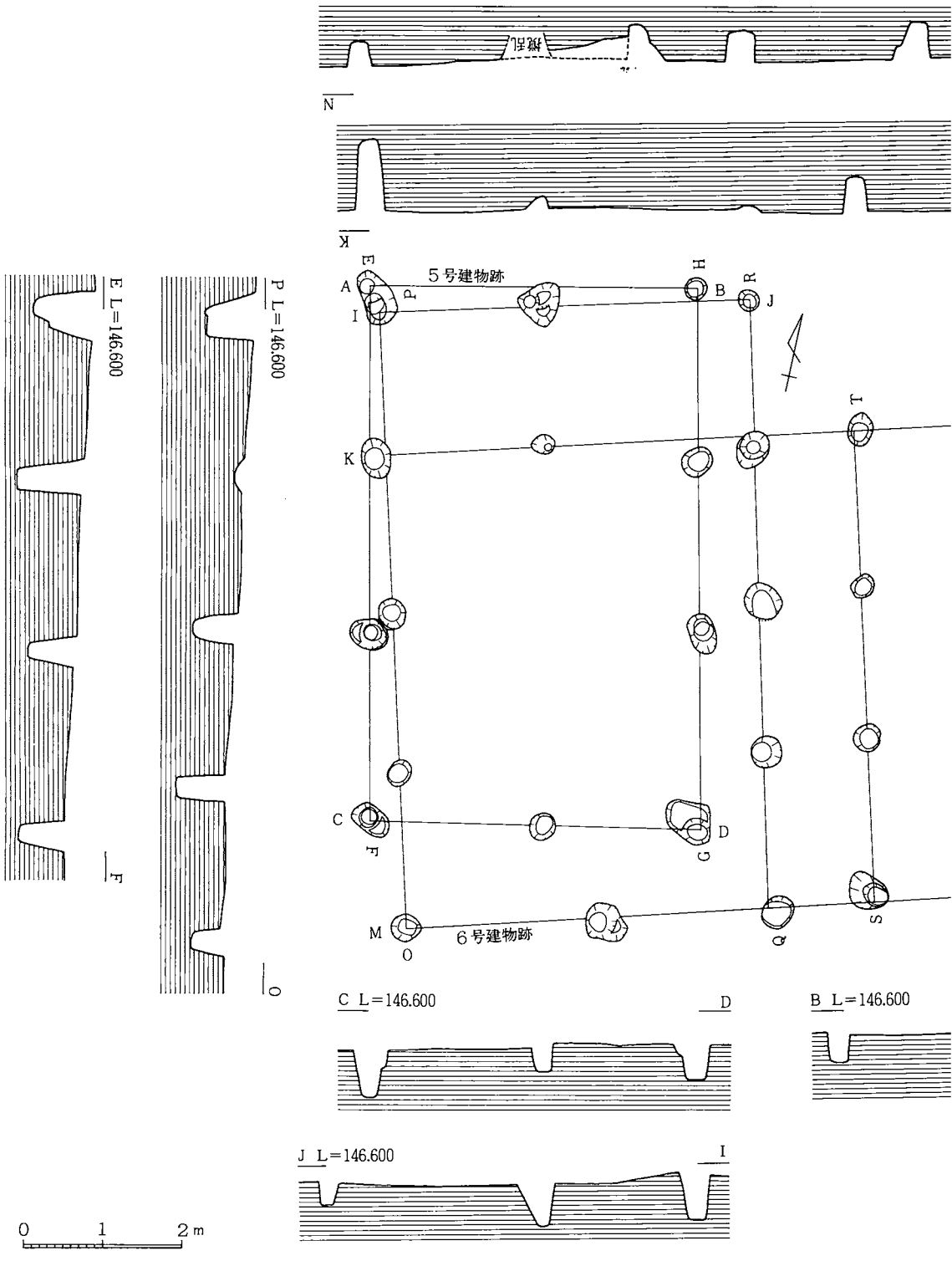
６号建物跡は、桁行４間（7.7m、25.5尺）、梁行２間（4.67m、15.5尺）の10.9坪の面積を持つもので、北側に間敷切の柱穴がある。桁行方向は、N－15°－Wである。柱穴は、直径25cm～50cm、深さ10cm～90cmの規模で、そこに直径25cmの柱痕跡が残っている。柱間寸法は、西桁行で北から5.5尺＋７尺＋6.5尺＋6.5尺、東桁行で5.5尺＋6.5尺＋6.5尺＋７尺、北梁行で西より７尺＋8.5尺、南梁行で8.5尺＋７尺である。



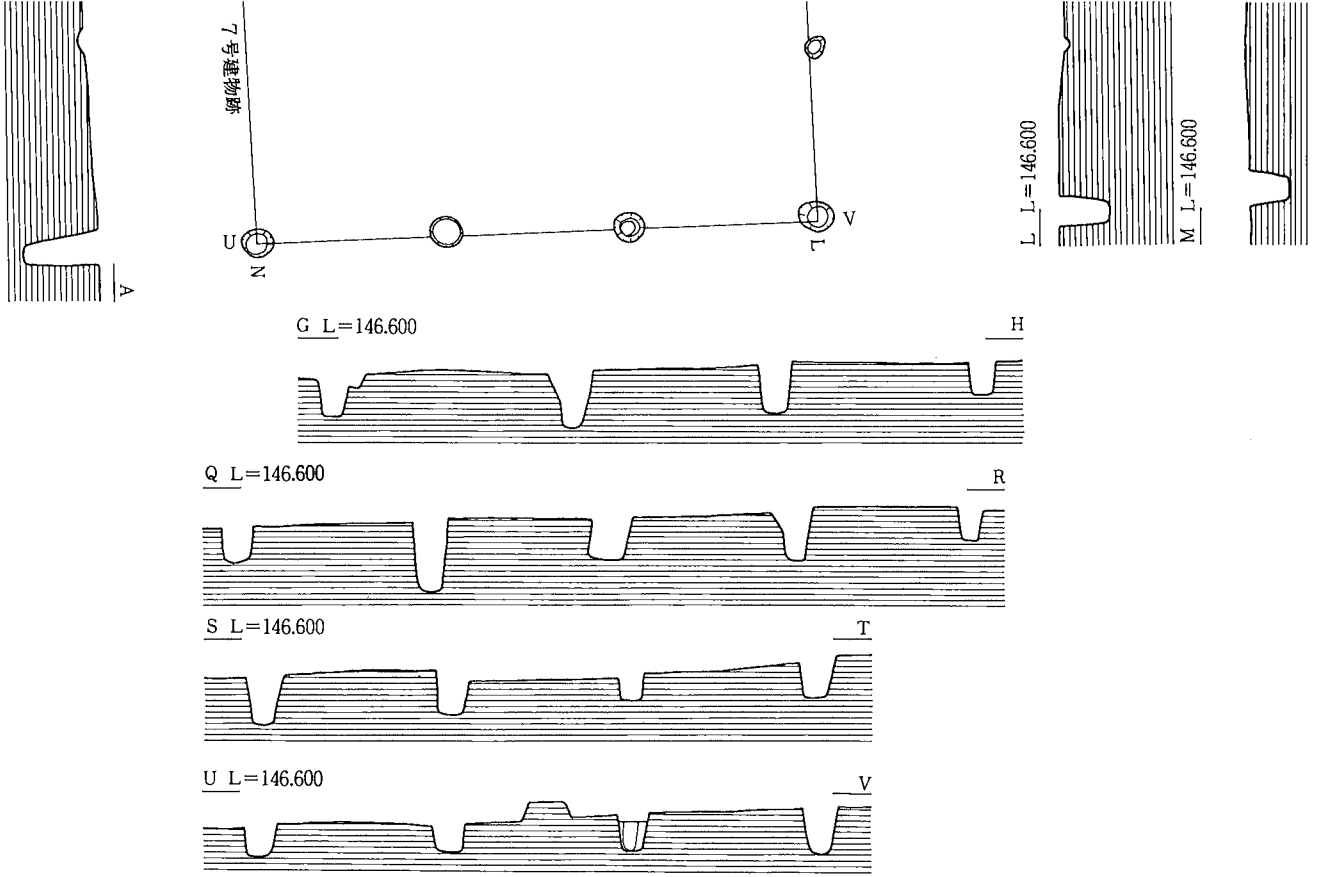
第166図　1・2号掘立柱建物跡実測図



第167図　３・４号掘立柱建物跡実測図



第168図　5・6・7号掘立柱建物跡実測図


7号建物跡
U
N
V
L
A
L L=146.600
M L=146.600
G L=146.600
H
Q L=146.600
R
S L=146.600
T
U L=146.600
V

7号建物跡は、桁行3間（5.9m、19.5尺）、梁行2間（3.6m、12尺）の6.44坪の面積を持つもので、桁行方向は、N－15°－Wである。柱穴は、直径25cm～35cm、深さ10cm～55cmを測り、直径15cmの円形の柱痕跡が残っている。柱間寸法は、桁行で6.5尺、梁行で6尺である。

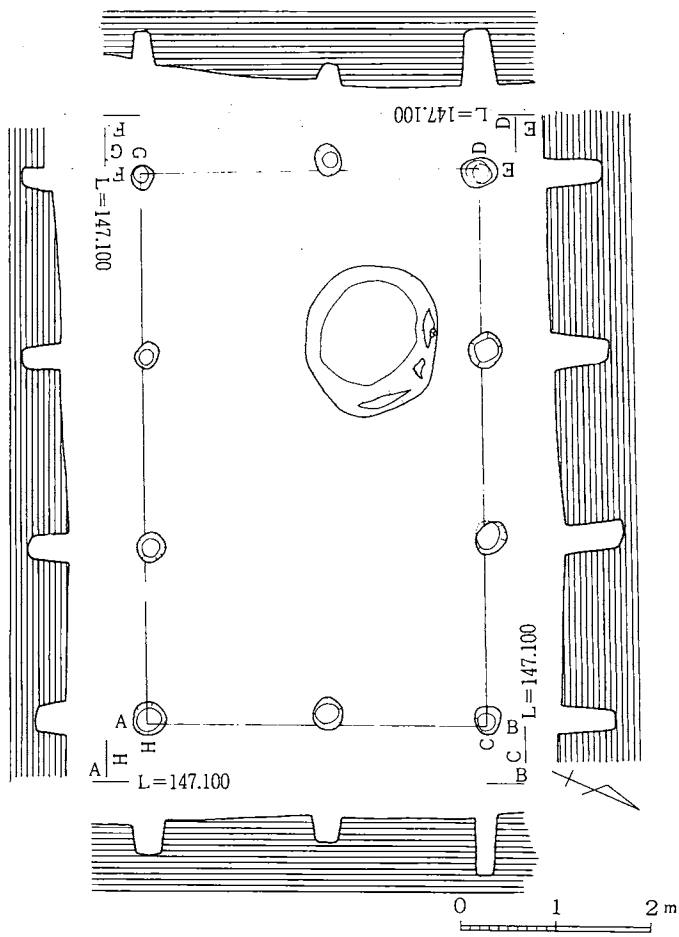
この6号と7号の二つの建物跡は、1.35m（4.5尺）の距離を置いて並び、しかもその並び方は、桁行を同一方向（N－15°－W）に向け、6号・7号建物跡の南側の妻部の柱列そして6号建物跡の間敷切部と7号の北側妻の柱列の2本の柱筋を通すという整然とした状況である。こうした状況から、この6号と7号の二つの建物跡は、同一家屋の構造としての平行形二棟造の形態をとると考えることができる。この家屋の面積は、10.9坪（6号）＋6.44坪（7号）＋2.41坪（連結部）で19.75坪である。

8号掘立柱建物跡（第169図）

建物群の中で南に位置している掘立柱建物跡である（第165図）。

8号建物跡は、桁行3間（5.8m、19.5尺）、梁行2間（3.6m、12尺）の6.33坪（土坑の面積を除けば、4.19坪）の面積を持つもので、桁行方向は、N－70°－Eである。柱穴は、直径25cm～35cm、深さ25cm～65cmの規模を持ち、そこに19cmの柱痕跡が残っている。柱間寸法は、北桁行で6.5尺、南桁行で西から6尺＋6.5尺＋6.5尺、西梁行で北より5.5尺＋6.5尺、東梁行で6尺である。

この建物の西側隅には、直径1.45m～1.55mのほぼ円形の平面形を呈する土坑がある。深さは、55cmを測る。土坑の底面は、直径1m～1.1mの円形を呈し、硬く締まっている。土坑内の埋土は、黒色土を含む上層と含まない下層の大きく二つに分層できる。そして、上層は、さらに上部（アカホヤ火山灰を含む）



第169図　8号掘立柱建物跡実測図

下部に、下層も上部（アカホヤ火山灰）下部（褐色土）にそれぞれ区分ができる。土坑の面積は、2.14坪である（第170図）。

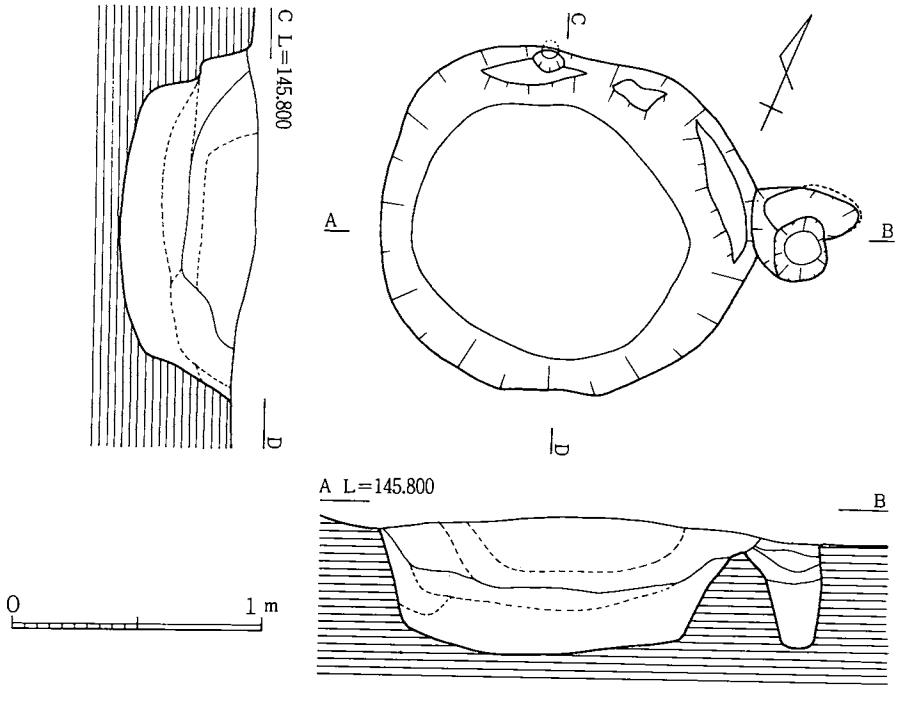
⑵溝状遺構・柵状柱列（第171図）

溝状遺構は，谷底部分に位置し、１号建物跡の約２ｍ南から始まり、その後南方向へと伸びる細長い遺構である（第165図）。遺構の断面形は、上端部の最大幅で70cm、下端部で35cm、最深部で75cmを測る逆台形を呈している。遺構の基部には長径45cm、短径25cmの楕円形を呈する深さ47cmの穴があり、溝は、この穴から徐々に幅を広げながら伸び、その底面は、基部部分で24.3％の急な傾斜率で、その後は5.6％を保持しながら緩やかに傾斜している。埋土は、上・中層の黒褐色土と下層の暗褐色土の二つに区分できる。

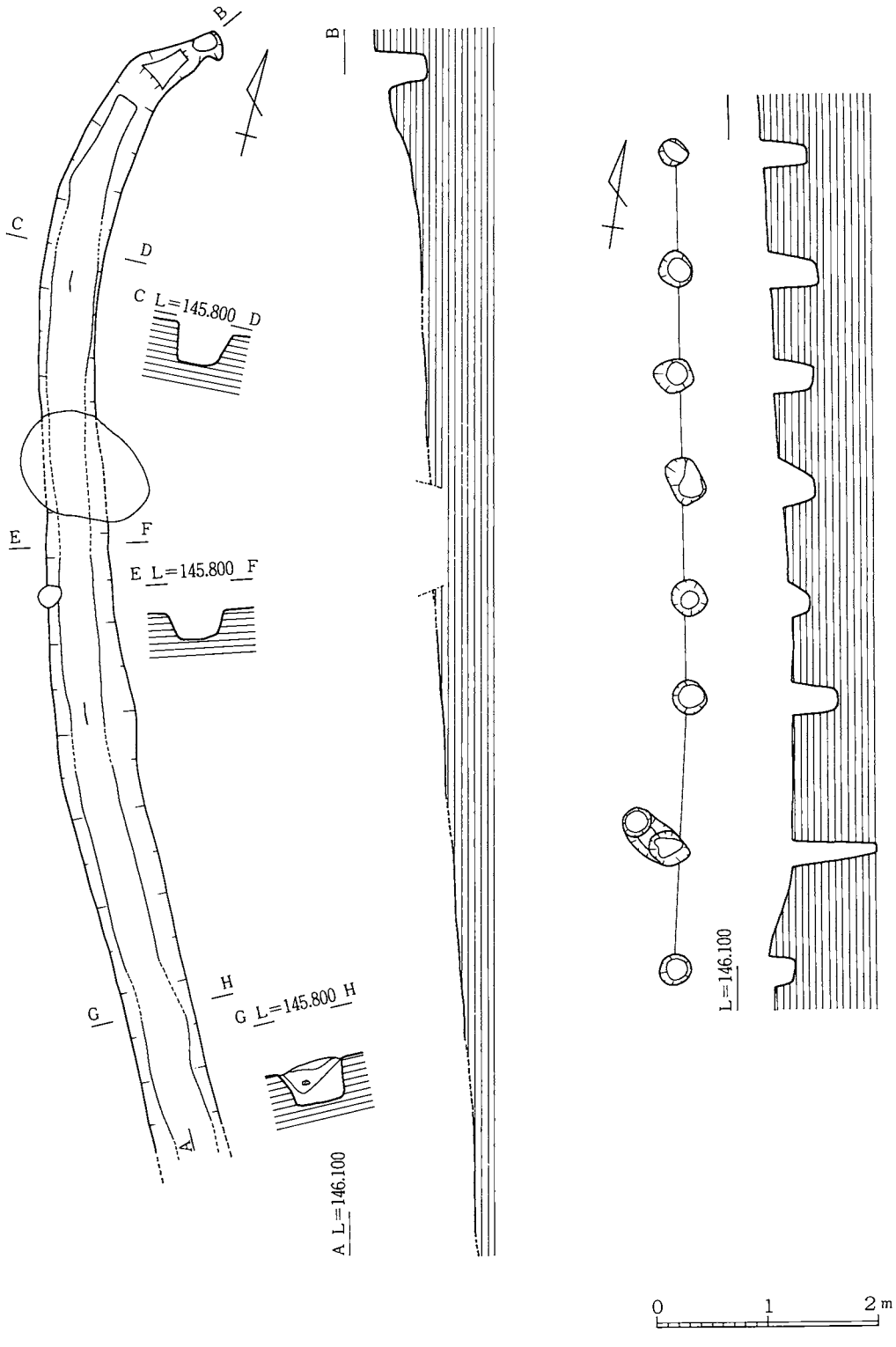
柵状柱列は、６号建物跡の近くから南へ伸びる遺構（第165図）で、８本の柱穴によって構成されている。方向は、N－10°－Wである。柱穴は、直径25cm～40cmの円形を呈し、深さ17cm～77cmを測り、北より1.05m＋0.95m＋１ｍ＋１ｍ＋0.9m＋1.3m＋1.1mで、ほぼ１ｍ前後の間隔である。

⑶土坑（第173～174図）

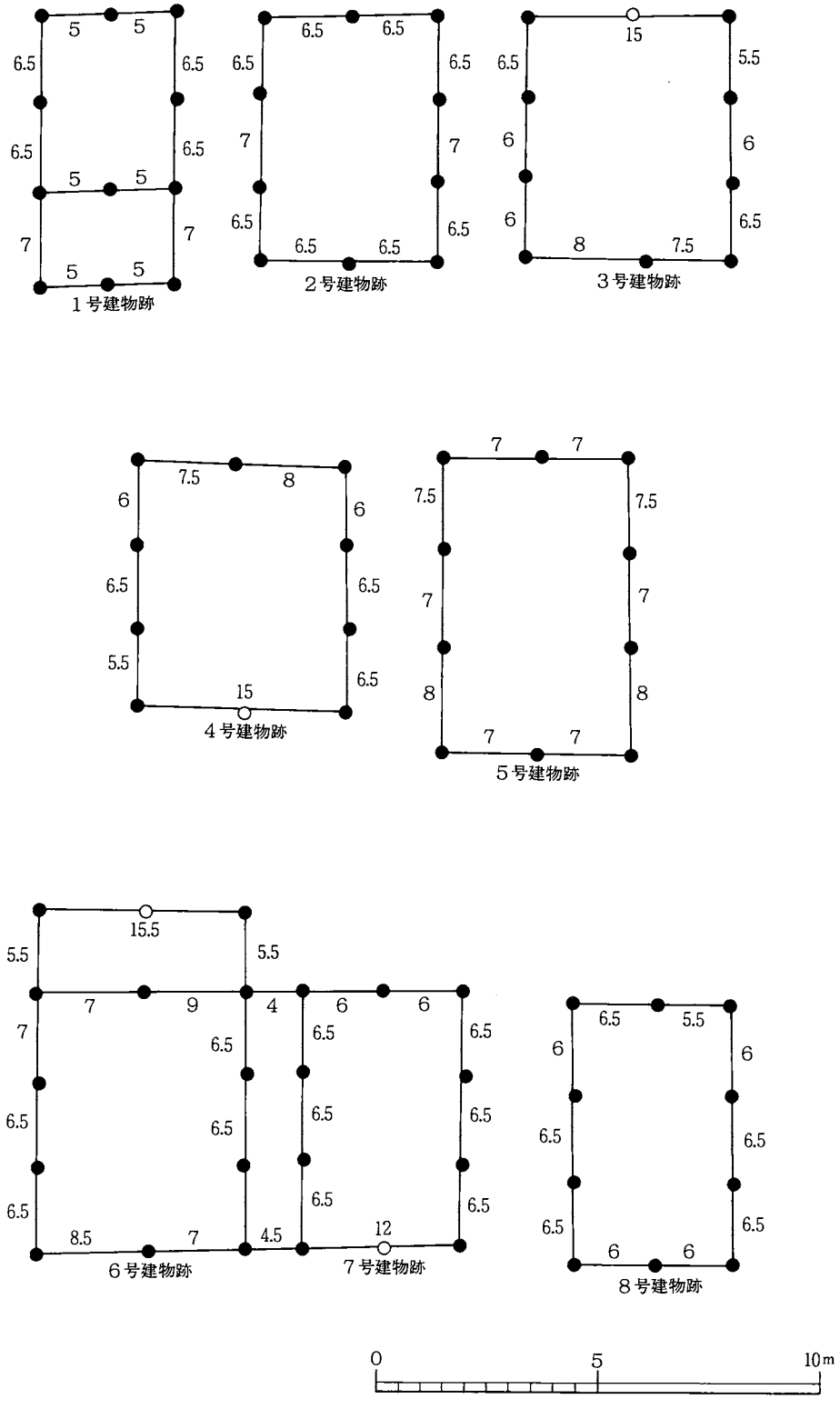
10基の土坑が検出された。それらは、丘陵の平坦部（１号～６号）と山の斜面部（７号～10



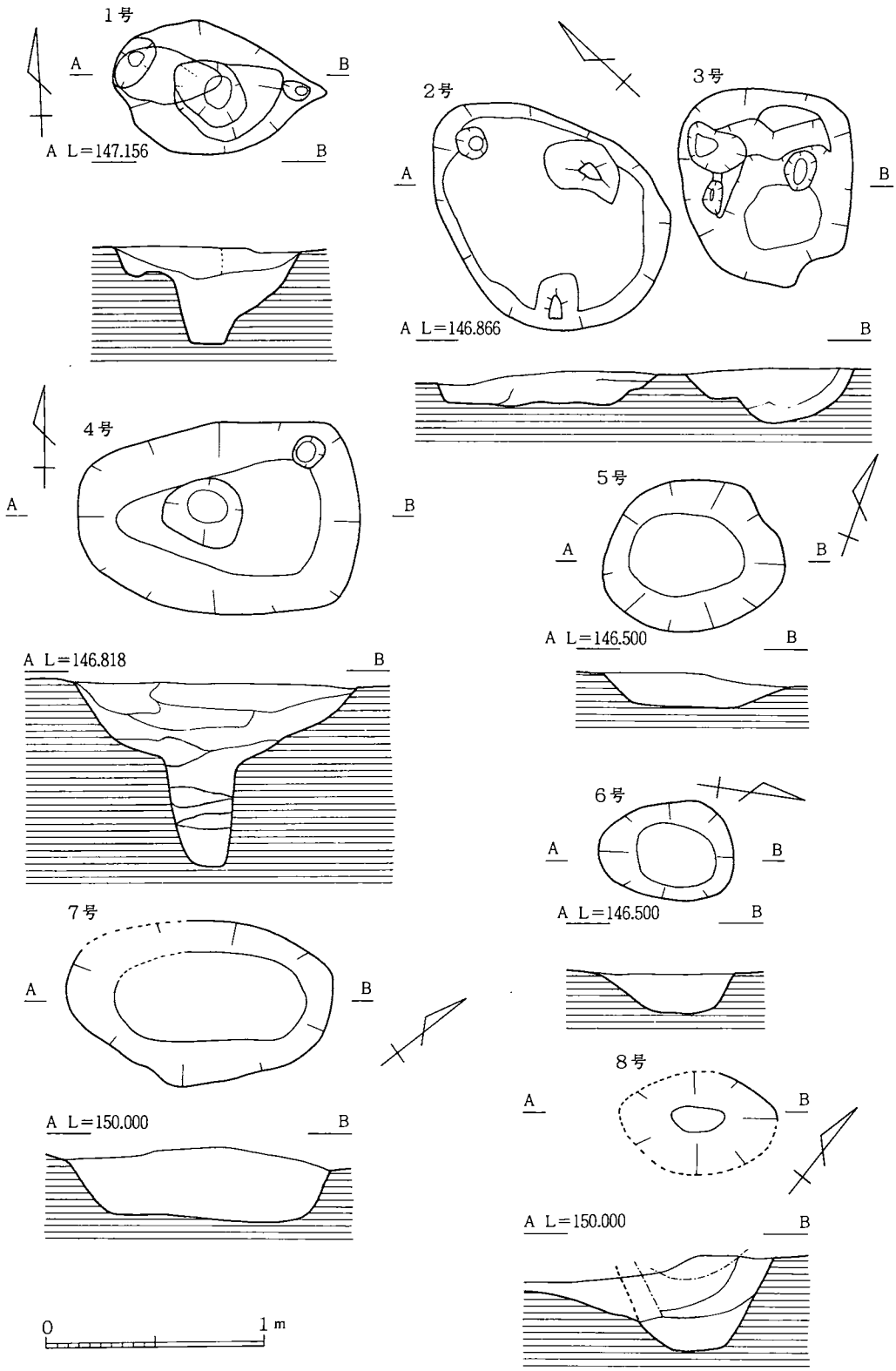
第170図　８号掘立柱建物跡内土坑実測図



第171図　溝状遺構・柵状柱列実測図



第172図　掘立柱建物跡規格図


1号
A
B
A L=147.156
B
2号
3号
A
B
A L=146.866
B
4号
A
B
A L=146.818
B
5号
A
B
A L=146.500
B
6号
A
B
A L=146.500
B
7号
A
B
A L=150.000
B
8号
A
B
A L=150.000
B
0
1 m

第173図　土坑実測図

号）というように立地の違いによって二つに分けられる。屋敷部分との位置関係は、前者が西方で、後者が北方である（第165図）。

１号土坑（第173図）

最も西側に位置する土坑で（第165図）、長径0.98m、短径0.6m の不整の楕円形を呈している。深さは、62cmである。埋土は、炭化物を多量に含む上層と褐色土の下層に区分でき、その中で上層は、特に炭化物が集中する部分とそうではない部分とに分けられる。

２・３号土坑（第173図）

２号土坑は、１号土坑の北東29m の所にあるもので（第165図）、長径1.24m、短径0.9m、深さ0.15m の規模を持つ楕円形の遺構である。埋土は、褐色土による二つの層に区分できる。３号土坑は、0.92m～0.80m のほぼ円形を呈する遺構である。深さは、25cmを測る。埋土は、２号土坑と同様である。

４号土坑（第173図）

４号土坑は、３号土坑の南東５ m の所にあるもの（第165図）で、長径1.3m、短径0.87m、深さ0.7m の規模を持つ楕円形の遺構である。そして、その底面にはさらに直径0.65m～0.7m、深さ0.97m の円形の穴が穿たれている。埋土は、褐色土と黒褐色土との互層である９枚の土層に区分される。

５号土坑（第173図）

５号土坑は、４号土坑の東20m の所にあるもの（第165図）で、長径0.83m、短径0.58m、深さ0.15m の規模を持つ楕円形を呈する遺構である。埋土は、アカホヤ火山灰の粒子が混じる黒褐色土である。

6号土坑（第173図）

６号土坑は、５号土坑の西側に近接してあり（第165図）、その規模が長径0.65m、短径0.45m、深さ0.2m と歴史時代の土坑の中で最も小さい楕円形遺構である。埋土は、５号土坑のものに近似した黒褐色土である。

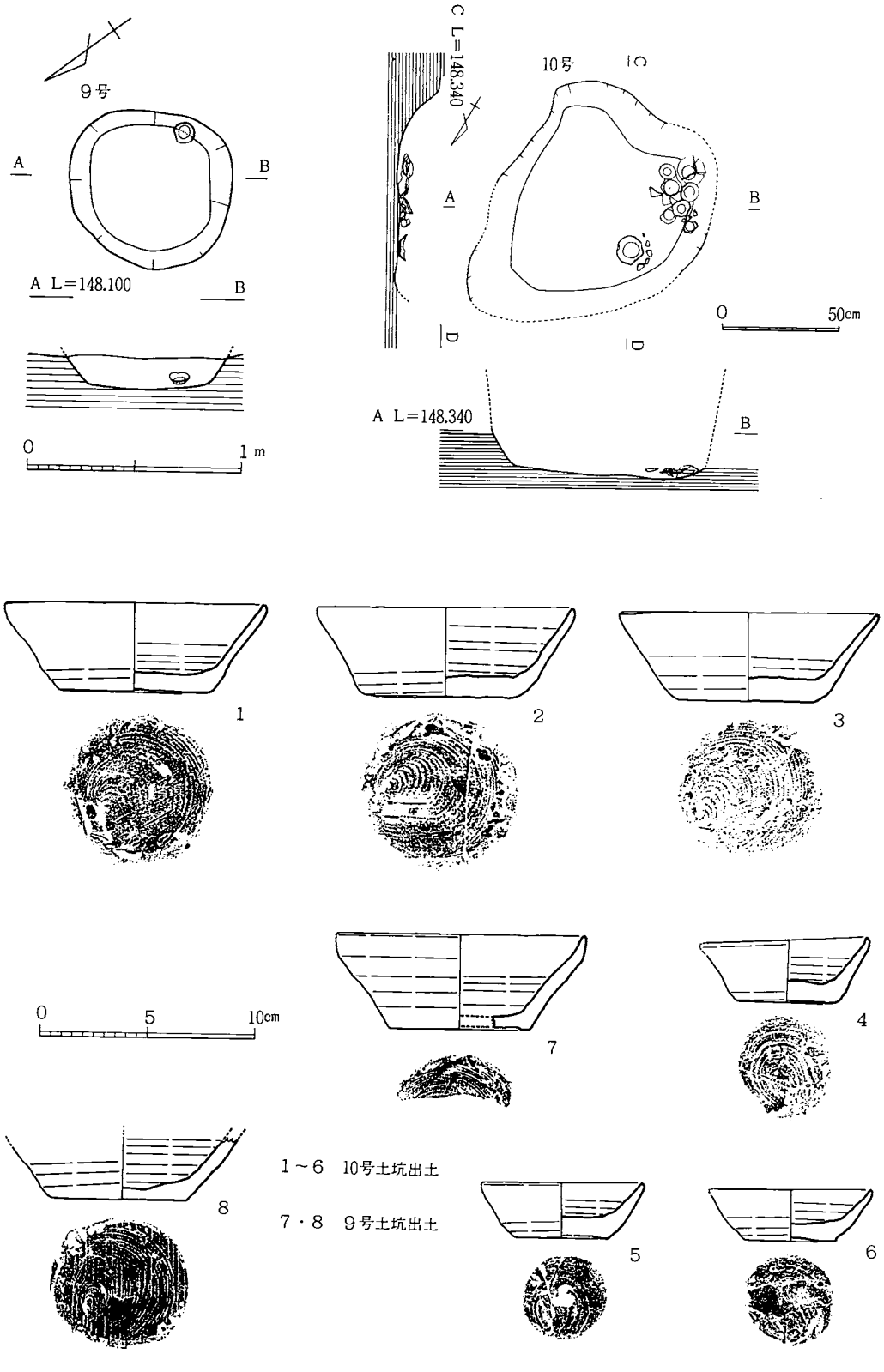
７号土坑（第173図）

７号土坑は、山部西側の斜面にあり（第165図）、長径1.21m、短径0.77m、深さ0.31m の規模の楕円の平面形を呈する遺構である。埋土は、アカホヤ火山灰の粒子を含んだしまりのない褐色土である。

８号土坑（第173図）

８号土坑は、７号土坑の北側に近接してあり（第165図）、長径0.72m、短径0.47m、深さ0.44 m の規模を持つ小型の楕円形遺構である。埋土は、褐色土による上・中・下の三つの層に区分できる。

９号土坑（第174図）



第174図　土坑・出土遺物実測図

７号土坑の南11mの所で、麓に近い斜面にあたる(第165図)。この土坑は、直径0.73m～0.76mの円形を呈し、その深さ17cm（現存値）を測る。埋土は、しまりのない褐色土である。伴出遺物には、土坑の南隅と埋土中から出土した土師器２点（第174図７・８）がある。

７・８は、いずれも器面が明褐色を呈し、焼成が良好な土師器の坏で、７は埋土下部から、８は底面南隅からの出土である。器体は、底部から鋭く折れて直線的に開き（７・８)、そして口縁部でやや直立気味に起きて明瞭な稜線みせる（７）という形状をとっている。底部は、糸切り痕が残り、８にはさらにその上に板目の圧痕が観察される。法量は、７が口径11.8cm（復元値)・器高4.4cm・底部径6.7cm（復元値）で、８が底部径6.4cm（口径・器高は不明）である。

10号土坑（第174図）

９号土坑の東26mの麓に近い斜面部にあり(第165図)、長径1.21m、短径0.91m、深さ0.41m（いずれも推定値）の規模を持つ楕円形の土坑である。埋土は、９号土坑と同質であるしまりのない褐色土である。伴出遺物には、土坑西隅でまとまって出土した土師器８点（１～６）がある。

１～３は、器面が明褐色を呈し、焼成がやや不良な土師器の坏である。器体の底部から体部にかけての形状には、やや鋭く折れるもの（１）と丸みを持って折れるもの（２・３）がある。そしてその後、体部は、両者とも直線的に開いていく形状をとり、口縁部の上面は、ヘラ削りによって整形される（１～３)。また、底部には、糸切り痕が残り、１・２にはその上に板目圧痕が観察される。法量を示せば、１は口径12.3cm・器高4.15cm・底部径7.05cmで、２は12.2cm・4.2cm・6.9cmで、３は12.0cm～12.3cm・4.2cm・6.3cmである。

４～６は、器面が明褐色を呈し、焼成がやや不良な土師器の小皿である。器体の底部から体部そして口縁部にかけての形状には、鋭く折れ、その後やや膨らみながら開いていくもの(５・６）と丸みを持って折れ、その後直線的に開いていくもの（４）がある。底部は、糸切り痕が残った上げ底である。法量は、４が口径8.0cm(推定値)・器高2.7cm～3.3cm・底部径4.7cmで、５が7.6cm・2.6cm・4.4cmで、６が7.7cm（推定値）・2.5cm・4.3cmである。この他に２点の土師器が出土したが、焼成不良のため復元不可で図示しなかった。

２．ま　と　め

(1)時期について

歴史時代に属する遺構として８棟の掘立柱建物跡、溝状遺構、柵状柱列、10基の土坑が検出されたが、これらのさらに具体的な時期はどの段階であろうか。

時期決定の資料として９号・10号土坑出土の土師器がある。しかも、これらは、底部の糸切痕と小皿の存在（４～６）という時代性を最も良く示す特徴をもっている。特に、土師器に残

された糸切痕は、ヘラ切痕に後続するものとして、熊本県下での古代と中世とを明確に区別する時代指標の資料として扱われる場合がある。しかし、その基準は、その上限が不明であるということから、不明確である。

そこで、これらの資料と12世紀末～13世紀の鎌倉時代前半と推定されている高橋南貝塚の出土資料（隈・松本　1978）とを比較検討してみたい。なお、この両者は、糸切り底であるという点では共通している。

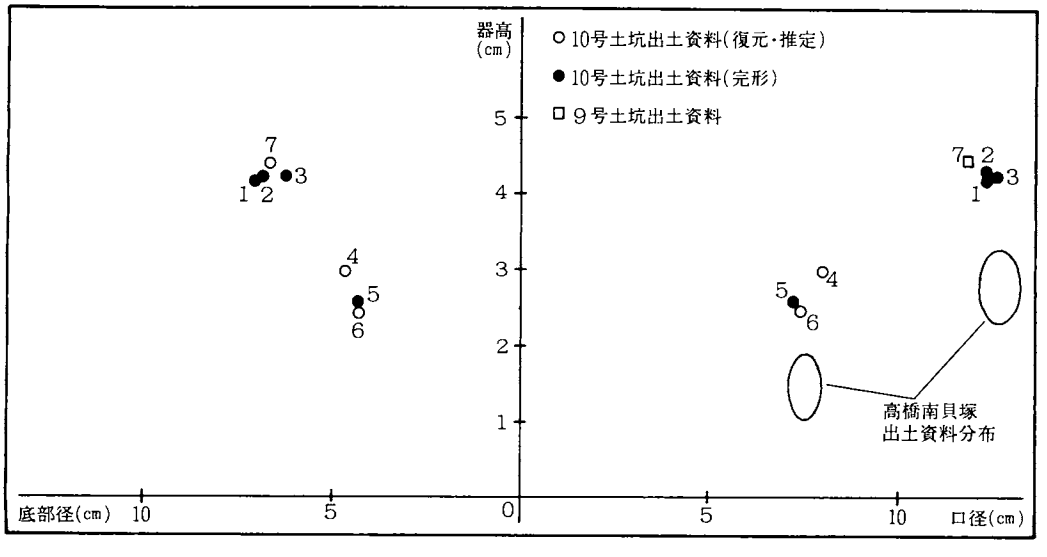
第４表として示しているものが、その二つの資料の法量の比較表である。それによると大丸・藤ノ迫遺跡出土の土師器が坏・小皿共に器高が高く、しかもその差は明瞭である。つまり、この法量の差は、大丸・藤ノ迫遺跡の土師器が高橋南貝塚の土師器に時期的に先行するということを示しているとも受け取れる。このことから、９・10号土坑出土の土師器を鎌倉時代前半に先行する資料として、平安時代後半～鎌倉時代初頭のものに位置付けて、その他の遺構もこの時期として考えておきたい。

⑵掘立柱建物群について

丘陵には、遺構の立地及び配置によって大きく三つの遺構群がみられる。つまり、谷部にある遺構群と丘陵の西側平坦部にある遺構群そして山の斜面部にある遺構群である。そしてこれらの群は、その性格によって、掘立柱建物跡・溝状遺構・柵状柱列によって構成される谷部の屋敷、供献された土師器を出土した土坑によって構成される斜面部の墓地そして不明遺構によって構成される平坦部の群とすることができる。そこで屋敷についてみてみることにしたい。

屋敷部には８基の掘立柱建物跡があるが、それぞれの同時性ないしは前後関係を知る資料が無い。そこでその配列関係からある程度の推定を試みてみたい。これらは、その桁行方向によ

第４表　器高・口径・底部径 比較表



って三つの建物群、すなわちＮ－90°－Ｅのもの（１号）とＮ－70°－Ｅのもの（２号・３号・８号）そしてＮ－15°－Ｅのもの（４号～７号）にまとめることができる。

次に、これらの群ごとの建物の位置関係を観てみよう。すると、それぞれがまとまりながら西から東へとずれていることがわかる。そのずれを有意なものとして扱い、これと切り合い関係を考え合わせると、１号建物、２号・３号・８号建物、４号・５号建物、６号・７号建物がそれぞれ近い関係として浮かび上がってくる。さらに、８号建物は、切り合い関係が無い独立家屋であることから、継続的使用物の可能性が高い。この他、柵状柱列は、２号・３号・８号建物に伴うと考えられる。

以上のことを整理すれば、可能性としての１号建物、２号・３号・８号建物、４号・５号（・８号）建物、６号・７号（・８号）建物を単位とした建物群の時間的変遷が想定できる。そして、その時間的変遷は、その四つの単位がすべて切り合い関係で連鎖的に繋がっていることから、間断無く続いていったことを伺わせる。

この他に、建物の時期的変遷とその他の土坑との対応関係があるが、資料不足で触れることはできない。唯、墓と考えられる土坑が３基あり、その数と建物群の変遷が対応しそうで、建物の建替えの契機を考える上で面白い問題ではある。また、広く残されている丘陵の平坦部の利用も今後考えていかなければならない問題であろう。

参考文献

隈　昭志・松本健郎　『高橋南貝塚』　熊本県文化財調査報告　第28集　1978

橋本康夫・鶴島俊彦　『上鶴頭遺跡』　熊本県文化財調査報告　第63集　1983

第IV章　総　　括

今回の調査によって、大丸・藤ノ迫遺跡が先土器時代・縄文時代（早期・前期・後期・晩期）・弥生時代・歴史時代という多彩な内容を持つ複合開地の集落跡であることが判明した。この具体的な調査結果については、これまで時代・時期ごとに分けて解説・整理してきたとおりである。そこで、ここでは本報告のまとめとして、調査結果に基づく通時間的な概観を行い、その成果と問題点を整理していきたい。

先土器時代の石器としては、ナイフ形石器・三稜尖頭器・掻器・削器・彫器・敲石・その他の不定形石器が出土した。これらの中でナイフ形石器は、形態の上で、切出状のものと剝片尖頭器そして台形石器の三つの種類に分類できる。そして、さらに剝片尖頭器は、その加工の部位によって基部ないし先端部に加工があるもの、二側縁にみられるもの、先端部のみにみられるものの三つの種類に分けることができた。

以上のように、大丸・藤ノ迫遺跡出土の先土器時代資料は、ナイフ形石器文化の中でも剝片尖頭器を主体とした石器文化にあたり、出土した石器の種類から当時の石器装備（道具箱）をほぼ完全な形で残していると考えられる。このように、当該石器文化は、中九州の編年上での標準資料となると同時に、組成研究でも良好な資料になるものといえよう。

縄文時代は、早期・前期・後期・晩期の資料が検出された。出土層位は、早期がアカホヤ火山灰層直下の第IV層に、前期・後期・晩期がアカホヤ火山灰の二次堆積層である第IIIa層にあたっている。時期別の規模では、すでに前記しているように、早期が最も充実し、前期以降は、数片の土器が出土しているのみである。

第IV層からは多様な型式の土器が出土し、早期のほぼ全期間にわたって当地が使用されていたことが判明した。その前半期は、吉田式土器・前平式土器・押型文土器・円筒形条痕文土器を中心とした時期であり、後半期は、手向山式土器・塞ノ神式土器を中心とした時期であろう。石器では、石鏃・磨石・敲石・削器・石匙・石錐・磨製石斧・尖頭器・植刃・石皿・不定形の石器が検出された。中でも石鏃と磨石・敲石は、石器組成の中心を成し、石器全体の53%を占めている。しかし、これらの時期ごとの石器組成は不明である。これらの他に特徴的な遺物として石製品－垂飾品・線刻礫がある。垂飾品の類例としては鹿児島県中尾田遺跡の軽石製品がある（新東　1981）が、線刻礫と同様にその出土例は少なく、アカホヤ火山灰降下以前の縄文文化を考える上でも貴重な資料となるであろう。

遺構としては、竪穴式住居跡・小穴土坑・土坑・集石・炉穴等100基が丘陵の平坦部を中心に検出された。その中で九州では珍しい遺構として、俗に「陥し穴」とされるものに類似した土坑がある。しかし、「陥し穴」遺構は、関東・東北地方が分布の中心であって、西日本では少な

く、今後の資料増加を待たなければ、この両者の直接的な対比は不可能であろう。但し、機能問題は別として、極めて類似した遺構が九州にも存在しているということだけは注意しておく必要がある。

第III層は、アカホヤ火山灰の層で、その性質・形成の違いにより二つの亜層に分離される。すなわち、アカホヤ火山灰の一次的な堆積物による硬く締まった無遺物の第IIIb層と同火山灰が降下後に土壌化し、二次的に堆積したふかふかの第IIIa層である。縄文時代の前期・後期・晩期の遺物は、この中で第IIIa層から検出された。しかし、その検出された遺物は、4点と少なく、遺構も確認されなかった。このように、大丸・藤ノ迫遺跡における前期以降の様相は、出土した土器毎に数型式の隔たりがある断続性、そして明確な集落を形成しない一過性の状態を呈し、早期に比べ不安定である。

こうしたことは、アカホヤ火山灰の降下がその後の人々の活動に及ぼした影響の一端を如実に表しているものであろう。では、この影響とは、一体どのようなものであったのだろうか。

大丸・藤ノ迫遺跡で確認された第IIIa層は、包含物として縄文時代前期〜弥生時代後期までの長期間にわたる遺構・遺物が入る包含層である。このことは、アカホヤ火山灰の二次堆積が縄文時代前期に始まり、弥生時代後期まで継続されていたことを示す事実でもある。しかも、弥生時代の遺構の埋土が第IIIa層で、また、その遺構を切った倒木痕跡の埋土にも第II層である黒色の腐植土がみられないということは、さらにこの事実を強く裏付けるものであろう。これに対して、黒色の腐植土が発達し、堆積している遺跡も周辺にみられる。例えば、人吉市鼓ヶ峯遺跡がそれにあたる。この遺跡では、黒色の腐植土層が厚く堆積し、この土層中から船元式土器がある程度の遺物分布を持って検出された。しかも当該期の土坑の埋土も同様の状態である。この事実は、当遺跡周辺では、すでに縄文時代中期初頭よりアカホヤ火山灰の二次堆積が止まり、それに替わって黒色腐植土の形成が開始され始めたことを物語っているものであろう。

以上のことを整理すれば、アカホヤ火山灰の降下以後の状況がわかる。つまり、同一地域の中にあっても、黒色腐植土の形成という自然修復が急速に行われた土地とそうでない土地があったということ、そして、人々はその中で自然修復が急速に行われている土地を生活の場所として最初に選んでいったことである。そして、このことが、アカホヤ火山灰降下以後に於ける人々の活動への影響であり、大丸・藤ノ迫遺跡の丘陵が縄文時代の前期・後期・晩期のいずれの時期に於いても集落として利用されなかった理由の一つでもあると考えられる。

弥生時代では、後期後半の遺物や竪穴式住居跡・免田式土器の埋納土坑を始めとする各種の土坑が丘陵の平坦部を中心として検出された。

遺物は、土器・石器が中心となるが、集落廃棄後、道具のすべてが持ち去られたのか、出土量は少なかった。しかし、その中でも弥生時代の当遺跡を特徴付けるものがある。それは、土

器では免田式土器であり、石器では太形蛤刃の磨製石斧である。特に、太形蛤刃の磨製石斧は、弥生時代の後期になるとほとんどの場合、鉄器に置き換えられ、減少していく道具の一つである。その意味からこの資料は、大丸・藤ノ迫遺跡を始めとする人吉盆地の弥生時代の社会における鉄器の普及が他の地域に比べて相当に遅れていたことの具体例となるかもしれない。

竪穴式住居跡は、規模的な大小の差はあるにしても、ほとんどのものが2本柱の間に地床炉を設けるという構造を成している。　ただ、1例のみではあるが、特異な形態の炉を持つ4本柱の住居跡がある。この炉は、平面形態が長方形を呈し、深さ40cmのしっかりした掘り方を持ったもので、その中に多量の硬化した焼土が詰った状態で検出された。おそらく、呪い小屋的な機能を持った特異な構造の施設ではなかろうか。

こうした宗教的色彩の濃い遺構の他に、同様の性格を持つ非日常的な土器である免田式土器が出土した。免田式土器は、人吉盆地でも多く検出されているが、その状態は底部や胴部に穿孔のあるものがほとんどで、墓前祭用の儀器としてのものが一般的である。つまり、人吉盆地内では墓に伴う場合が多いと考えることができる。これに対して、大丸・藤ノ迫遺跡の例は、集落内でしかも土坑を伴ったもので、このことは、人吉盆地内での免田式土器が墓前祭と同時に集落内での祭にも使用されていたことを伺わせる資料である。

歴史時代では、前章の第5節で具体的に述べているように、丘陵の平坦部中央の谷部で、2～3棟が単位となる掘立柱建物群とその他の付属施設により構成された屋敷跡が検出された。この屋敷は、荘園区分では人吉荘に位置すると考えられ、前面に広がる人吉荘側の水田面を充分に見通せるだけの丘陵上に立地し、そのあり方は、集落を離れて単独で存する状態である。このことは、この屋敷の住人の階層を考える上での一つの手掛りとなるものと考えられ、しかも人吉荘内での集落分布と土地利用についての資料になるものといえよう。

参考文献

今村啓爾　「陥穴」『縄文時代の研究』第2巻　生業所収　1983

乙益重隆　『肥後上代文化史』　1954

新東晃一　「南九州の火山灰と土器形式」『どるめん』第19号　1979

新東晃一　「火山灰からみた南九州縄文早・前期土器の様相」
鏡山猛先生古稀記念『古文化論攷』所収　1980

新東晃一他　『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書　第15集　1981

種元勝弘　『人吉市史』　1981

宮本　尚・松本雅明監修『多良木町史』　1980

図　　版

図版１　遠望・全景

１．遠望（遺跡より北方）

２．遺跡北側の迫地

３．遺跡全景

４．丘陵基部の谷

図版２　遠望・遠景

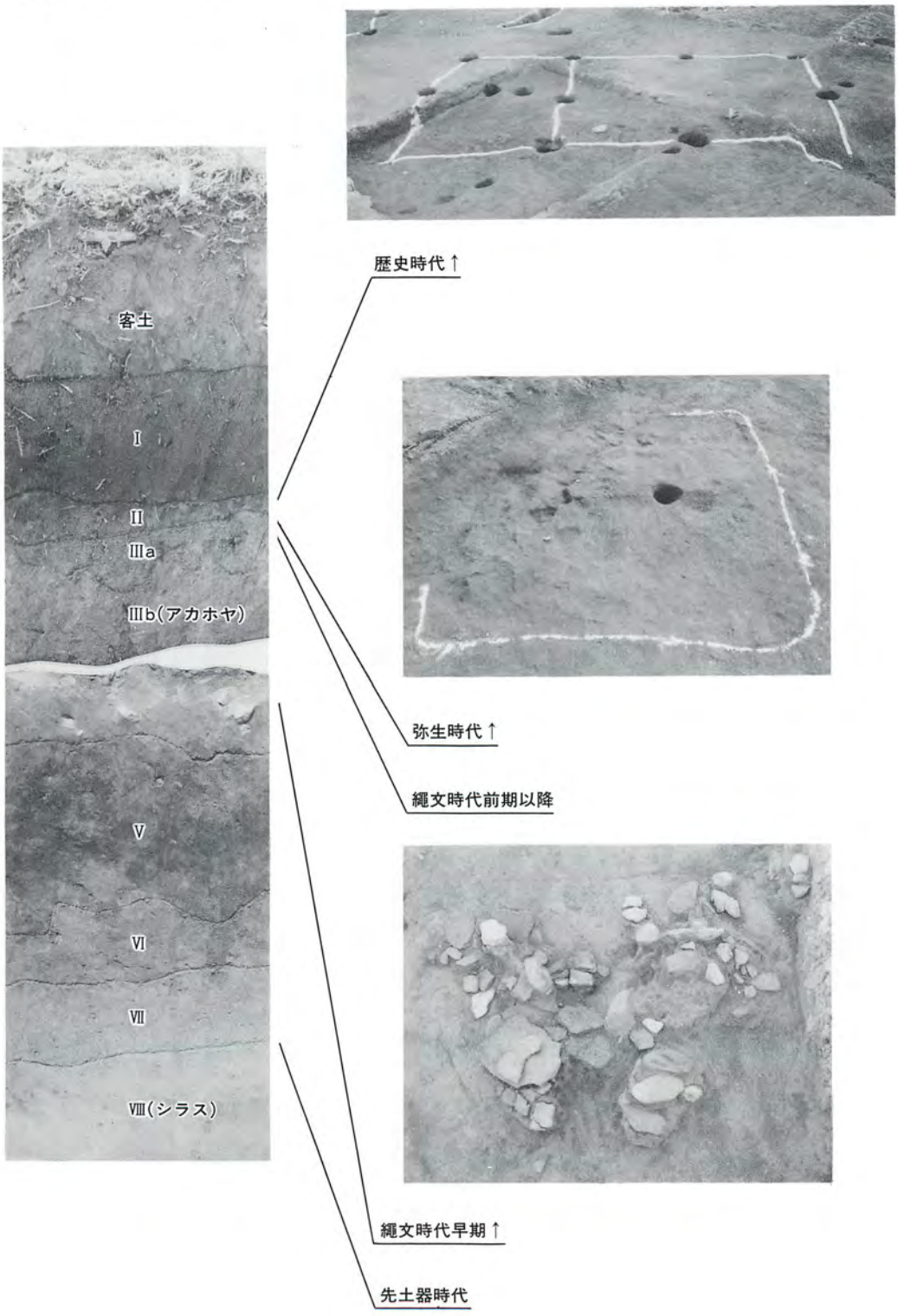
1．遺跡遠景(水田面より)

2．遠望(人吉市街地)

3．遺跡遠景(西方)

4．遠望(西方)

図版３　土　　層



図版４　試掘調査

図版５　縄文時代早期の調査

1．出土状態遠景

2．出土状態遠景

3．出土状態遠景

4．出土状態

5．出土状態

6．出土状態

7．出土状態

8．出土状態

図版６　縄文時代早期の調査

１．調査風景

２．調査風景

３．出土状態

４．出土状態

５．出土状態

６．出土状態

７．出土状態

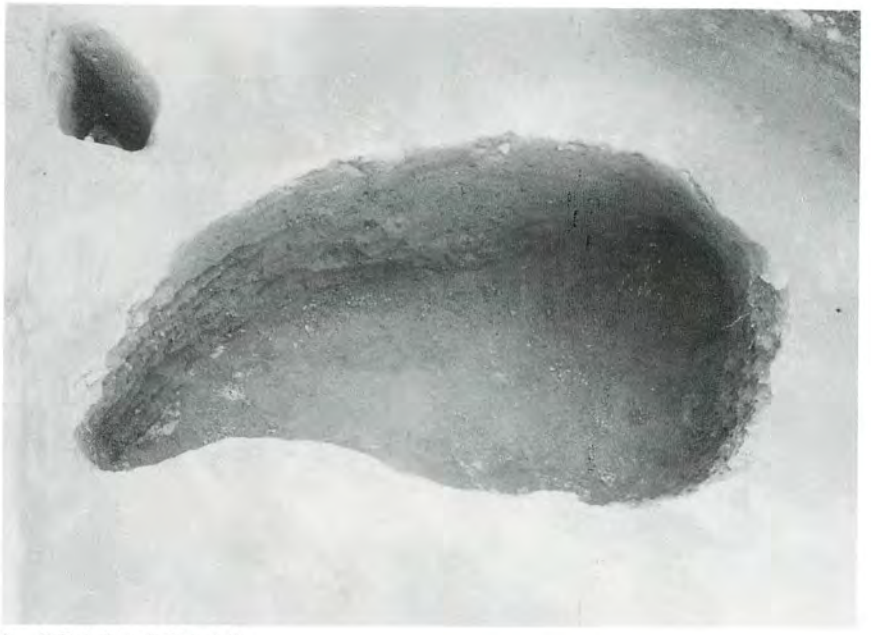
８．出土状態

図版７　縄文時代早期の遺構

1．竪穴式住居跡(右側)・弥生時代４号土坑

2．１号小穴を有する土坑

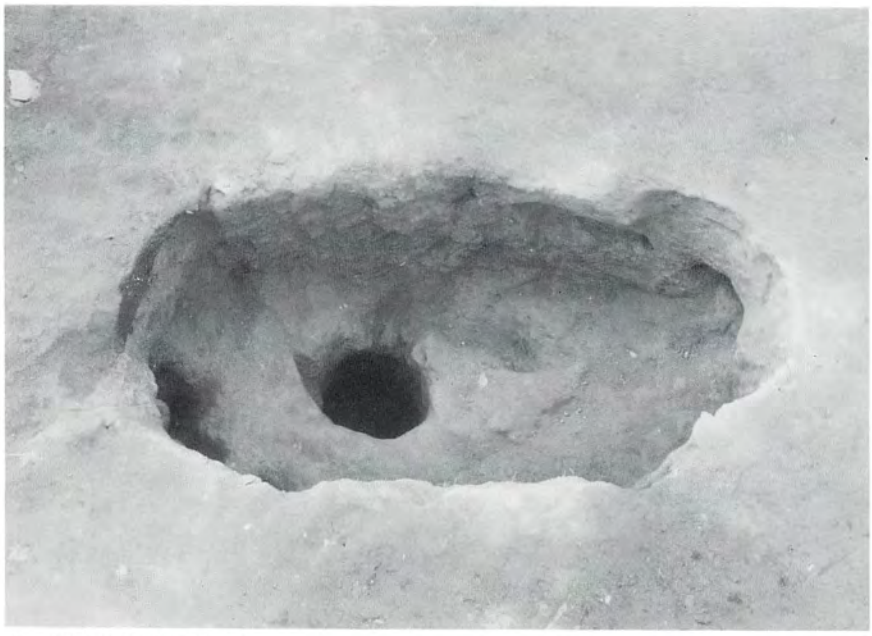
図版８　縄文時代早期の遺構



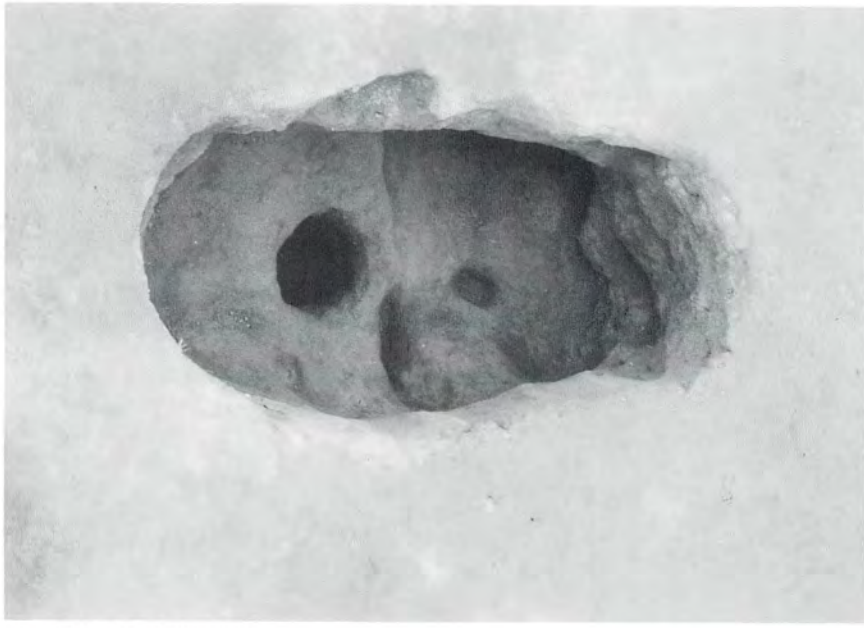
１．３号小穴を有する土坑

２．10号小穴を有する土坑

図版９　縄文時代早期の遺構



１．７号小穴を有する土坑



２．８号小穴を有する土坑

図版10　縄文時代早期の遺構

1．11号小穴を有する土坑

2．13号小穴を有する土坑

図版11　縄文時代早期の遺構

1．5号集石

2．8号集石

図版12　縄文時代早期の遺構

1．7号集石

2．同上(半割)

図版13　縄文時代早期の遺構

1．11号集石

2．同上(半割)

図版14　縄文時代早期の遺構

1．9・10号集石

2．12号集石

図版15　縄文時代早期の遺構

1．2号炉穴

2．3号炉穴

図版16　縄文式土器出土状況

1.　1

2.　4

3.　7

4.　8

5.　10

6.　11

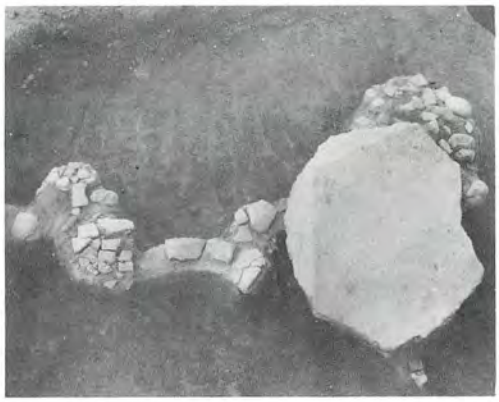
図版17　縄文式土器出土状況

1．　12

2．　13

3．　16

4．16と同一個体



5．　18

6．　19

図版18　縄文式土器出土状況

1．17

2．同上

3．同上

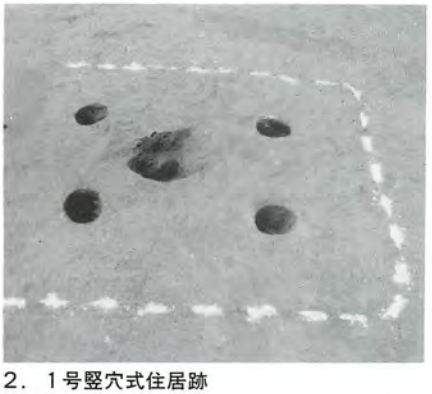
図版19　塞ノ神式土器

図版20　塞ノ神式土器

図版21　石　製　品

図版22　弥生時代の遺構

1．遺構配置状況(西側平坦部)



2．1号竪穴式住居跡

3．2号竪穴式住居跡

4．3号竪穴式住居跡

図版23　弥生時代の遺構

1．4号竪穴式住居跡

2．5・6・7号竪穴式住居跡

3．5・6号竪穴式住居跡

4．7号竪穴式住居跡

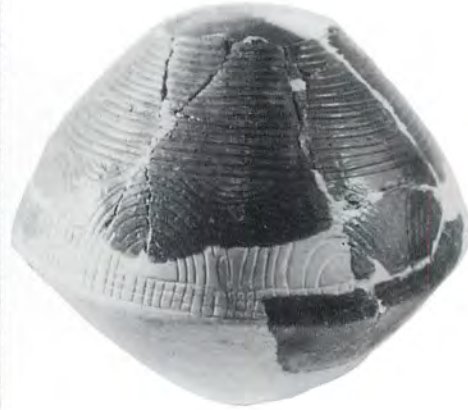
図版24　弥生時代の遺構

1．８号竪穴式住居跡

2．９号竪穴式住居跡

3．10号竪穴式住居跡

図版25　弥生時代の遺構



1．１号土器埋納土坑

2．２号土器埋納土坑

図版26　弥生時代の遺構

1．１号粘土貯蔵穴

2．２号粘土貯蔵穴

図版27　歴史時代の遺構

1．掘立柱建物跡配置状況

2．掘立柱建物跡配置状況

3．同上

4．溝状遺構

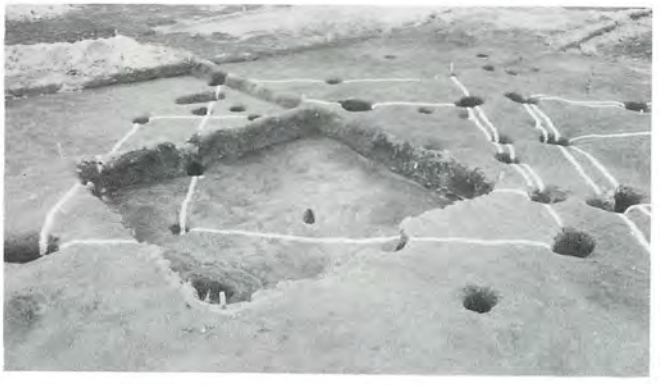
5．同上

6．柵状柱列

図版28　歴史時代の遺構

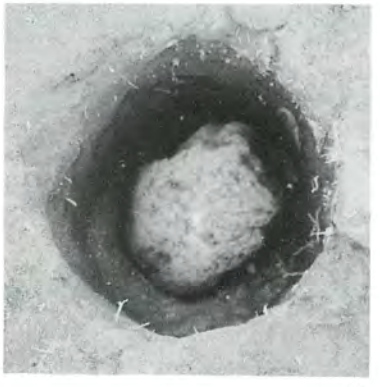
1．1･2号掘立柱建物跡
2．3･4号掘立柱建物跡
3．5･6･7号掘立柱建物跡
4．柱穴
5．柱穴
6．柱穴

1.

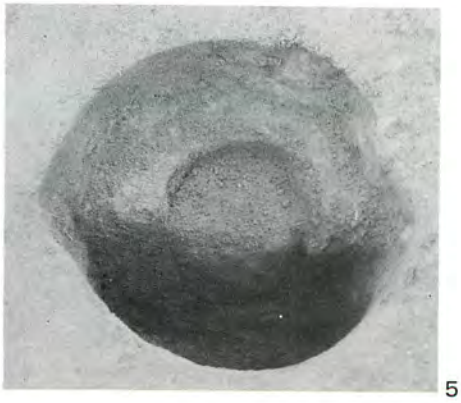


2.

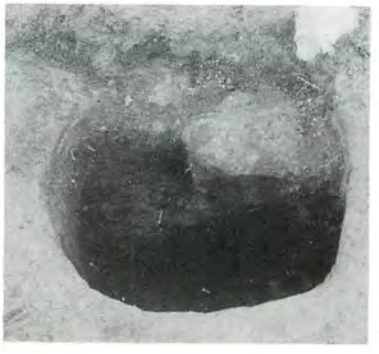
3.



4.



5.



6.

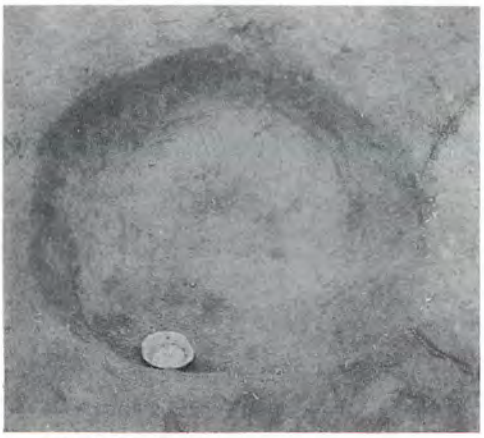
図版29　歴史時代の遺構

1．８号掘立柱建物跡

2．同左内土坑

3．10号土坑

4．同左土師器出土状況



5．９号土坑

6．同左土師器出土状況

あ と が き

ようやく「大丸・藤ノ迫遺跡」の調査報告書を発行することができた。その内容は、先土器時代から歴史時代までの各時代に及び、検出された遺構・遺物もまた多種多様である。今後の球磨・人吉地方での地域研究(地域史)に関する重要な資料になるものと期待している。

最後になってしまったが、発掘調査から報告書作成の間大変御世話になった方々がいる。そこで、その方々の御芳名を記すことによって、感謝の意を表したい。

〔発掘調査〕

福山春男・西英吾・田原高憲・久保山八重子・内田スミカ・迫田初子・柳瀬幸子・谷川佐千子・福山イツ子・中村恵美・中村みちよ・石工タツト・松舟妙子・立山フミカ・宮原栄子・蕨野トミカ・福山フクミ・矢桟間チク・米田ヤエ子・村山文子・高山静子・中村祐子・平俊隆・大槻正義・中村正好・勝山タツ・勝山ミサ子・勝山良子・加村キミ子・迫田チフ・迫田初子・田頭一義

〔整理〕

吉長都美子・水本寿美子・宮本扶未子・永広絹代・渕上慶子・小島由美子・浜田安美・前田志磨江・木下俊恵・山下和美・中村絹子・古賀ゆみ子

〔報告書作成〕

渋谷敦・松本健郎・島津義昭・江本直・高木正文・野田拓治・大田幸博・西住欣一郎

熊本県文化財調査報告　第80集

大丸・藤ノ迫遺跡

昭和61年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　印刷協業組合　サン・カラー
〒862 熊本市御領町730

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 80 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：大丸・藤ノ迫遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日